岐阜県文化財保護センター調査報告書　第20集

岡　前　遺　跡

1995

岐　阜　県　土　木　部

財団法人　岐阜県文化財保護センター

序

清流宮川のほとりに開けた吉城郡古川町には、原始・古代の遺跡が数多く見つかっています。縄文早期の押型文土器の出土で著名な沢遺跡、縄文時代の集落遺跡として知られる中野山越遺跡、前方後円墳の信包八幡神社古墳、古墳時代から奈良時代の大集落が確認された上町遺跡、白鳳時代の寺院跡である杉崎廃寺等、枚挙にいとまがありません。岡前遺跡もそういった数多い遺跡のひとつとして知られていました。

このたび、県単道路改良工事（鼠餅古川線）に伴い、埋蔵文化財の記録保存をはかるため、岡前遺跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は、岐阜県土木部古川土木事務所から岐阜県教育委員会に委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

今回の調査では、竪穴住居址が８軒確認されるとともに、大量の縄文土器、石器、須恵器等の遺物が出土しました。さらに、飛騨地方の発掘調査では初の出土となった和同開珎も見つかりました。縄文時代の遺物からは、飛騨周辺の各地方との文化交流の様子が明らかになりました。また、歴史時代の遺物は、当遺跡の眼下にひろがる杉崎廃寺との関連も予想されます。

最後になりましたが、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成にあたりましては、関係諸機関・各位の温かいご理解とご協力を頂き、感謝申し上げます。また、現地における調査に際しましては、地元の方々に多大なるご協力を賜り、厚くお礼申し上げる次第であります。

平成７年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　　吉　田　　豊

例　言

1．本書は岐阜県吉城郡古川町杉崎御構に所在する岡前遺跡（G06F00150）の発掘調査報告書である。

2．本調査は県道鼠餅古川線改良工事に伴うもので、岐阜県土木部古川土木事務所から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は、平成６年度に実施し、渡辺誠名古屋大学文学部教授の指導のもとに上嶋善治が担当した。

4．本書に記載した遺物の実測は、次の者が主に行った。

縄文土器（拓本含む）　古田奈緒子　田中靖久　田中雅裕　川上百合子　野村三鈴
白石和代　竹本朋生　牛丸富士子　田井孝子　梶　君子
清田由美子　所　洋子　伊藤世志光　坊田洋子　田邊直子

須恵器・灰釉陶器・土師器・陶磁器　田井孝子　白石和代

石　器　上嶋善治　竹本朋生　田中雅裕　梶　君子　柚村幸子

土製品　梶　君子　古田奈緒子

鉄製品　古田奈緒子

5．実測図等のトレースは次の者が主に行った。

柚村幸子　田中靖久　田中雅裕　梶　君子　竹本朋生　伊藤世志光

6．遺物の写真撮影は野村宗作が行った。

7．本書の執筆は、第４章第１節３（Ｉ群）・４は谷口和人が執筆し一部上嶋が加筆した。第２章第１節は藤橋村立小中学校教諭古田靖志氏、第４章第４節は、㈱パレオ・ラボ吉川純子・藤根 久の各氏に玉稿を賜り、他は上嶋が執筆した。編集は上嶋が行った。

8．事前地形測量は有限会社沖下測量に委託して行った。

9．空中写真撮影はガルト・エアロサービスに委託して行った。

10．炭化種子および炭化材の同定は株式会社パレオ・ラボに委託して行った。

11．発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

大野政雄　八賀　晋　大江　命　戸田哲也　河合英夫　林　直樹　神村　透　小島俊彰
岩田　修　田口昭二　狩野　睦　神保孝造　南　久和　小阪　大　斉藤弘道　栄　一郎
玉田忠雄　樋口昇一　会田　進　恩田　勇　若田俊一　小島孝修

12．発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には、次の方々の参加・協力を得た。

古田奈緒子　坂谷正道　大平　勇　三枝　實　飯塚八十子　稲本　嗣　柚原末三　野村新三
田中靖久　白石和代　竹本朋生　中林保昌　加藤清左衛門　川上百合子　野村三鈴　牛丸富士子
柚村幸子　田井孝子　梶　君子　清田由美子　所　洋子　田中雅裕　伊藤世志光　坊田洋子
田邊直子　松葉弘子　辻垣内ひとみ　辻千恵子　新田香代子　水口智子　宮崎和子　中屋寿賀子
古川恵利子　屋上満智子

13．遺構記号は次の通りである。ＳＢ：住居址　ＳＦ：焼土址　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット

14．土層および遺物の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』(1993)を参照した。

15．調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　次

序
例言
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経緯 …… 2
第２章　遺跡の環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　遺　構 …… 9
　第１節　基本的層序 …… 9
　第２節　竪穴住居址 …… 9
　第３節　その他の遺構 …… 25
第４章　遺　物 …… 31
　第１節　縄文土器 …… 31
　　1　概　要 …… 31
　　2　遺構出土の縄文土器 …… 31
　　3　包含層出土の縄文土器 …… 52
　　4　底部・脚部 …… 109
　第２節　石　器 …… 115
　第３節　土製品 …… 132
　第４節　植物遺体 …… 136
　第５節　歴史時代の遺物 …… 138
　　1　土器および陶磁器類 …… 138
　　2　その他の遺物 …… 145
第５章　まとめ …… 147
　第１節　遺　構 …… 147
　第２節　縄文土器 …… 147
　第３節　石　器 …… 151
　第４節　歴史時代の遺物 …… 153
主要参考文献 …… 154

図版目次

図版１　１．遺跡遠景　２．発掘前の状況　３．遺跡全景
図版２　１．北東調査区　２．南西調査区　３．作業風景
図版３　１．第１号住居址　２．第２号住居址　３．第３号住居址
図版４　１．第４号住居址　２．埋甕の蓋石　３．蓋石除去後　４．埋甕
図版５　１．第５号住居址　２．炉　３・４．有孔鍔付土器出土状況
図版６　１・２．第６号住居址　３．第８号住居址　４．第７号住居址
図版７　１．埋甕　２．ＳＫ１検出状況　３．縄文土器出土状況　４．土偶出土状況
　　５．和同開珎出土状況
図版８　１～６．第１号住居址出土の縄文土器
図版９　１～４．第１号住居址出土の縄文土器
図版10　１～３．第１号住居址出土の縄文土器
図版11　１～４．第２号住居址出土の縄文土器
図版12　１～４．第３号住居址出土の縄文土器
図版13　１～５．第４号住居址出土の縄文土器
図版14　１～３．第４号住居址出土の縄文土器
図版15　１～６．第５号住居址出土の縄文土器
図版16　１～３．第５号住居址出土の縄文土器
図版17　１～５．遺構出土の縄文土器
図版18　１・２．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群１類）
図版19　１～３．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群１類）
図版20　１～３．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群１類）
図版21　１・２．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群２類）
　　３．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群３類）
図版22　１．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群１類）
　　２～４．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群２類）
図版23　１～３．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群２類）
図版24　１～３．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群２類）
図版25　１～５．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群２類）
図版26　１～３．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群２類）
図版27　１～４．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群３類）
図版28　１～３．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群３類）
図版29　１～４．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群３類）
図版30　１～３．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群３類）
図版31　１・２．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群４類）
　　３．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群５・６類）
図版32　１～５．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群７類）

図版33　1～3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群８類）
4．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群９類）
図版34　1～4．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群10類）
図版35　1．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群10類）
2～5．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群11類）
図版36　1～4．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群12類）
5．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群13類）
図版37　1．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群13類）
2．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群14・15類）
3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群15類）
図版38　1．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群１・２類）
2．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群３・４類）
3．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群５類）
図版39　1．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群６・７類）
2．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群８・９類）
3．包含層出土の縄文土器（Ⅳ群）
図版40　1．石器（石鏃）　2．（石錐、三脚石器、石匙）　3．石器（削器、掻器）
図版41　1．石器（ピエス・エスキーユ、ヘラ形石器、ＲＦ、ＵＦ）
2・3．石器（打製石斧）
図版42　1・2．石器（磨製石斧）　3．石器（石錘）
図版43　1．石器（磨石）　2．石器（凹石）　3．石器（石皿）
4．石器（石製装身具、玉石、粗製削器）　5．石器（砥石）
図版44　1．石器（石棒、石刀、石剣）　2．土製品（土製円盤）
3．土製品（土偶、茸形土製品）
図版45　1～5．第６号住居址出土の土器　6．ＳＫ６出土の土器　7．包含層出土の土器
図版46　1～8．包含層出土の土器
図版47　1～7．包含層出土の土器
図版48　1・2．包含層出土の土器　3・4．陶磁器類　5．土錘、鉄鏃　6．貨幣
図版49　岡前遺跡の炭化種子
図版50　ＳＢ５Ⅱ層出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　地区設定図 …… 3
第３図　遺跡周辺の地質 …… 4
第４図　古川町内の遺跡 …… 7
第５図　土層図 …… 10
第６図　北東調査区 …… 11

第７図　南西調査区 …… 12
第８図　第１号住居址 …… 13
第９図　第１号住居址遺物出土分布図 …… 14
第10図　第２号住居址 …… 15
第11図　第３号住居址 …… 16
第12図　第３号住居址遺物出土分布図 …… 17
第13図　第４号住居址 …… 18
第14図　第４号住居址遺物出土分布図 …… 19
第15図　第５号住居址 …… 20
第16図　第５号住居址遺物出土分布図 …… 21
第17図　第６号住居址 …… 23
第18図　第７号住居址 …… 24
第19図　第８号住居址 …… 24
第20図　埋　甕 …… 25
第21図　焼土址 …… 25
第22図　土坑（１）…… 27
第23図　土坑（２）…… 28
第24図　第１号住居址出土の縄文土器（１）…… 33
第25図　第１号住居址出土の縄文土器（２）…… 34
第26図　第１号住居址出土の縄文土器（３）…… 35
第27図　第１号住居址出土の縄文土器（４）…… 36
第28図　第２号住居址出土の縄文土器 …… 38
第29図　第３号住居址出土の縄文土器（１）…… 39
第30図　第３号住居址出土の縄文土器（２）…… 40
第31図　第４号住居址出土の縄文土器（１）…… 42
第32図　第４号住居址出土の縄文土器（２）…… 43
第33図　第４号住居址出土の縄文土器（３）…… 44
第34図　第５号住居址出土の縄文土器（１）…… 46
第35図　第５号住居址出土の縄文土器（２）…… 47
第36図　第５号住居址出土の縄文土器（３）…… 48
第37図　遺構出土の縄文土器（１）…… 50
第38図　遺構出土の縄文土器（２）…… 51
第39図　包含層出土の縄文土器（１）…… 54
第40図　包含層出土の縄文土器（２）…… 58
第41図　包含層出土の縄文土器（３）…… 61
第42図　包含層出土の縄文土器（４）…… 68
第43図　包含層出土の縄文土器（５）…… 69

第44図　包含層出土の縄文土器（６）…… 71
第45図　包含層出土の縄文土器（７）…… 72
第46図　包含層出土の縄文土器（８）…… 73
第47図　包含層出土の縄文土器（９）…… 75
第48図　包含層出土の縄文土器（10）…… 76
第49図　包含層出土の縄文土器（11）…… 77
第50図　包含層出土の縄文土器（12）…… 78
第51図　包含層出土の縄文土器（13）…… 80
第52図　包含層出土の縄文土器（14）…… 81
第53図　包含層出土の縄文土器（15）…… 82
第54図　包含層出土の縄文土器（16）…… 83
第55図　包含層出土の縄文土器（17）…… 85
第56図　包含層出土の縄文土器（18）…… 86
第57図　包含層出土の縄文土器（19）…… 87
第58図　包含層出土の縄文土器（20）…… 88
第59図　包含層出土の縄文土器（21）…… 90
第60図　包含層出土の縄文土器（22）…… 91
第61図　包含層出土の縄文土器（23）…… 92
第62図　包含層出土の縄文土器（24）…… 94
第63図　包含層出土の縄文土器（25）…… 95
第64図　包含層出土の縄文土器（26）…… 96
第65図　包含層出土の縄文土器（27）…… 97
第66図　包含層出土の縄文土器（28）…… 98
第67図　包含層出土の縄文土器（29）…… 100
第68図　包含層出土の縄文土器（30）…… 101
第69図　包含層出土の縄文土器（31）…… 102
第70図　包含層出土の縄文土器（32）…… 103
第71図　包含層出土の縄文土器（33）…… 105
第72図　包含層出土の縄文土器（34）…… 107
第73図　包含層出土の縄文土器（35）…… 108
第74図　底部断面形態 …… 110
第75図　底部圧痕 …… 114
第76図　石器（１）…… 116
第77図　石器（２）…… 118
第78図　石器（３）…… 119
第79図　石器（４）…… 121
第80図　石器（５）…… 122

第81図　石器（６）…… 123
第82図　石器（７）…… 125
第83図　石器（８）…… 126
第84図　石器（９）…… 127
第85図　石器（10）…… 129
第86図　石器（11）…… 130
第87図　石器（12）…… 131
第88図　石器（13）…… 133
第89図　石器（14）…… 134
第90図　土製品 …… 135
第91図　遺構出土の土器 …… 138
第92図　包含層出土の土器（１）…… 140
第93図　包含層出土の土器（２）…… 141
第94図　包含層出土の土器（３）…… 142
第95図　陶磁器類 …… 145
第96図　土錘・鉄鏃 …… 146
第97図　貨　幣 …… 146
第98図　岡前遺跡出土縄文土器の変遷（中期後半）…… 148
第99図　石器組成の比較 …… 152

付表目次

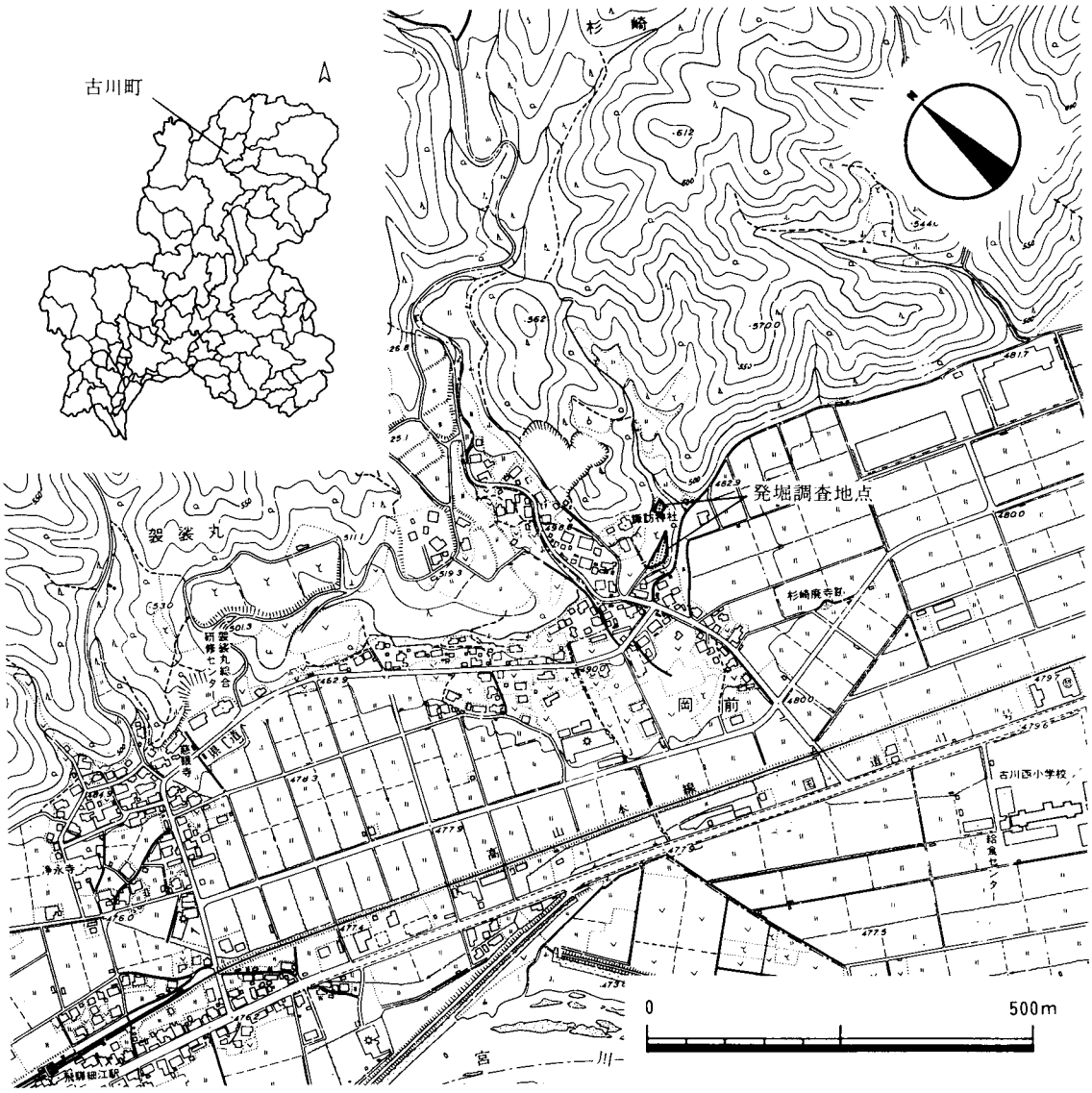
第１表　古川町内の遺跡 …… 8
第２表　ピット一覧表 …… 29
第３表　縄文土器観察表（Ⅰ群１類ａ類） …… 54
第４表　縄文土器観察表（Ⅰ群１類ｂ１類）…… 59
第５表　縄文土器観察表（Ⅰ群１類ｂ２類）…… 62
第６表　北東調査区における押型文土器の平面分布および垂直分布状況 …… 64
第７表　底部器形分類 …… 111
第８表　底部圧痕分類 …… 111
第９表　網代圧痕分類 …… 111
第10表　スダレ状圧痕観察表 …… 113
第11表　石鏃の石材と形態 …… 115
第12表　磨石の石材と形態 …… 128
第13表　凹石の石材と形態 …… 128
第14表　出土炭化種子一覧表 …… 136
第15表　ＳＢ５覆土出土炭化材の樹種 …… 137
第16表　土器観察表 …… 143
第17表　石器一覧表 …… 156

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

今回の発掘調査で、岡前遺跡が対象となったのは、岐阜県土木部古川土木事務所による県単道路改良工事（鼠餅古川線）による。この遺跡は、第２章第２節で述べるように古くからその存在が知られていた。また、道路改良地点には墓地があり、その移転先も当遺跡内であったため、発掘調査の対象となった。

古川町教育委員会は、本調査に先立ち事前に当遺跡の確認調査を行った。道路工事部分に関しては平成３年度に、墓地部分については平成４年度に実施した。その結果、道路部分はほぼ全域にわたって、縄文時代から歴史時代にかけての集落遺跡の可能性が確かめられ、墓地部分は、攪乱が激しいも



第１図　遺跡の位置

のの、8世紀代の遺物が出土することが認められた。

発掘調査にあたっての地区の設定は、国土座標に合わせて第2図のように、4×4mの区画を設けた。A列は、国土座標第Ⅶ系のX＝28465、1列は、同じくY＝－593となっている。調査地点の北東部のA19区からD18区までが、墓地部分であり、南西部のL1区からH14区までが道路部分となる。便宜的に前者を北東調査区、後者を南西調査区と呼ぶことにする。

調査地点は畑地で、遺物が容易に表面採集できる場所であった。従って、手掘りで平面発掘を行った。

第2節　発掘調査の経緯

6月上旬までに現場事務所の設置等の準備や、地形測量を実施し、6月14日に杭打ちおよび一部掘削を開始した。6月15日に調査始め式を行った。以下、週ごとに調査経過を記述する。

第1週(6.14～6.17)　現場事務所を設置し用具の搬入を行った。地区の設定をし、6月15日に調査始め式を行った。西側より掘削を開始する。第Ⅱ層より縄文中期後半の土器片が出土する。

第2・3週(6.20～7.1)　L2・3区あたりで、竪穴住居址らしきプランが見えはじめてくる。K6区では土器の集中的な出土が見られる。B16～C17区のあたりの表土剥ぎにかかった。

第4週(7.4～7.8)　L3区の埋設土器の掘りあげを行った。10列目から14列目の掘削にかかった。30度を越す暑さが徐々に厳しくなったきた。

第5週(7.11～7.15)　SB1の掘削を進める。9列目から14列目は地山まで予想以上に深く、掘削が難航する。H12・13区のあたりで、竪穴住居址らしきプランが見えはじめてくる。

第6週(7.18～7.22)　B列からD列のあたりは攪乱が激しいものの、第Ⅳ層が確認され、縄文早期の包含層の可能性がでてきた。L7区で天目茶碗が出土する。

第7・8週(7.25～8.5)　南西調査区のⅡ層および北東調査区の攪乱層の掘削を進める。K4区で方形の石囲炉を検出（SB2）。L5区で土偶の胴体部分と左腕部が出土する。

第9・10週(8.8～8.19)　北東調査区で「和同開珎」が出土。第3号住居址を検出した。

第11週(8.22～8.26)　北東区のⅡ層を掘削する。旧地形が南東方向に傾斜していることを確認する。J7区で須恵器の短頸壺が出土する。遺構の可能性を調べたが確認されなかった。

第12・13週(8.29～9.9)　北東区のⅢ層・Ⅳ層の掘削に入る。J8区で第4号住居址を検出する。北東区をほぼ掘り終えた。

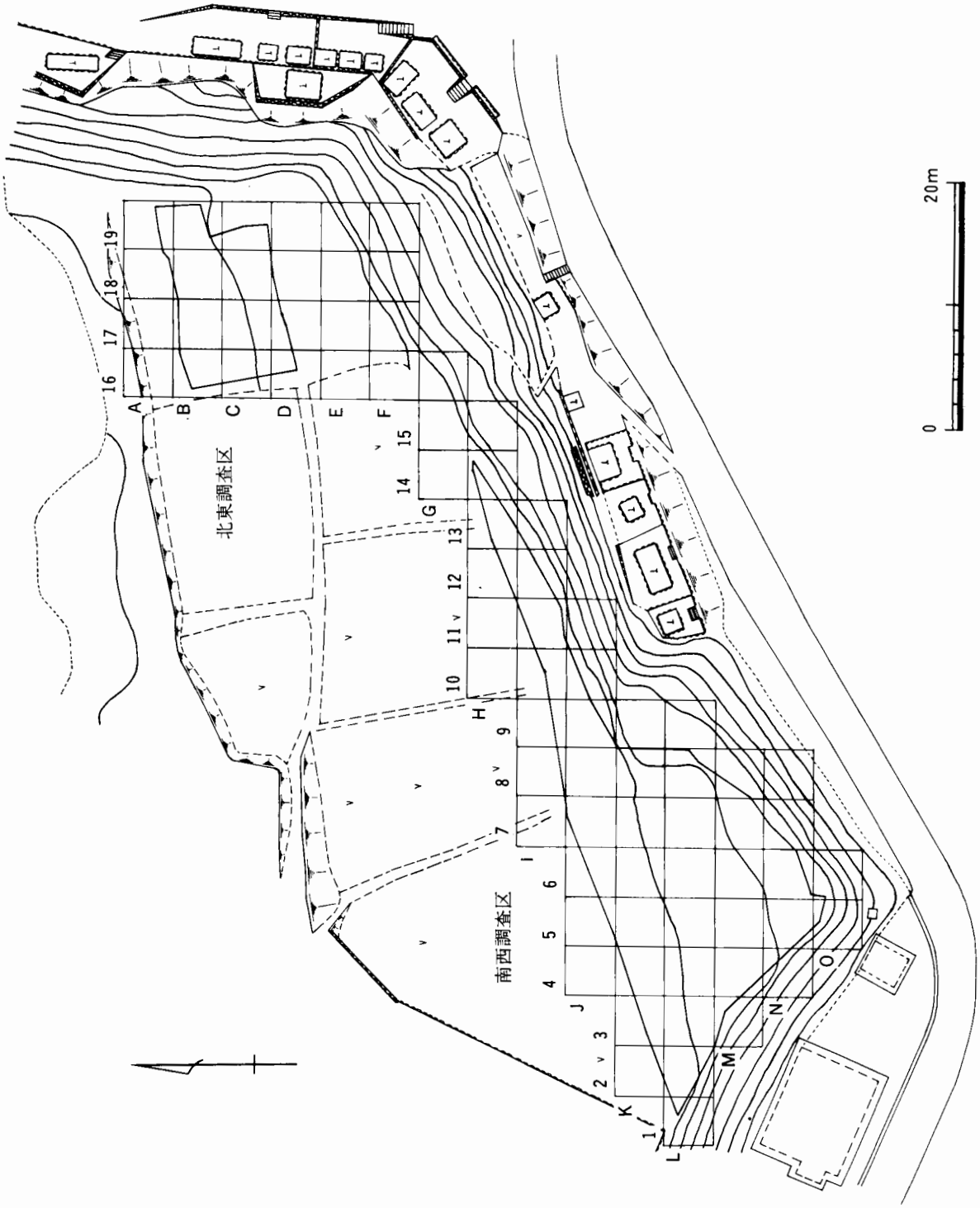
第14週(9.12～9.16)　第5号住居址を検出する。SB4で蓋石を伴う埋甕（逆位）が見つかり、SB5からは、有孔鍔付土器が出土した。第6号住居址を検出した。

第15週(9.19～9.22)　第7号住居址を検出する。ピットおよび土坑の掘削に入る。

第16・17週(9.26～10.8)　住居址内のピットの掘削を終え、遺構の実測および写真撮影を行う。10月8日に現地説明会を実施する。

第18週(10.11～10.13)　未掘部分および遺構の精査を行う。第8号住居址を検出する。I8区より鍔付きの大型石棒の一部が見つかる。埋め戻し作業および用具の搬出等を行って現地での調査を終了した。

以後、財団法人岐阜県文化財保護センター飛騨出張所にて整理作業に入った。


北東調査区
南西調査区
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0
20m

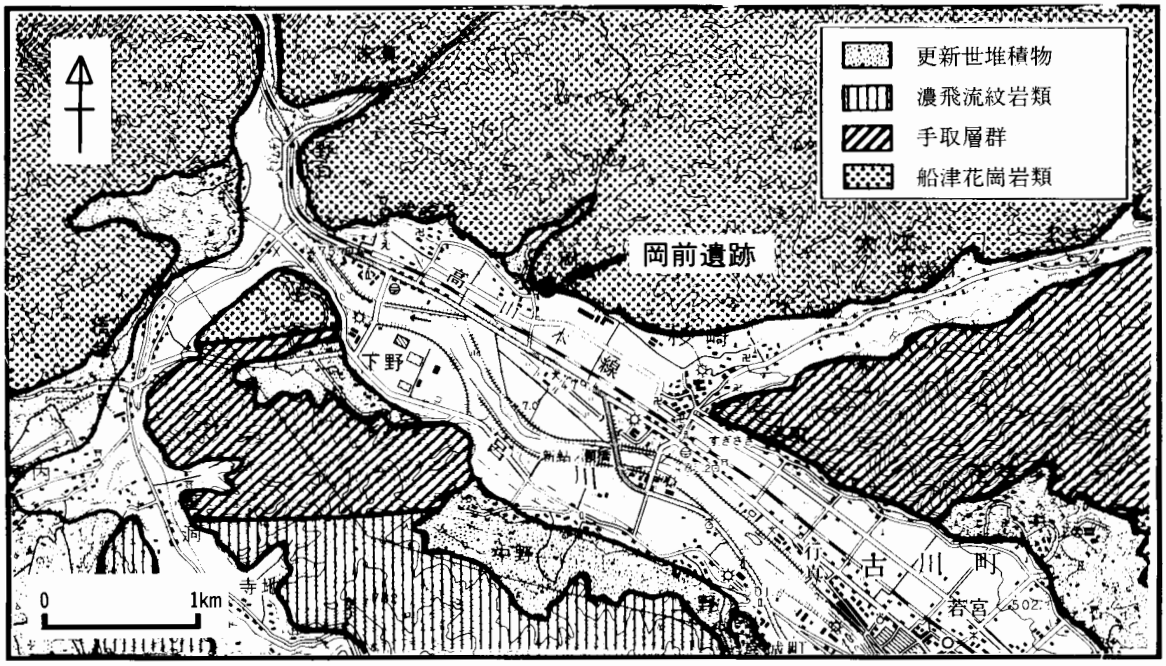
第2図　地区設定図

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

遺跡の所在する吉城郡古川町付近の地形は、宮川流域に広がる沖積低地と、それを取り巻く標高1,000m前後の山地からなる。宮川は国府町から古川町にかけては南東から北西方向に流路を取り、大きく曲流することもなく、標高差の少ない平坦面をゆるやかに流下している。この周辺で宮川に流れ込む小河川や谷は本流の流向に対しておおよそ垂直方向に流下し、宮川流域の低地にさしかかる辺りで小規模な扇状地を形成しながら宮川に合流する。これらの河川や谷の流路は、地下に伏在する断層の走行に一致している。宮川流域の低地は、両岸に500m～1,500mの幅で広がっており、第四紀完新世に礫や砂・泥などが堆積した沖積層からなる。これらの沖積層は、基盤の船津花崗岩類や濃飛流紋岩類、手取層などを被覆している。

宮川流域の沖積低地を取り巻く山地は、中生代ジュラ紀の船津花崗岩類、ジュラ紀～白亜紀の手取層、白亜紀後期の濃飛流紋岩類などからなる。船津花崗岩類は中生代ジュラ紀に大規模に貫入してできたもので、古川町周辺では南部に分布する花崗閃緑岩を主体とした下之本タイプのものと、北部に分布する眼球状マイロナイトなどを主体とした船津タイプのものに区分されている。手取層群は宮川を東西に横切るように帯状に分布しており、礫岩、砂岩、泥岩からなる。礫岩中には船津花崗岩類や濃飛変成岩類、オーソコーツァイト、砂岩、粘板岩、安山岩などの礫が含まれており、いずれも非常に円磨されている。この手取層の泥岩や砂岩層などからは植物や軟体動物の化石を産出している。古川町の西方に分布する濃飛流紋岩類は、白亜紀後期の火山活動による火砕流の堆積物であり、岐阜県内に広く分布する大規模な岩体の北縁部にあたる。岩質は流紋デイサイト～流紋岩溶結凝灰岩であり、



第3図　遺跡周辺の地質（地質調査所発行20万分の1図幅「高山」を改編）

岩体中には花崗斑岩の貫入が見られる。

山地が宮川流域の低地にさしかかる辺りでは、礫や砂、泥からなる更新世の堆積物が局所的に分布している。

古川町杉崎の岡前遺跡は、ちょうど山地と沖積低地の境界部に位置している。宮川流域の平坦面にさしかかる標高531.9mの山（諏訪神社の裏山）の南東山麓の緩斜面上にあり、眼下遠方に古川町市街を一望することができる。この山は船津花崗岩類に区分されている花崗閃緑岩やそれが圧砕作用を受けてできた眼球状マイロナイトからなるが、岩石全体が極めて風化しており、表層部からマサ化が進行している。遺跡の立地面は、こうした山の斜面上の風化岩屑が堆積してできた崖錐にさらにマサの流出したものが堆積して形成された緩斜面であると考えられる。遺跡付近でも、船津花崗岩類が風化していない山が平坦面にさしかかるような場所では崖的な急斜面を形成している。

マサは乾燥した状態では黄味を帯びた色をしており、遺跡の包含層中に認められる黄色い土はこのマサ起源のものであると考えられる。これは大雨等で裏山から流出して堆積したもので、遺跡の地層を識別する決め手にはなりにくい。

参考文献

野沢保・河田清雄・河合正虎 1975 『飛騨古川地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１図幅)』
山田直利・野沢保・原山智・滝沢文教・加藤碩一 1988 『20万分の１図幅「岐阜」』

第２節　歴史的環境

岡前遺跡は、吉城郡古川町杉崎地内に所在する。前述のように、花崗岩質の山が崩れてできた緩斜面に立地する。現在諏訪神社があるが、その境内およびその周辺が遺跡とされている。調査地点の現況は畑地であった。

ここは、古くから縄文時代の遺跡として知られ、1935年（昭和10）発行の飛騨考古土俗学会編輯『飛騨石器時代遺蹟地名表』では、出土遺物として「縄紋式土器．石鏃．石錐．打製石斧．磨製石斧．石錘．石棒．凹石．土偶．石鋸．石冠」があげられている。

1938年（昭和13）に林魁一は、県内の縄文時代の遺跡の報告する中で当遺跡を取り上げている（林1938)。それによると、1933年（昭和８）２月に鉄道工事（現在のＪＲ高山本線）の際、岡前の諏訪神社の南側山麓の土を取ったが、その時、断面半円形の穴が見つかり、中から、「細い石棒、磨製石斧の斷缺と石皿のやうなもの」が発見されたと記している。また、付近で林道を開く時に、炉と推定される遺構とともに、底部を欠損した土器が見つかったことが記されている。写真から判断すると沈線によるいわゆる剣先文がある唐草文系土器である。

岐阜県教育委員会（1962)『岐阜県遺跡目録』では、上記の遺物をあげているが、縄文土器は「後期」と記されている。1972年（昭和47）発行の『岐阜県史』の一覧表では、同様の遺物をあげ、さらに土器に関しては、「中期と後期」と記している。

遺跡の背後に諏訪神社がある。創立年代は平安時代とされている（土田1987)。神社西側の駐車場整備の際に、縄文時代後期堀之内式段階の注口土器が見つかっている。あたかも革袋形を呈しており、

珍しい形のものである。神社周辺の畑地では、縄文土器片・フレイク類や、須恵器片が容易に表採できる。

さて、古川町内の著名な縄文遺跡をあげるとすると、まず、沢遺跡がある。ゆるく傾斜する山麓の小さい平地にある。1964年（昭和39）と1967年（昭和42）に発掘調査が行われ、県内では最も古い段階に位置づけられる押型文土器が確認され、その時期の竪穴住居址も検出された。黒鉛を含む独特な胎土が特徴的で、帯状施文の山形文を主体とする。「沢式」の型式名が確立しているが、その編年的位置づけについては議論されている。

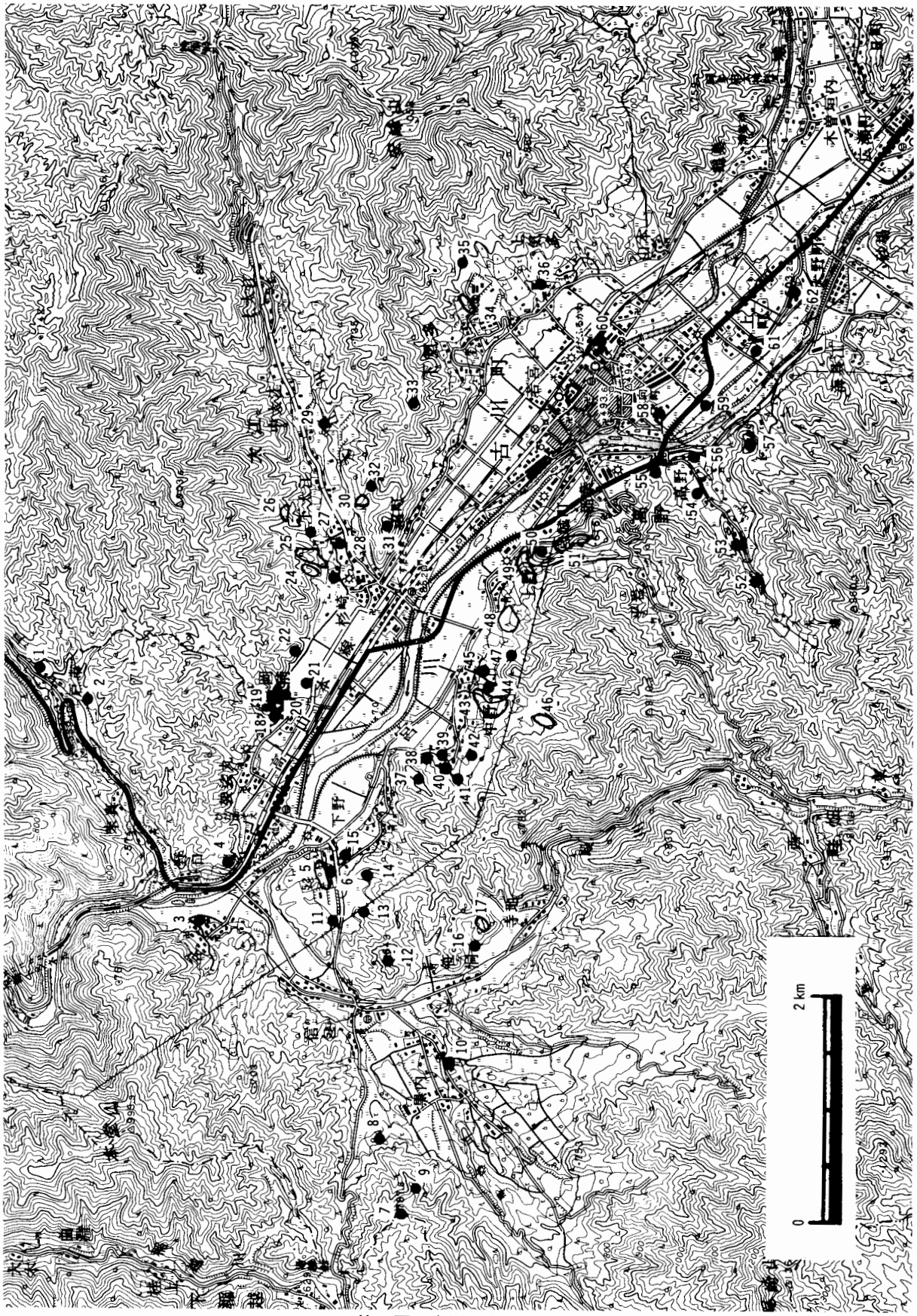
飛騨地方の発掘史の中でも注目されるのが、御番屋敷遺跡である。この遺跡は、山麓台地の南端にある。1954年（昭和29）に開田工事に伴い７基の炉跡が見つかり、そのうちの１つが発掘調査されて、竪穴住居址が１軒明らかになった。住居の中央に６個の石からなる方形の石囲炉があった。出土した縄文土器の主体は中期のもので、北陸系の前葉から中葉にかけてのものや、加曽利ＥＩ式に類するものが圧倒的に多く出土し、住居址の時期もこの時期に比定される。

やがて、飛騨地方においても、発掘調査の規模が大きくなってくる。大野郡久々野町の堂之上遺跡や高山市の垣内遺跡など、縄文時代の集落遺跡の発掘調査が行われるようになった。古川町内では、岡前遺跡と宮川を挟んで反対の山麓に所在する中野山越遺跡が、1976年（昭和51）から1979年（昭和54）にかけて調査された。発掘調査報告書によると、縄文時代中期から後晩期にかけての竪穴住居址が32軒検出されるとともに、大量の土器・石器類の出土があった。

古川町内では、弥生時代の遺跡はほとんど知られていない。それに対して、古墳の造営は、飛騨地方では、古川・国府から高山にかけての盆地地域に集中している。古川町でも、信包古墳群、中野古墳群、高野古墳群などがあり、全長64ｍの前方後円墳である信包八幡神社古墳は、鉄地金銅張の馬具類、碧玉、水晶、硬玉製の玉類、鉄鏃等が発見されており、６世紀代の古墳であると言われる。光泉寺古墳や高野水上古墳は巨石、切石を利用した横穴式石室を有する。

古代寺院も古墳と同様に飛騨においては、盆地地域に集中している。現在14寺の所在が推定されているが、そのうち古川町内に６寺を数える。なかでも、岡前遺跡の眼下に広がる杉崎廃寺は、古くから礎石群があり、県の史跡に指定されていたが、1991年（平成３）から古川町教育委員会の調査によって、伽藍配置が明らかになった。また、伽藍間に石が敷きつめられた珍しい寺院であることが注目されている。

古墳時代から奈良時代にかけての住居址が数多く見つかったのが、上町遺跡である。国府古川バイパスの建設に伴いＣ地点・Ｄ地点の調査が、1987年（昭和62）から1989年（平成１）にかけて実施され、竪穴住居址90軒、掘立柱建物址31棟などが検出され、飛騨地方では、当時代の調査としては、画期的な成果を上げた。報告書では、出土した土器および検出された遺構等から、律令体制が整備されてきた段階から地域的土器様式への変容、さらに、律令体制が変質・解体し中世へと進んで行く過程にまで言及している。上町遺跡に関しては、その後、トヨタ地点・Ｏ地点・栗原センター地点の調査もなされた。



第４図　古川町内の遺跡

第1表　古川町内の遺跡（岐阜県教委1990より作成）

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	備　　考
1	戸市古屋敷古墳群	古川町戸市古屋敷	古墳	円墳2基
2	戸市遺跡	古川町戸市上野	縄文	
3	谷遺跡	古川町谷立道	縄文	
4	野口城跡	古川町野口宮ノ腰	中世（室町）	町史跡
5	羽根坂古墳群	古川町下野中山	古墳	円墳4基
6	下野羽根坂古窯跡	古川町下野中山	奈良	
7	小鷹利城跡	古川町信包牛ヶ谷	中世（室町）	県史跡
8	信包塩屋古窯跡	古川町信包塩屋	奈良	
9	黒内城跡	古川町黒内古屋敷	中世（室町）	
10	黒内細野遺跡	古川町黒内細野	縄文	
11	丸山古墳	古川町信包中山	古墳	円墳
12	向小島城跡	古川町信包轟	中世	県史跡
13	信包中原田古窯	古川町信包中原田264	奈良	昭和54発掘調査
14	八幡古墳	古川町信包八幡	古墳	円墳
15	信包八幡神社古墳	古川町信包八幡	古墳	前方後円墳　県史跡
16	西ケ洞廃寺跡	古川町寺地西ヶ洞	平安	
17	寺地西ヶ洞古墳群	古川町寺地西ヶ洞	古墳	円墳2基
18	岡前奥御堂跡	古川町杉崎奥御堂	中世	
19	岡前諏訪神社裏古墳	古川町杉崎御構	古墳	円墳
20	岡前遺跡	古川町杉崎御構	縄文～平安	
21	杉崎廃寺跡	古川町杉崎淡原	白鳳	県史跡
22	杉崎嵯峨山古墳	古川町杉崎嵯峨山	古墳	円墳
23	御番屋敷遺跡	古川町太江御番屋敷	縄文	県史跡
24	稲荷神社古墳群	古川町杉崎天神洞	古墳	円墳3基
25	太江多度古墳群	古川町太江多度	古墳	円墳8基
26	太江前平古墳群	古川町太江前平	古墳	円墳2基
27	太江釜ヶ洞遺跡	古川町太江釜ヶ洞	縄文～奈良	
28	左近廃寺跡	古川町太江左近	白鳳	
29	太江中日影古墳	古川町太江中日影	古墳	円墳
30	太江中ケ野古墳群	古川町沼町東洞	古墳	円墳4基
31	小島城跡	古川町沼町前平	中世（室町）	県史跡
32	沼町天王洞古墳	古川町沼町天王洞	古墳	円墳
33	下北城跡	古川町下気多城山	中世（室町）	
34	上気多古墳群	古川町上気多沢	古墳	円墳3基
35	沢遺跡	古川町上気多沢	縄文	町史跡
36	上気多古墳	古川町上気多榊岡	古墳	円墳
37	池之山城跡	古川町下野池之山	中世（室町）	
38	中野宮田古墳	古川町中野宮田	古墳	円墳
39	中野宮ケ洞遺跡	古川町中野宮ヶ洞	縄文	
40	中野西ケ洞遺跡	古川町中野西ヶ洞	縄文	
41	中野トンビヶ洞遺跡	古川町中野トンビヶ洞	縄文	
42	中野祢宜ヶ洞古墳	古川町中野祢宜ヶ洞	古墳	円墳
43	大洞平古墳群	古川町中野大洞平	古墳	円墳3基　方墳2基　1・2号墳　県史跡
44	中野大洞平遺跡	古川町中野大洞平	縄文	
45	中野山越遺跡	古川町中野山越	縄文～平安	昭和51～54発掘調査　町史跡
46	中野山越古墳群	古川町中野大洞	古墳	円墳12基
47	上野梨ヶ洞遺跡	古川町上野梨ヶ洞	弥生	
48	上野水上洞古墳群	古川町上野水上洞	古墳	円墳17基
49	上野井西古墳群	古川町上野井西	古墳	円墳7基
50	落岩城跡	古川町上野城山	中世（室町）	
51	上野城山古墳群	古川町上野城山	古墳	円墳5基
52	高野光泉寺古墳	古川町高野光泉寺988	古墳	円墳　県史跡
53	高野水上古墳	古川町高野水上	古墳	円墳　県史跡
54	高野溝添古墳	古川町高野溝添	古墳	前方後円墳
55	百足城跡	古川町高野滝ノ上	中世（室町）	
56	高野巾ノ上古墳	古川町高野巾ノ上	古墳	円墳
57	古川城跡	古川町高野城山	中世（室町）	
58	五阿弥塚古墳	古川町向町2－7	古墳	円墳
59	古町廃寺跡	古川町向町古町	白鳳	
60	増島城跡	古川町片原町8	安土桃山	県史跡
61	上町遺跡	古川町上町五反田	古墳～中世	昭和62～平成2発掘調査
62	上町廃寺跡	古川町上町久中	白鳳	

第3章　遺　構

検出された遺構は、竪穴住居址、屋外埋甕、土坑、ピットおよび焼土の広がりである。まず、基本的層序について述べ、以下遺構ごとに順に記述する。

第1節　基本的層序

岡前遺跡は前述のように、背後の花崗岩質の山が崩れてできた緩斜面上に位置する。従って地山は、黄褐色の砂礫土である。調査地点は畑地であった。遺物が表採できるが、表土は攪乱が激しい。また、北東調査区は、山芋が採集されており、かなり深く攪乱されている。基本的な層序は、次のようにⅣ層からなる。

まず第Ⅰ層は、畑の耕作土である。黒褐色土（10YR2／3）で、草根が多く粘性が乏しく、しまりはよくない。厚さは約10～20㎝程度である。

第Ⅱ層は、第Ⅰ層より黒っぽく、黒褐色土（10YR2／2）の層が約10～30㎝の厚さで広がり、さらに黒色土（19YR1.7／1）の層が約20～40㎝ある。縄文時代中期を中心に土器・石器等の遺物が出土する。地点によっては、黒褐色土層より須恵器・土師器が出土する。

遺跡の地形は、北から南にかけて緩やかに傾斜しており、斜面の縁辺部では、縄文時代の遺物包含層の上層である黒褐色土が下がってきており、須恵器等の遺物が出土する。

北東調査区では、第Ⅲ層が存在する。黄橙色土（10YR7／8）で、約5㎜の小礫を含む。背後の花崗岩質の山からマサが流出して堆積したものと思われる。

さらに第Ⅳ層の黒褐色土（10YR3／1）がある。やや粘性があり、しまりがある。縄文早期の押型文土器および条痕文系土器が出土する。

地山は、黄褐色土（10YR5／6）である。

第2節　竪穴住居址

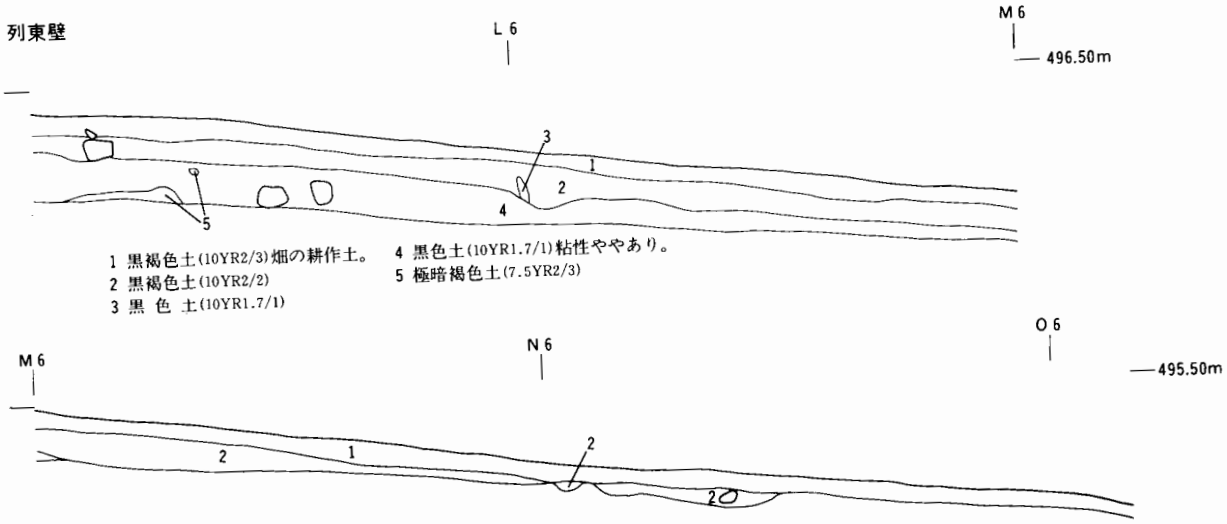
検出された竪穴住居址は8軒である。ただし、石囲炉のみを検出したものも含む。いずれも南西調査区である。7軒は石囲炉を有する縄文時代のものであり、1軒は平安時代のものと推定される。検出された順に遺構番号を付けた。

第1号住居址（第8図、図版3）

最も西端に位置する住居址で、L2区とL3区にまたがっている。黄褐色土を掘り込んだ状態であった。南側は攪乱されていてプランは明瞭でないが隅丸方形を呈すると推定される。大きさは、東西4.0mで、南北は確認された範囲では、約3.5mである。壁の高さは、北側で約65㎝確認された。

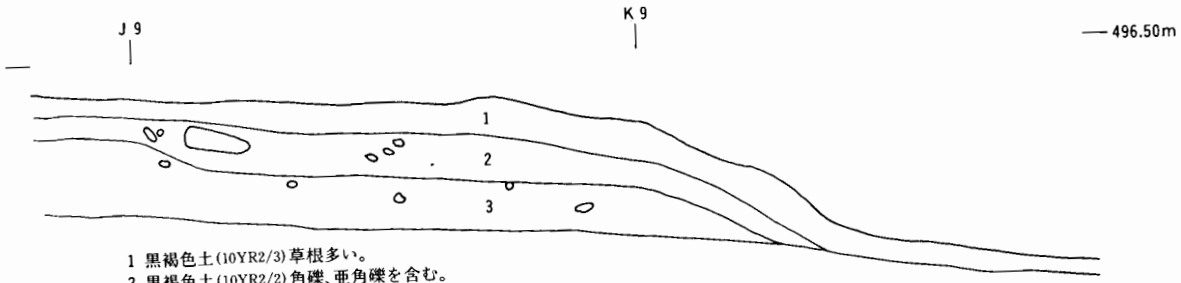
この地点は、包含層を掘り下げて行く段階から遺物の出土が多い地点であったが、かすかに土色の違いがあり、住居址のプランと想定して掘り進めたが、実際はそれよりも、やや北側に大きく掘り込

5列東壁



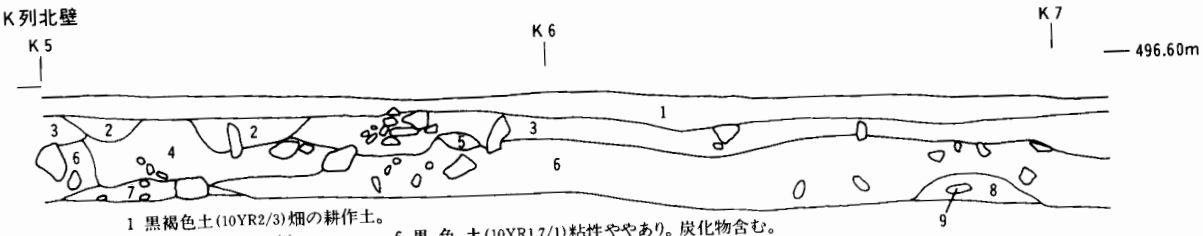
1 黒褐色土(10YR2/3)畑の耕作土。
2 黒褐色土(10YR2/2)
3 黒 色 土(10YR1.7/1)
4 黒色土(10YR1.7/1)粘性ややあり。
5 極暗褐色土(7.5YR2/3)

8列東壁



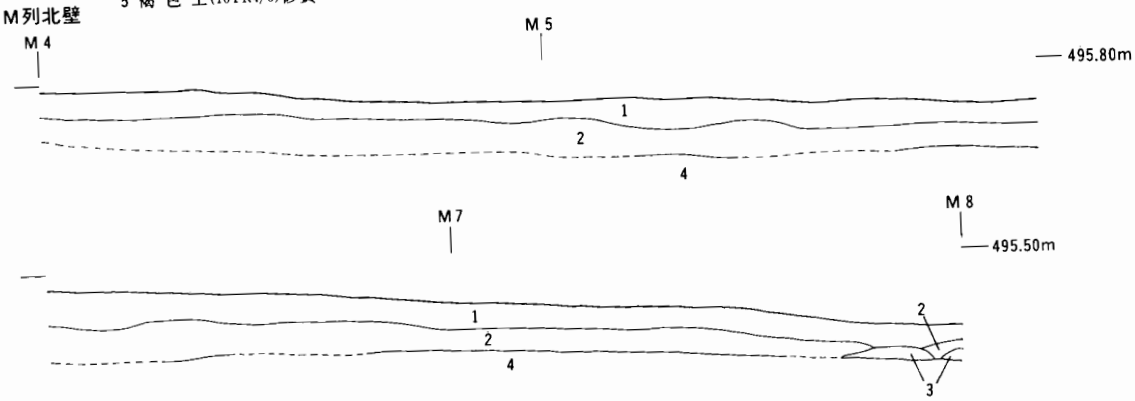
1 黒褐色土(10YR2/3)草根多い。
2 黒褐色土(10YR2/2)角礫、亜角礫を含む。
3 黒 色 土(10YR1.7/1)炭化物含む。

K列北壁



1 黒褐色土(10YR2/3)畑の耕作土。
2 黒褐色土(7.5YR2/1)
3 黒褐色土(10YR2/2)
4 黒 色 土(7.5YR1.7/1)
5 褐 色 土(10YR4/6)砂質
6 黒 色 土(10YR1.7/1)粘性ややあり。炭化物含む。
7 暗褐色土(10YR3/3)
8 黒 色 土(7.5YR1.7/1)炭化物含む。
9 黒 色 土(10YR1.7/1)

M列北壁

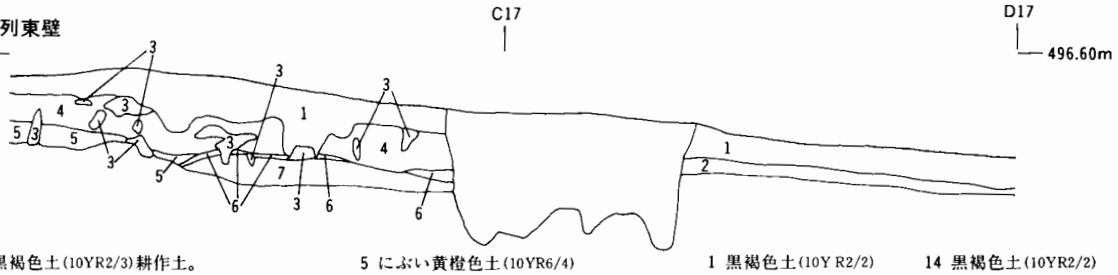


1 黒褐色土(10YR2/3)
2 黒褐色土(10YR2/2)
3 黄褐色土(10YR5/6)
4 黄褐色土(10YR5/6)小礫含む。

0　2 m

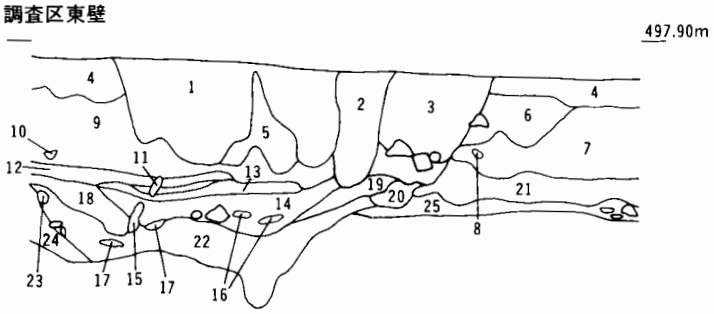
第5図　土 層 図

17列東壁



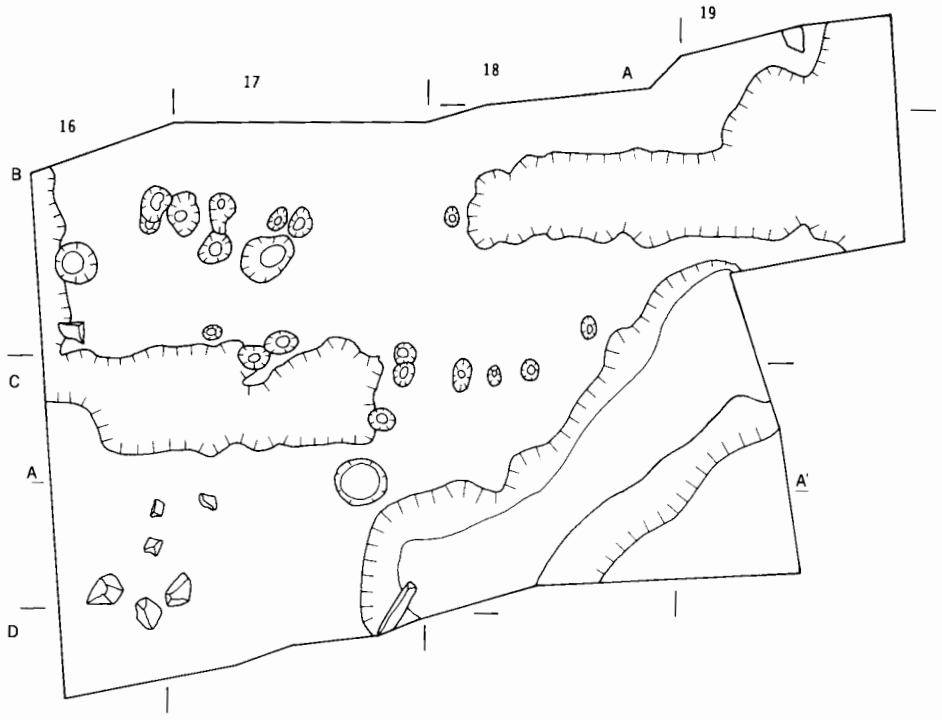
1 黒褐色土(10YR2/3)耕作土。
2 黒　色　土(10YR1.7/1)
3 黒褐色土(10YR2/3)黄橙色土(10YR7/8)混じり。
4 黄橙色土(10YR7/8)
5 にぶい黄橙色土(10YR6/4)
6 灰黄褐色土(10YR4/2)
7 黒褐色土(10YR3/1)

調査区東壁



1 黒褐色土(10YR2/2)
2 黒　色　土(10YR2/1)
3 暗褐色土(10YR3/3)
4 黒褐色土(10YR2/3)
5 暗褐色土(10YR3/3)
6 暗褐色土(10YR3/4)
7 黒褐色土(10YR3/2)
8 にぶい黄橙色土(10YR6/3)
9 黒褐色土(10YR2/2)
10 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
11 黒　色　土(10YR2/1)
12 暗褐色土(10YR3/4)砂質。
13 暗褐色土(10YR3/3)
14 黒褐色土(10YR2/2)
15 黒　色　土(10YR2/1)
16 明黄褐色土(10YR6/6)
17 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
18 黒　色　土(7.5YR1.7/1)
19 褐　色　土(7.5YR4/4)
20 黒褐色土(7.5YR2/2)黄褐色土混じり。
21 黒褐色土(7.5YR2/2)
22 黒　色　土(7.5YR2/1)
23 黒　色　土(7.5YR1.7/1)
24 褐　色　土(7.5YR4/3)
25 黄褐色土(10YR5/8)

0　2 m



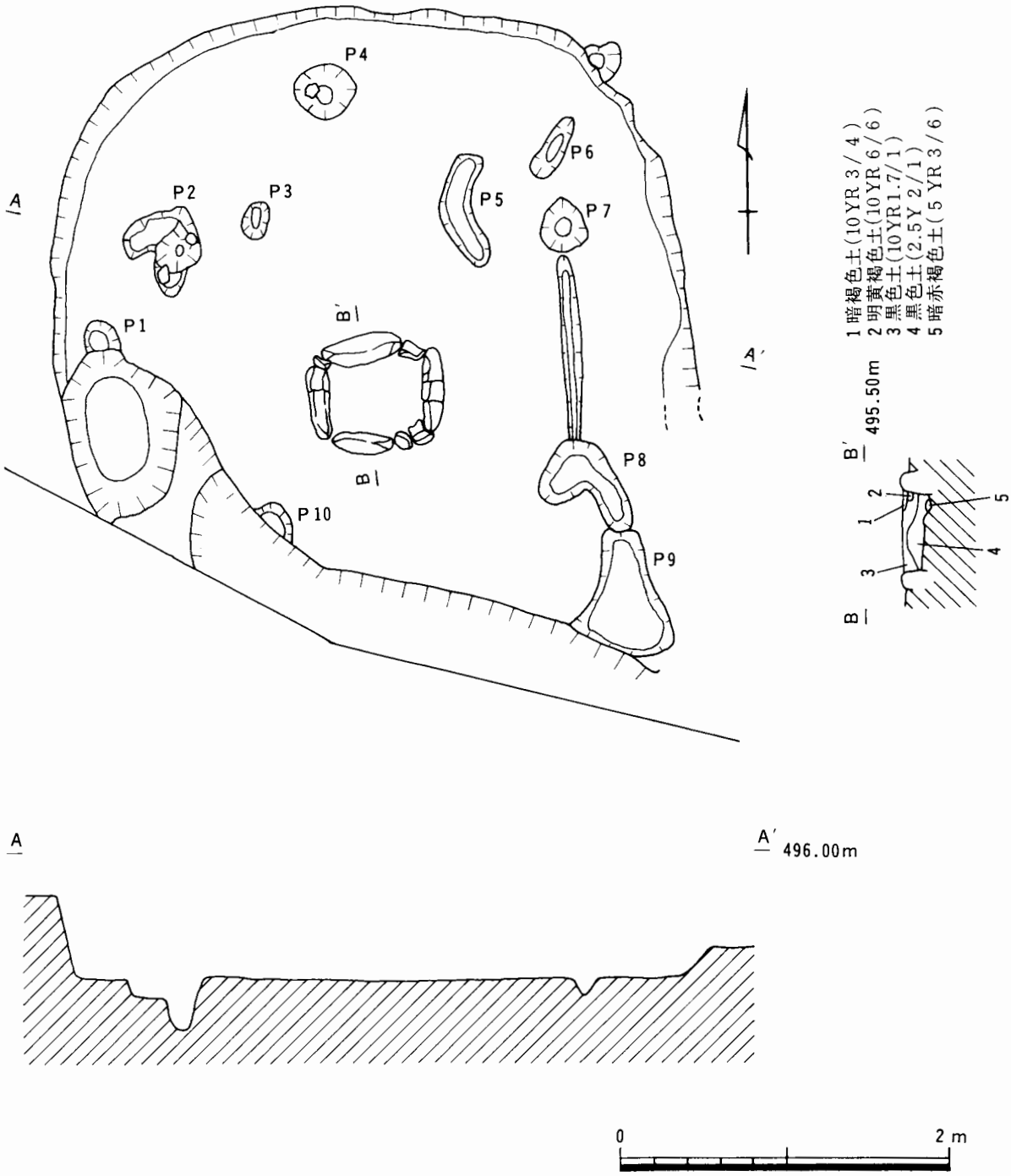
第6図　北東調査区

第7図　南西調査区

まれていた。

ピットは、Ｐ１からＰ10まであるが、柱穴と推定されるのは、Ｐ２・Ｐ７・Ｐ８である。Ｐ７とＰ８の間は溝が結ばれている。中野山越遺跡36号住居址では主柱穴をめぐるように周溝があり、同じく２号住居址でもピットを結ぶように周溝がある。本住居址の類例といえよう。

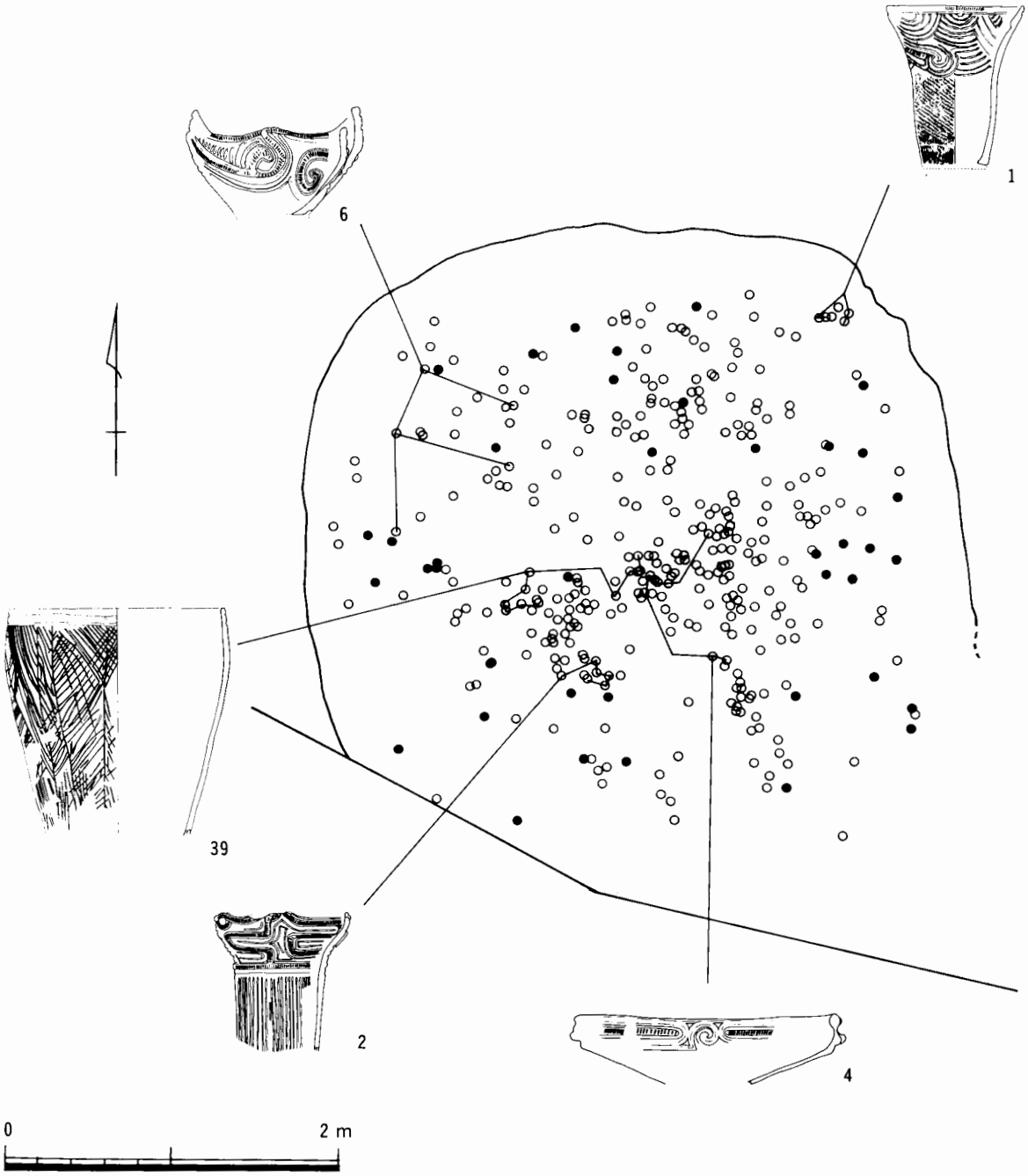
中央やや南寄りに石囲炉を検出した。川原石約８個からなる方形のプランを呈し、火熱を受けて割れている石もある。約85×80cmの大きさである。焼土はそれほど確認されなかった。



第８図　第１号住居址

覆土中より土器片の出土は多く、ほぼ器形の復元できる個体が数点あった（遺物出土分布図の○は土器、●は石器類）。第24図の１は、床面直上からの出土である。在地的な要素をもっているが、全体的には北陸の古府式に相当する。39の土器は、大型の土器で破片が散在していた。葉脈状の沈線文のくずれたものと見ることができることからも、やや新しいものと考えられる。４の浅鉢、６の平面楕円形の台付き土器など北陸的な要素を強くもつ土器が多い。石器類は、石鏃５点、石錐３点、石匙１点、ピエス・エスキーユ１点、打製石斧６点、磨製石斧２点、磨石４点、凹石７点、切目石錘１点、礫石錘１点、石皿１点、ＵＦ２点、石核１点、フレイク100点が出土した。

時期は、出土した土器から見て、北陸編年の古府式の最終段階と推定する。



第９図　第１号住居址遺物出土分布図

第2号住居址（第10図、図版3）

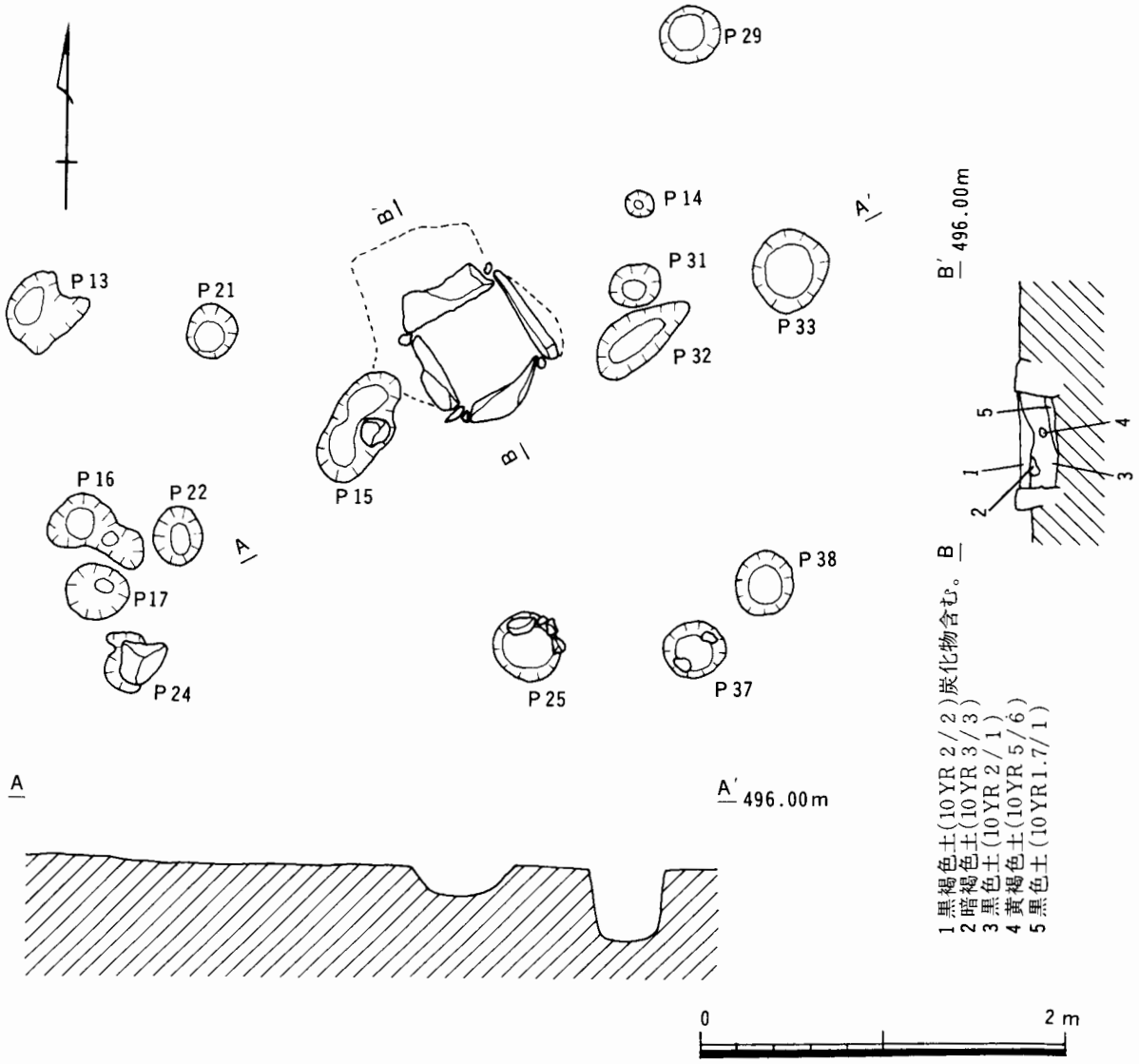
K4区で検出された。ただし、石囲炉とその周辺の硬化部分のみを確認しただけである。プランは周辺のピット等から推定すると円形を呈するものと思われるが不明である。

周辺のピットのうちP13・P21・P22・P25・P29・P33・P37・P38等が柱穴と推定される。この中で、P22とP33がそれぞれ深さが44cm・40cmと深く、石囲炉を中心に対称の位置にあることから注目される。

石囲炉のプランは方形で、80×70cmの大きさである。四辺をそれぞれ1つずつ大きな石で組んでいる。他の住居址の石囲炉はすべて川原石をもって構築されているが、この石囲炉のみ山石を利用している。覆土中には、炭化物を含んでいたが、焼土はそれほど確認されなかった。

炉の周辺は非常に固く締まった面が約90×70cmにわたって確認された。

出土遺物は、炉の覆土中および炉の周辺の遺物のみをこの住居址に伴うものと判断したが、実際は、住居址のプランを検出できなかったので、包含層と判断した部分からの出土も少なからずあるはずで



第10図　第2号住居址

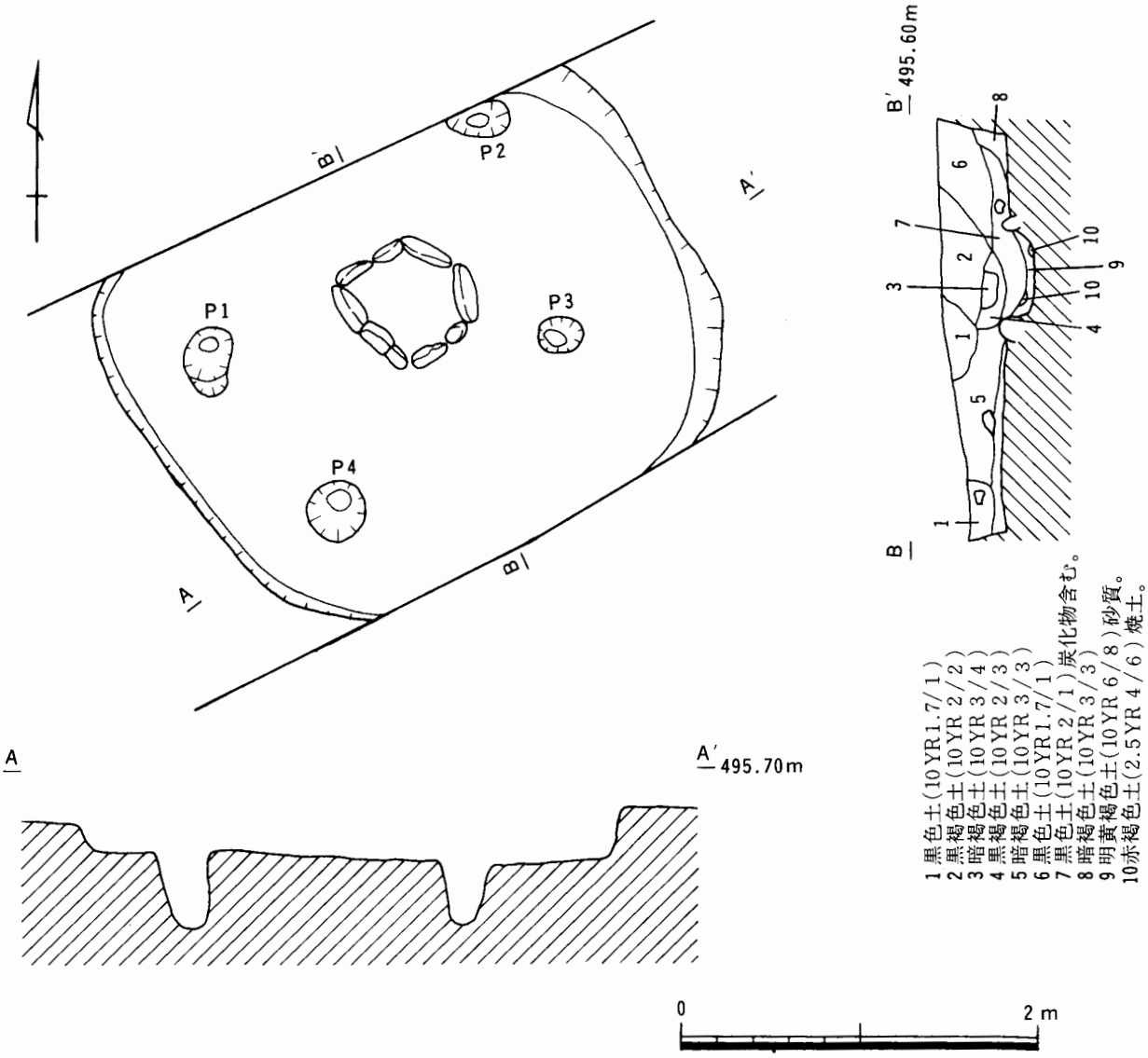
ある。第28図の68は、器厚約６㎜と薄手であるが、半截竹管による半隆起線文が偏平になった段階のもので、第１号住居址と同様に、北陸編年の縄文中期古府式最終段階と思われる。他に87や88のように条線文の粗製土器であるが、口縁に沈線を施すもの、口縁に沿って隆帯がめぐり櫛状工具による連続刺突を施すものなど特徴的な土器が出土している。

石器類の出土は少量で、石錐１点、磨石２点、フレイク４点のみである。

第３号住居址（第11図、図版３）

H12・13～Ｉ12区のあたりで検出された。黄褐色土を掘り込んだ状態であった。北側および南側が掘削できなかったためプランは明瞭にできなかったが、直径約3.2ｍの隅丸方形と推定される。壁は、北寄りでは、約50㎝、南寄りでは、約20㎝の高さが確認された。ピットは、Ｐ１からＰ４までの４か所検出され、それぞれが主柱穴と推定される。

中央やや北よりに方形あるいは五角形の形状を呈する石囲炉がある。大きさは、約75㎝×70㎝であ



第11図　第３号住居址

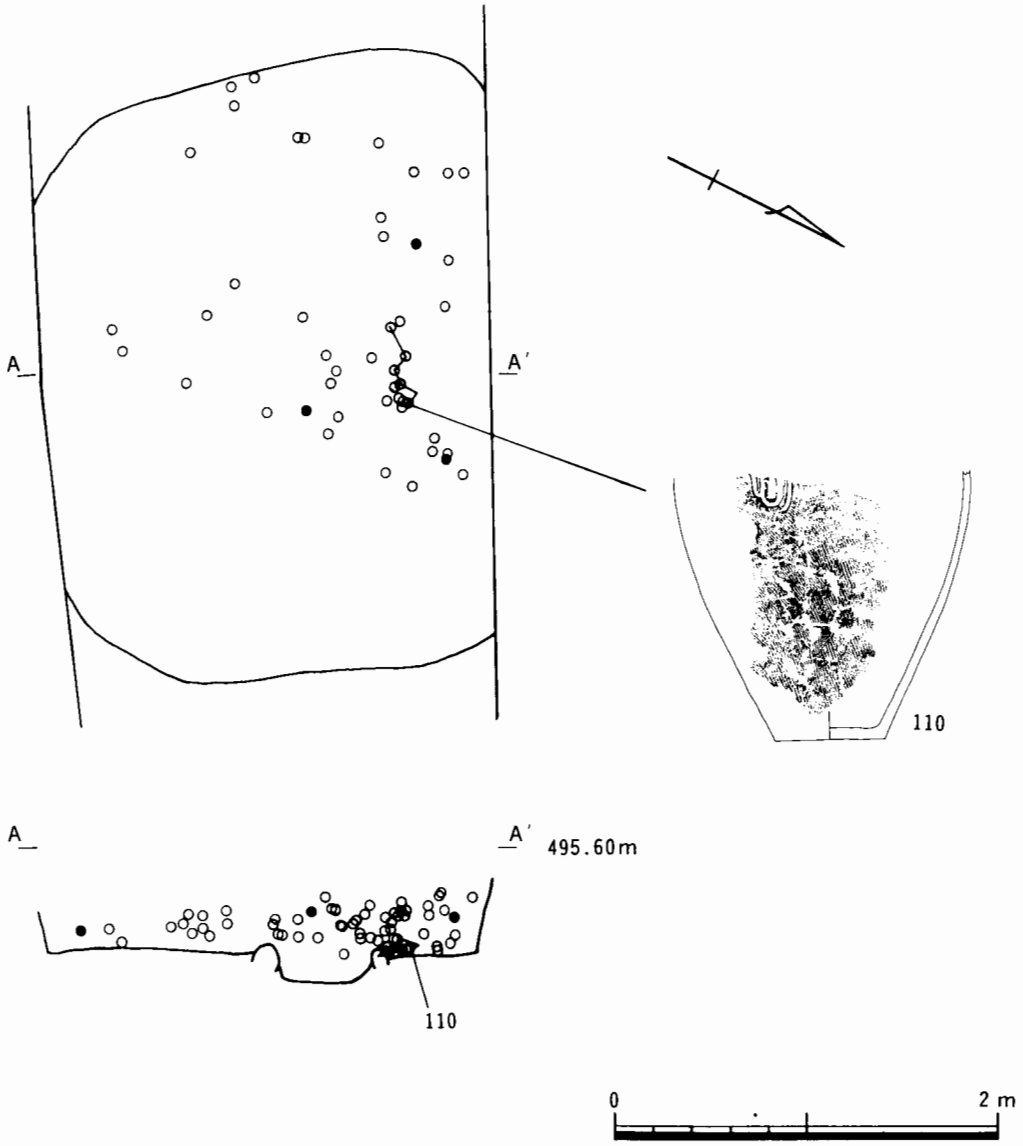
る。川原石を7個利用している。西側は一つの石であったが、火熱を受けて大きく三つに分かれている。焼土はわずかに確認できた。

出土遺物は少量である。第29図の110は床面直上からの出土である。口縁部は不明であるが、地文は撚糸文で、胴上部に条線が施され、U字状に半隆起線文とそれに沿って沈線が施されている。縄文中期中葉の末頃であろう。石器類は、磨製石斧1点、磨石2点、凹石2点、フレイク22点が出土している。

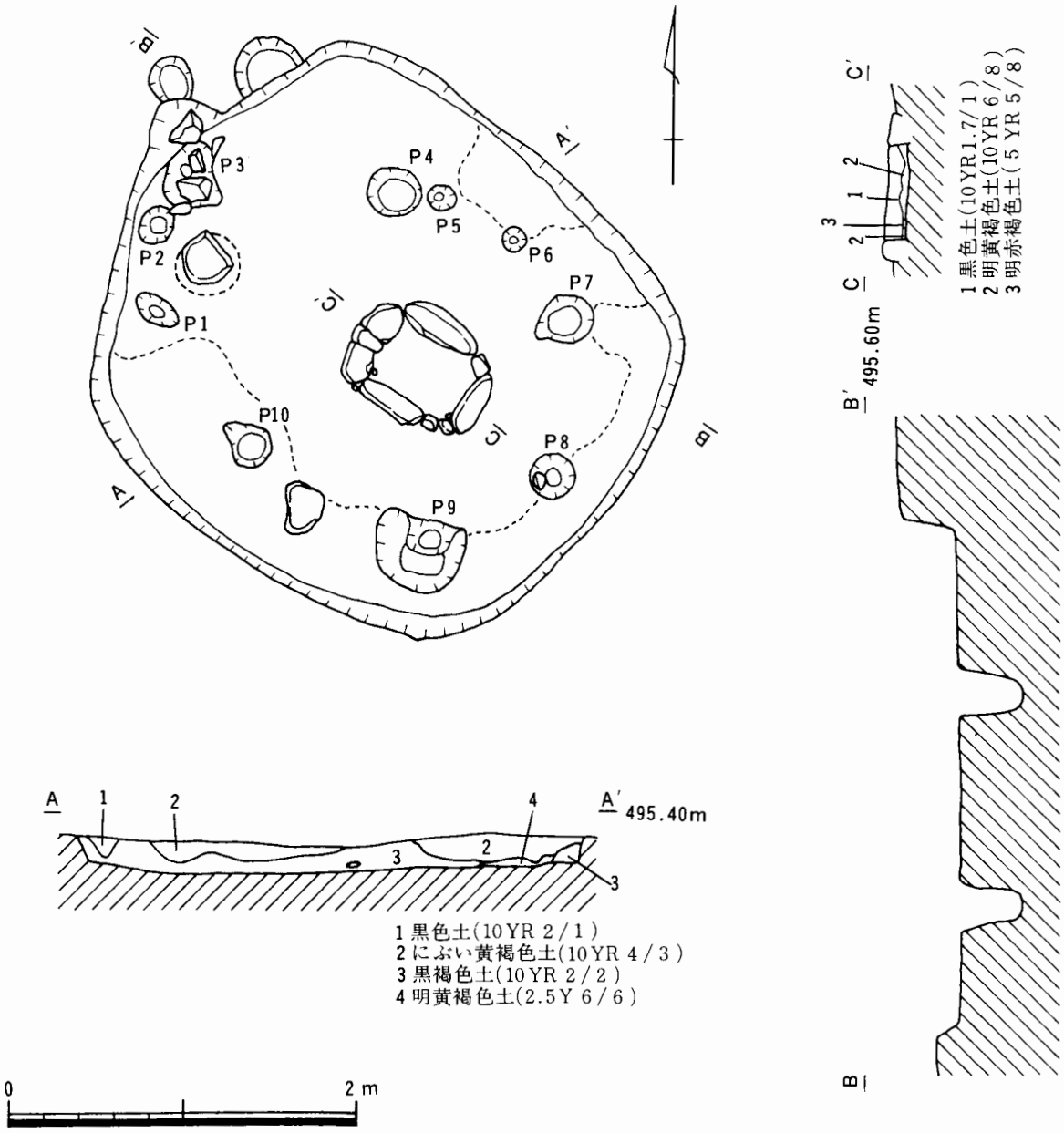
第4号住居址（第13図、図版4）

J8区で検出された。黄褐色土を掘り込んだ状態であった。北西部がピットによってやや攪乱されている。隅丸方形のプランで、約3.1×2.9mとやや小型のものである。

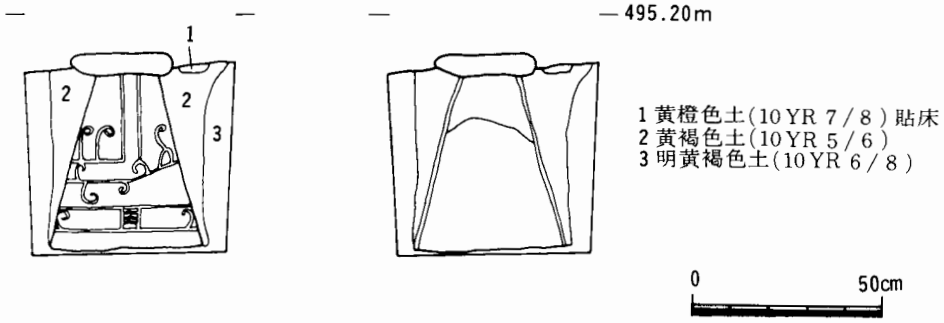
壁は、北側の高い方で約30cm、南側の低い方で約20cm確認された。ピットは、P1からP9まであるが、P4・P7・P8・P9・P10は柱穴の可能性がある。北西側は不明である。中央よりやや南



第12図　第3号住居址遺物出土分布図



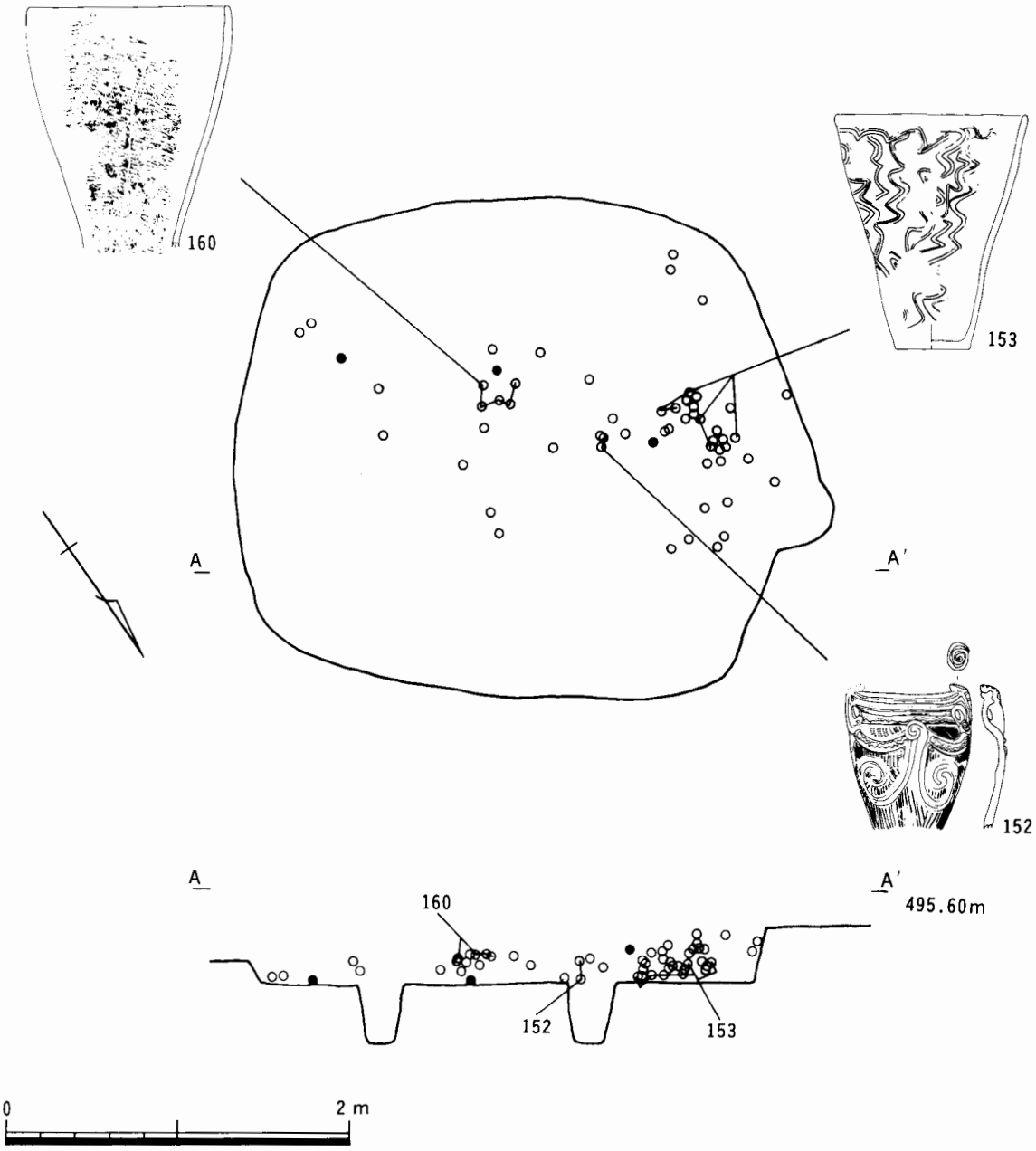
埋甕



第13図　第4号住居址

東寄りに長方形の石囲炉がある。大きさは、約90×70cmである。四辺に大きめの川原石を据えているが、北西側のものは火熱を受けて大きく3つに割れている。焼土がわずかに確認できた。ピットの状況および後述する埋甕等から判断すると、出入り口は、北西部にあったことになる。石囲炉の長軸はその向きに合致する。また、この軸に沿って遺跡の南東方向を見ると、御嶽山が見通せる。

北西に埋甕が確認された。偏平な石が蓋石となっており、埋設された土器は底部を欠いて逆位に据えてあった。蓋石の下部10cm以上が空洞になっており、遺存状況は良好であった。第31図139がその土器である。後述するように北陸的な手法と信州的な要素を混合した他地域に類例を見ない在地的な土器である。隆帯に櫛状工具による刺突文が施文されていることから、古府式の段階と推定する。埋甕以外の土器は、152のように典型的な唐草文系土器があるとともに、櫛状工具による連続刺突を多



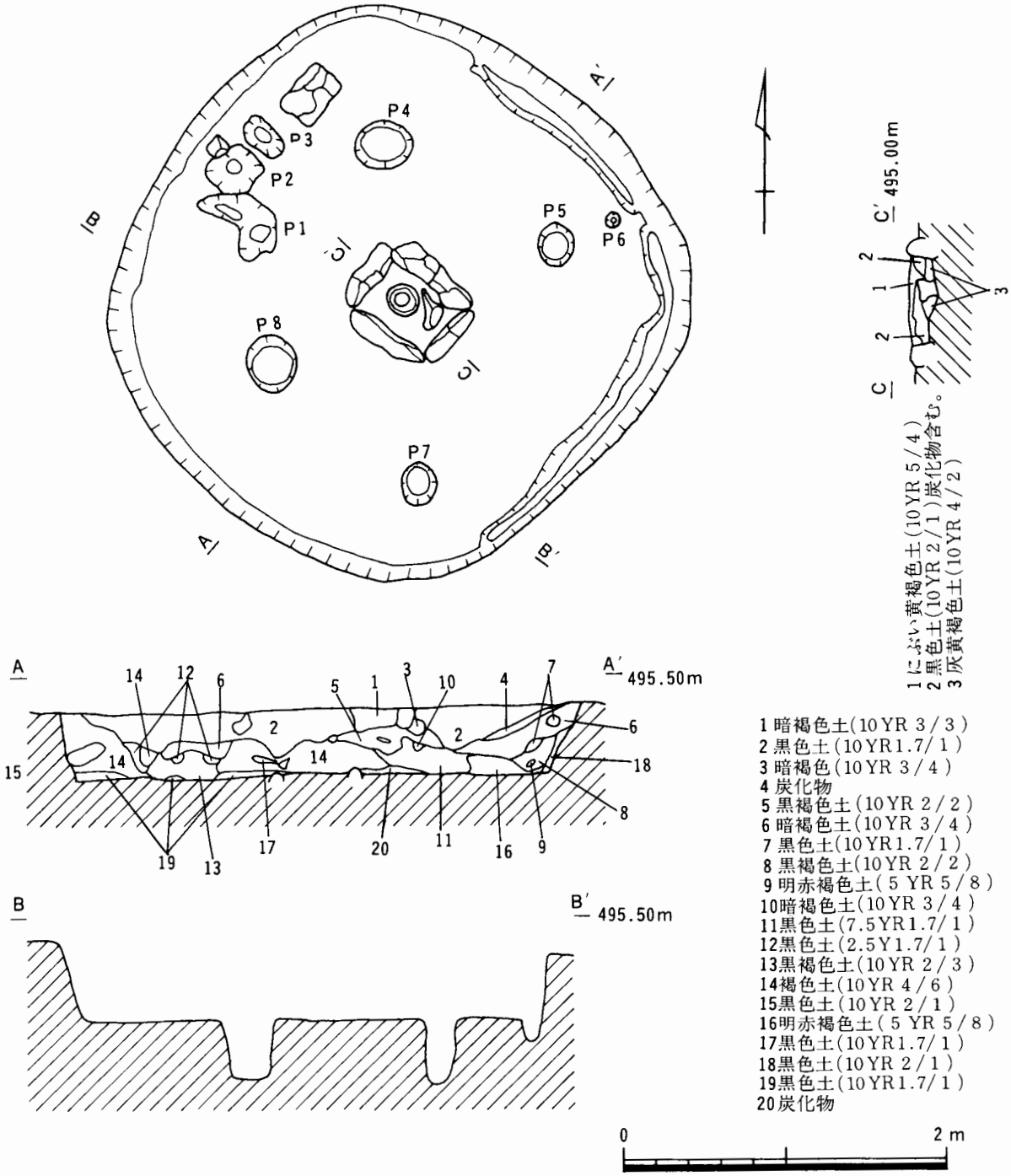
第14図　第4号住居址遺物出土分布図

用する北陸的な要素が強い土器もある。153のように２本単位になった沈線が蛇行する独特の土器もある。

石器類は、石錐１点、打製石斧１点、凹石３点、フレイク10点である。

第５号住居址（第15図、図版５）

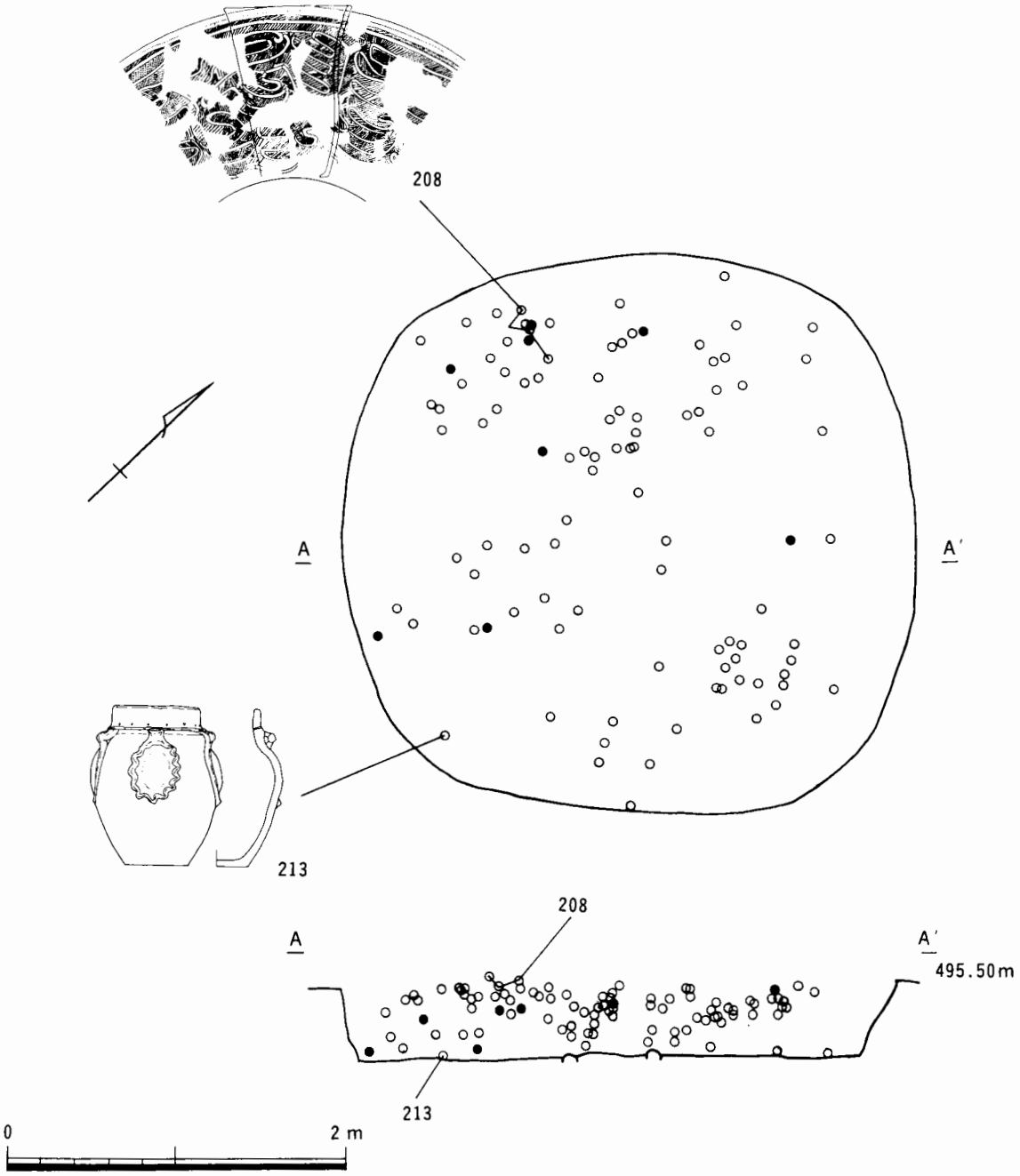
Ｊ７～Ｋ７区で検出された。第４号住居址の西側に位置する。黄褐色土を掘り込んだ状態であった。



第15図　第５号住居址

覆土は炭化物を多く含む黒色土が広がっていた。隅丸方形のプランを呈し、大きさは、約3.4×3.3mである。壁の高さは約40～50cm確認された。炭化材を含む炭化物が多く、焼失した住居と推定される。後述するように炭化材は建築材・燃料材として広く利用されていたクリ材であった。ピットは、P1～P8まである。P4・P5・P7・P8が主柱穴であろう。P1・P2・P3のあたりは、出入り口に伴う施設に関係があるかもしれない。P3の北東に火熱を受けてボロボロになった石があった。壁際のいわゆる周溝が北東側と南東側で確認された。

石囲炉は、中央やや南東寄りに位置する。長方形を呈し、大きさは、80×60cmで、大きな川原石が四辺に据えてあった。南西のもの以外は、火熱を受けて割れていた。炉の中央やや北西寄りに、深鉢



第16図　第5号住居址出土遺物分布図

形土器の上部が据えてあった。第35図209の土器である。

南側の隅の床面直上から有孔鍔付土器がほぼ完形で出土した。第35図213の土器である。口を住居内側にし、胴部に孔があった。内部は炭化物を多く含む土のみで、土器片はなかった。他の出土遺物としては、第35図208の土器が覆土上層から出土した。櫛状工具を多用するが北陸地方では見られない在地性の強い土器である。また、長野編年の中期後半Ⅱ期に相当するであろうものが見られる。

石器類は、石鏃４点、石錐１点、石匙２点、削器１点、三脚石器１点、磨製石斧１点、磨石１点、凹石３点、ＵＦ１点、石核１点、フレイク11点である。

第６号住居址（第17図、図版６）

Ｌ６・７区およびＭ６・７区で検出された。黒褐色土がわずかに方形に残りプランが見えてきたことと、９世紀後半の須恵器・灰釉陶器がまとまって出土したことから住居址と判断した。しかし、確認された壁の高さが15㎝以下と低く、時期不明のピットが多くあって、残存状況が悪いという点と、焼土混じりの部分が北壁中央にあったものの、明確な竈跡にはならなかったという点から、住居址かどうか不確定な面を大きく残すことになった。

プランは方形であるが、南西部は確認できなかった。東西4.5ｍ、南北4.1ｍの大きさである。北壁中央に直径約１ｍ高さ約20㎝の焼土混じりの高まりがあった。竈に相当するか不明である。ピットが数多く検出され、番号は46まで付けた。柱穴等は不明である。

出土遺物は、第91図１～８にあるように、９世紀後半の灰釉陶器、須恵器の碗および甕類である。

第７号住居址（第18図、図版６）

Ｋ５～６区で検出された。黒褐色土の広がりから、当初土坑と推定していたが、石囲炉が検出され、竪穴住居址と判明した。住居址のプランは不明瞭である。壁の残り具合から見ると長軸が約3.3ｍの楕円形となるが、はっきりしたことは言えない。ピットは、Ｐ１～Ｐ４まで見つかった。Ｐ３は柱穴の可能性があるが、他は不明である。

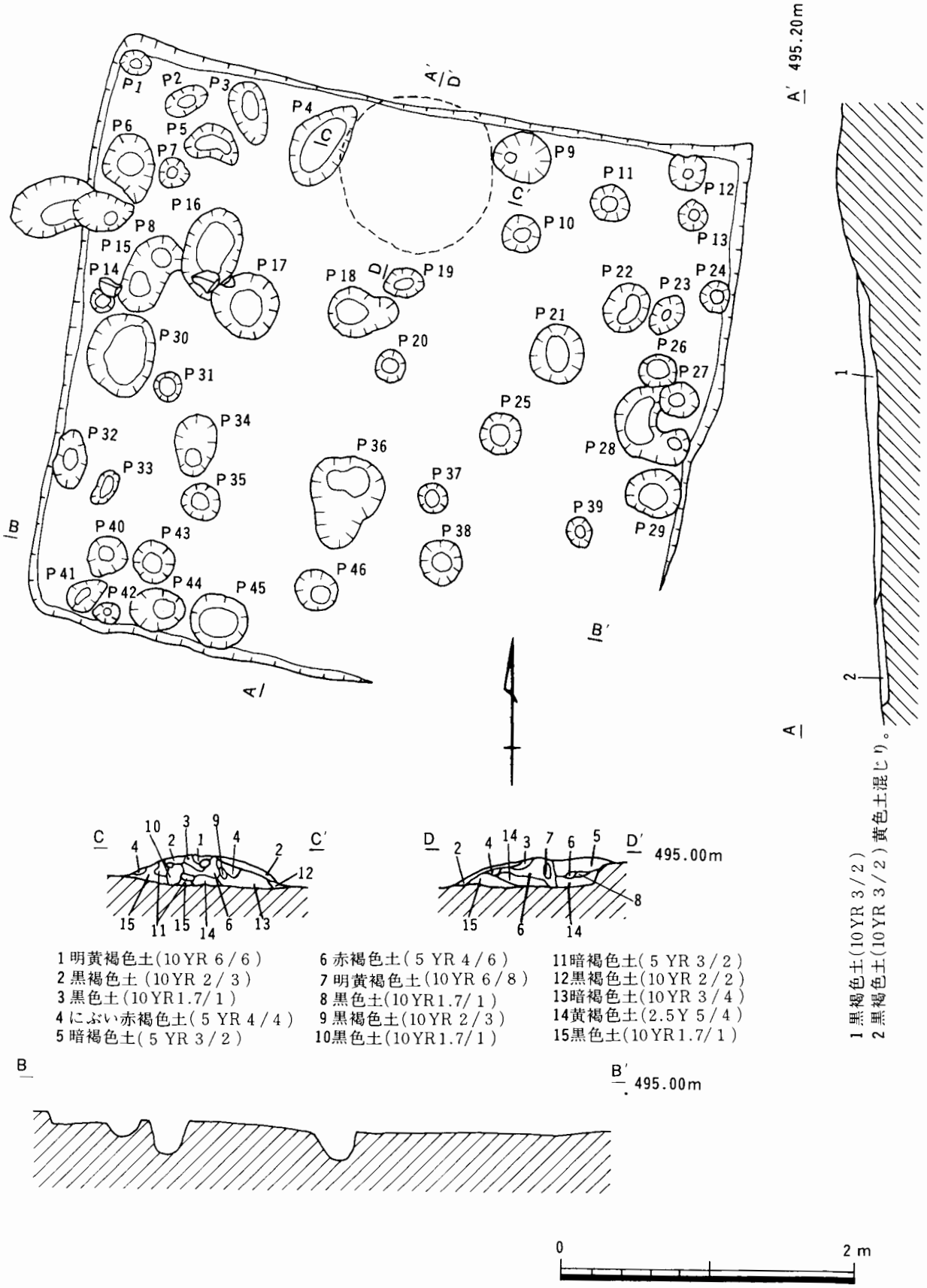
石囲炉は、方形で、65×60㎝の大きさで、大小８個の石からなる。北西の石は火熱を受けて割れている。焼土がわずかに確認された。

出土遺物は、遺構の残りが悪かったこともあり少量である。櫛状工具による蛇行沈線の土器（第37図236）や東海系の土器（第37図239）など縄文中期後半の土器が見られる。石器類は、石錐１点、フレイク４点のみである。

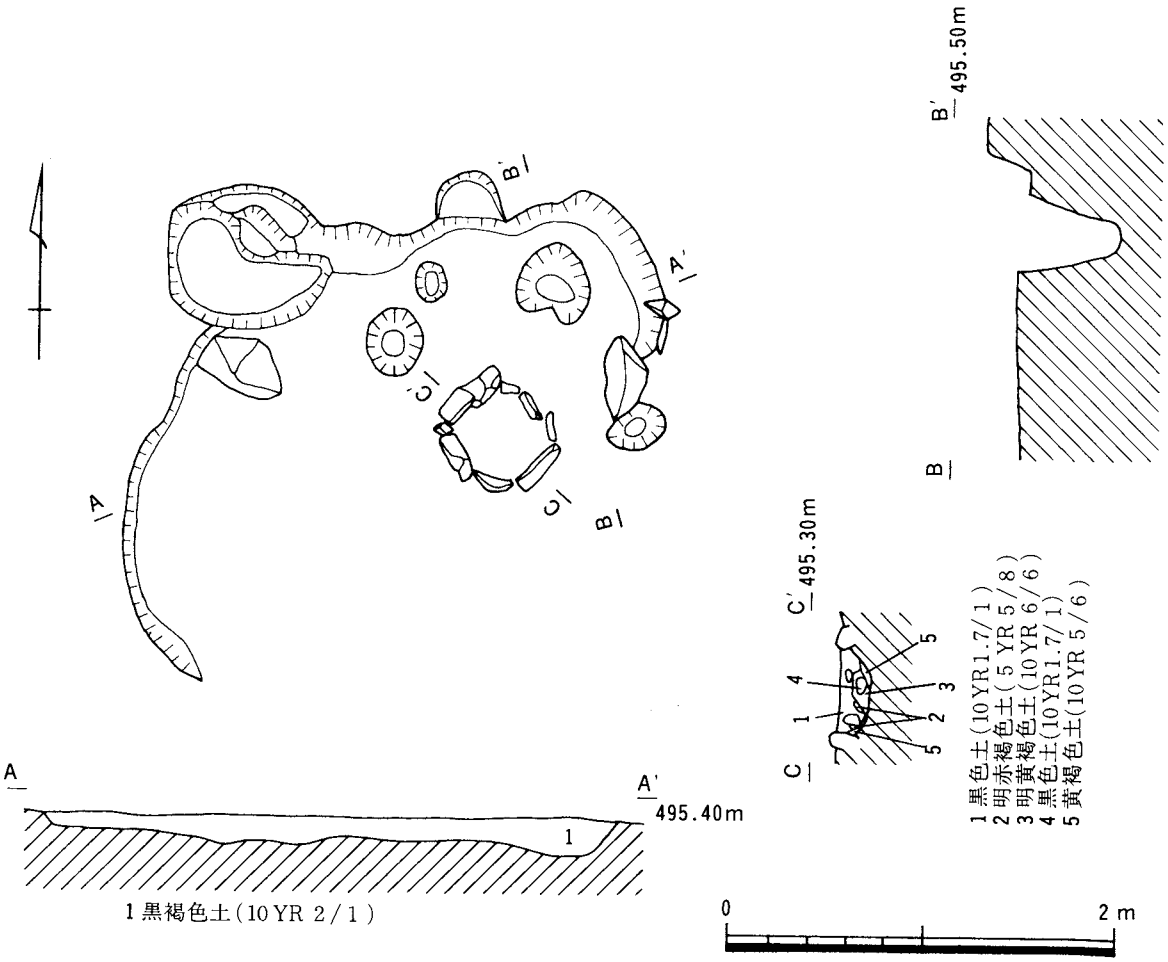
第８号住居址（第19図、図版６）

最後に確認された住居址である。Ｊ７区で石囲炉を検出した。方形で４つの石からなるが、北隅は石が欠失していた。炉の大きさは、85×80㎝である。炉内は、焼土を含む黒褐色土が堆積していた。住居址のプラン・柱穴とも不明である。

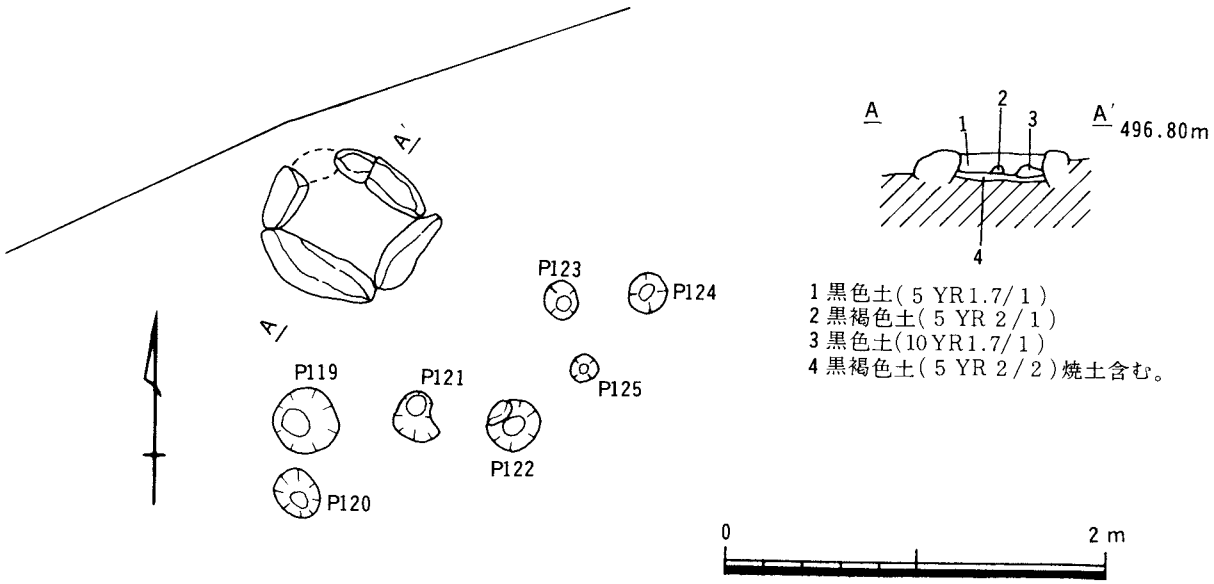
出土遺物は炉の覆土からのもので、ごくわずかである。まわりの住居址から見て、当初、同じく縄文中期後半の時期を考えていたが、図示してあるのは、いずれも無文の土器で、比較的薄手であり、後期の可能性もある。第Ⅱ層中に築かれた住居かも知れない。石器類は、フレイク２点のみである。


A′ 495.20m
A
1
2
1 黒褐色土(10YR 3/2)
2 黒褐色土(10YR 3/2)黄色土混じり。
C
C′
D
D′
495.00m
1 明黄褐色土(10YR 6/6)
2 黒褐色土 (10YR 2/3)
3 黒色土(10YR1.7/1)
4 にぶい赤褐色土(5YR 4/4)
5 暗褐色土(5YR 3/2)
6 赤褐色土(5YR 4/6)
7 明黄褐色土(10YR 6/8)
8 黒色土(10YR1.7/1)
9 黒褐色土(10YR 2/3)
10黒色土(10YR1.7/1)
11暗褐色土(5YR 3/2)
12黒褐色土(10YR 2/2)
13暗褐色土(10YR 3/4)
14黄褐色土(2.5Y 5/4)
15黒色土(10YR1.7/1)
B
B′
495.00m
0
2 m

第17図　第6号住居址



第18図　第7号住居址



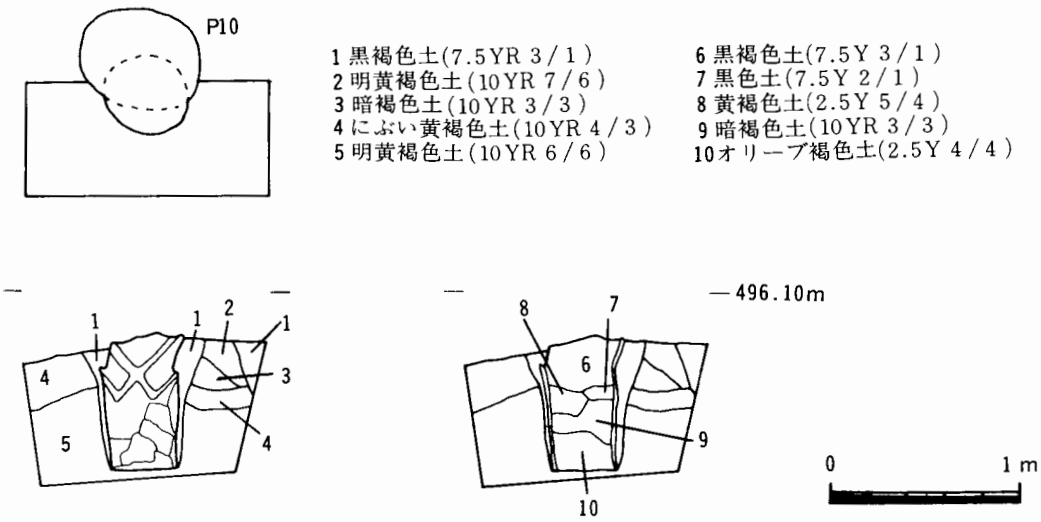
第19図　第8号住居址

第3節　その他の遺構

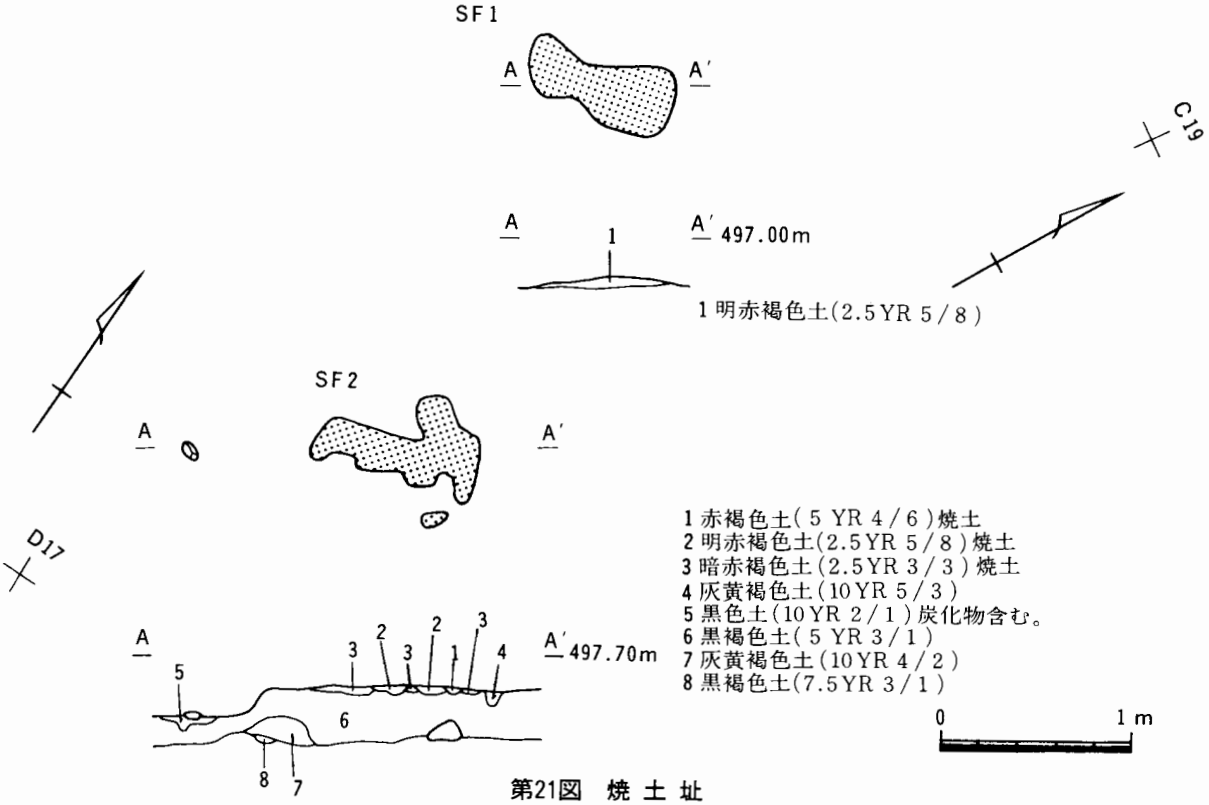
竪穴住居址以外の遺構としては、埋甕1、焼土址2か所、土坑6基、ピット186基がある。

埋　甕（第20図、図版7）

L3区第1号住居址の東側で検出された。屋外の埋設土器である。深鉢形土器の上方が円弧を描いて検出された。当初、P10がその掘り方と推定したが、実際は、P10によって西側を壊されていた。



第20図　埋　甕



第21図　焼 土 址

黄褐色土を掘り込んでいた。土器は、第37図249で、同一固体と思われる口縁部を利用して図上で復元している。撚糸文に幅広の沈線で連弧状の文様が続く。北陸の串田新式に類似性を見いだせる土器である。

焼土址（第21図）

北東調査区で２か所、焼土の広がりを認めた。

ＳＦ１は、Ｃ18区にある。Ⅱ層を掘削中に検出した。80㎝×40㎝の範囲に焼土が広がっていた。遺物は伴っていない。

ＳＦ２は、Ｃ17区にある。Ⅳ層を掘削中に検出した。90×50㎝の範囲に焼土が広がり、50㎝ほど離れた所に炭化物を含む黒色土があった。縄文早期押型文土器が出土する層であり、いわゆる炉穴の可能性があり、断ち割ってみたが、不明であった。わずかに遺物を伴う。いずれも押型文土器である。

土　坑（第22・23図）

土坑として検出したものは、Ｍ４～６・Ｎ４区にかけての地点である。この付近は、攪乱が激しい部分であり、土坑として不適切なものがあるかもしれない。

ＳＫ１は、配石を伴う。1.7×1.6ｍの大きさで、深さは20㎝である。縄文土器片を伴う。

ＳＫ２は、3.3×2.0ｍで深さは40㎝である。縄文土器片を伴う。

ＳＫ３は、1.9×1.1ｍで深さは25㎝である。縄文土器片を伴う。

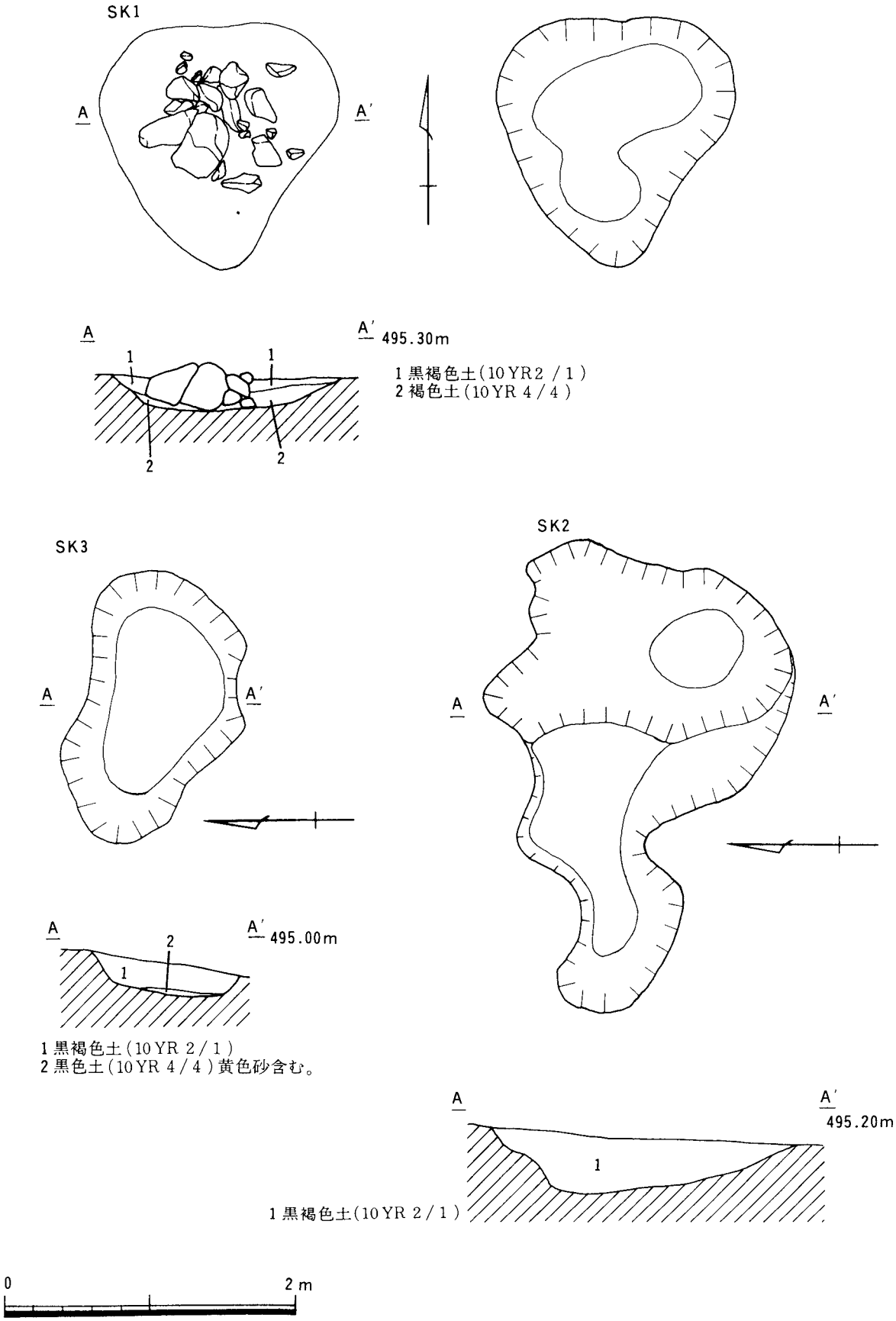
ＳＫ４は、南西側は掘削できなかったため全容は明らかではない。検出された最大幅が1.8ｍで、深さは30㎝、底の部分は石が多くあった。

ＳＫ５は、2.1×1.5ｍで、深さは20㎝である。

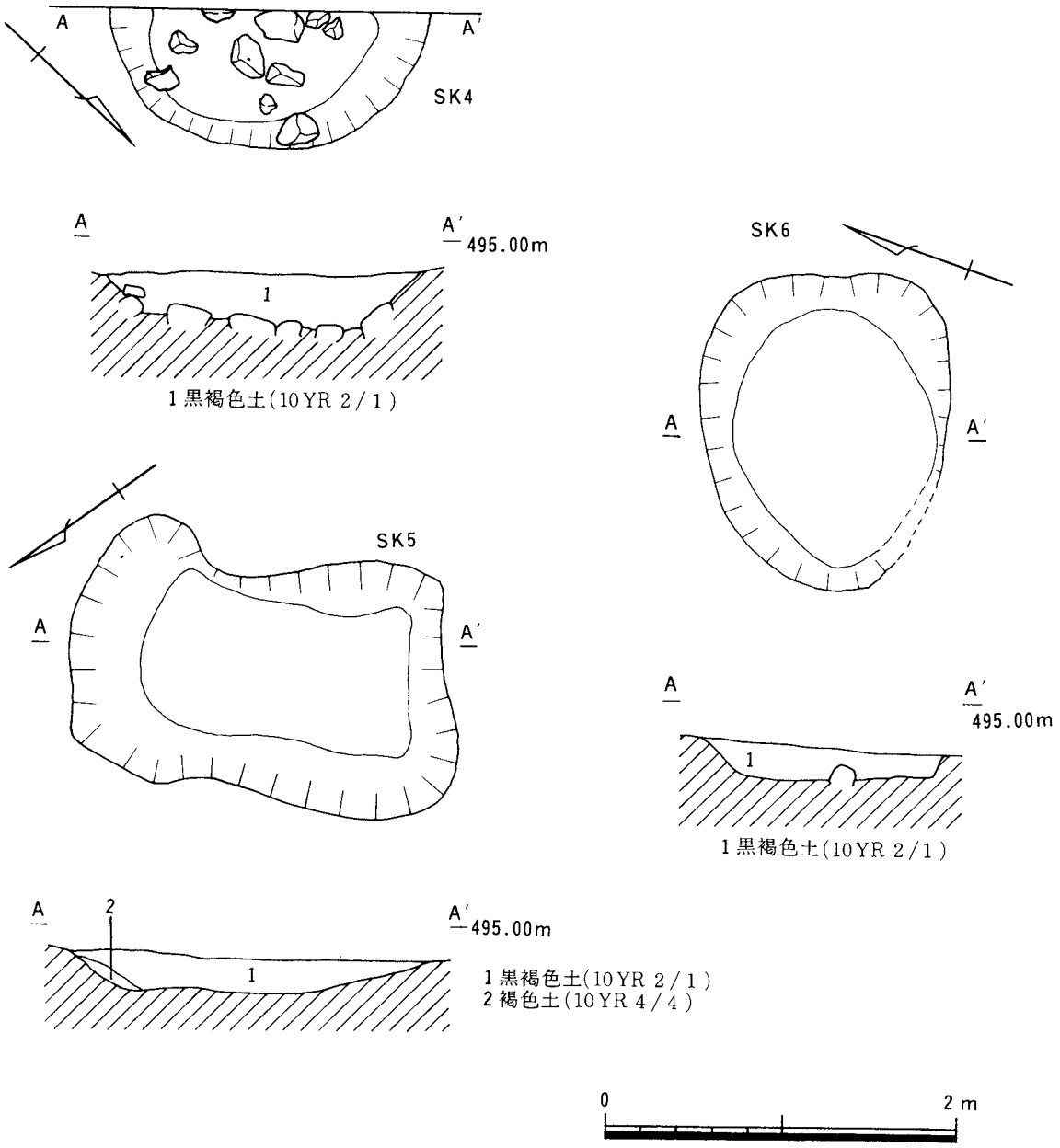
ＳＫ６は、1.8×1.4ｍで深さは20㎝、須恵器等を出土している。

ピット（第７図）

ピットは調査地点全体に広がっている。図示できたのは186基である。調査区全域に散漫に存在する傾向が強い。掘立柱建物が建つような配列は確認されなかった。それぞれの記述はせず、表にまとめておく（第２表）。


SK1
A
A′
A
A′ 495.30m
1
1
2
2
1 黒褐色土(10YR2 / 1)
2 褐色土(10YR 4 / 4)
SK3
A
A′
A
A′ 495.00m
2
1
1 黒褐色土(10YR 2 / 1)
2 黒色土(10YR 4 / 4)黄色砂含む。
SK2
A
A′
A
A′
495.20m
1
1 黒褐色土(10YR 2 / 1)
0
2 m

第22図　土坑（1）


A
A′
SK4
A
A′
495.00m
1
1 黒褐色土(10YR 2/1)
SK6
A
A′
SK5
A
A′
A
A′
495.00m
1
1 黒褐色土(10YR 2/1)
A
2
A′
495.00m
1
1 黒褐色土(10YR 2/1)
2 褐色土(10YR 4/4)
0
2 m

第23図　土坑（2）

第2表　ピット一覧表（単位はcm）

番号	地区	大きさ	深さ	遺物（数字は挿図番号）	番号	地区	大きさ	深さ	遺物（数字は挿図番号）
1	L 2	30×30	16	縄文土器片 2（37－257）	51	M 5	30×20	17	
2	L 2	30×30	18		52	M 5	30×20	15	
3	L 2	70×60	29	縄文土器片 8、フレイク 1	53	M 5	40×30	8	
4	K 3	50×40	30	縄文土器片 4	54	N 5	40×30	18	
5	K 3	20×20	23	縄文土器片 1、RF 1	55	M 5	40×30	19	
6	K 3	30×30	28	縄文土器片 7	56	N 5	30×30	18	
7	K 3	50×50	30	縄文土器片 3、フレイク 1	57	N 5	40×30	26	
8	L 3	30×30	23	縄文土器片 2　フレイク 2	58	N 5	60×40	32	縄文土器片 3
9	L 3	50×40	12	縄文土器片13（37－258～260）、凹石 1	59	N 5	40×30	28	縄文土器片 1（38－275）
10	L 3	40×20	32		60	N 5	50×30	37	縄文土器片 1
11	L 3	60×30	26	縄文土器片 3（37－261）	61	N 5	60×40	52	
12	L 3	70×40	11	縄文土器片 3	62	J 6	60×30	10	縄文土器片 1（38－276）
13	K 4	50×40	23	縄文土器片 8（38－262）、フレイク 4	63	J 6	40×30	19	
14	K 5	10×10	10	縄文土器片10（38－263）、石鏃 1、フレイク 3	64	J 6	70×50	54	
15	K 4	70×30	21	縄文土器片12、石錐 1、フレイク 3	65	J 6	30×30	23	
16	K 4	60×30	16		66	K 6	50×40	15	フレイク 1
17	K 4	30×30	28	縄文土器片 5（38－264・265）	67	J 6	40×30	19	
18	K 3	100×40	25	縄文土器片 7、フレイク 1	68	K 6	90×60	41	縄文土器片 2（38－277）、フレイク 1
19	K 3	40×30	16		69	K 6	50×30	29	
20	K 3	40×30	23	縄文土器片 1	70	K 6	30×30	9	
21	K 4	30×30	13	縄文土器片 2	71	K 5	60×50	56	
22	K 4	30×20	44		72	K 6	70×50	37	縄文土器片10（38－277・278）
23	K 4	90×70	65		73	K 6	50×30	37	縄文土器片 1（38－279）
24	K 4	40×30	35		74	K 6	30×20	35	
25	K 4	40×40	12		75	K 6	20×20	18	
26	L 4	40×30	11		76	K 6	30×20	21	
27	L 5	60×50	18		77	K 6	20×20	16	
28	L 4	40×20	38		78	K 6	40×30	12	
29	K 5	30×30	19		79	K 6	30×30	18	
30	K 5	50×50	75	縄文土器片 5	80	L 6	30×20	14	
31	K 5	30×20	32	縄文土器片 1（38－266）	81	L 6	80×70	16	
32	K 5	60×30	16	縄文土器片 1　茸形土製品 1	82	L 6	20×20	14	
33	K 5	50×40	40	縄文土器片10（38－267～269）、フレイク 3	83	L 6	80×60	11	
34	K 5	150×70	22	縄文土器片18（38－270～274）	84	L 6	50×30	23	フレイク 1
35	K 5	40×30	43		85	L 6	50×30	31	
36	K 5	20×20	12		86	L 6	40×40	34	
37	K 5	30×30	21		87	L 6	120×80	19	
38	K 5	40×30	34		88	L 5	80×40	25	
39	K 5	40×20	8		89	L 6	90×80	38	縄文土器片18（38－281～284）
40	K 5	40×30	29	縄文土器片 4	90	L 6	70×50	14	縄文土器片 2
41	K 5	90×40	39	縄文土器片 5	91	L 6	70×60	25	
42	K 5	40×20	17		92	M 6	30×30	19	縄文土器片 1
43	K 5	30×20	11		93	M 6	80×60	10	縄文土器片 4（38－285）
44	L 5	30×30	10		94	M 5	50×50	54	
45	L 5	40×40	19		95	M 6	120×90	30	縄文土器片 9（38－286・287）、磨石 1
46	L 5	110×100	39	縄文土器片 9、打斧 1、フレイク 2	96	L 6	80×70	18	
47	M 5	30×30	14		97	M 6	30×20	11	
48	M 5	40×20	10	縄文土器片 1	98	M 6	30×30	10	縄文土器片 2
49	M 5	50×30	19		99	M 6	100×60	16	縄文土器片 1（38－288）
50	M 5	60×40	18		100	M 6	40×40	16	縄文土器片 1

番号	地区	大きさ	深さ	遺物（数字は挿図番号）
101	M 6	30×20	10	
102	M 6	30×30	15	
103	M 6	40×30	20	縄文土器片 1（38－289）
104	M 6	40×20	13	
105	M 6	50×50	28	フレイク 1
106	M 6	40×30	19	縄文土器片 3
107	M 6	20×20	10	
108	M 6	30×20	13	
109	M 6	70×40	16	
110	N 6	40×40	8	
111	N 6	40×30	9	
112	N 6	30×30	10	
113	M 6	20×10	11	
114	N 6	40×30	19	
115	N 6	40×20	28	
116	N 6	50×30	16	
117	N 6	40×30	17	
118	N 6	30×30	43	
119	J 7	40×30	11	縄文土器片 3
120	J 7	20×20	17	
121	J 7	30×20	24	縄文土器片 1（38－290）
122	J 7	30×30	13	
123	J 7	20×20	9	
124	J 7	20×20	11	
125	J 7	20×10	7	
126	J 7	30×20	38	
127	J 7	20×20	24	縄文土器片 1
128	K 7	30×30	20	
129	K 7	40×30	21	縄文土器片 1
130	K 7	40×40	18	
131	K 7	50×40	23	縄文土器片 1
132	K 7	50×40	39	
133	L 7	70×50	47	
134	L 7	120×70	28	縄文土器片 1
135	L 7	90×70	38	縄文土器片 3、UF 1
136	L 7	60×40	24	
137	L 7	80×50	44	縄文土器片 2
138	L 7	80×50	38	縄文土器片 3（38－291）
139	M 7	70×60	25	
140	M 7	150×110	35	縄文土器片 3（38－292）、凹石 1
141	K 7	40×30	25	縄文土器片 1
142	I 8	30×20	12	
143	J 8	30×30	38	
144	I 8	40×30	17	
145	J 8	20×20	15	
146	J 8	40×30	26	縄文土器片 1
147	J 8	50×40	18	縄文土器片 1
148	K 8	40×40	17	
149	K 8	50×50	20	磨石 1
150	K 8	30×30	22	縄文土器片 1（38－293）
151	I 9	20×10	13	
152	J 8	100×40	30	縄文土器片 1（38－294）
153	J 9	50×50	20	縄文土器片 1（38－295）
154	I 9	40×30	10	
155	I 9	60×20	14	
156	I 9	40×40	24	縄文土器片 1
157	J 9	50×30	16	
158	J 9	30×20	18	
159	J 9	20×20	20	
160	J 9	30×30	18	
161	I 10	60×40	18	縄文土器片 1
162	I 10	30×20	26	
163	I 10	70×40	15	縄文土器片 2（38－296）
164	I 10	40×30	20	
165	I 11	30×20	11	
166	I 11	40×30	26	
167	I 11	30×20	18	
168	I 11	30×30	15	
169	K 3	40×30	18	
170	K 3	40×20	14	
171	L 3	30×20	24	
172	L 3	30×30	10	
173	L 3	50×40	29	
174	L 3	80×40	12	
175	M 5	60×30	16	
176	M 5	30×30	22	
177	N 5	40×30	15	
178	K 6	30×30	9	
179	N 6	30×30	26	
180	N 6	10×10	15	
181	K 7	120×90	23	縄文土器片 7（38－297）
182	J 7	80×60	26	
183	K 8	20×20	17	
184	K 8	20×20	17	
185	K 8	40×40	22	
186	K 8	30×30	20	

第4章　遺　物

第1節　縄文土器

1　概　要

今回の発掘調査では、調査面積の割りには多量の縄文土器が出土した。破片点数は約26,000点である。接合可能のものは、できるだけ接合を行った。紙面の都合で報告できないものもあるが、早期の押型文土器から縄文晩期の浮線文土器まで各種のものがある。さらに、草創期末の表裏縄文土器もわずかに出土した。しかし、主体となるのは縄文中期後半の土器である。

押型文土器は、そのほとんどが北東調査区からの出土であった。黒鉛入りで山形文の帯状施文に特徴があるいわゆる沢式土器や密接楕円文の細久保式が出土しているが、グリッドによる分布状況とからめて時期差が見られる出土状況を示している。

中期の土器は、北陸系、信州系の土器および東海系の土器が見られるが、どの系統にも直接的に繋がらないものや、各要素が折衷したような土器も多く見られる。

北陸の中期の編年は、大筋は確立されている。前葉の新保・新崎式、中葉の上山田・古府式、後葉の串田新式といった具合である。一方、信州の中期の編年もいわゆる井戸尻編年によって把握され、さらに長野県各地域の資料を集成した形で編年が確立してきている（長野県1978・中部高地1979）。ただし、長野編年の「後葉」は曽利式の段階からであるが、北陸の「中葉」の途中から「後葉」にかけての時期に対応するようである。従って、ここでは、「中葉」・「後葉」ということばは、北陸編年に依り、長野編年の「後葉」は「後半」ということばでとらえることにする。

後晩期の土器も一部出土している。堀之内式段階の注口土器が諏訪神社の西側で出土しており、今回の調査地点とは別の地点に後晩期の資料の集中する地点があることが予想される。

2　遺構出土の縄文土器

縄文時代の竪穴住居址7軒と、土坑、ピットの一部から縄文中期中葉から後葉にかけての土器が出土している。

第1号住居址出土の縄文土器（第24～27図、図版8～10）

覆土から比較的多くの土器が出土した。器形の復元できるものも数個体ある。古府式の典型的なものもあるが、総じて半截竹管文は偏平化し、櫛状工具による連続的な刺突が施される時期、つまり上山田・古府様式のV様式の時期と見られる。いずれにしても、北陸的な要素を持つものが多い。

1は、直線的に外反する器形で、口縁部内面にわずかに段が形成されている。口縁部は、沈線が横位に一本巡り、細い刻みが連続している。偏平な半隆起線が数本弧状に施され、さらに渦状に垂下する。その横に連続刻みが施されている。渦巻き部分と弧状部分の間は、やはり半隆起線文で満たされている。胴下半は縄文である。2は、胴部は直線的に立ち上がるが、口縁部は、開いてから真っ直ぐに立ち上がる。口縁は、緩い波状を呈する。胴部は沈線が縦に密接して施され、上部は、隆帯が直線

的に屈曲しながら展開し、口縁付近では円形の部分もある。隆帯には櫛状工具による連続刺突が施されている。隆帯の間は、沈線が沿うように走る。3は、口径40.5㎝、胴部の最大径50㎝の大型のものである。胴部が丸く頸部がくびれて口縁は開いている。偏平な半隆起線が口縁部に弧状に施され、頸部は、その間隔が広がり、櫛状工具による連続刺突がある。胴部の文様は、横位に細長い楕円状に半隆起線文があり、頸部との間は同じく半隆起線が緩い渦巻き状に施されている。口縁部と同様に櫛状工具による連続刺突がある。

4の浅鉢は、北陸地方で見られるものである。隆帯による渦巻きが4単位で施され、その間は隆帯の細長い楕円形状の区画があり、その間に櫛状工具による連続刺突が施されている。

5・6は、波状口縁で、平面形が楕円形で台付きの北陸地方の特徴的な器形の土器である。口縁に沿って、隆帯が走り、渦を巻きながら下りてくる。隆帯上に櫛状工具による連続刺突がある。その横に半隆起線が沿っている。6は縦の連続沈線も施されている。

7は直線的に外反する器形で、頸部から上は、隆帯が屈曲しながら横位に展開し、胴部は、隆帯が直線的に方形の区画を描いている。隆帯には、半隆起線が沿っており、櫛状工具による連続刺突が施されている。

8～18は、櫛状工具による連続刺突が見られるものである。平口縁で、直立またはやや開き気味の器形である。隆帯あるいは半隆起線が横位あるいは弧状や渦巻き状に展開し、連続刺突が隆帯上にあるものや半隆起線の間に施されるものがある。19～24は、信州系の要素が強いものである。19・20は隆帯に沿って押し引き文があり、連続する沈線は櫛形文であろう。21は隆帯が縦に連なり、22は水平に受け口をもつ突起がつく。24は地文が縄文で、沈線による入り組み文が見られ、伊那地方の土器に類似する。

25は直線的に立ち上がる器形で、細い隆帯が曲線的に展開し、その両側に連続する爪形状の文様が施されている。26は内湾する口縁で、地文は縄文で、貼り付け隆帯が口縁に沿った部分と、その下位に横位に蛇行している。28はいわゆるリボン状突帯があり、その上部は無文部である。29は、隆帯と沈線によって縦に区画され、その横に押し引き文があり、区画した部分に斜位に沈線が施されている。

30～32は、沈線が横位に施され、27は細い沈線が曲線的に、33・34は、細い沈線が直線的に施されている。

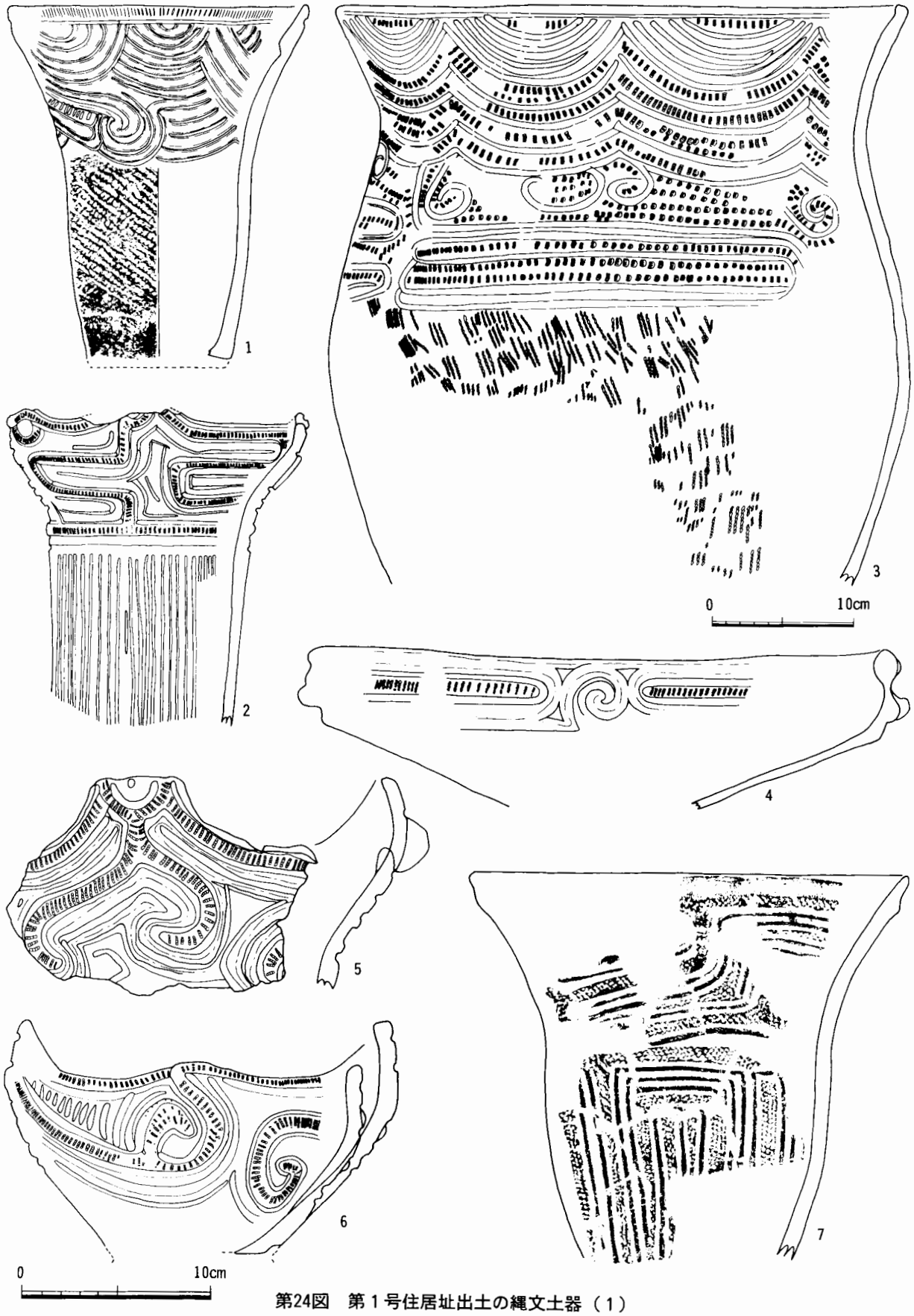
35は、口縁部は不明であるが、胴部が膨らむ器形で、頸部に2本の隆帯とその両側は沈線が沿い、隆帯上には、連続の刻みが入る。胴部は、撚糸文を地文とし、沈線による細長い「日」の字を横にした区画文が縦に連続的に見られる。

36は、円盤状のものを貼り付け、そのまわりは短沈線を施しており、内面は平滑に仕上げてあり、有孔鍔付土器の破片と推定される。

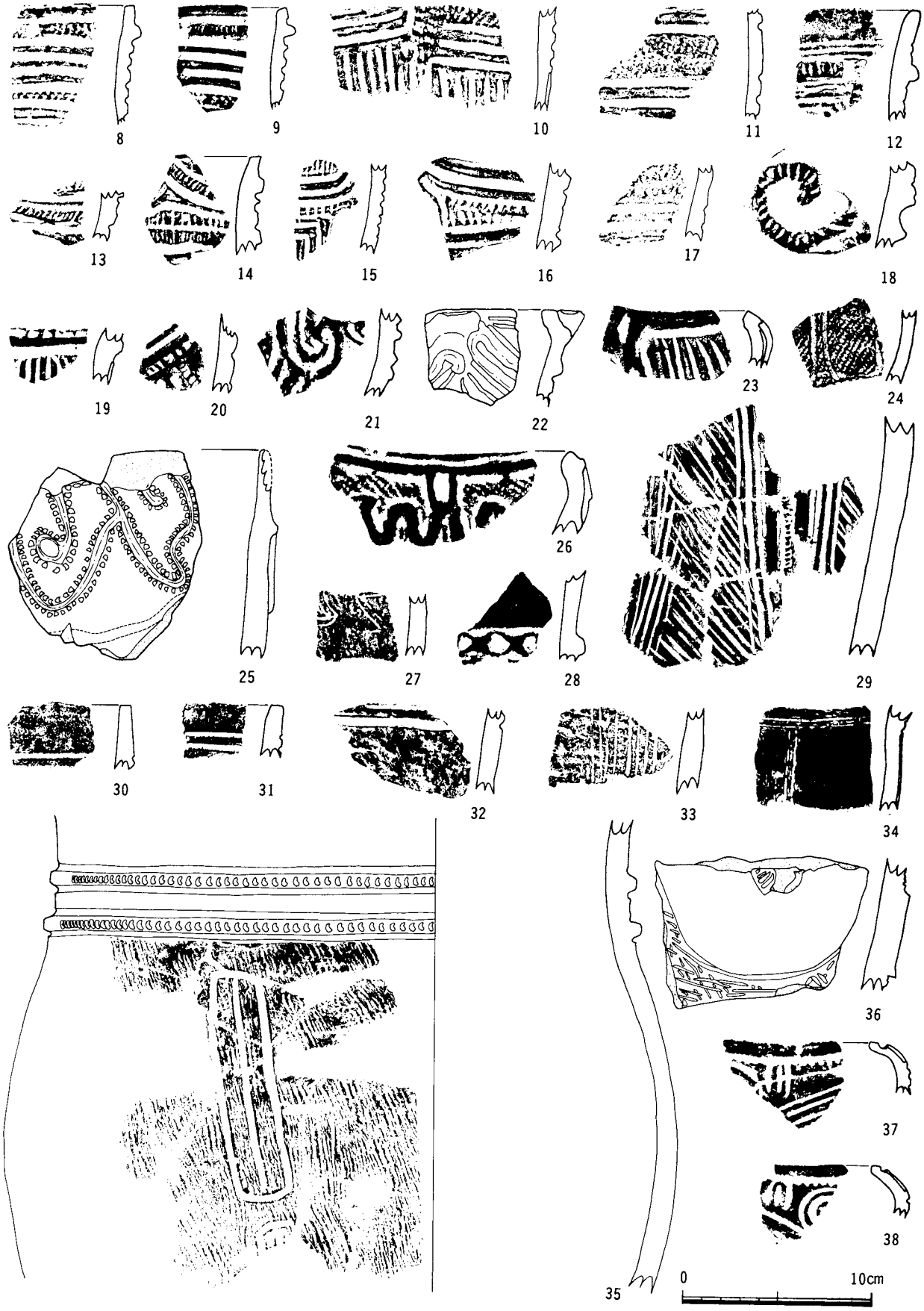
37・38は、内湾する器形で沈線による渦巻き文、横位および縦位に区切る沈線による文様等から、東海系の土器と思われる。

39は口縁部が直線的に立ち上がる器形で、口縁部に2本の沈線が横走し、以下、ヘラ状工具による沈線が胴部を埋めている。縦に基軸となる沈線があり、その他は斜位に施されているように見ることができるので、いわゆる葉脈状文的な要素が見られる土器である。

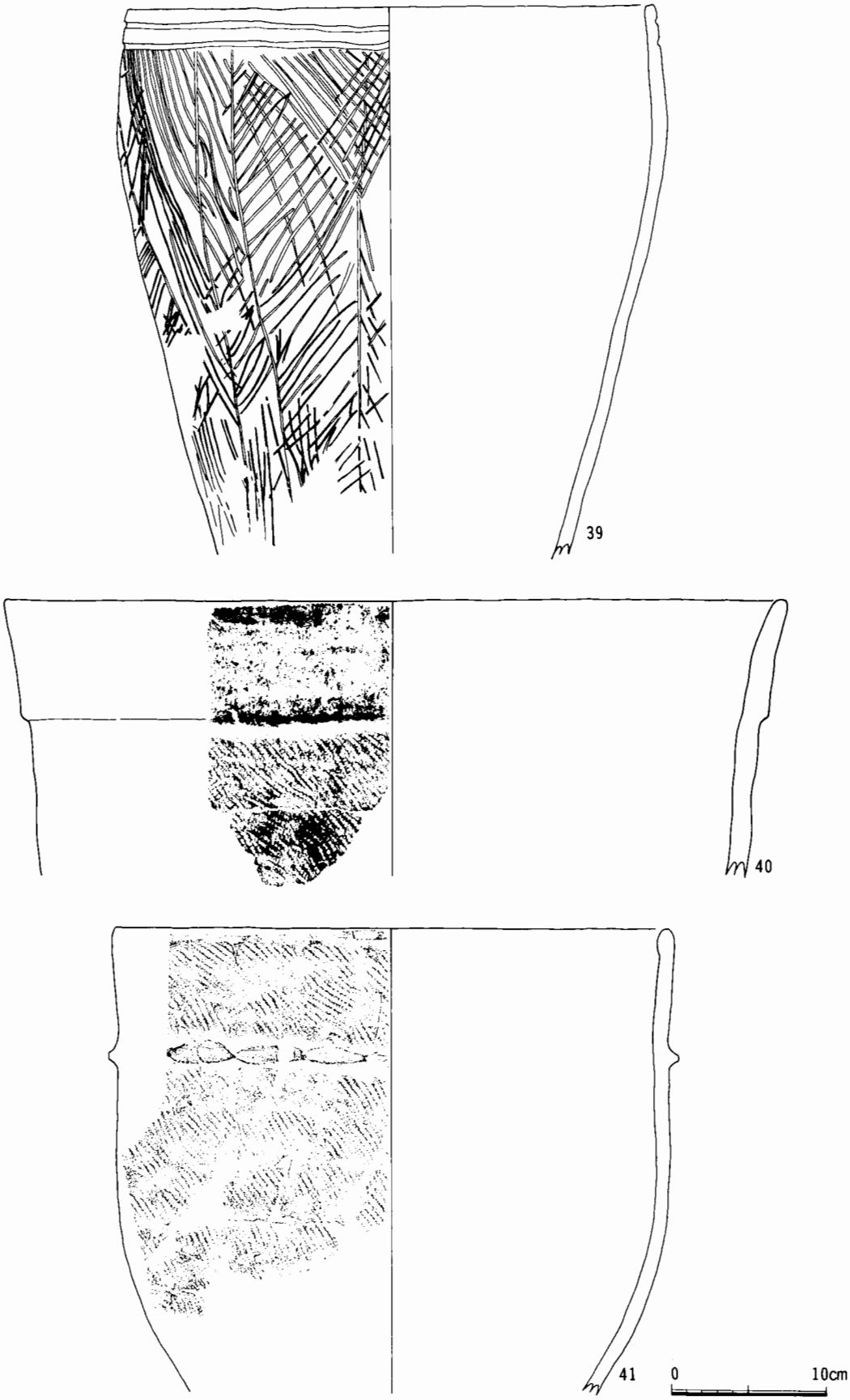
40は口縁部に段を有しやや開き気味になる器形で、段の下は縄文である。41は、直立した口縁で、



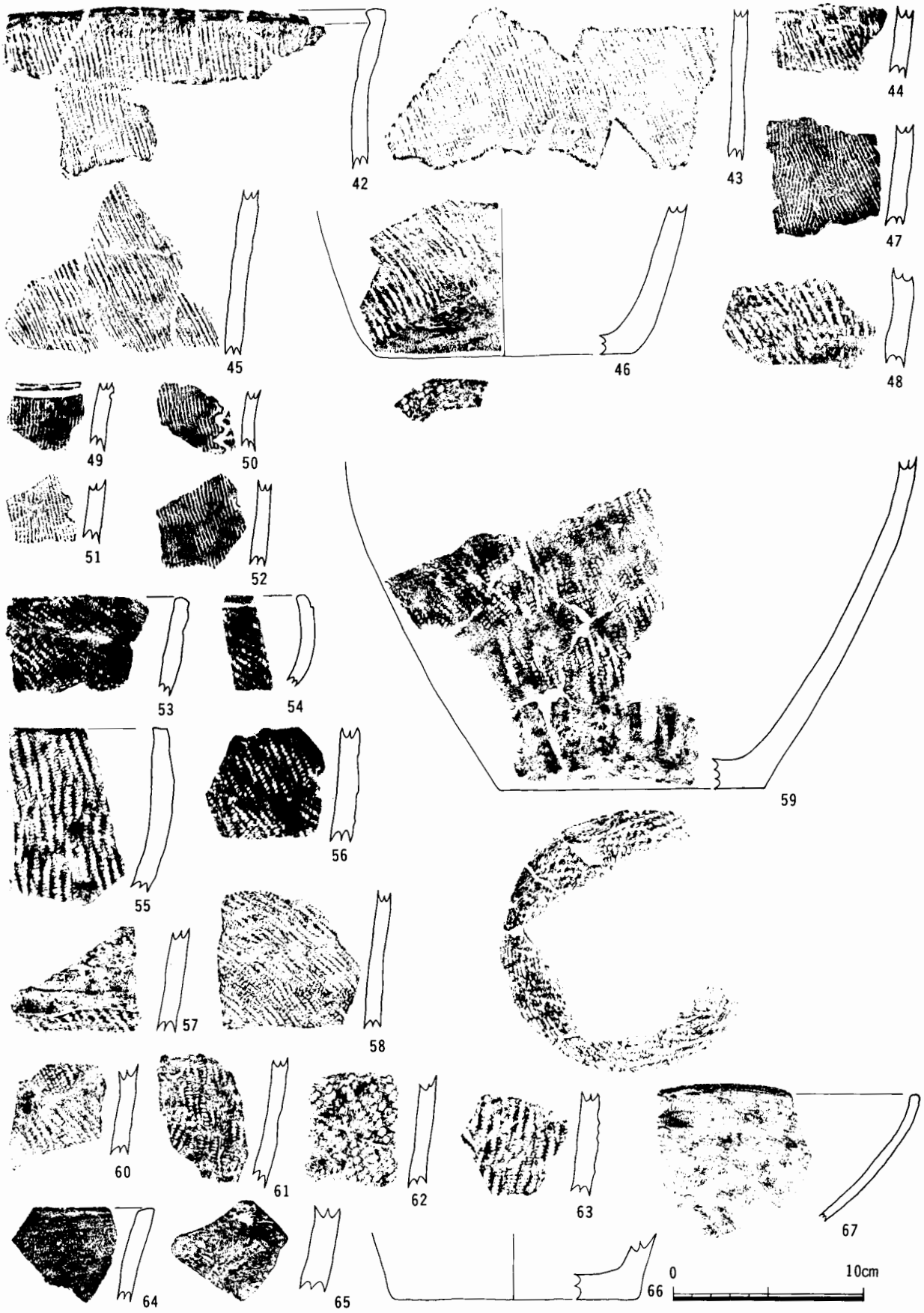
第24図　第1号住居址出土の縄文土器（1）



第25図　第１号住居址出土の縄文土器（２）



第26図　第1号住居址出土の縄文土器（3）



第27図　第1号住居址出土の縄文土器（4）

頸部に幅広のリボン状突帯がめぐり、地文は縄文となっている。

42～48は撚糸文のものである。49～52は、目の細かい撚糸文を地文とし、横位または縦に蛇行する沈線が施されている。

53～63は縄文のものである。57は無文部もある。

64～67は無文のものである。ただし66は、底部で上部の文様は不明である。67は浅鉢である。

第2号住居址出土の縄文土器（第28図、図版11）

第2号住居址は、プランが把握できなかった住居址である。石囲炉を検出した後、炉およびその周辺から出土した土器をここに集めた。

68は大小の波頂部をもつ波状口縁で、平面形が楕円を呈する。器厚が約5㎜と薄手である。半截竹管による半隆起線は偏平で、口縁に沿った隆起線上に櫛状工具による連続刺突がある。小波頂部の位置に渦巻き文があり、頸部には、半截竹管による短い押し引き文が横走する。それらの間は、ＲＬの縄文が施されている。

69～71は、真っ直ぐ立ち上がる器形で、半隆起線が、2本単位で長楕円形の区画と同心円か渦巻き状に施され、下部は条線の土器である。胎土は粗く、焼成はやや不良である。

72・73は隆帯および沈線の区画内を櫛状工具によって刺突が施されているものである。72は緩い波状を呈する。

北陸系の土器とともに、信州的な要素が強い土器もある。74・75・79は、隆帯による区画があり、その間を沈線で埋めている。76は隆帯が横走する。77・78は、短沈線が連続する。80は縄文地に曲線的な沈線が施される。

81・82は撚糸文、83・84は縄文、85～88は条線文である。87は、口縁部に2本の沈線が横走し、88は、口縁部に1本の隆帯がめぐり、櫛状工具による連続刺突が施されている。補修孔がある。

89・90はヘラ状工具による沈線文で、91は無文であるが、底部なので全体の文様は不明である。

第3号住居址出土の縄文土器（第29・30図、図版12）

出土した土器は少量で、器形の復元できるものがほとんどない。

92～97は、曲線的または直線的に沈線で区画した部分に連続する刺突文が施されている。98～105は、半截竹管による偏平な半隆起線文が施されている。100・101は、外反する器形で曲線的な文様展開を示す。103～105は直立し2本の半隆起線が横走し、その下は縦位に沈線が密接する。

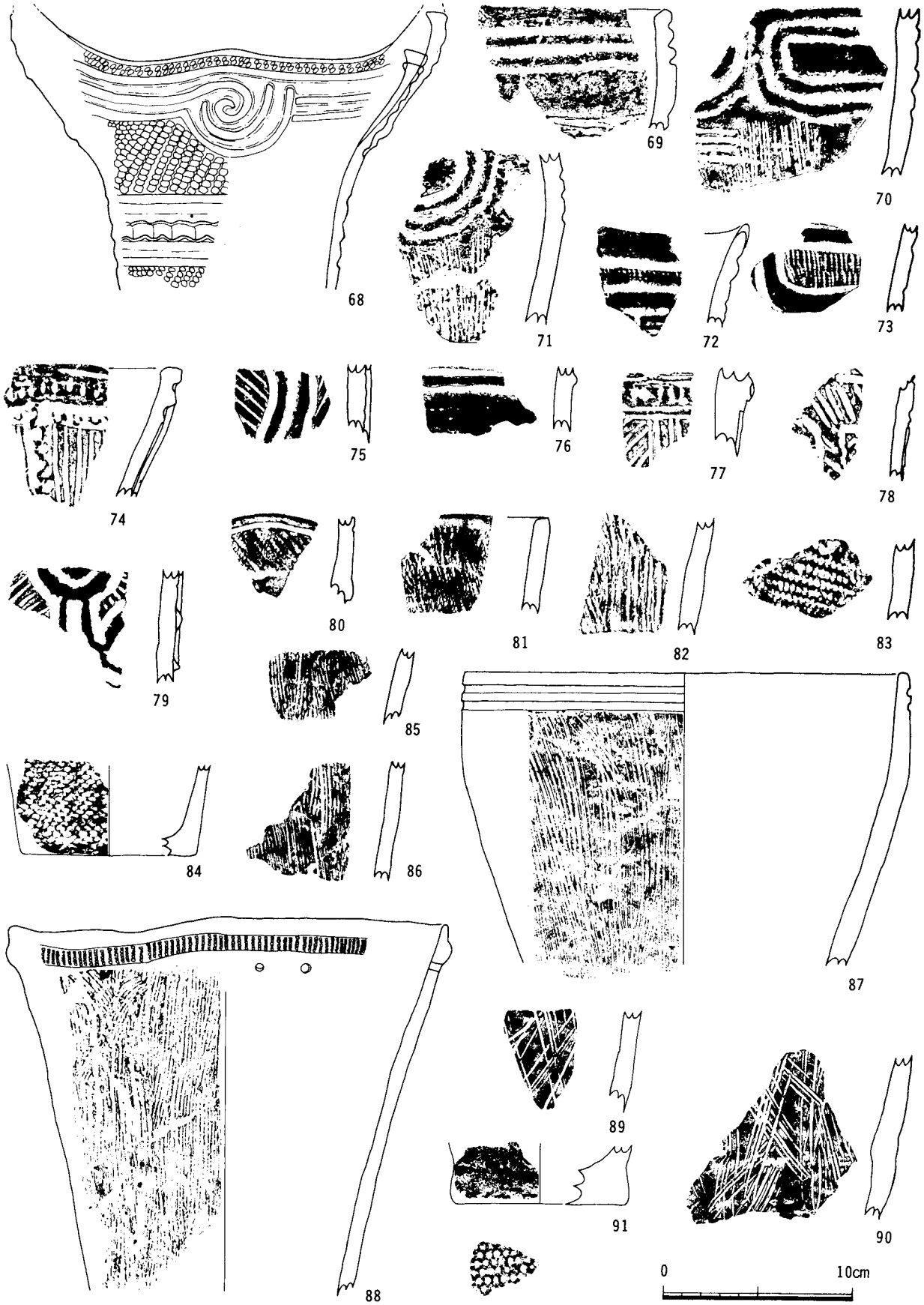
106～108は隆帯に沿って押し引き文が見られ、109は、口縁部に縦の沈線がある。

110は底部から直線的に開き、上方で直立する器形で口縁部は不明である。床面直上で出土した。地文は撚糸文で、上部に隆帯と沈線によってU字状の文様が見られる。

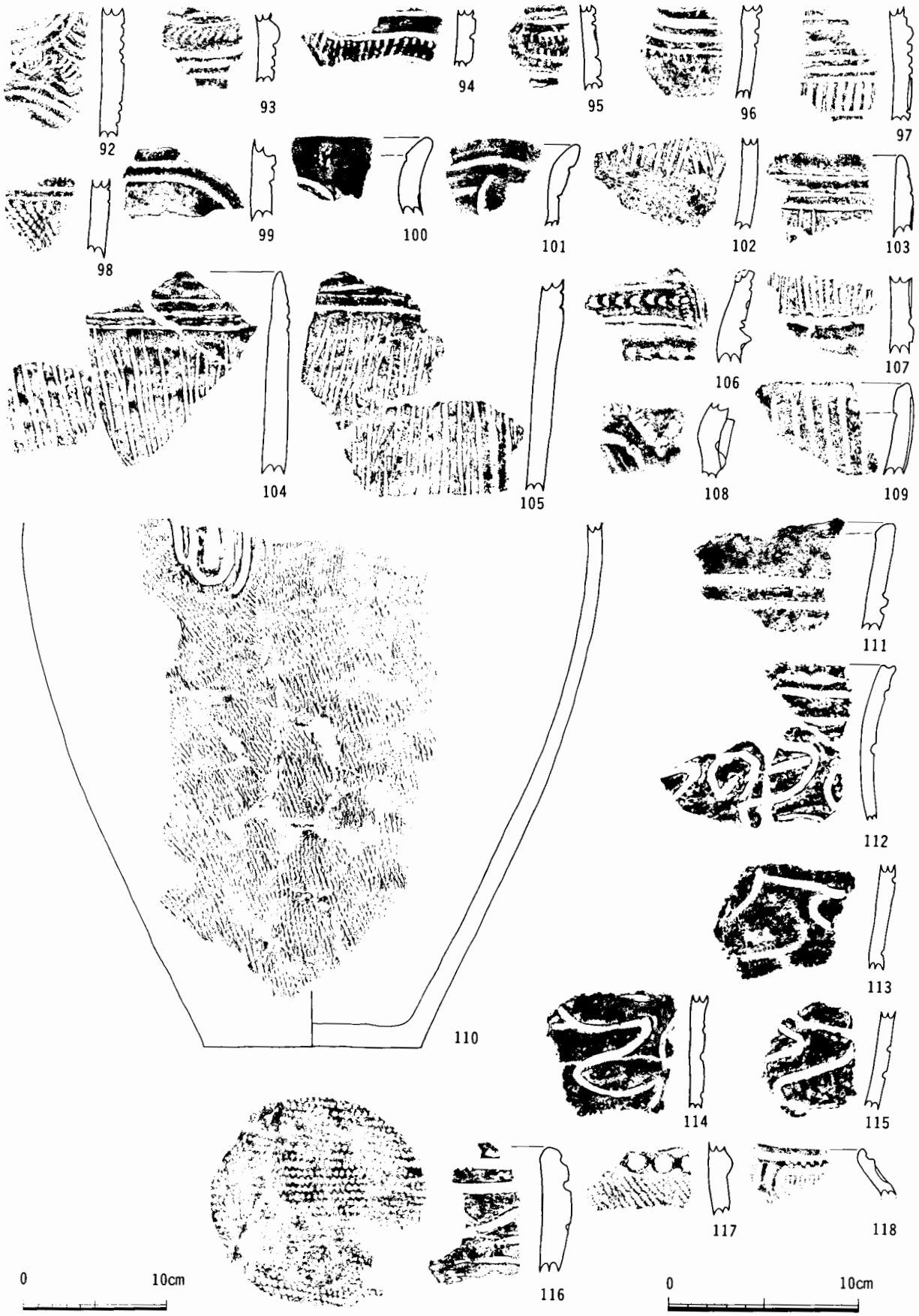
111は沈線が横走し、112～115は、沈線が不規則な曲線を描いている。116は、直立する口縁で沈線が横位および斜位に施されている。

117は狭いリボン状突帯が施されている。118は内湾し、隆帯と沈線が組み合わされている。東海系の土器である。

119～123は撚糸文の土器である。119は横走する隆帯があり、櫛状工具による刺突がある。120～122



第28図　第2号住居址出土の縄文土器



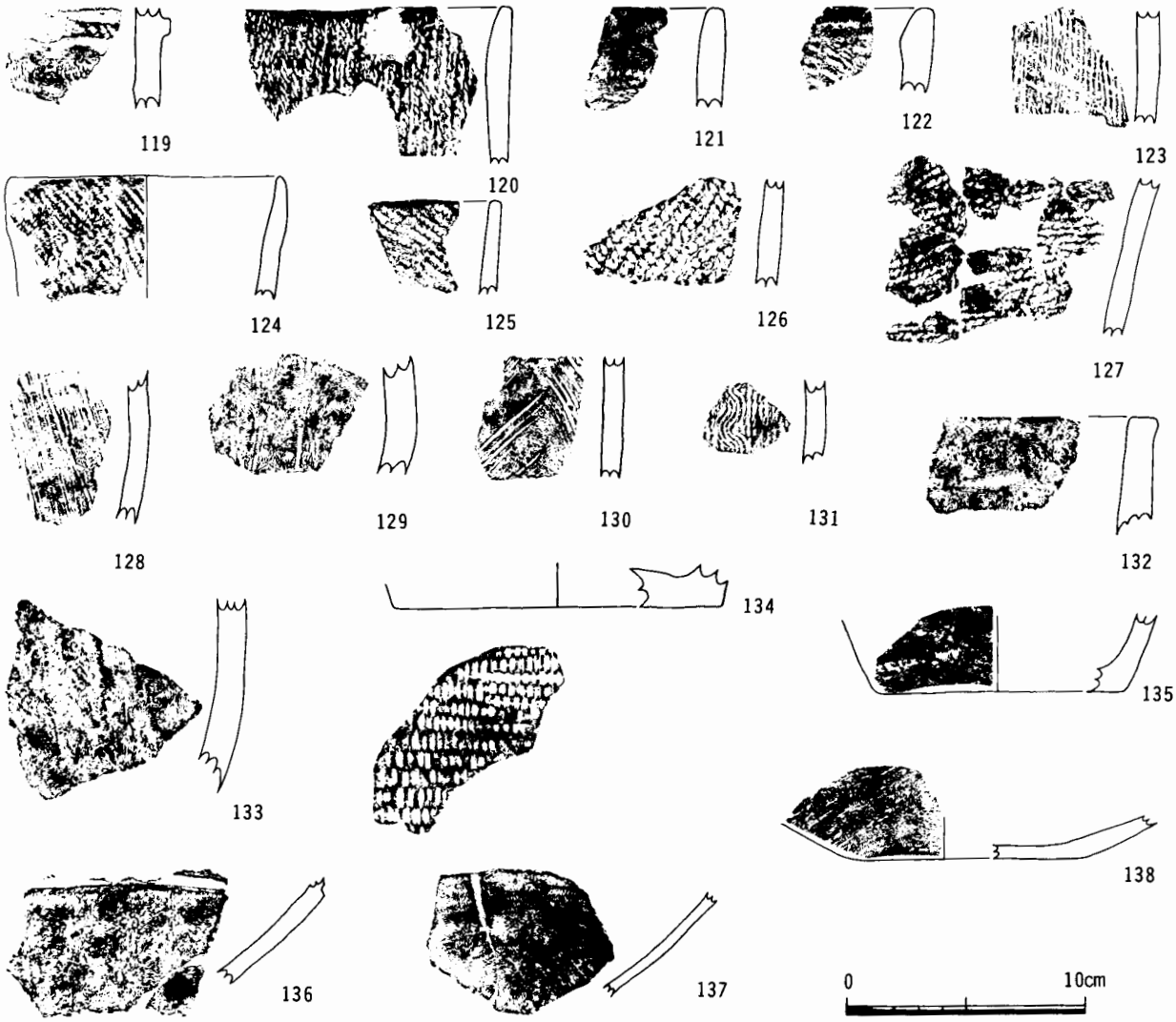
第29図　第3号住居址出土の縄文土器（1）

は、直立する器形で内側がやや膨らんでいる。121と122は、口縁部に無文部を残して斜位に撚糸文が施される。

124～127は縄文の土器である。口縁部がやや開き気味に直立する。

128～131はヘラ状工具による条線である。130は綾杉状に施され、131は蛇行して懸垂する部分がある。

132～138は無文の土器である。132は口縁部、133は胴部、134・135は底部であり、全体の文様構成は不明である。136～138は浅鉢である。



第30図　第3号住居址出土の縄文土器（2）

第4号住居址出土の縄文土器（第31～33図、図版13・14）

第4号住居址は埋甕を伴う。覆土からの土器の出土状況を見ると上下の幅があり、やや異なる時期のものがあるかもしれない。

139は埋甕である。前述したように、底部を欠失し逆位に据えてあった。残存状況は非常によかった。直線的に開くバケツ形の器形で口縁部でやや直立する。口径38㎝、底径16㎝、高さ43㎝で、色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

口縁部の文様は、半截竹管による浅い半隆起線による円形の文様が5か所あり、その間を平行する2・3本の半隆起線が折り返されている。頸部は、2本の隆帯が平行して巡り、円形の文様の下には、2本の隆帯が縦に平行して施文され、その間を半截竹管によって連続押し引きする部分が3か所と背中合わせの渦巻きの部分が2か所ある。隆帯の間は、横方向の半隆起線が埋めている。胴部は、隆帯が上から1本、下から5本伸びてきて屈曲しながら縦横に伸び、所々で渦を巻いている。隆帯の間は、半隆起線が直線的あるいは曲線的に描かれながら埋めている。隆帯には櫛状工具による連続刺突が施されており、半隆起線は非常に偏平なものである。底部の網代は後述するＡａ類である。

櫛状工具による連続刺突や、隆帯間を半隆起線で埋める手法などは北陸的と言えるが、あくまでも施文方法が似ているということで、北陸の土器とはまったく異質である。また、信州にも同様の土器は見あたらない。地域性の強い独特の土器といえる。

半隆起線と櫛状工具による刺突文を加えた北陸的要素が強い土器がある。140は直線的に立ち上がり口縁部が外反する器形で、櫛状工具による刺突が施された隆帯が2本単位で弧状に描かれ、沈線がその間を埋める。頸部は半隆起線が3本平行し、胴部は半隆起線で横方向に区画されている。それぞれの間は、櫛状工具による刺突で埋められている。櫛の単位は3本で、末端は四角形を呈する。141の口縁部は140よりやや大きく外反する。沈線の区画内を櫛状工具の刺突で埋めている。142は口縁部に沈線が縦横に施され、その間に刺突がある。143は内傾する口縁で、半隆起線が横に展開し、刻みが入る。144は、波状口縁で口縁に沿って連続刺突が入り、波頂部に対応して隆帯が渦を巻き、櫛状工具の刺突が入る。145は、直線的に立ち上がる口縁で、横走する沈線は、偏平化した半截竹管文である。146は、地文が縄文で沈線が施され、その上に刻みが入る。

147は、内湾する口縁で、縦に沈線が入る。148は、2単位の把手をもつ深鉢形土器で、突起部の上面は渦巻き文である。頸部と胴部上部に交互刺突文を配し、隆帯による渦巻きが対をなして、その間を沈線が埋めている。暗褐色を呈する。唐草文系の土器である。

149は形態が不明であるが、釣り手土器の一部であろうか。

150は内湾する口縁や沈線による区画文などから見て東海系の土器であろう。

151～154は、櫛状工具による沈線が蛇行するものである。151は、縦に隆帯を伴う。153は、直線的に開く器形で、2本ないしは3本単位の沈線が、口縁部付近では横方向に、胴部では縦方向に描かれているが、不規則な配列をしている。

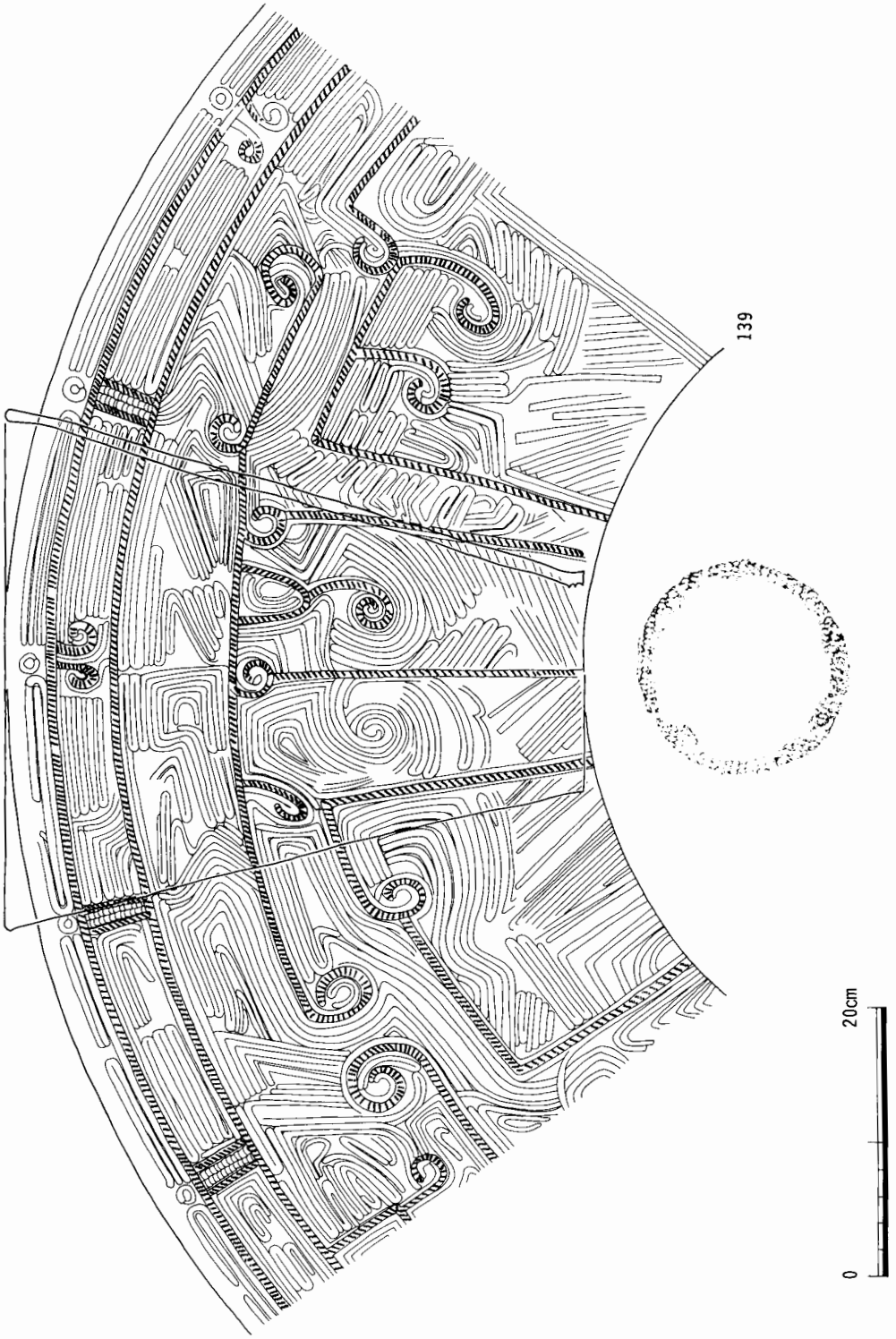
155～157は撚糸文である。155は外反する口縁で、157は直立する口縁に3本の沈線を伴う。

158・159は脚台部である。159は、残存が一部なので不明であるが、透かし孔がある。

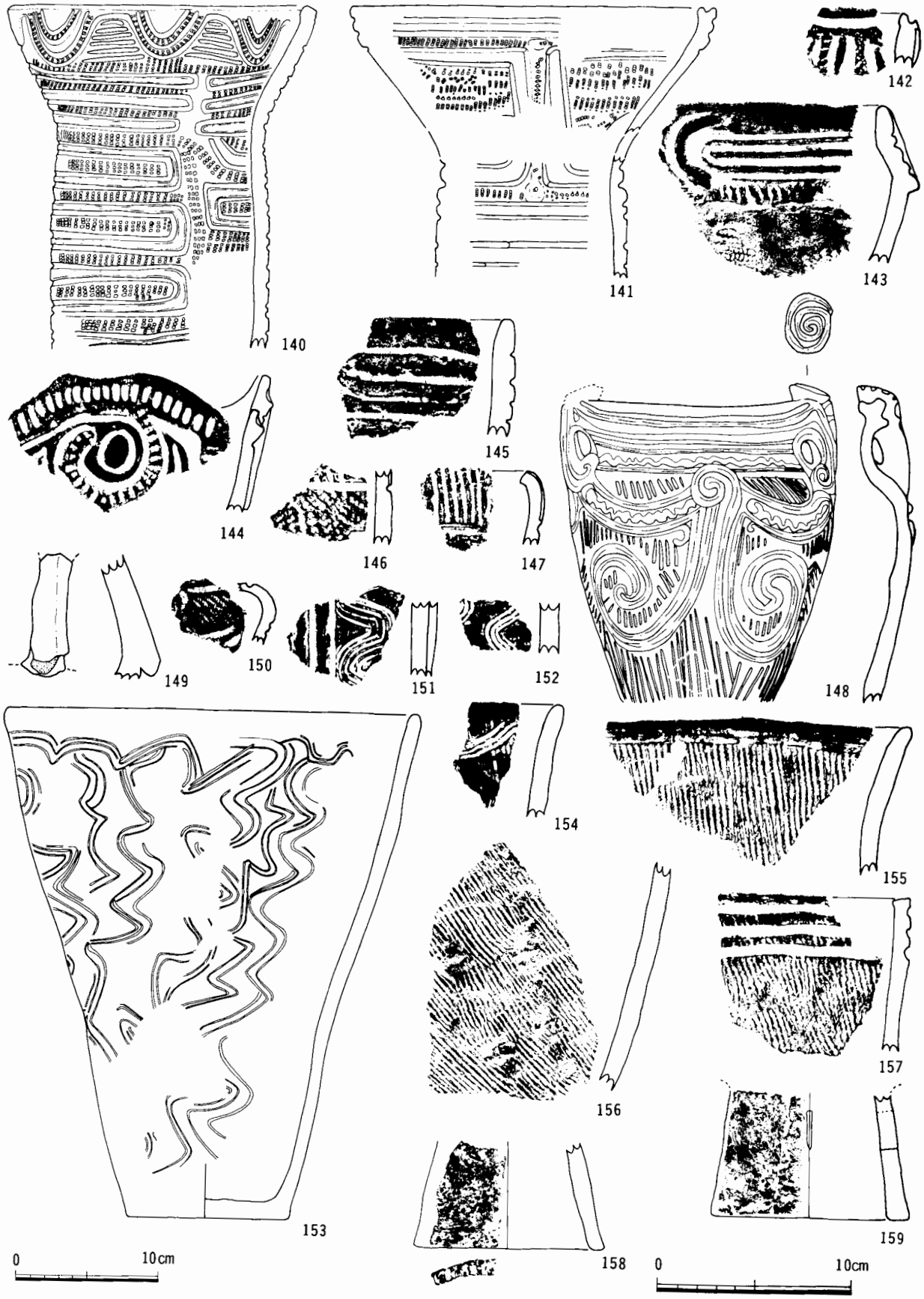
160～167は縄文である。160は真っ直ぐ開きながら口縁部は直立する器形で、粗い縄文が施されている。

168～174は条線文である。口縁は直立し、172は横方向に細い沈線がある。175は、ヘラ状工具による沈線が縦横に走る。

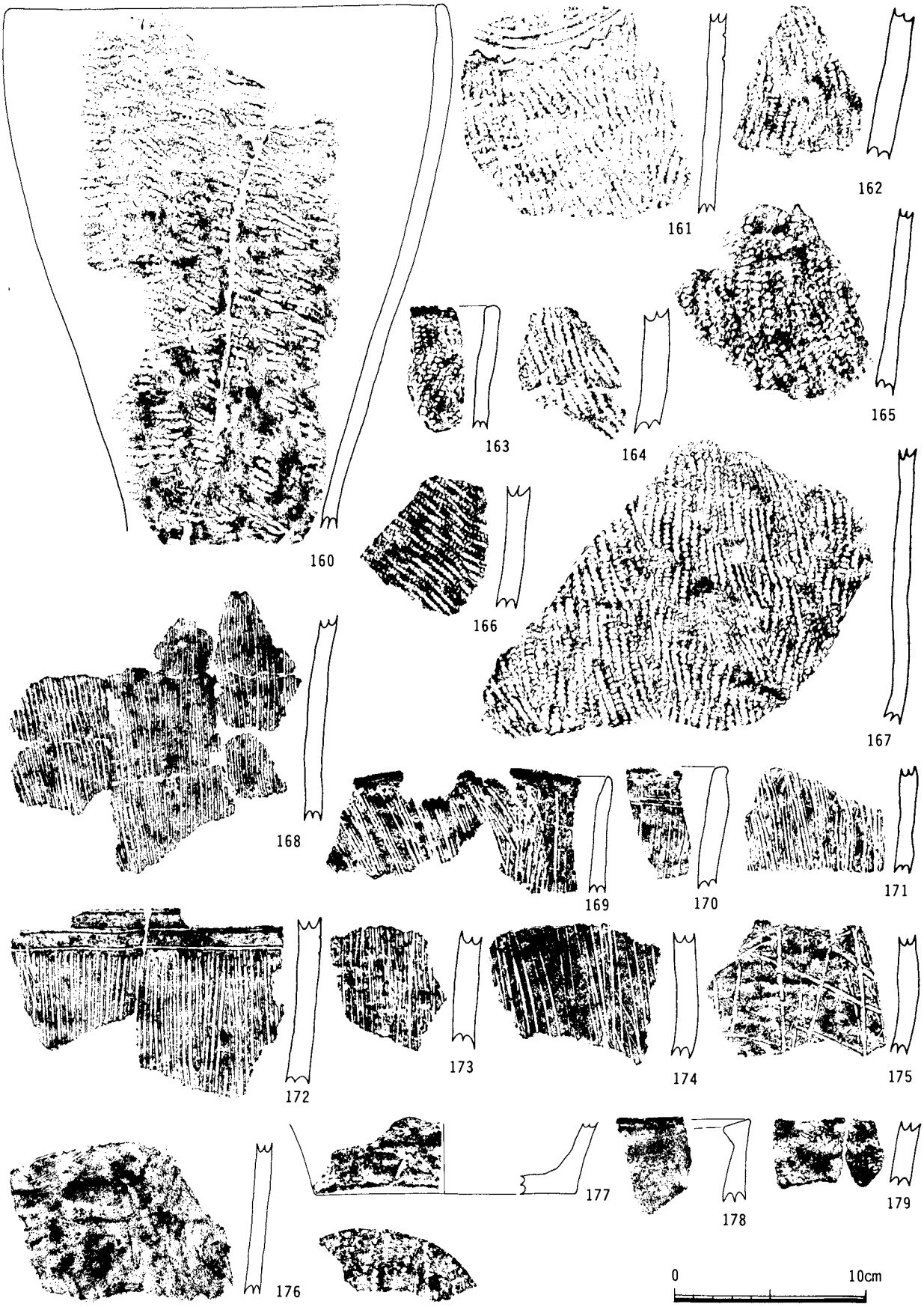
176～179は無文である。ただし、177は底部、178は口縁部で、胴部の文様は不明である。



第31図　第4号住居址出土の縄文土器（1）



第32図　第4号住居址出土の縄文土器（2）



第33図　第4号住居址出土の縄文土器（3）

第5号住居址出土の縄文土器（第34～36図、図版15・16）

180～194は北陸的な要素をもつ土器である。180は隆帯による渦巻きに刻みが入る。187～198は半隆起線による縦横の区画がなされ、櫛状工具による連続刺突が続く。193は同様の文様をもつ浅鉢である。194は隆帯上に爪形文が入りやや古い段階のものであろう。

195～207は信州的な要素をもつ土器である。195・196は隆帯に沿って押し引き文が見られる。197・198は楕円および渦巻きの隆帯と沈線の組み合わせで、199は横方向に隆帯があり、縦に沈線が並ぶ。200・201はU字状に隆帯が続く。202は縦の隆帯と、細い沈線の組み合わせである。211は交互刺突文が見られ、受け口のある突起がつく。203～207は地文が縄文である。口縁部に隆帯が曲線的に展開し、区画された中を沈線が縦に引かれる。これらは、在地的な要素も強いが、長野編年の中期後半Ⅱ期の段階のものであろう。

208は、緩く湾曲した胴部にやや開き気味の口縁がつく形態である。器厚約5㎜で黒色を呈し、焼成は良好である。偏平化した半截竹管文が口縁では、横方向に、胴部では、曲線的に蛇行して降りながら複雑に組み合わさっている。復元の際に文様の展開が予想できないくらいである。半截竹管文の間は、櫛状工具による刺突で埋められている。

209は、石囲炉の中に据えてあったものである。キャリパー形の器形で、隆帯による区画と4単位の渦巻きを配し、地文は縄文である。加曽利E的な土器のようである。

210はリボン状突帯の下が撚糸文になっている。211は平口縁で急にすぼまる特異な器形である。口縁部は隆帯と沈線が横走し、下は縄文が施されている。

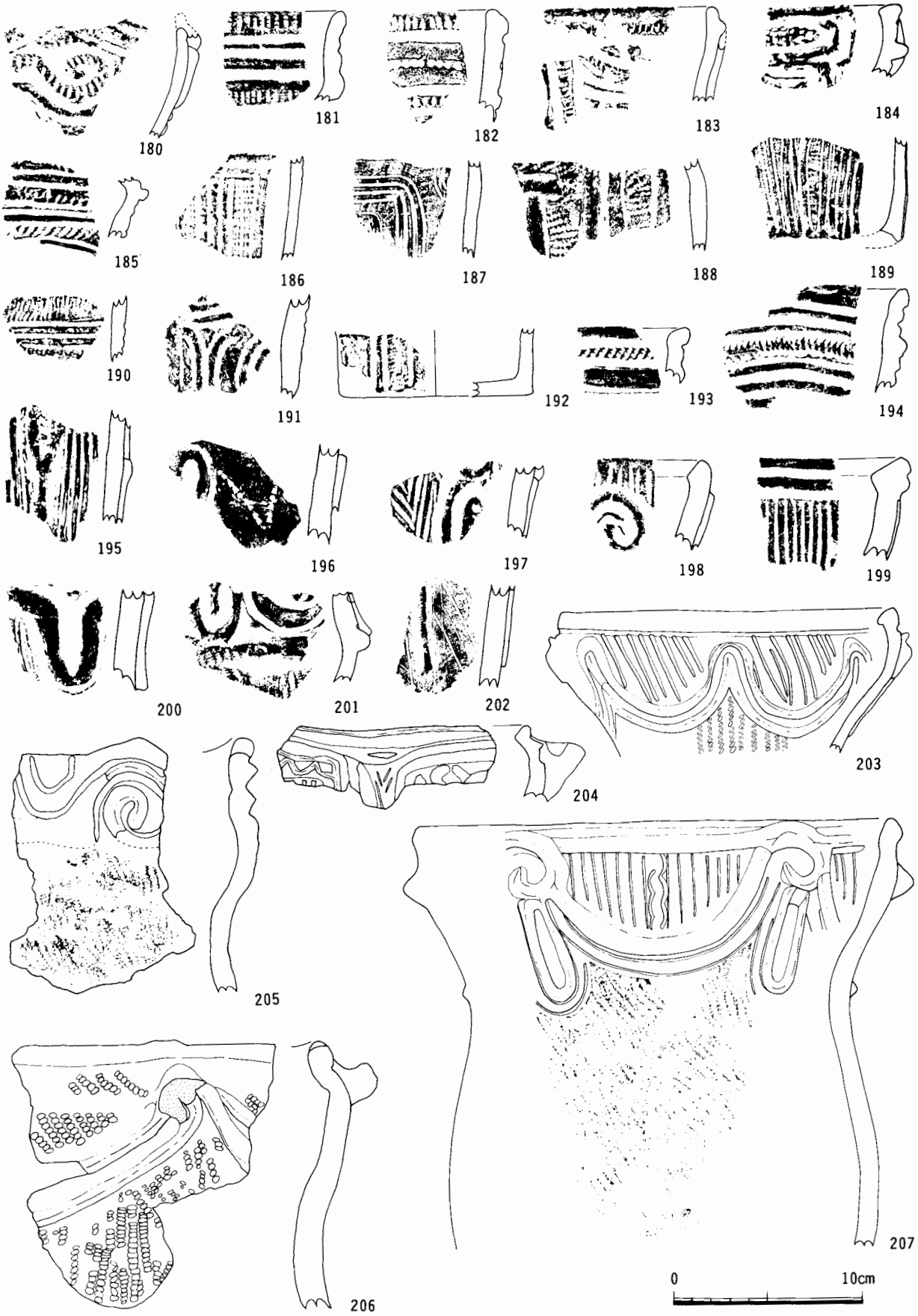
212は有孔鍔付土器の一部である。橋状把手が付き、その下は沈線文である。橙色を呈し焼成は良好で、内面は磨かれている。同じく213も有孔鍔付土器である。住居址の南隅部で、床面直上からの出土である。口縁部を住居内側に向けて位置していた。口縁部で一部欠失した部分があるが、ほぼ完形の土器であった。胴部に約2.5㎝×1.7㎝の穴が開いていた。外から穿たれたものと推定される。土器内部の土からは、破片は見つからなかった。口径9.7㎝、底径7.4㎝、高さ18.6㎝である。丸みをもって立ち上がり、口縁は直立する。孔は14か所である。孔の径は、外側2.0㎜、内側1.5㎜程度である。胴部文様は、隆帯による楕円形の文様と襞状の楕円形の文様が交互に1対ずつある。楕円文の内側の部分4か所はそれぞれふくらんでいる。楕円文のうち、前者は下端に2か所切り込みがある。また、鍔部と楕円の接する部分は、突起が付くが、前者の方は、縦方向に孔が貫通している。下の切り込みと合わせると、あたかも紐をつるす部分のようである。紐擦れの痕は観察できなかった。一見して黒色を呈するが、火熱を受けており、灰黄褐色でもろく変質している部分は特に高熱にさらされた部分であろう。床側の部分のにぶい黄褐色が本来の色調であろう。楕円文のあたりには、赤色顔料の付着痕が観察できた。また、内部は光沢があり何らかの被膜物があるようであるが不明である。

214・215は縄文地に幅広のリボン状突帯がつく。216は東海系の土器である。

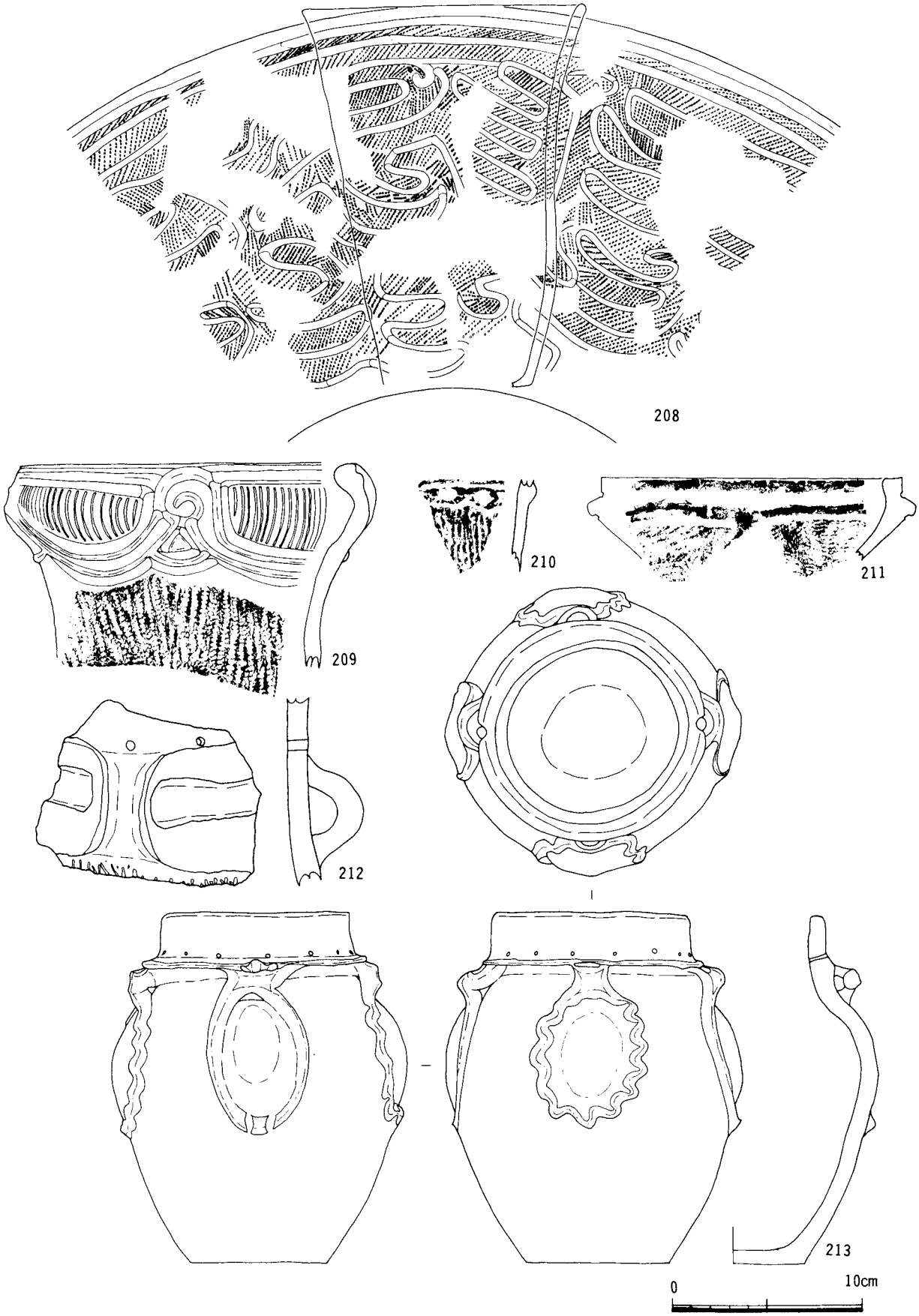
217～224は撚糸文である。218は直線的に広がる器形で、口縁部に無文帯がある。221は、すぼまりながら直立する口縁部で、無文帯の下に撚糸を押さえたような施文が見られる。223は、2本の沈線が横走する。224は、頸部がややくびれる器形である。

226・227は縄文で、226は、結節縄文が横走する。

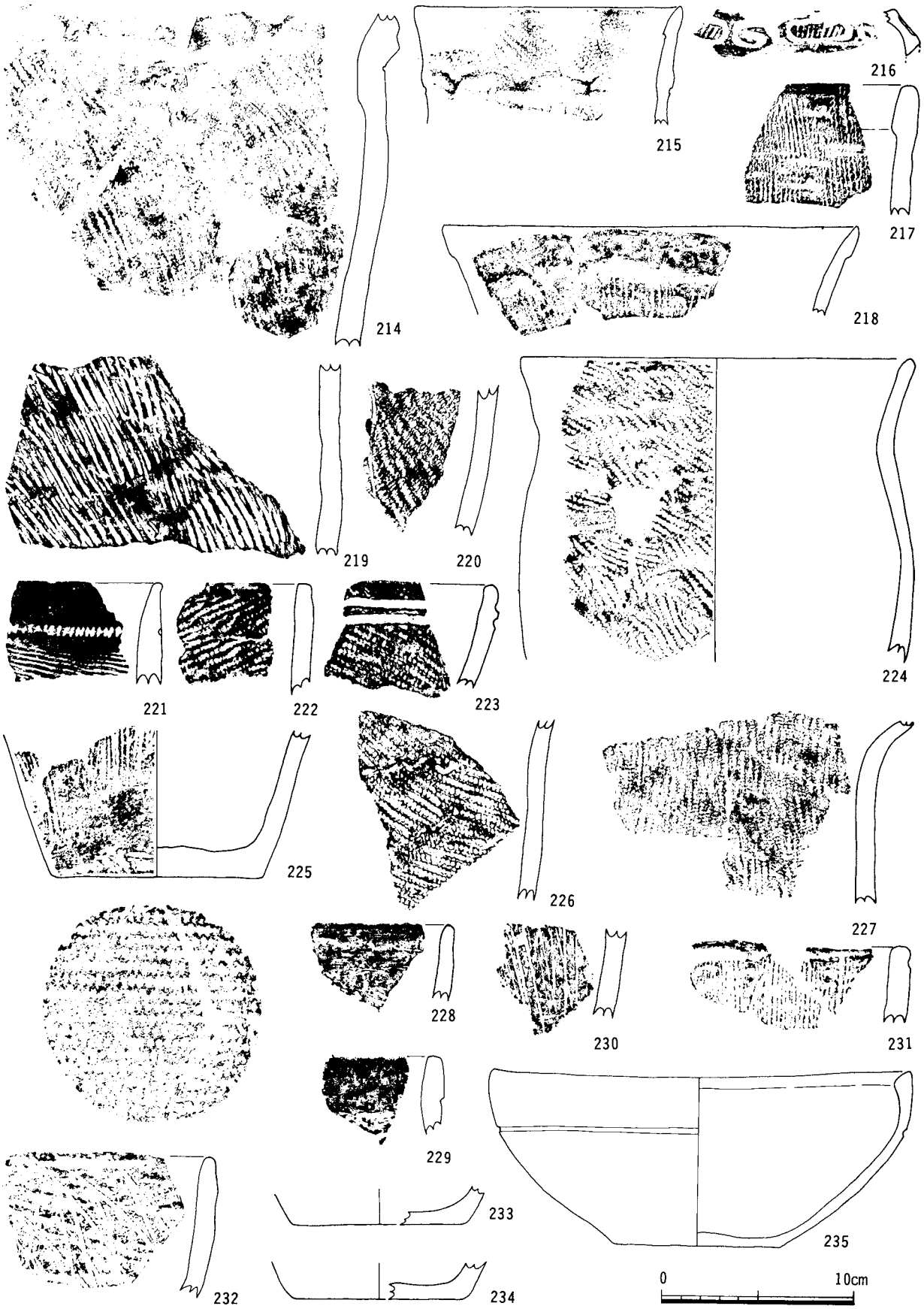
225・230・231は条線文である。225は底部である。232は、ヘラ状工具による沈線が斜位に施され



第34図　第5号住居址出土の縄文土器（1）



第35図　第5号住居址出土の縄文土器（2）



第36図　第5号住居址出土の縄文土器（3）

ている。

228・229は口縁部の無文帯で、233・234は無文の底部である。235は無文で、沈線が1本横走する浅鉢である。

第7号住居址出土の縄文土器（第37図236～245、図版17）

土器の量は少ない。236は櫛状工具による沈線が縦方向に施され、その間に蛇行する部分が降りてくる。237・238は、隆帯と沈線が曲線的あるいは直線的に組み合わせてあり、地文は縄文である。239は目の細かい撚糸文に沈線で弧線が引かれており、東海系の中富式等に類似する。240～244は縄文で、245は無文の浅鉢である。

第8号住居址出土の縄文土器（第37図246～248、図版17）

石囲炉のみを検出したため量は少ない。いずれも無文である。248は浅鉢である。

埋甕（第37図249、図版17）

屋外の埋設土器である。ピットによって一部壊されていた。検出時は口縁部は不明であった。出土した土器片の整理の段階で、同一個体と思われる口縁部があり、図上で器形を復元した。底部からまっすぐ立ち上がり、やや肥厚しながら開く平口縁の土器である。地文は撚糸文である。幅広の沈線が2本1組で2段の連弧を描いている。串田新式の段階のものであろう。

ＳＦ２出土の縄文土器（第37図250・251、図版17）

Ⅳ層中で確認された焼土址より出土した。図示した2点はいずれも押型文である。250は黒鉛入りで、山形文の一部が見える。251は格子目文で、底部に近い部位である。

土坑出土の縄文土器（第37図252～256、図版17）

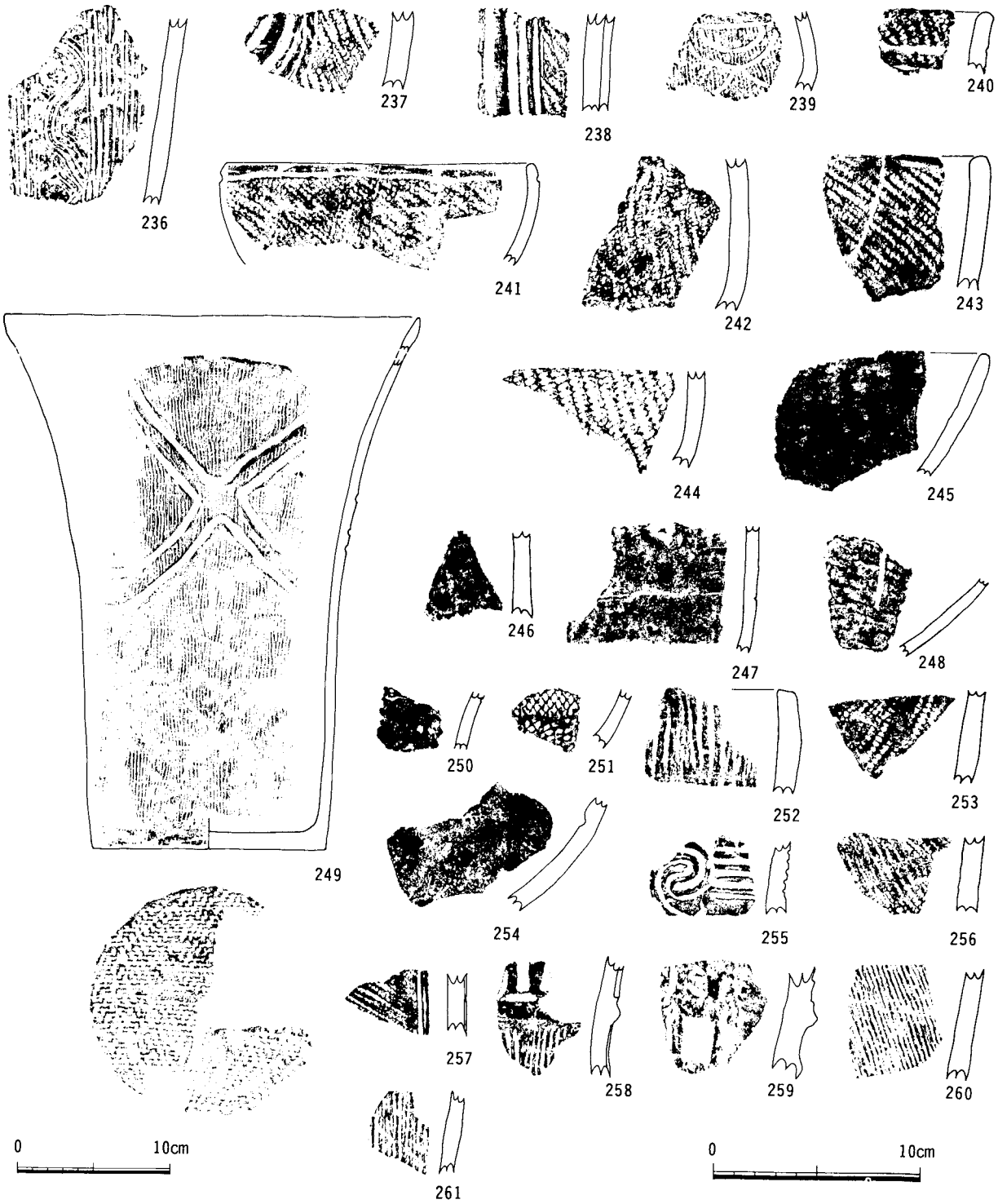
ＳＫ１出土の252は直立する口縁で縦に沈線が施されている。ＳＫ２出土は253と254である。前者は縄文の深鉢の胴部、後者は無文の浅鉢である。ＳＫ３出土は255・256である。前者は、半隆起線文の渦巻きがあり、北陸系中期中葉のものである。後者は縄文の土器である。

ピット出土の縄文土器（第37図257～261・第38図、図版17）

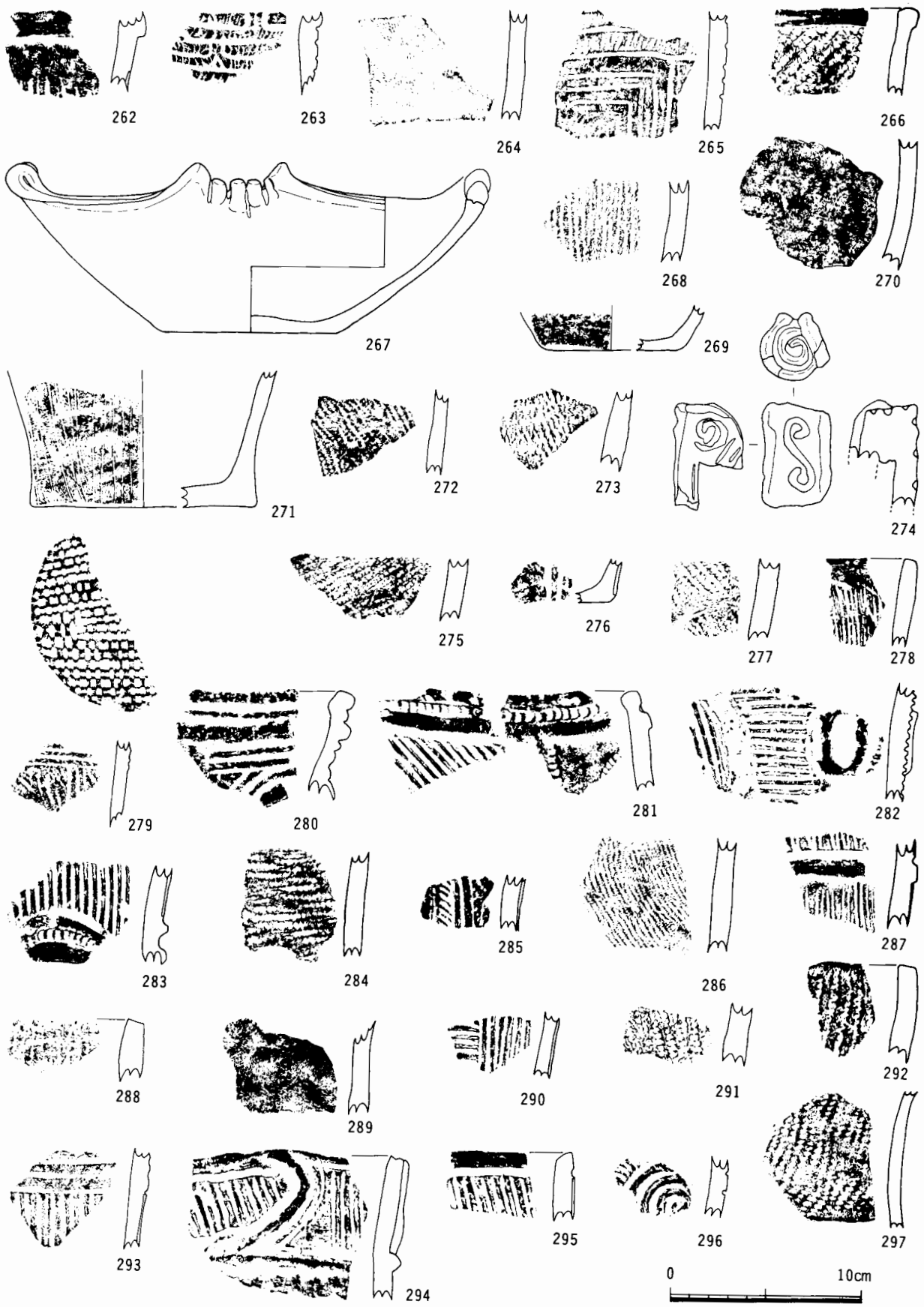
図示した土器のピット番号は第2表に記した通りである。

257は縄文地に縦に沈線が入る。258は隆帯とその上方に幅広の沈線が縦に引かれる。259・262・287は隆帯がある。263・265は沈線の区画内に刻み状の刺突が入る。267は4単位波頂部をもつ浅鉢で、波頂部は5本の刻みが入る。色調は明赤褐色で、焼成は良好である。中期中葉と推定される。271はやや開き気味に立ち上がる底部で、細い沈線が縦に引かれる。網代底である。274は突起部で、表面にＳ字状の文様、上部と側面に渦巻きが描かれる。276は縦に沈線が施された底部。279は縦横に沈線で区画され、中は縄文である。280は隆帯と半隆起線が横走する。281～283は同一個体と思われる。隆帯が直線あるいは曲線的に描かれ、それに沿って押し引き文がある。区画された中は沈線で埋めて

ある。長野編年の中期後半Ⅰ期のものであろう。285は沈線間に連続刺突がある。290・293は沈線が縦横に施されている。294・295は直立する口縁で、隆帯による区画があり、その中を沈線が埋めている。296は半隆起線が渦を巻き連続的に刻みが入る。278は条線文が施されている。260・261・264・268・273・286・288・292は撚糸文、266・272・275・277・284・291・297は縄文、270・289は無文の土器である。



第37図　遺構出土の縄文土器（1）



第38図　遺構出土の縄文土器（2）

3　包含層出土の縄文土器

縄文土器の包含層は、調査区のほぼ全域から広がっている。北東調査区からは押型文土器を中心に早期のまとまった資料が出土している。また、調査区全域から中期の土器が出土している。さらに後晩期の土器も小量ではあるが出土している。次のⅠ～Ⅵ群に分類した。以下、分類ごとに記述する。

Ⅰ群　早期の土器（第39～42図、図版18～21）

本遺跡から出土した早期の遺物を一括して本群とする。

早期に属する土器の概要は以下のようである。押型文系の土器333点、条痕文系の土器43点、縄文施文の土器（一部草創期の可能性もある）11点、撚糸文施文土器3点などである。また、同期に属すると思われる遺構は焼土址（ＳＦ２）を1基確認したのみである。

北東調査区の第Ⅳ層においては、同期の遺物の集中出土をみた。しかし、後述するように同層では１ａ類（沢式土器）の出土比率が他の遺物と比較して高いなど、早期の遺物包含層として認定できるが、緩い傾斜をなしており純粋に一時期の遺物包含層とは認定できない状況にある。したがって本群の遺物は主に土器の形態的特徴により分類し、その特徴を述べる。

1類　押型文土器群（第39～41図、図版18～20）

押型文土器群を黒鉛を含む土器（ａ類）と黒鉛を含まない土器（ｂ類）に分類した。また、ｂ類は基本的には密接施文を最大の特徴とするが、器壁・胎土等から大きく2分し、薄手の繊維を含まない土器（ｂ１類）、厚手の繊維を含む土器（ｂ２類）に細分した。

以下各類ごとに、器形、胎土・焼成、原体、文様構成等の特徴を中心に記述する。

なお、土器の観察表は以下の記号及び数値を用いている。

・施文単位　分類　Ｄ＝楕円文　Ｙ＝山形文　Ｋ＝格子目文　ＲＨ＝連続菱目文
　　ＨＫ＝複合鋸歯文　ＨＹ＝変形山形文　Ｓ＝柵状文　Ｉ＝異形文
　　形状　楕円：１類＝整った形（いわゆる穀粒状）を呈する
　　２類＝やや丸い（円形もしくは菱形状）を呈する
　　山形：１類＝角のある山形状を呈する
　　２類＝緩やかで角の丸い波状を呈する
　　格子目：１類＝方形（菱形、平行四辺形など）を呈する
　　２類＝隅丸方形を呈する（本遺跡では確認できず）
　　大きさ：各施文一単位の大きさを示す。
　　（回転方向の長さ／回転方向と垂直の方向の長さ）

・原体形状　明確に確認出来るものは実数で記載し不明確なものは最低の数値を（　）で記載した。
　　長・径：（原体の長さ／原体の推定直径）
　　端部：ａ類＝原体の端部に刻みがなく、圧痕端部が直線状を呈するもの
　　ｂ類＝原体端部に刻みがあり、圧痕端部が波形状を呈するもの

・器質　器壁は平均的だと思われる部分で測定した。
　　胎土は特に繊維と黒鉛の有無に限って記載した。

焼成　a～eの5段階で表記し、aが堅緻で焼成良好なもの、eがもろく焼成不良なものとした。

a類（1～28）

沢式土器に比定される黒鉛入り土器は、北東調査区を中心に66点出土した。若干の接合資料や同一個体と思われる資料もふくまれるが、大半は破片であり、全体を明らかにできる個体はない。

器形：口縁部や頸部破片から推定復元できる器形は、口縁部で外反するものである。4・5は比較的緩やかに外反するのに対して、1・3・6は外反が強い。8・11は屈曲する頸部である。9・19はわずかに反りがあり、胴上部破片である。25・26は胴下半に近い破片であるが尖底部につながると思われる。口縁はその端部を外側に向かい面取りをする。2・4のように強くなでることにより外側に粘土のはみ出しが看取できる。1は若干端部が肥厚するのに対して、5は端部が薄くなる。器壁は4～8㎜の範囲にあるが、全体的には5㎜前後であり薄い。

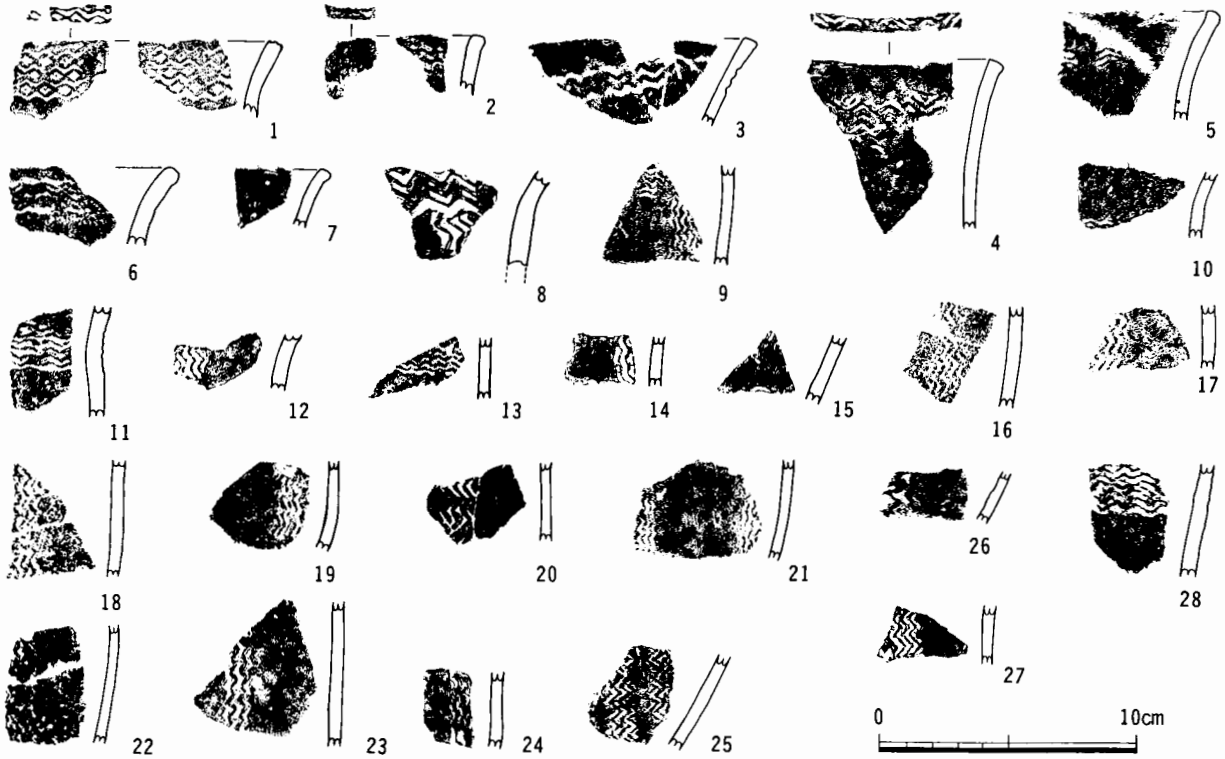
胎土・焼成：焼成は良好な土器が多い。8・20は特に堅緻である。暗灰色を呈する土器と、表面は黄褐色を呈し破損面がやや灰褐色を呈する土器がある。前者の土器には黒鉛が多量に含有されると推定できるが、後者の土器には黒鉛の微粒の混入が確認できるが他の黒鉛入り土器とは異質である。特に4など土器表面に黒鉛を含まない粘土を薄く塗布し、その上から施文した様子が看取できる。黒鉛の他には白色の砂粒を含む土器が多い。

原体：文様の種類は連続菱目文と山形文である。7は無文であるが、細片のため全体が無文土器とは認定できない。1は3条2単位のいわゆる連続菱目文である。形の整った連続した菱形を3条交互に配する。黒鉛入り土器としては現時点での報告例がない。非黒鉛入り土器では吉城郡国府町宮ノ下遺跡で「卯の木式類似の連続菱目文」土器が出土している。宮ノ下遺跡の連続菱目文は2条であり、形もやや乱れて菱形となっていない。むしろ宮ノ下遺跡の格子目文土器を分離させた形に類似している。

2以降は山形文である。4・8のように山幅が11㎜を越すやや大振りな山形文もあるが、全体的には小振りな山形文である。形状は20・25のように鋭角な山形、6・11・14のようになだらかな波形をを呈するものなど一様ではない。原体を明確にできる破片が少ないが条数は2～5条で4条が圧倒的に多い。単位数の判明する個体では2単位以外は認められない。原体長は8が22㎜で比較的長い原体を使用しているが、その他は13㎜前後、径は5㎜前後と小振りな原体を使用する。

文様構成：異方向直交の帯状施文が原則と思われる。口縁部には表裏及び端部への施文の有無で3形態に細分できる。すなわち、表裏端面に施文するもの（1・2）。表端面に施文するもの（3・4）。表面に施文するもの（5・6）である。口縁表面に施文されるものは口唇直下に少し無文部を残し口縁の中央付近に横位に1段施文するものと思われる。3・5はやや右上がりに施文されるが外反する器形のために斜位の施文になったものと思われる。

頸部から胴上部にかけての施文では4は破片下部に横位施文が認められ、口縁部から頸部にかけて横位に2段施文する。その他の破片では横位施文が見られるもの（4・10・11）。直交施文のみられるもの（8・9・14）。縦位帯条施文が見られるもの（12）がある。12を除いて頸上部で横1段の横位施文を原則とし、そこから縦位の施文を直交させるのが原則をなすようである。



第39図　包含層出土の縄文土器（1）

第3表　縄文土器観察表（Ⅰ群1類a類）

番号	出土区層位	施文単位			原体形状				器質				備考
		分類	形状	大きさ	条数	単位	大きさ	端部	器壁	胎土	焼成	色調　表／裏	
1	C 19 Ⅱ	R	1	8／7	3	2	20／5	a	6	黒鉛	a	暗灰　／暗灰黄	
2	K 4 Ⅰ	Y	1	／3	3		12／	a	6	黒鉛	a	暗灰　／暗灰	
3	C 18 Ⅳ	Y	1	7／4	2	2	13／5	a	5	黒鉛	a	暗灰　／暗灰	
4	C 17 Ⅳ	Y	1	11／5	4	2	15／8	a	6	黒鉛	b	黄褐　／黄褐	
5	C 18 Ⅱ	Y	1	8／2	3	2	11／6	a	6	黒鉛	b	灰黄褐　／灰黄褐	
6	C 19 Ⅱ	Y	2	9／3	4	2	13／6	a	7	黒鉛	b	にぶい黄橙／暗灰黄	11と同一
7	C 17 Ⅳ	Y							5	黒鉛	a	黄褐　／暗灰黄	
8	C 18 Ⅱ	Y	1	11／6	(3)	(1)	22／8	a	8	黒鉛	a	灰　／灰	
9	K 7 Ⅱ	Y	2	5／3	4	2	11／3	a	4	黒鉛	b	暗灰　／暗灰	同一
10	C 17 Ⅳ	Y	2		4	2	11／3	a	4	黒鉛	b	暗灰　／灰	
11	C 18 Ⅱ	Y	2	9／2	4	2	13／5	a	7	黒鉛	b	にぶい黄橙／黄褐	6と同一
12	C 19 Ⅱ	Y	1	7／3	(4)		13／	a	5	黒鉛	a	黄褐　／灰	
13	B 17 Ⅳ	Y	2	5／3	4	2	11／3	a	4	黒鉛	b	暗灰　／灰	9と同一
14	C 18 Ⅳ	Y	2	7／2			／(7)	a	5	黒鉛	a	暗灰黄　／暗灰黄	
15	C 17 Ⅳ	Y	1		(4)			a	6	黒鉛	a	暗灰黄　／にぶい黄橙	
16	C 18 Ⅱ	Y	1	7／4	4	2	17／5	a	5	黒鉛	c	オリーブ黒／にぶい黄橙	
17	C 19 Ⅱ	Y	1	8／4	4	2	17／5	a	5	黒鉛	c	にぶい黄褐／にぶい黄橙	同一
18	C 17 Ⅳ	Y	1	7／3	4	2	17／5	a	5	黒鉛	c	にぶい黄褐／にぶい黄橙	
19	C 17 Ⅱ	Y	2	6／3	5	(2)	15／5	a	5	黒鉛	a	灰オリーブ／灰	
20	C 17 Ⅳ	Y	1	9／6	3	(2)	16／5	a	4	黒鉛	a	にぶい黄　／灰	
21	C 17 Ⅳ	Y	2	5／3	4	2	11／3	a	4	黒鉛	b	暗灰　／暗灰	9と同一
22	C 17 Ⅱ	Y	2	5／3	4	2	11／3	a	4	黒鉛	b	にぶい黄　／灰オリーブ	9と同一
23	C 18 Ⅱ	Y	2	6／4	3	2	11／4	a	5	黒鉛	b	にぶい黄褐／にぶい黄褐	
24	C 18 Ⅱ	Y	2	6／3	3	2	11／4	a	5	黒鉛	a	黒褐　／黒褐	
25	C 18 Ⅱ	Y	1	7／5	3	2	15／4	a	5	黒鉛	b	暗灰黄　／灰	
26	C 18 Ⅳ	Y	1	6／6	(3)		17／		4	黒鉛	c	にぶい黄褐／にぶい黄褐	
27	L 5 Ⅱ	Y	1	6／3	4	(2)	／5	a	4	黒鉛	b	黄灰　／にぶい黄褐	
28	C 18 Ⅱ	Y	2	8／3	(4)	4	／6	a	6	黒鉛	a	黄灰　／灰黄褐	

胴部の施文は破片の部位が特定できないため不明確であるが圧倒的に縦位帯状施文が多い。21の無文部33㎜をはじめ、無文部は広い破片が圧倒的である。25は胴下部の破片であり胴下部に向かい施文が狭くなるものである。15は胴下部と思われる破片であるが、縦位施文の下（若しくは上）に少し間隔を開けて横位に施文されている。また、28は横位に施文される。２段が重複して施文され施文部が広くなるが、無文部も広く、帯状施文の原則に拠っていると思われる。

以上の破片や図示し得なかった破片から本類の土器の文様構成は口縁表面に１段、頸部付近に１段及び胴部に横位に施文し、さらに頸部付近から底部に向かい縦位で帯状に施文するものが多いと思われる。

ｂ類（29～91）

押型文土器でａ類を除く土器（黒鉛の入っていない押型文土器）を一括し本類とした。本群の土器は楕円文、山形文、格子目文などを原体とした密接施文を原則としている。この観点から本類は細久保式に併行する一群と考えられるが、さらに器壁、胎土、焼成などから以下に２分した[1]。

ｂ１類　器壁が７㎜以下で平均的には５㎜前後と薄く、焼成が良好な土器の一群

ｂ２類　器壁が７㎜を越し平均的には９㎜前後と厚い土器で焼成がやや不良な土器の一群。
本群には繊維を含む土器が多く見られる。

ｂ１類（29～91）　本類に属する破片は108点である。文様の種類は山形文27点、楕円文69点、格子目文16点、その他６点である（併存タイプ７点は各々の文様に含まれる）。以下、文様の種類ごとにその特徴を記す。

山形文（27～39）

器形：口縁部が２点で緩く外反する器形であると思われる。口縁端部を外側に向かい面取りする。35は頸部に向かいやや肥厚し、繊維も認められるためやや厚手の土器ｂ２類に属する可能性もある。その他器形の推定できる破片はない。

胎土・焼成：胎土は白色砂粒を含む他は密である。焼成は比較的良く、文様も明瞭に残る。39はやや焼成が不良で磨滅が激しい。

原体：29～34は同一個体と思われる。山形の形状は１類であるが、緩い山で２類の波状に近い。37は振幅の深い山形状を呈するが連続しない部分もあり変形の山形文である。38は原体凹部が狭く細い山形文である。単位数の判明する破片は２単位である。原体長は20㎜以下、径は５㎜程度であり、比較的小振りであるがａ類よりやや長い原体を用いている。端部は29～34は切り落としをしないｂ類であり特徴的である。

文様構成：横位に密接施文される。32は中央の施文が上下から切られており、重複部分も多く見られることから無文部を無くすように全面施文された可能性がある。９は山形文をずらして菱目状に文様を作っているが、小片のため、意図的な施文か判断できない。

楕円文（40～72）

器形：口縁部でみると極薄の４㎜程度のもの（41～43）と６㎜程度のもの（40・44・45）に２分される。43は口縁部での推定径が10㎝前後と小さく、推定高も10㎝程度になる。また、71は薄く湾曲が強い底部である。これら極薄の土器は比較的小型の土器である可能性が高い。

口縁端部は面取りをするなど、丁寧な調整で仕上げてある。40は端部が水平に近い角度で面取りし

てある点で特徴的である。45は口縁で表に粘土を折り返し若干肥厚させ端部と裏面をミガキ調整で仕上げる。全体的に口縁部で外反する器形と思われるが、a類のように頸部と判明するような屈曲を示す破片は64・67以外には認められないことから、いずれの個体も外反は緩いと思われる。

41は口縁部に焼成後の補修孔と思われる穿孔がある。円形の穿孔ではなく紡錘形を呈する。工具を縦方法に動かして穿孔した様子が看取できる。

胎土・焼成：焼成は全体に良好であり、堅緻である。白色の砂粒（長石）を含む土器が比較的多い。43はガラス性の鉱物を多く含み、他と胎土の面で異なる。45～48は同一個体と思われるが裏面に横方向へのミガキが見られる。20～23は焼成は良好であるが、粒の大きい砂粒が多く、粘土の接合部を明確に残し破損しているのが特徴的である。30・31は砂粒の混入が多く、焼成も他と比較して不良である。

原体：63が菱形状に近い他は、いわゆる穀粒状を呈し、長軸×短軸が5㎜×3㎜前後の比較的小振りな楕円文である。42は4㎜×2.2㎜と最小である。本類で最大のものは62で7㎜×3.5㎜である。条数は4条以下のものは確認できていない。また8条以上も確認できていない。単位数は2単位以外のものは確認できていないが、判明しないものでも2単位の可能性が高い。施文具の大きさは、径が3㎜～5㎜で小型のものが多い。長さは11㎜からあるが、長いものでも28㎜である。端部はb類である。また、本類では楕円を交互に配するもの以外は確認できなかった。

文様構成：底部に近い破片と思われる72が縦位に施文する他は横位施文である。45は口唇直下に無文部を残す。肥厚させていることから考えても意識的に施文していると思われる。同一個体と思われる46～48にも少しの無文部を残し横位に施文してある。67も頸部にあたる部分に1㎝ほどの無文帯が確認できる。69は部位は不明であるが比較的広い無文帯を残す。その他の破片は僅かに無文部を残すものもあるが、大半が横位で密接に施文する。特に54・55は上部の施文を下部から重ねて消すように施文が繰り返されている。

格子目文（73～82）

器形：口縁部は73の1点のみで、この破片は図示するように緩やかな反りを持つ破片と接合した。口縁部で緩やかに外反する器形で、口縁端部を水平に近い角度で面取りする。74は同一個体の胴部である。比較的小振りな土器と考えられる。その他器形を明確にできる破片はない。器壁は73～77までは5㎜以下で薄い。78～82は6㎜前後で比較的厚く、格子目の大きいものほど器壁も厚くなる傾向がある。80は土器表面に格子目文を施文してあるが、剥離した下面には楕円文をやや斜位に施文してある特異な例である。一次成形で楕円文を施文し、粘土を重ね合わせて格子目文を施文したと思われる。

胎土・焼成：焼成は比較的良好である。73～77は土器断面で赤褐色を呈する土器で、胎土は砂粒等の混入が少なく密である。79は石英粒が多く混入する。81・82は比較的大粒の砂粒を多く混入させる。

原体：73～77は左に長辺が傾く2㎜×4㎜と小振りな平行四辺形を単位とする。原体への刻みは上に4分割した点を取り、下にややずらして4点を取り、上の1点から下の対応する点より左回り及び右回りに3点目の点に沈線を刻むことによって作られた格子目である。長さ18㎜と小さな施文具である。77はやや大きめの格子であるが、平行四辺形の傾きなどから同様の原体であると思われる。78・79は原体を明らかにできるような破片ではないが、菱形、若しくは正方形に近い。左右への刻みが対称になっている点で上記の例と相違が認められる。82は4単位であるが、原体の上端に4点を設け、

下端の左右に3／8回転した位置に向かって沈線を刻むことによって作られる縦長の菱形を基本とする。

文様構成：横位密接施文が中心である。73・75・77は口縁端部や上下の文様の重なりが見られない。81は縦位に密接施文されている。

その他（83～91）

83・84はいわゆる異形押型文である。平行四辺形とその斜辺に平行な複数の線を組み合わせる複合鋸歯文であるが、全容を図り知れるようなものではない。83は緩い反りがあり、頸部にあたる。焼成は良好である。横位に密接に施文する。84は胎土からみて6と同一個体である可能性が高く、楕円文を併用すると思われる。また83は胎土・調整・色調などが73の格子目文と酷似しており、格子目文と複合鋸歯文の併存タイプである可能性が高い。

85は山形文の変形文である。縦位の沈線と5条以上の山形を配する。砂粒の混じりが少なく、緻密な胎土で、焼成も比較的良い。横位で施文されていると思われるが詳細は不明である。

86～91は異種原体の併存タイプの土器である。

86・87は複合鋸歯文と楕円文の組み合わせである。焼成はいずれもよい。86は複合鋸歯文の下部に楕円文を施文する。複合鋸歯文はＡ１ａ類（片岡1988）で1単位である。楕円文は条数は不明であるが、2単位である。異種原体ではあるが、径は約5㎜で同じ程度の原体を使用していると想定される。87は上が鋸歯であると想定できるが詳細は不明である。楕円は径5㎜程度の原体を使用する。上記のように84を同一個体とする可能性が高い。

88～91は山形文と楕円文を併用する。91は同一個体が多いことから文様構成を図上で復元した。緻密な粘土を使い、白色砂粒を多く含む。焼成は良い。6条2単位の穀粒文状の楕円文と4条1単位のやや波の大きい山形文である。双方とも長さ17㎜、径4㎜程度の似た大きさの原体を使用している。文様構成は口縁に2段の楕円文を横位施文し、若干の無文部を頸部に残して以下山形文を施文する。山形文は3段以上施文し胴下半で楕円文を再び施文する。一部で同帯に楕円文と山形文があるが、意図的に変えたものか、1周施文した結果ずれたものかは不明である。

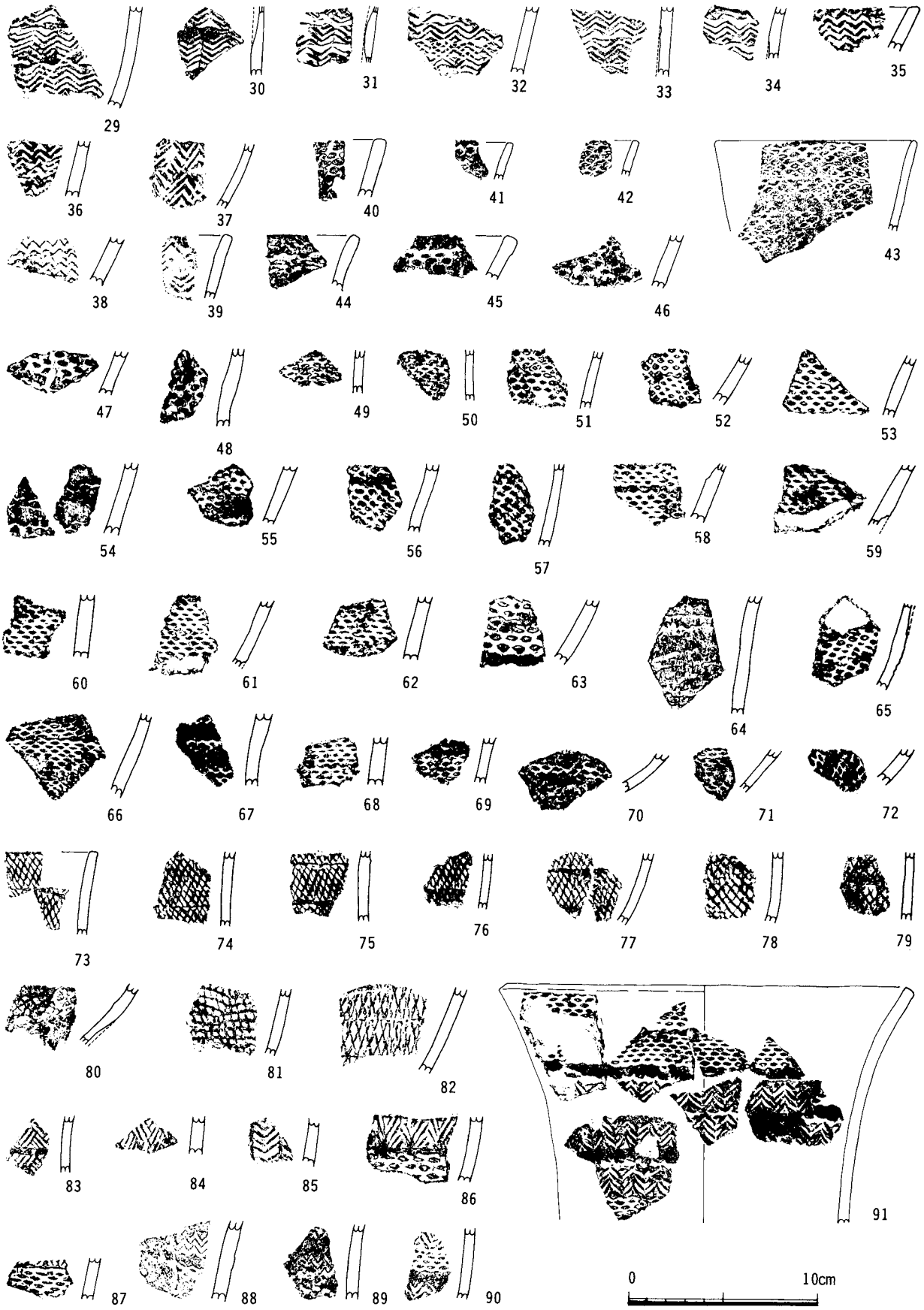
88・89は同一個体。二つとも緩く反る。頸部付近の破片と思われる。比較的堅緻な土器であるが、砂粒が多く粗い胎土である。施文された山形文は原体への印刻部が細く、小振りである。楕円文は明確でないが、小振りな穀粒状の楕円である。天地が逆転する可能性もあるが、頸部に細い無文部を残し、上部に山形文、下部に楕円文を施文する。90は楕円文と山形文の併存であるが、楕円文の幅が極端に狭いことでは91と相違する。

ｂ２類（92～151）　本類に属する土器は111点で、山形文14点、楕円文96点、その他3点である。格子目文で本群に該当する土器は確認できなかった。

山形文（92～103）

器形：101・102が頸部付近の破片である。緩い反りがみられることから口縁部で緩く外反する器形と思われる。102は粘土の継ぎ目にあたり口縁部に向かい肥厚する。その他は部位は特定できないが、推定の径からやや大きめの土器になると思われる。

胎土・焼成：焼成は全体的に不良であり、表面磨滅も著しい。繊維の混入を本類の特徴としているが95・96・102・103には認められない。103は砂粒を多く含む。



第40図　包含層出土の縄文土器（2）

第4表　縄文土器観察表（Ⅰ群1類b1類）

番号	出土区層位	施文単位			原体形状				器質				備考
		分類	形状	大きさ	条数	単位	大きさ	端部	器壁	胎土	焼成	色調　表／裏	
29	C 17 Ⅱ	Y	1	14／5	6	(1)	20／(4)	a	5		b	にぶい黄橙／にぶい黄橙	同一
30	C 17 Ⅱ	Y	1	14／5	6	(1)	20／(4)	a	5		b	にぶい黄橙／灰黄褐	
31	C 17 Ⅳ	Y	1	14／5	(4)	(1)	(11)／(4)	a	5		b	にぶい黄橙／(剥離)	
32	C 17 Ⅱ	Y	1	14／5	(6)	(1)	(17)／(4)	a	5		b	灰褐　／灰黄褐	
33	I 9 Ⅱ	Y	1	14／5	(5)	(1)	(16)／(4)	a	6		b	灰黄褐　／にぶい黄橙	
34	K 7 Ⅱ	Y	1	13／5	(4)		(12)／	a	5		b	黄褐　／灰黄褐	
35	A 19 Ⅱ	Y	1	9／5	(6)	2	(19)／6	b	7	微繊	c	明赤褐　／明赤褐	
36	B 17 Ⅱ	Y	1	9／6	(4)		(16)／		6		b	にぶい橙　／橙	
37	H 12 Ⅱ	Y	1	15／12	(5)		(17)／		5		b	灰黄褐　／スス付着	
38	H 14 Ⅱ	Y	1	7／4	(3)		(14)／		6		c	黒褐　／にぶい褐	
39	C 18 Ⅱ	Y	1	10／6	(5)		(16)／		5		c	黒褐　／にぶい褐	
40	C 19 Ⅱ	D	1	7／3	(6)		(20)／		6		a	褐灰　／褐灰	
41	C 17 Ⅳ	D	1	5／3	(2)		(9)／	b	3		a	黒褐　／灰黄褐	
42	C 17 Ⅱ	D	1	4／2	(3)		(8)／	b	4		c	灰褐　／にぶい褐	
43	B 18 Ⅳ	D	1	6／3	6	2	17／5	b	4		c	灰黄褐　／にぶい褐	
44	C 17 Ⅱ	D	1						6		b	黒褐　／灰黄褐	
45	A 19 Ⅱ	D	1	6／3	(3)	2	(14)／5	a	6		b	灰黄褐　／にぶい赤褐	同一
46	C 16 Ⅱ	D	1	6／3	(5)	2	(20)／5	a	6		b	灰褐　／明赤褐	
47	C 17 Ⅳ	D	1	6／3	(4)	2	(14)／5	a	6		b	暗赤褐　／にぶい赤褐	
48	C 17 Ⅳ	D	1	6／3	5	2	22／5	a	6		b	にぶい赤褐／にぶい赤褐	
49	C 17 Ⅳ	D	1	5／2	5	(2)	12／4	b	4		c	黒褐　／にぶい褐	
50	C 17 Ⅳ	D	1	5／2	(4)		(11)／		4		c	暗褐　／にぶい褐	
51	C 19 Ⅱ	D	1	5／3	6	2	21／3	b	5		b	にぶい橙　／にぶい橙	
52	I 10 Ⅱ	D	1	4／3	5	2	26／3	b	5		a	にぶい赤褐／にぶい褐	
53	表　採	D	1	5／3	5	2	14／4	b	5		b	灰黄褐　／にぶい黄橙	
54	C 18 Ⅳ	D	1	6／4	(4)	2	(15)／4	b	6		a	灰黄褐　／にぶい褐	
55	C 17 Ⅱ	D	1	4／3	(4)	2	(13)／3	b	6		b	にぶい黄橙／黒褐	
56	B 17 Ⅳ	D	1	5／4	7	2	21／4	b	6		b	黒褐　／灰褐	
57	C 18 Ⅱ	D	1	5／3	(6)	2	(20)／3	b	5		b	灰褐　／黒褐	
58	B 16 Ⅳ	D	1	5／2	(6)	2	(17)／4	b	7		a	にぶい褐　／にぶい褐	
59	C 17 I	D	1	5／2	(5)	2	(14)／4	b	7		a	にぶい褐　／にぶい赤褐	
60	C 17 Ⅳ	D	1	5／2	(5)	2	(14)／4	b	6		a	褐灰　／にぶい赤褐	
61	C 17 Ⅳ	D	1	5／2	(6)	2	(16)／4	b	7		a	灰黄褐　／にぶい褐	
62	C 17 Ⅱ	D	1	5／3	(5)	2	(19)／4		6		c	黒褐　／にぶい褐	
63	B 17 Ⅱ	D	1	7／4	(4)	2	(20)／5	b	6		b	にぶい黄橙／にぶい橙	
64	C 17 Ⅱ	D	2						6		b	黒褐　／にぶい橙	
65	C 17 Ⅱ	D	1	4／3	4	2	(12)／4		5		b	灰黄褐　／褐灰	
66	B 19 Ⅱ	D	1	5／2	8	2	19／4	b	6		c	にぶい黄橙／灰黄褐	
67	C 18 Ⅱ	D	1	3／2	8	2	17／3	b	7		c	にぶい褐　／にぶい黄橙	
68	B 18 Ⅱ	D	1	4／2	(5)	2	(13)／4	b	7		c	褐灰　／褐灰	
69	C 17 Ⅱ	D	1	4／2	(4)	2	(12)／4	b	7		c	褐灰　／灰黄褐	
70	C 17 Ⅱ	D	1	5／3	(5)	2	(16)／4	b	5		c	にぶい黄橙／にぶい黄橙	
71	H 12 Ⅱ	D	1	4／2	(2)	2	(6)／4	b	4		b	にぶい黄橙／にぶい黄橙	
72	C 17 Ⅱ	D	1	5／3	(4)		(11)／		6		b	にぶい黄橙／にぶい黄橙	
73	C 17 Ⅱ	K	1	2／4	7	4	18／4	a	5		a	黒　／黒褐	
74	C 18 Ⅱ	K	1	2／4	7	4	18／4	a	5		b	暗赤褐　／暗赤褐	
75	B 17 Ⅳ	K	1	3／4	7	4	18／4	a	4		a	灰褐　／褐灰	
76	B 17 Ⅳ	K	1	2／4	(4)	4	(13)／4	a	4		b	灰褐　／褐灰	
77	C 17 Ⅱ	K	1	3／5	(7)	4	(19)／5	a	5		b	にぶい褐　／黒褐	

番号	出土区層位	施文単位			原体形状				器質				備考
		分類	形状	大きさ	条数	単位	大きさ	端部	器壁	胎土	焼成	色調　表／裏	
78	C 17 Ⅳ	K	1	4／5	(6)	4	(22)／5		5		c	にぶい黄褐／灰黄褐	
79	B 17 Ⅳ	K	1	4／5	(5)		(16)／	a	6		c	褐灰　／にぶい黄橙	
80	I 9 Ⅱ	K	1	4／4	(3)		(11)／		5		c	にぶい黄褐／にぶい黄橙	
81	H 12 Ⅱ	K	1	3／4	(5)	4	(22)／6		6		c	にぶい橙　／橙	
82	C 17 Ⅳ	K	1	3／9	2	4	18／3	a	7		b	にぶい黄褐／にぶい黄褐	
83	C 17 Ⅱ	HK			(1)		(20)／		6		b	にぶい褐　／褐	
84	A 19 Ⅱ	HK			(1)		(16)／	a	5		a	黒　／暗褐	
85	C 18 Ⅱ	IY		12／6	(5)	1	(21)／4		6		b	褐灰　／にぶい黄橙	
86	B 17 I	HK		15／12		1	(19)／5	a	6		b	橙　／灰褐	
		D	1	7／4	(3)	2	(15)／5	b					
87	C 17 Ⅱ	HK						a	6		b	にぶい赤褐／にぶい赤褐	83と同一?
		D	1	5／2	(5)	2	14／5	a					
88	C 18 Ⅱ	Y	1	5／4	(4)		(19)／	b	6		b	スス付着　／灰褐	同一
		D	1	4／2	(5)		(18)／	b					
89	C 17 Ⅱ	Y	1	5／4	(4)		(15)／	b	6		b	スス付着　／黄灰	
		D	1	4／2				b					
90	B 17 Ⅳ	Y	1	12／9	(3)		(11)／	b	5		a	にぶい黄橙／黒褐	
		D	1	5／2	(4)	2	(12)／4	b					
91	B17ⅡⅣ C17ⅡⅣ C 18 Ⅱ	Y	1	11／7	4	1	18／4	a	6		b	褐灰　／にぶい黄橙	
		D	1	4／2	6	2	16／4	b					

原体：ｂ１類と比較して原体への刻みの幅（器面凸部）が広くまた凹部も広いのが特徴である。特に101は凸部と凹部が広くゆったりとした山形文である。94～96は振幅が大きく山形状を呈するが他はやや波形状を呈する。本類全体の特徴であるが、施文具とする原体は比較的大きなものを使い、長さの明確な97では35㎜、91は40㎜以上ある。径も７㎜前後と太く、ａ類及びｂ１類と異なる。95・96は原体端部に刻みがなく、圧痕が直線状となる。

文様構成：横位密接に施文するものが多いが、101・102は頸部で縦位に施文する。103は横位密接と縦位施文が認められる。

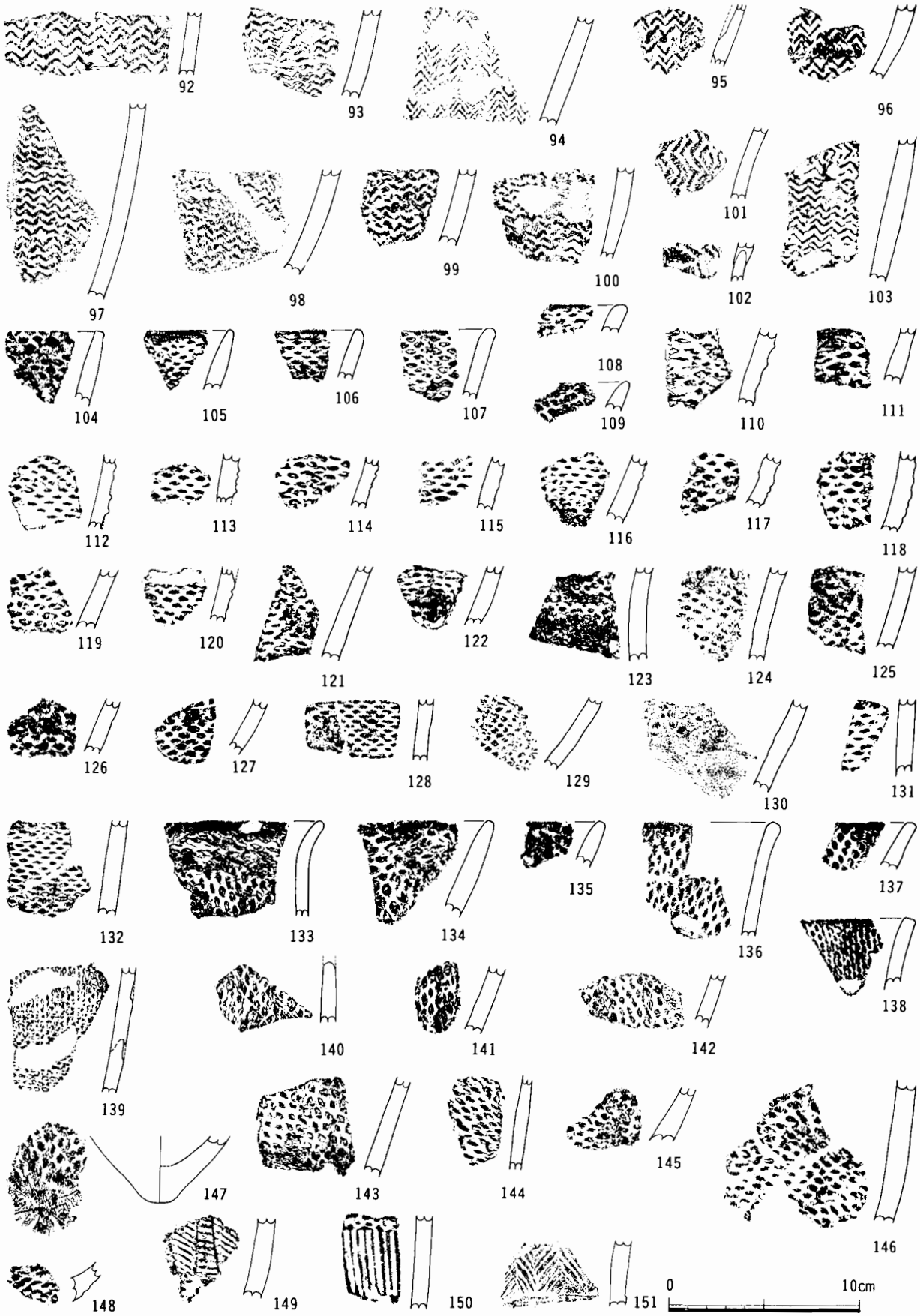
楕円文（104～148）

器形：本類に属する口縁部は13点である。ｂ１類に比べて口縁端部の面取りが明瞭でなく、やや丸みをおびる。108・109は口縁端部が外に向かいやや尖ったように薄くなる。105・134などは口縁端部よりやや下部が肥厚する。口縁部は傾きは明瞭ではないが、直口気味に立ち上がりながらも、緩く外反すると思われる。133は口縁直下で強く外反する器形で、他と比べて異質である。

123は頸部付近の破片と思われ、緩い反りをもつ。他には明確に反りの認められる破片はなく、外反が緩いと思われる。147・148は底部またはそれに近い部位である。147は尖底部でやや丸みを増しわずかに乳房状を呈する。148は147と同様の器形になる可能性が高い。

器壁は８㎜前後で、10㎜を越す土器もある。128・138は７㎜程度であるが胎土・焼成などから本類に含めたものもある。

胎土・焼成：107のように焼成の良好な土器もあるが、他はａ類やｂ１類と比較して焼成が不良である。表面の磨滅が激しく図示し得なかった個体も多い。繊維を含む土器は９割近くを占める。139は表面が剥離している個体であるが、表面にあまり繊維痕が見られない。この個体も剥離面では繊維の圧痕が多く確認でき、粘土にかなり混入させていたと思われる。110・111は同一個体と思われるが、



第41図　包含層出土の縄文土器（3）

第5表　縄文土器観察表（Ⅰ群1類b2類）

番号	出土区層位	施文単位			原体形状				器質				備考
		分類	形状	大きさ	条数	単位	大きさ	端部	器壁	胎土	焼成	色調　表／裏	
92	K 6 Ⅱ	Y	1	12／7	(7)	2	(40)／8		8	繊維	c	灰褐　／にぶい橙	
93	C 16 Ⅱ	Y	2	7／5	(7)	2	(32)／5	b	9	繊維少	c	黒褐　／にぶい黄褐	
94	A 19 Ⅱ	Y	1	8／8	(7)	2	(30)／7		8	繊維	d	黒褐　／にぶい橙	
95	C 17 Ⅰ	Y	1	9／8	(4)	2	(17)／6	a	10		c	橙　／にぶい黄橙	
96	I 10 Ⅱ	Y	1	9／8	(4)	2	(24)／6	a	8		c	にぶい褐　／暗褐	
97	C 17 Ⅱ	Y	2	7／5	8	4	35 ／7	a	9	繊維	d	にぶい黄橙／にぶい黄褐	
98	C 17 Ⅱ	Y	2	8／5	8		35 ／		10	繊維	d	灰褐　／褐	
99	C 17 Ⅱ	Y	2	9／5	(3)		(19)／		10	繊維	d	にぶい黄橙／褐	同一
100	A 19 Ⅱ	Y	2	9／5	(4)		(19)／	b	9	繊維	d	にぶい黄橙／にぶい黄橙	
101	C 17 Ⅳ	Y	1	18／8	(5)		(29)／		8	繊維	c	明赤褐　／赤褐	
102	C 19 Ⅱ	Y	2	16／6					8		d	橙　／橙	
103	A 19 Ⅱ	Y	1	8／6	(6)	2	(24)／5	a	9		c	にぶい褐　／にぶい赤褐	
104	C 17 Ⅱ	D	1	6／4	(5)		(21)／	b	8	繊維少	c	灰黄褐　／にぶい黄橙	
105	C 18 Ⅱ	D	1	5／3	(5)		(18)		9	繊維少	c	灰黄褐　／灰黄	
106	H 13 Ⅱ	D	1	6／2	(7)	2	(18)／6		8	繊維	b	黒　／灰褐	
107	K 4 Ⅱ	D	1	6／3	7		28／	b	8	繊維	d	にぶい褐　／褐	
108	B 18 Ⅱ	D	1	6／3	(3)		(10)		8		c	黒褐　／黒褐	
109	B 19 Ⅱ	D	2	5／4					8	繊維	d	明赤褐　／明赤褐	
110	B 18 Ⅱ	D	1	9／4	(4)	2	(18)／7	b	9	繊維少	b	灰黄褐　／にぶい褐	
111	C 18 Ⅳ	D	1	9／4					9	繊維少	b	灰褐　／にぶい褐	
112	B 18 Ⅱ	D	1	7／3	(5)	2	(20)／6		8	繊維少	b	にぶい赤褐／にぶい赤褐	
113	B 18 Ⅱ	D	1	6／3	(5)	2	(20)／6		10	繊維	d	明赤褐　／褐灰	
114	K 5 Ⅱ	D	1	6／4					8	繊維少	d	にぶい橙　／にぶい褐	
115	I 12 Ⅱ	D	1	8／3	(6)		(20)／		9	繊維少	b	灰褐　／灰黄褐	
116	C 18 Ⅱ	D	1	5／3	(5)		(17)		9		c	にぶい黄橙／にぶい黄橙	
117	K 4 Ⅱ	D	1	6／4	(4)		(14)		8	繊維少	c	にぶい黄橙／灰黄褐	
118	C 19 Ⅱ	D	1	7／4	(7)	2	(31)／6		10	繊維	c	にぶい橙　／にぶい橙	
119	B 18 Ⅱ	D	1	7／4	(4)		(22)	b	9	繊維少	c	にぶい橙　／黒褐	
120	K 6 Ⅱ	D	1	7／3	(5)		(20)／		9	繊維少	b	にぶい赤褐／灰褐	
121	B 19 Ⅱ	D	1	5／3					10	繊維少	b	にぶい黄橙／褐灰	
122	I 10 Ⅱ	D	1	4／2	(3)		(10)	a	9	繊維少	c	にぶい橙　／にぶい黄	
123	B 18 Ⅱ	D	2	4／3	(6)	2	(22)／4	a	9	繊維少	c	にぶい黄褐／にぶい褐	
124	B 19 Ⅱ	D	2	5／4	7	2	26 ／5	a	8	繊維少	d	黄灰　／にぶい橙	
125	B 18 Ⅱ	D	2	5／4	(6)		(20)		9	繊維少	c	にぶい橙　／にぶい赤褐	
126	B 18 Ⅱ	D	1	7／4		2	／6		9	繊維	c	にぶい赤褐／にぶい褐	
127	C 18 Ⅱ	D	1	7／3	(5)	2	(18)／5		8		c	にぶい黄橙／褐灰	
128	C 18 Ⅳ	D	1	6／2	(11)	2	(30)／5	b	7	繊維	d	褐　／にぶい黄褐	
129	C 19 Ⅱ	D	1	4／3					8	繊維	c	にぶい黄橙／黄灰	
130	B 18 Ⅳ	D	2	5／4					8		b	にぶい褐　／灰褐	
131	B 18 Ⅱ	D	1	6／3	(7)		(29)		8		c	黒褐　／にぶい赤褐	
132	B 18 Ⅱ	D	1	5／2	(8)	2	(21)／5	b	9	繊維少	b	褐灰　／黄灰	
133	B 19 Ⅱ	D	1	6／4	(5)	2	(22)／5	b	8	繊維少	b	褐灰　／にぶい褐	
134	B 18 Ⅱ	D	2	7／6					10	繊維	c	にぶい褐　／浅黄	
135	I 10 Ⅱ	D	1	7／3	(3)		(13)		9	繊維少	d	黄灰　／黄灰	
136	B 18 Ⅱ	D	1	7／3	(9)		(26)		8	繊維少	d	褐　／にぶい褐	
137	B 18 Ⅱ	D	2	5／4	(5)		(18)		8	繊維少	c	灰黄褐　／にぶい黄橙	
138	C 18 Ⅳ	D	1	4／2	(4)	4	(13)／4	b	7		c	にぶい褐　／にぶい黄橙	
139	B 18 Ⅱ	D	1	4／2	(4)	3	(12)／4	b	8	繊維少	b	灰黄褐　／にぶい黄橙	
140	H 13 Ⅱ	D	1	7／3	(4)		(14)		8	繊維	c	黒褐　／明赤褐	

番号	出土区層位	施文単位			原体形状				器質				備考
		分類	形状	大きさ	条数	単位	大きさ	端部	器壁	胎土	焼成	色調　表／裏	
141	Ⅰ 11 Ⅱ	D	1	6／3	(3)		(11)	b	9	繊維少	c	にぶい赤褐／灰黄褐	
142	C 19 Ⅱ	D	1	5／3	5	2	16／5	b	7	繊維少	c	灰褐　／黒褐	
143	B 18 Ⅳ	D	2	4／4	(6)		(25)		8	繊維少	d	黒褐　／にぶい黄橙	
144	H 13 Ⅱ	D	1	6／3	(6)		(23)	b	7	繊維多	c	にぶい褐　／にぶい赤褐	
145	Ⅰ 10 Ⅱ	D	2	5／3					10		d	にぶい橙　／橙	
146	A 19 Ⅱ	D	1	6／4	(5)		(23)		10	繊維	c	橙　／にぶい赤褐	
147	B 18 Ⅱ	D	2	7／4					8	繊維	d	黄灰　／灰黄	
148	B 18 Ⅱ	D	1	7／3					9	繊維	c	橙　／にぶい褐	
149	B 18 Ⅰ	Ⅰ		14／2	(9)	1	(31)／8		10	繊維	c	にぶい赤褐／にぶい赤橙	
		D	1										
150	C 18 Ⅱ	S		3／34	1	4	34／5	a	8		c	灰褐　／にぶい黄橙	
		D	1	5／3				b					
151	B 18 Ⅱ	ⅠY		27／28	(1)	1	(28)／9	a	9	繊維	b	にぶい赤褐／にぶい橙	

どちらにも黒鉛の小さな粒と思われる鉱物の混入が、肉眼で確認できる。ただし微量であり、a類に属する個体ではないと考える。123には金雲母が含まれる。

原体：例外もあるが、b1類より大振りな楕円文である。また、長軸と短軸の差が小さくb1類より円形に近い楕円文が多い。殻粒文を呈する楕円文も長軸4㎜から9㎜とやや大振りになる。112・113は原体への刻みが深く2㎜近くある。

条数や単位数を明確にできる個体は少ないが、106・124は7条確認できる。また128は11条以上あり長さは30㎜を越すなど、全体的に条数は多いと推定できる。単位は2単位が多いようであるが、138は4単位、139は3単位である。これらは粒の長軸も4㎜と小さく、従って施文具の径も4㎜程度である。粒の配列は各段入れ違いになる以外の例はない。ただし、137は楕円を螺旋状に配したため、文様が左下がりに密になっている。また、138・139は楕円が連珠文的につながっている。

文様構成：密接施文を原則とし123は少しの無文部が看取できる他、無文部を残す破片は確認できない。ただし130は僅かに横位に楕円文の施文を認めるが、下部では楕円文は確認できず、ナデ調整の痕跡が認められる。

施文の方向は104～132が横位で一番多いが、縦位施文、斜位施文なども見られ一様ではない。

133・134は口縁直下に横位に1帯施文し、後から縦位に密接させて施文している。133の屈曲した口縁部には施文具端部の回転圧痕が残るが連続しておらず、横位1帯を施文具の向きを直しながら施文したと考えられる。

135は細片のためはっきりしないが、口縁から斜位に施文されている。136～138は口縁直下から縦位に施文されている。139は施文具、胎土から同一個体と考えられるが、縦位施文下部に横位に施文する。ただし中央部で縦と横の重複部分が広く、縦位施文部に広く重ねて横位に施文したと思われる。140～146は胴部で、縦位またはやや斜位に施文されている。斜位のものについては、規則性の有無の判断は困難であるが、146は破片中央に1帯横位に施文し、その上下は右下がりの斜位に密接施文している。147の底部は縦位密接施文、148はやや斜位の施文である。

その他（149～151）

149は異形文と楕円文の併存である。繊維を含み、焼成は悪い。異形文は片岡分類のB1b類に近いが、縦位の凸部は互い違いの台形である点で異なる。併存する楕円はやや円形に近い大粒の楕円と

第6表　北東調査区における押型文土器の平面分布及び垂直分布状況　（●：a類　○：b1類　◎：b2類）

	16	17	18	19
A			◎	◎◎◎◎◎◎◎◎ ○○○○
B	○○○ ●●	◎◎◎◎ ○○○○○○○○○○ ○○○○ ●●	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ○○○○ ●	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ○○○○○
C	◎ ○○○○○ ●●	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎ ○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○ ○○○○○○○ ●●●●●●●●●● ●●●●●●●●●● ●●●●●●●●●● ●●●●●	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎ ○○○○○○○○○○ ○○ ●●●●●●●●●● ●●●●●	◎◎◎◎◎◎◎◎ ○○○○○○ ●●●●●●●●●
D		○		

上　層	●●●●●● ●●●●●● ●●●●●● ●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
Ⅳ　層	●●●●●● ●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○	◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ◎
	42%	28%	15%

思われる。

150は柵状文と楕円文の併存である。器壁は7㎜～8㎜で若干薄い。かつ胎土には砂粒などの混入は少ない点などから、本類に属するものかは不明である。柵状文は本遺跡では1点のみである。長さ34㎜、径5㎜程度の丸い原体に、縦に幅1㎜程度の沈線を4本刻み、回転させている。その上部にある楕円文は全容は不明であるが、不揃いの粒である。

151は綾杉文であるが、縦位の凸部がないことから、変形種である。山形文にもみえるが、左右の食い違いがある。胎土には繊維・砂粒を含み、器壁も厚い。

小結

岡前遺跡出土の押型文土器は、いわゆる沢式土器の一群と密接施文を特徴とする細久保式に併行する時期の一群に大別できる。本遺跡では後者をさらに2群に細分した。第6表は各類ごとのグリッドごとの出土状況及び垂直分布状況である。調査区全域で押型文の出土が確認できているが、南西調査

区は散漫な出土状況であり、流れ込みなどが激しいと考えられる。従って資料化したのは北東調査区出土の土器のみに限った。

ａ類はＣ17区を中心に特に南側に多く出土している。この傾向はｂ１類土器にも同様のことが言える。しかし、ｂ２類土器はＢ18区を中心に特に北東に多く出土している。地点的な差と言えるほど離れた地点ではないため多少の問題もあるが、ｂ１類とｂ２類の出土の違いは時期差を示すと考えられる。

また、垂直分布においてはａ類の土器は全体の42％がⅣ層より出土しているのに対し、ｂ１類は28％、ｂ２類は15％に過ぎない。多少の攪乱等があり、純粋な出土状況を確認できなかったのは残念ではあるが、Ⅳ層出土の遺物の相違は時期差を示していると考えられる。

以上から、岡前遺跡の押型文土器は大きくⅢ期に分類できよう。

Ⅰ期　いわゆる沢式期。沢遺跡の近くに本遺跡は存在しており、周辺の黒鉛入り土器と比較しても大きく違う点はなく、沢式土器に比定できる。しかし、黒鉛の含有量では個体差が大きいことや口縁部への施文の差も一様ではないことなど、時期幅がある可能性も否定できない。また、口縁部に連続菱目文を施文する土器の報告例はない。資料が少ないため卯の木式との併行関係まで言及するのは危険であるが、宮ノ下遺跡出土の連続菱目文土器は非黒鉛入りとは言え、飛騨地方では近似した施文具を持つ土器として留意すべきであろう。

Ⅱ期　横位密接施文を基本としているが、Ⅲ期より無文帯が残る破片も目立ち、帯状施文を意識している時期でもある。

- 器壁が薄く、胎土が密で焼成が良好な土器が多い。
- 口縁部が緩く外反し、口縁端部を明瞭に面取りする土器が多い。
- 原体は楕円が中心であるが、格子目や山形もある。
- 楕円や山形の単位が小さい傾向にあり、形が整然としている土器が多い。

Ⅲ期　Ⅱ期に後続する時期と考えられる。

- 器壁が厚く、胎土に繊維を含む。
- 楕円文が圧倒的に多く、格子目文は本遺跡では皆無である。
- 楕円文や山形文に２類（やや丸みを持つもの）が多い。
- 口縁から縦位に密接に施文する土器や口縁に１帯施文し、以下縦位に密接に施文する土器がある。かつ、縦位の施文はやや斜位なものも目立ち、不規則な全面施文の可能性もある。

ただし、基本的分類は器壁の厚さであり、施文方法など検討すると更に細分出来る可能性がある。また、本文中に記述したように、基本的に分類を再検討する必要な土器もあることを追記しておく。

２類　条痕文系土器群（第42図、図版21）

茅山系の土器群から塩屋式に併行する土器を一括して本類とした。26点図示したが、全体でも43点と少ない。以下、細分に沿って記す。

ａ類（152～170）

条痕文系の土器で茅山下層式に併行する土器及び粕畑式に併行するものを本類とした。

152は偏平に近い破片で正確な部位は不明である。細沈線によりモチーフを描く。２本の並行沈線により文様帯を区画する。区画内に刺突文を充填している。磨滅しているためやや不明であるが、沈

線に直交する角度の押し引きによる刺突文と思われる。繊維を比較的多く含む他、やや大粒の砂粒を含む。裏面に横位のナデ調整痕が認められるが条痕文は認められない。本破片は茅山下層式にやや先行する可能性もある。

153はわずかに波状を呈する口縁部である。棒状工具による凹線によりモチーフを描く。区画内には3本の並行する沈線が斜位に施文される。胎土には多くの繊維を含む他、金雲母を含むのを特徴とする。表面の色調は褐色を呈しナデによる調整を行っている。地文に縄文を施文する。

154は口縁部に近い破片で口縁下部で屈曲する。表には貼り付けにより屈曲部を作りだしている。工具による凹線でモチーフを描き、同一施文具と思われる工具による刺突が不規則に認められる。地文に縄文が認められる。胎土には繊維を多く含む。

155は波状を呈する口縁部。ヘラ状工具の先端による連続刺突文によりモチーフを描く他、口縁端部にも部分的に刻みが施される。繊維を多く含む他、砂粒の混入も多い。表裏とも貝殻による条痕調整を施すが、裏面はより深い。

156は浅い2本の並行する沈線により連弧状文を描く。細片のため全体の構成は不明である。繊維を比較的多く含む他、白色の細砂粒を含む。表面に貝殻条痕が認められるが、裏面には条痕は認めらず、ナデ調整を施す。

157は屈曲部に低い隆帯を貼り付け、隆帯状を棒状工具で押圧している。磨滅しており他の文様・調整は不明である。繊維を少し含む他、石英を多く含む。

以上153～157は茅山下層式に併行すると思われる。

158はヘラ状工具先端により3列の緩い波状を呈する連続刺突文を施す。波状文は3段目で緩く屈曲しており、口縁部文様帯以下でわずかに段を持つ器形になると思われる。器壁は8㎜でa類の中ではやや薄い。表裏ともに条痕は認められない。繊維が非常に多い。本破片は八ツ崎Ⅰ式に併行すると思われる。

159は口縁端部に指頭による交互刺突が認められる。繊維を少し含み表裏面に貝殻による条痕を施す。残存部が少なく明確ではないが、施文の特徴から本破片は上ノ山式の古い段階に併行するものと思われる。

160は指頭によると思われる刺突が2か所に見られる。繊維を多く含み条痕調整も認められるが、詳細は不明である。

161～169は貝殻による条痕文のみが認められる胴部破片である。条痕調整や繊維の混入などから他の遺物とは区別できるが全体を推定するのは困難な状況である。これらは概ね、①表裏とも条痕が認められるもの（161～163）、②表のみに条痕が認められるもの（164～166）、③裏面のみに条痕が認められるもの（167～169）、に細分もできるが、部位が不明であり時期差なのか、個体差なのか、部位差なのか詳細は不明である。170には条痕は表裏ともに認められない。金雲母を含み153と表裏の調整や繊維の混入などでも類似しているが裏面の調整に違いがある。

b類（171～175）

やや薄手の土器で、隆帯上に刻みを持つ土器を本類とした。

171～173は同一個体である。器面にやや丸い隆帯を3段（以上）波状に貼り付け、隆帯上に縄目状の圧痕が残る。絡条帯の圧痕文もしくは絡条帯条痕文の可能性がある。隆帯の貼り付けが弱く数か所

で剥落している。繊維をわずかに含む他、石英、長石粒を含む。174は低い隆帯上をヘラ状工具により刻む。ごくわずかに繊維を含む。175は低い隆帯上に刻みを施すが施文具は不明である。174は入海Ⅰ式に併行すると思われる。

c類（176）

石山式併行と思われるものを本類とした。1点確認した。波状を呈する口縁端部に刻みを施し、口縁に並行する形で2ないし3条の連続刺突文を施文する。焼成は良好であり繊維をわずかに含む。器壁は7㎜でやや厚い。

d類（177～183）

極薄手の土器で低い隆帯を持つものを本類とした。

177は口縁に幅広の隆帯を貼り付け、端部をヘラ状工具で刻む。さらに隆帯上と口縁内面に連続した指頭圧痕が認められ、つまみながら隆帯を貼り付けたものと思われる。器壁は4～5㎜で薄く焼成は良い。

178は口縁部で、端部に貝殻による刺突文を施す。口縁直下から隆帯上を貫く形で貝殻による条痕が縦位に施される。179は胎土などからみて同一個体と思われるが隆帯より上部で緩く外反する器形と思われる。器壁は4～5㎜であるが口縁部で6㎜とやや厚くなる。

180～183は横走する隆帯とその前後もしくは間に波状の隆帯を貼り付ける。181・182は櫛状工具で条痕を施す。183は表面が磨滅しているが、横走する隆帯部で緩く外反し、下部に隆帯を波状に貼り付ける。隆帯状斜位に条痕が僅かに認められる。

本類の多くは塩屋式に併行すると思われる。

e類（184～186）

薄手の無文土器を本類とした。184は胴部で指頭圧痕が残り、繊維が僅かに含まれる。焼成は良好である。185・186は口縁部で緩く外反する。口唇部に「ハ」の字状に刻みを施す。焼成は普通である。

3類　縄文、撚糸文土器群（第41図187～194、図版21）

本類に属すると思われる縄文や撚糸文施文の土器を一括して本類とした。出土状況では共伴する土器は明確ではないため、時期幅がかなりある可能性がある。ただし、胎土や焼成から本遺跡出土の他の時期の縄文土器とは区別できる。

a類（187）

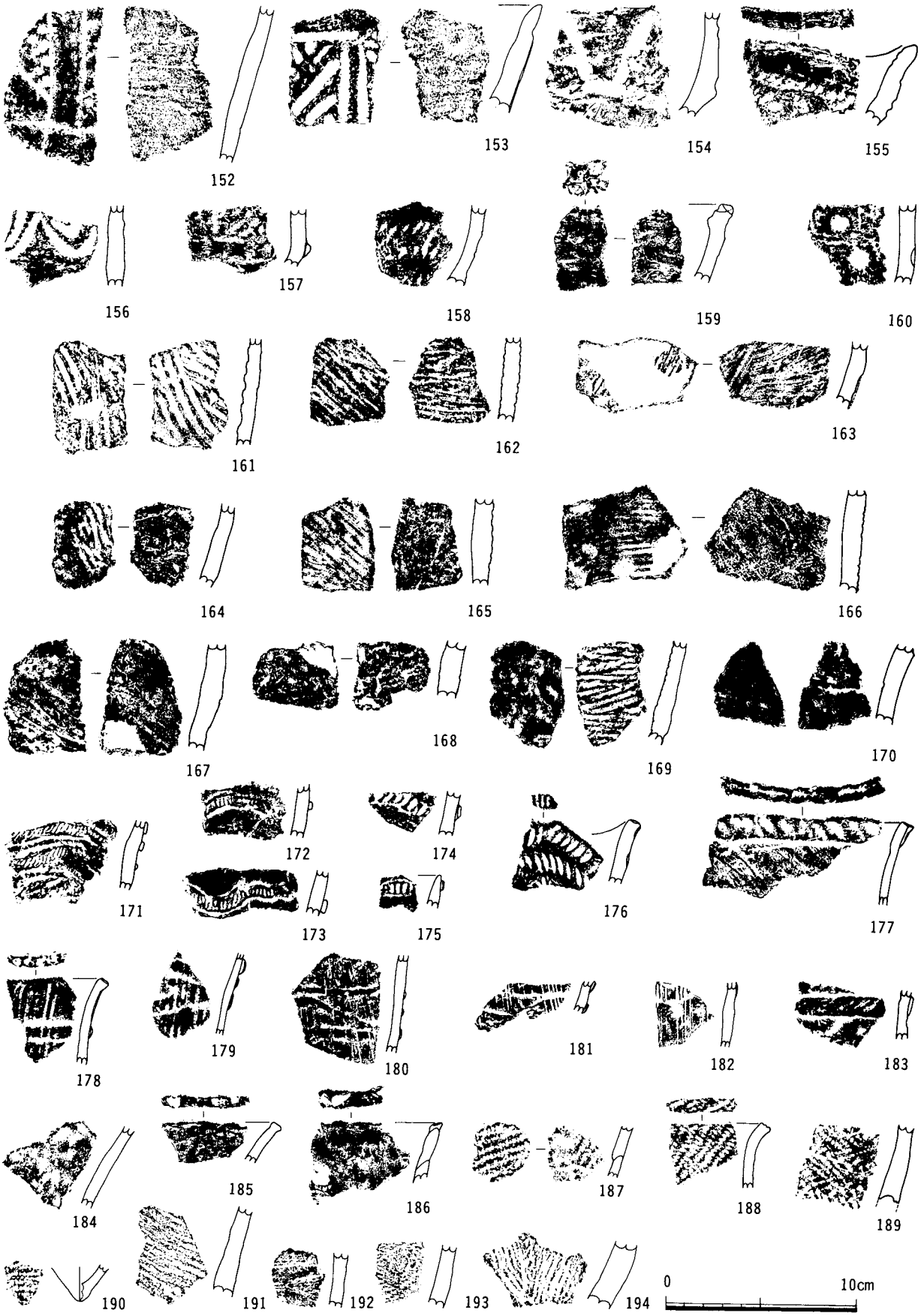
表裏縄文を本類とした。C17区Ⅳ層より1点出土した。表にＬＲの縄文を横位に施文し、裏には縦位にＬＲの縄文施文が見られる。細片のため部位等は明確ではない。焼成はやや不良で白濁砂粒を含む。本破片は表裏縄文土器の最末段階に属すると思わる。

b類（192・193）

撚糸文土器を本類とした。192は細かい撚糸文を横走させ、横位に無文帯が残る。繊維を僅かに含み、焼成は良好である。

193は細かい撚糸文の施文が認められるが、表面の磨滅が著しい。器壁は8㎜前後で焼成も192より不良である。192とは異なる時期の土器と思われ、本群に属さない可能性も否定できない。

c類（188～191・194）



第42図　包含層出土の縄文土器（4）

縄文施文土器を本類とした。188は口縁部で、口縁で強く屈曲する。口縁端部に縄文を施文する。赤褐色を呈し、白色砂粒を含む。焼成は良好である。

190は底部で尖底部になると思われ、尖底部まで縄文を施文する。白色を呈し、比較的薄手の小型の土器になると思われる。

189・191・194は繊維を多く含む比較的厚手の土器である。189は施文の方向を変えることにより羽状を呈する。194は無節の縄文を施文する。

1）本遺跡の押型文土器の細分に関しては、矢野健一氏よりご教示頂いたものをもとにした。

Ⅱ群　中期の土器（第43～70図、図版22～37）

調査区全域から出土している。前葉から後葉まで各時期のものがあるが、主体は後半のものである。また、中期末に位置付けられるものは後期との関連で、Ⅲ群に含めている。

1類　前葉の土器（第43図、図版22）

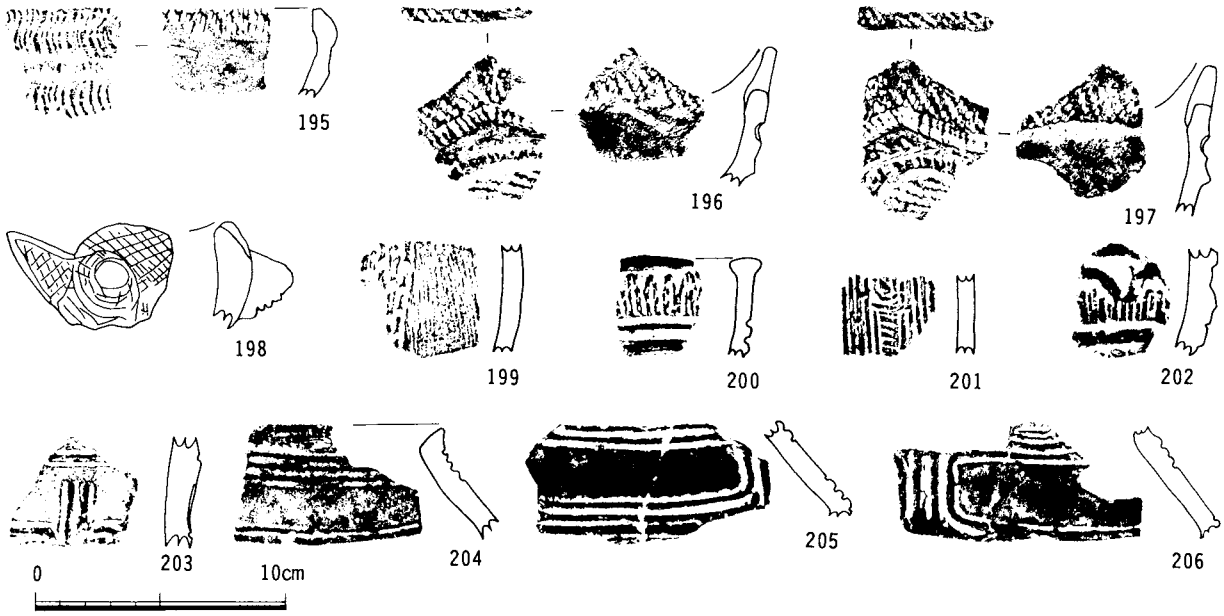
次の2類に分類する。

a類（195～197）

東海あるいは西日本系の前葉の土器である。195は幅広の連続爪形文が施され、口縁内面にも爪形文が施されている。船元Ⅰ式と思われる。196・197は同一個体である。波状口縁で、山形の波頂部をもつ口縁の内外面に縄文を施し、その下に窪みがあり、連続爪形文がある。口唇部にも縄文がある。

b類（198～206）

北陸系の前葉の土器である。198は新保式で、口縁部に突起がある。沈線で格子目文がある。199には撚糸文、200・202には蓮華文的な文様がある。201は縦横に細い半隆起線文が施されている。203は半隆起線文の間に無文帯がある。204～206は同一個体で、くの字状に内屈する器形の平口縁の浅鉢である。



第43図　包含層出土の縄文土器（5）

2類　北陸系の中葉の土器（第44～50図、図版22～26）

北陸の中葉の土器は、上山田・天神山様式として把握されており、型式としては上山田式、古府式の名が一般的に使用されている。ここでは、北陸系の土器の要素が比較的強いと思われるものをまとめた。北陸系の典型的なものは少なく、むしろ在地化したものが多い。ａ～ｃ類の３類に分類する。

ａ類（207～276）

上山田式段階のものである。次の２類に分類する。

ａ１類（207～235）　半隆起線文による渦巻き文や隆帯上の連続刺突文等が見られるものである。

直立または複合口縁の平口縁で、隆帯に連続刺突が施される。207は複合口縁で半隆起線が横走し、爪形文が施される。頸部から基隆帯が降りて来て渦を巻く。208・209・213も複合口縁状の屈曲した口縁である。隆帯上に連続刺突文がある。

214～216は波状口縁を呈する。214の波頂部は２山になっており、波頂部に対応して隆帯が渦を巻き、細かい連続の刻みが入る。215は緩い波状を呈する。216は渦の間に孔が開いている。

217～231は隆帯が曲線的に展開し渦を巻き、連続の刺突文がついている。217は基隆帯の先に眼鏡状の突起があり、半截竹管文の間に三角形の抉りがある。

232～235は刻みはないが同型式に対比できるものである。232は縦に半隆起線で区切られその間は縄文である。233・234は同一個体で、渦巻き文とともに、半隆起線に沿って刺突がある。

ａ２類（236～276）　典型的な上山田式とは異なるが、連続刺突文を施すものである。

236～238は爪形文的な連続刺突を施す。直立した口縁で横方向に施文する。239～242は胴部で、横および縦方向に施文されている。

243～261は連続的な細目の刺突を施すもので、上山田式とは明らかに異なるものである。243～253は口縁部で、直立するもの（243・244）、内湾気味に立ち上がるもの（245～251）、外反するもの（252・253）がある。254～261は胴部で、257は突き出た隆帯が渦巻き状に施され、その間を半隆起線でつなぎ、連続の刻み状の刺突文がある。

262～276はその他の形状の刺突を加えるものである。

ｂ類（277～342）

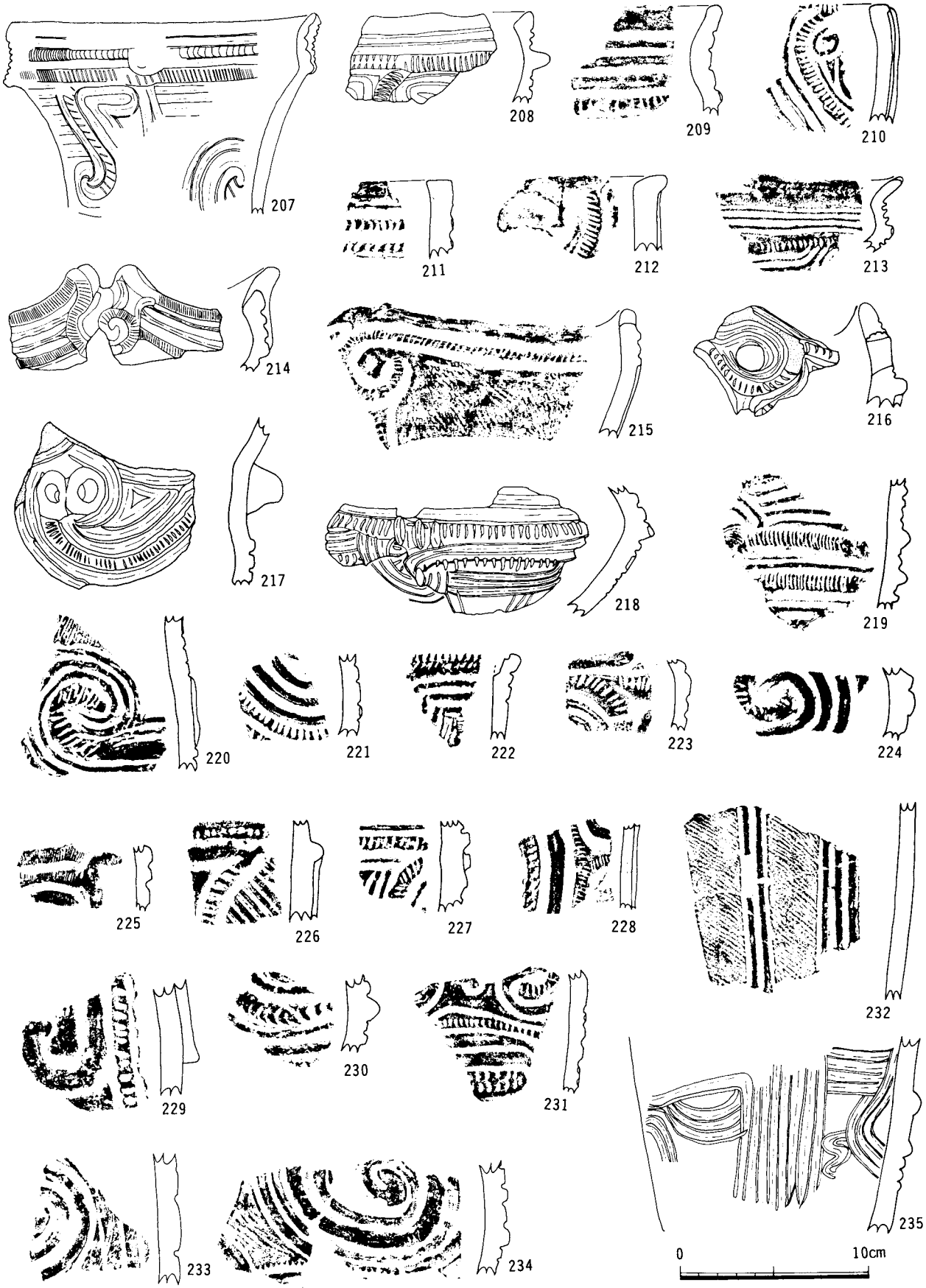
古府式段階のものである。櫛状工具による施文を多用するもので、在地性の強いものも含んでいる。次の３類に分類する。

ｂ１類（277～301）　隆帯上に櫛状工具による連続刺突文が見られる。

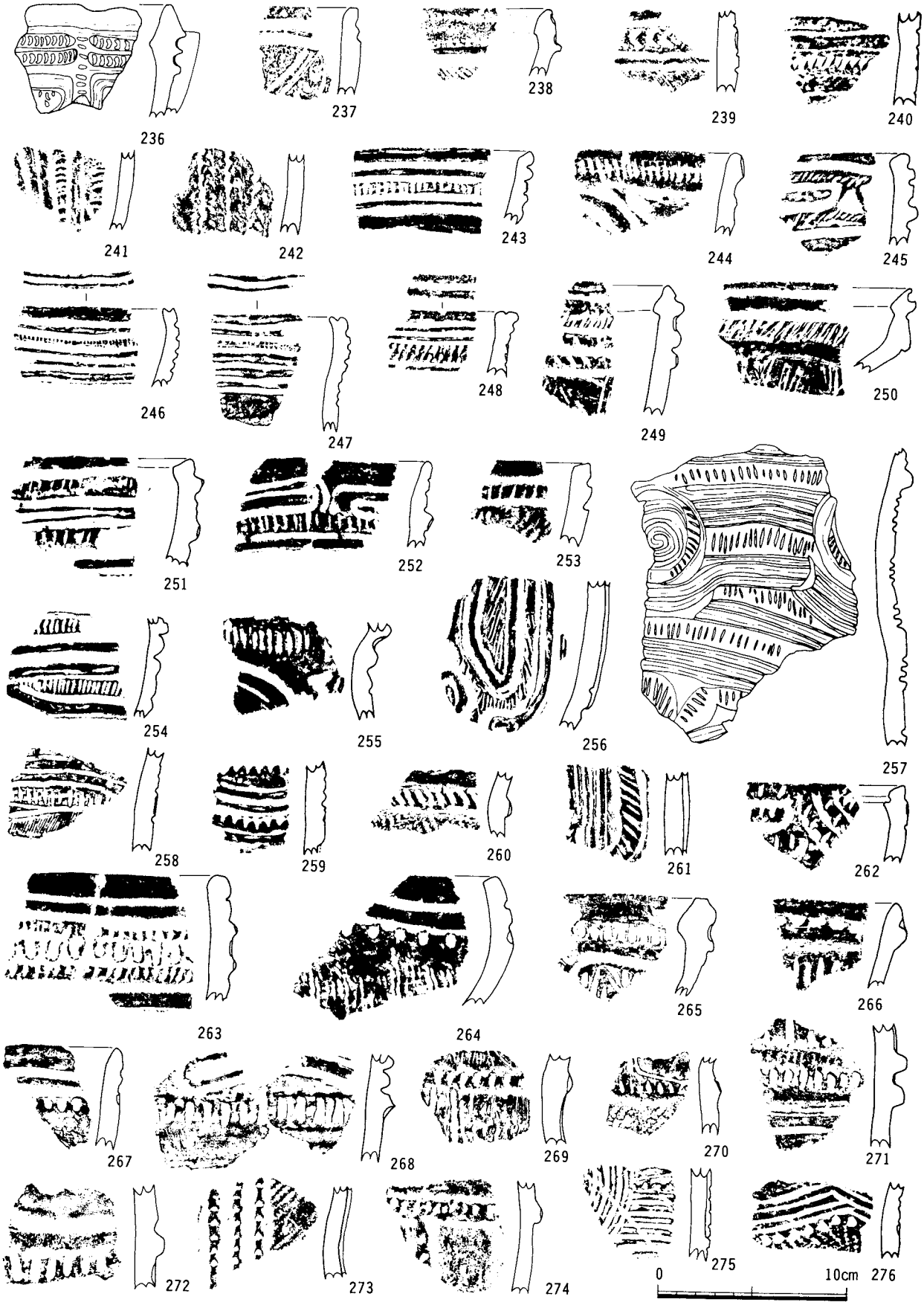
277は、胴部は直線的に立ち上がり頸部から開く器形で、上から見るとW字状の大波頂部とその間に小波頂部がそれぞれ４単位ずつある波状口縁の土器である。口縁部は低い隆帯が曲線的に連なり、頸部にはリボン状突帯が巡り、胴部は半隆起線が２本ないし３本単位でまわり、その間はやはり櫛状工具による刺突文がある。278は平面楕円を呈する台付き土器であろう。波状口縁で、低い隆帯と沈線が縦横に展開し、櫛状工具の刺突文が多用されている。279～282はゆるい波状を呈する。281は６単位の波状口縁である。282は口縁端部に刺突が見られる。

283～293は平口縁で、直線的に立ち上がる。292は外反する。隆帯が直線的に展開し、渦を巻き、櫛状工具による刺突が加えられる。294～301は同様の土器の胴部である。

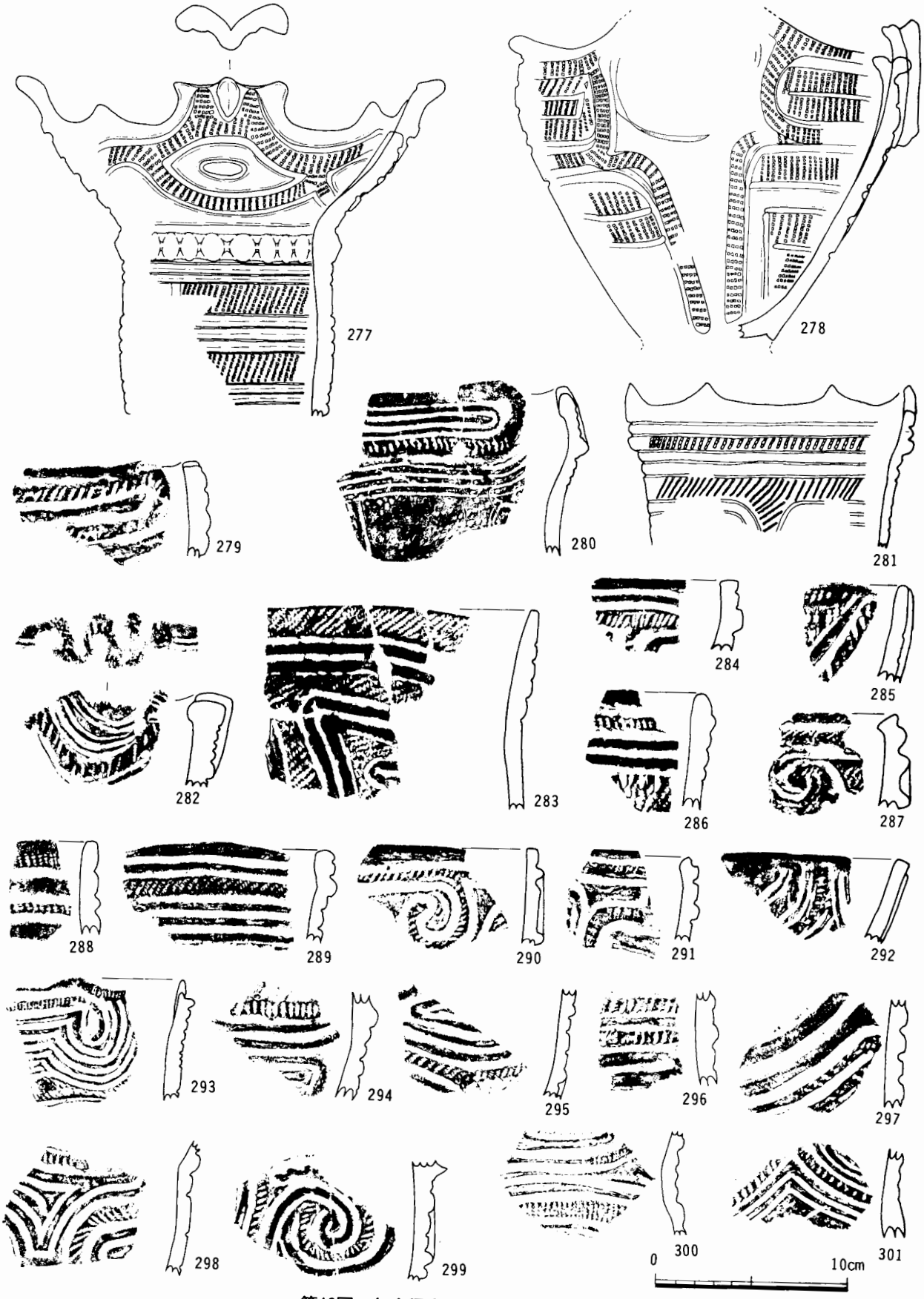
ｂ２類（302～321）　隆帯上ではない部位に櫛状工具の刺突が見られる。



第44図　包含層出土の縄文土器（6）



第45図　包含層出土の縄文土器（7）



第46図　包含層出土の縄文土器（8）

302は、直線的に開く器形で、4単位の小波頂をもつ波状口縁で、波頂部の下に半隆起線の円文がある。そこから横方向に半隆起線がのび、胴部では、方形の区画を形成する。半隆起線間は櫛状工具による連続刺突で満たされている。303～305はやや内湾する器形で、口縁部は無文帯で2本の半隆起線が横走する。303・305の刺突は四角くて粗いものである。306・307は直立する平口縁である。306は口縁部に連続刺突文が施されている。307は沈線によって区画化された文様の中に刺突文が見られる。より新しい段階のものかもしれない。308～313・315～318は胴部の破片であり。319は底部であるが同様の文様が施されている。314は、胴部が丸く張って頸部がすぼまり直立する平口縁をもつ。最大径が胴部中央にあり深鉢形というよりやや壺形を呈する。口縁部は縄文で、頸部に半隆起線が2条あり、胴部中央にも半隆起線が2条ある。胴上半部には、偏平な半隆起線が曲線的に横方向に蛇行し、その間に櫛状工具による刺突が施されるが、刺突は四角くて粗いものである。一部縄文がつけられている所もある。胴下半部は縄文である。

320・321は山形の波状口縁で、口唇部に沈線が施してある。口縁にそって沈線が引かれ、その間に刺突文が見られる。

ｂ3類（322～342）　その他の形状の刺突を加えたものである。

口縁部は、内湾気味に立ち上がるもの（322～329）、開き気味に立ち上がるもの（330～332）、直立するもの（333～335）がある。刺突文は、328・331・332・334・338のように非常に目の細かいものや、323・327・329・330のように粒が少なく粗いものもある。

323・327は隆帯が口縁部に沿って横走し、斜めに降りる。地文は櫛状工具による条線文であるが曲線的な施文もある。330は隆帯が斜めに降りて来て渦を巻く。隆帯上には、粗い刺突文が加えられる。331は平行する隆帯と沈線で口縁部文様帯を形成し、胴部はＲＬの縄文である。332は口縁部に無文帯があり、頸部に刺突を伴う隆帯があり、胴部はＬＲの縄文である。

341・342は器厚が約5㎜と薄手で異質な感じの土器である。

ｃ類（343～397）

半截竹管による半隆起線文を主体とする土器である。施文の特徴から次の3類に分類する。

ｃ1類（343～360）　半隆起線文が直線的あるいは曲線的に展開する。

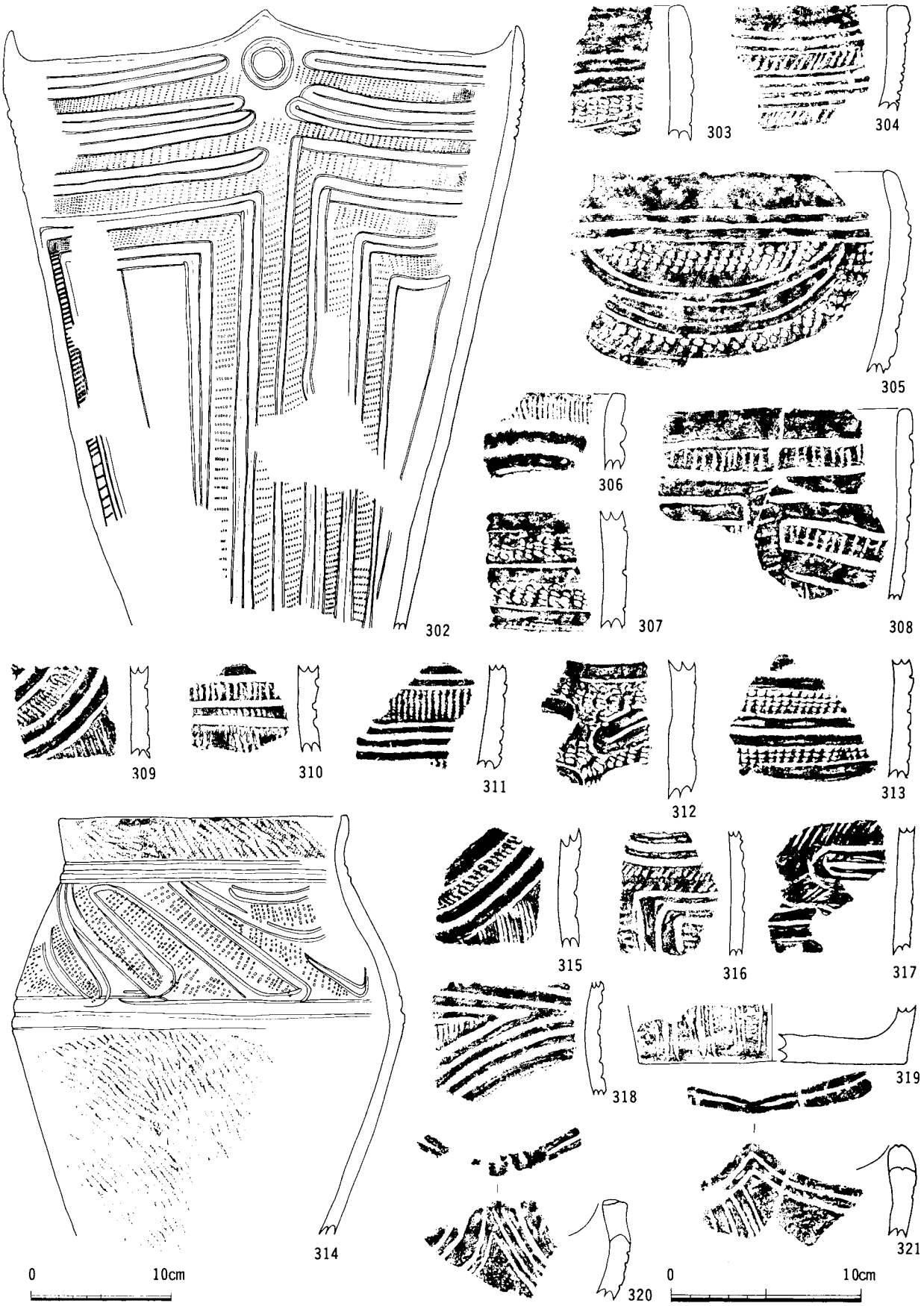
平口縁で開きながら立ち上がる。直立するもの（347）もある。口縁部は無文で、半隆起線が横走し折り返している。胴部は、直線的あるいは曲線的に文様が展開する。地文が縄文のものもある。

ｃ2類（361～375）　半隆起線文とともに半截竹管を押しつけた連続文様がある。

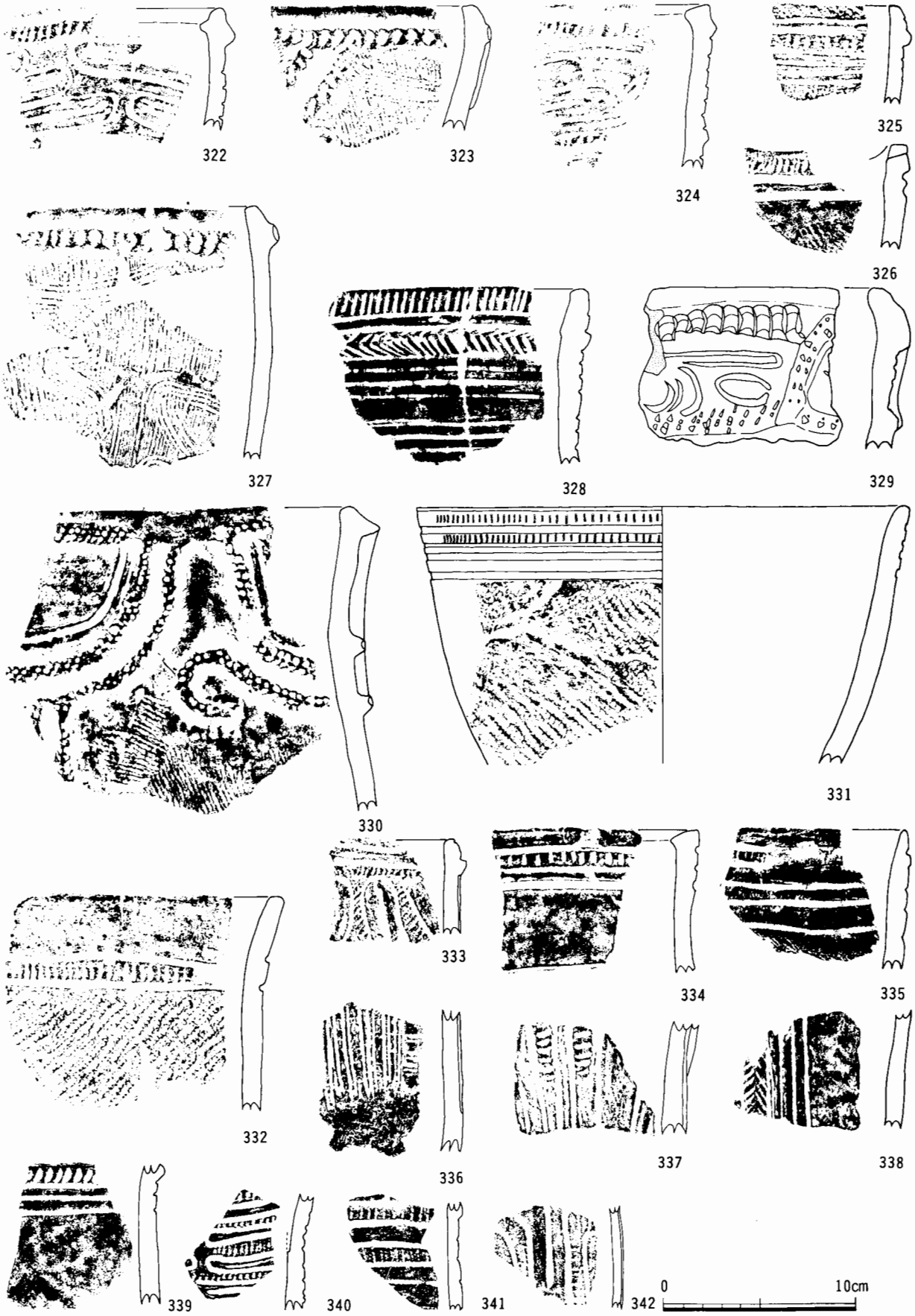
平口縁でほぼまっすぐに立ち上がるが、波状口縁のもの（374）もある。半隆起線を1・2条横走させ、その下に連続の押圧文が施されているものと、半隆起線がなくて押圧文が施されているものがある。口縁部文様帯の下は撚糸文のもの、縄文のもの、条線文のもの、無文のものがある。

ｃ3類（376～397）　半隆起線が偏平化して沈線化したものである。

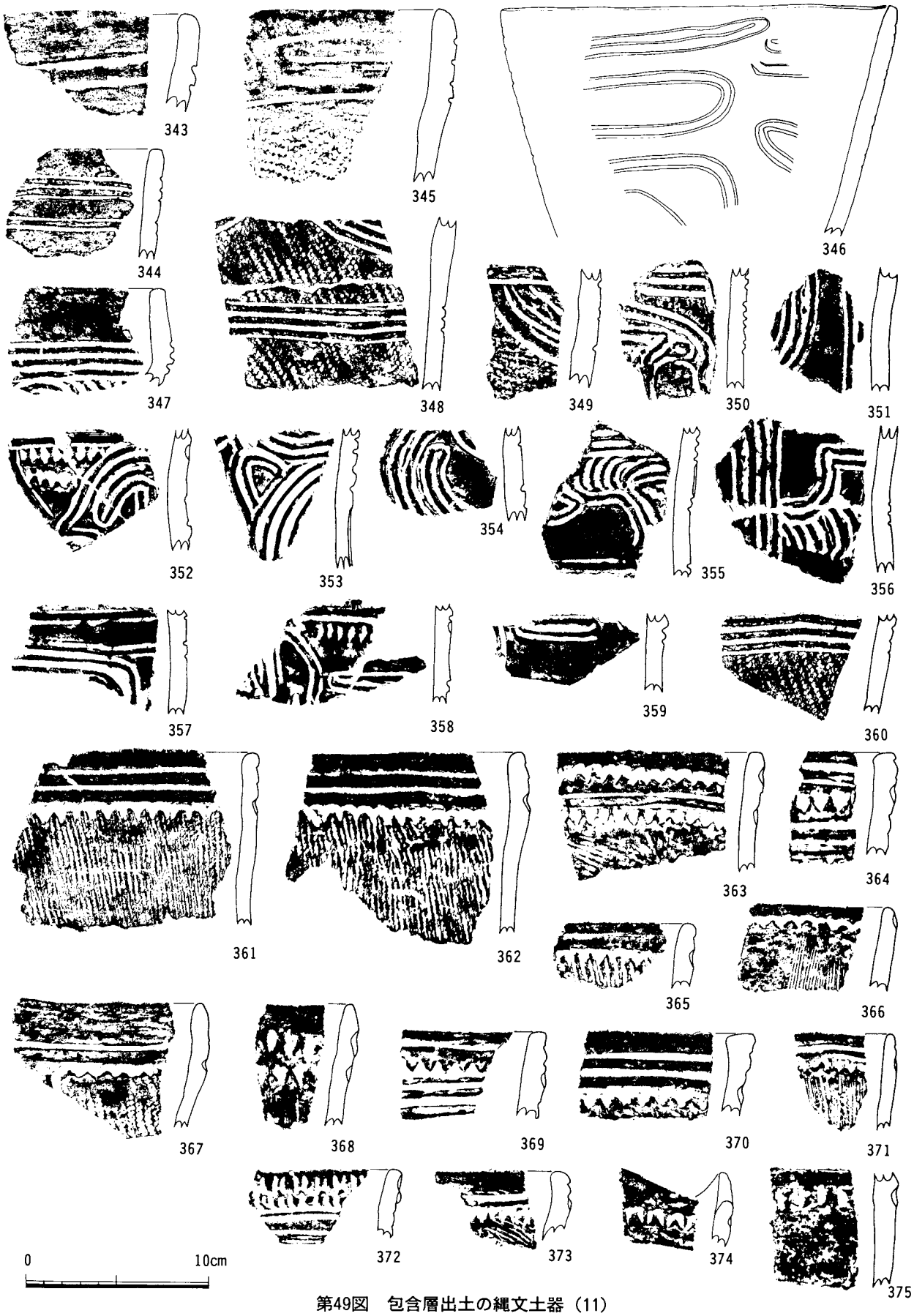
ほぼ直線的に立ち上がる口縁であるが、内湾するもの（392）、波状口縁のもの（387・396）もある。沈線は横方向が多く、曲線的に展開するものもある。地文は、撚糸文、縄文、条線文のものがある。381～383は、口縁端部が平坦で、口縁部に縦位の短沈線が施され、沈線が3本横走する。無文帯を挟んで、再び沈線が横走する。389は、交互刺突状の波状文がある。397は胴部の最大径が約50㎝の大型のもので、偏平化した半隆起線が屈曲して横方向に展開する。



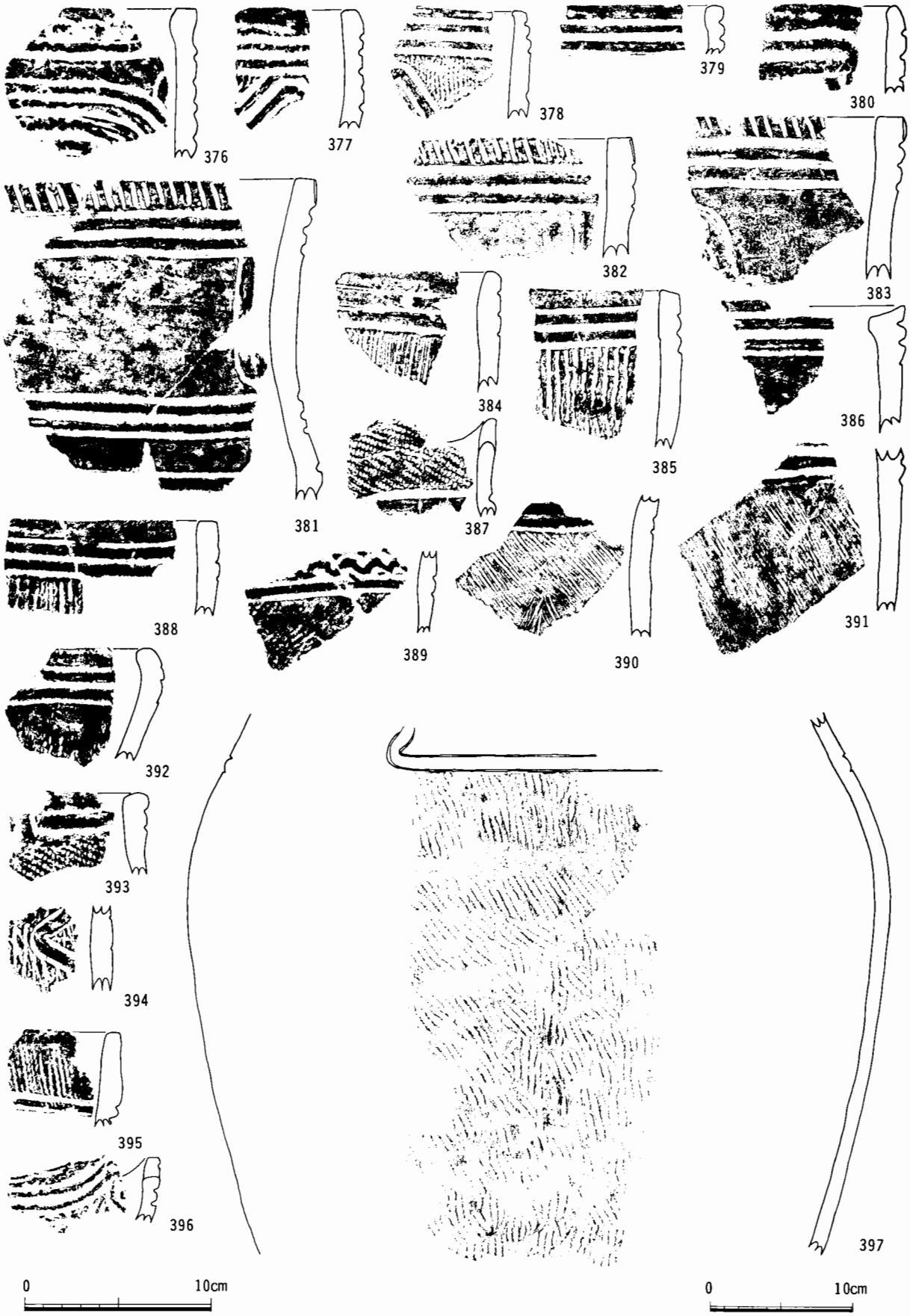
第47図　包含層出土の縄文土器（9）



第48図　包含層出土の縄文土器（10）



第49図　包含層出土の縄文土器（11）



第50図　包含層出土の縄文土器（12）

3類　信州系の中期後半の土器（第51～57図、図版27～30）

信州的な要素をもつ中期後半の土器である。いわゆる唐草文系の土器が多く見られる。在地的な要素の強いものも含まれている。概ね長野編年の中期後半Ⅰ期からⅡ期にかけてのものである。時期的に見てａ・ｂ類の２類に分類する。

ａ類（398～468）

長野編年の後半Ⅰ期に相当すると考えられるものである。施文・器形等から次の４類に分類する。

ａ１類（398～413）　櫛形文をもち井戸尻Ⅲ式から曽利Ⅰ式の段階のものである。

398～400は、４単位の波状口縁で、隆帯による曲線的な区画がなされ櫛形文があり、貼り付け隆帯が曲線的に展開する。402～407は同様の文様を施す胴部である。401は重弧文を有する平口縁の土器であるが、同様の要素をもっている。これらは、吉城郡河合村下田遺跡の第Ⅴ群３・４類（河合村1987）に相当するが、飛騨地方にその系譜をたどる考えがある[1]。408～413は櫛形文が見られる。

ａ２類（414～416）　頸部がやや膨らむ器形のものである。

414は口縁内面に段を有する。口縁直下に隆帯をもち、頸部に縦の沈線が並ぶ。415は渦巻き状の突起をもつ。416は、開いた口縁で、内面にかえりを有し、頸部には隆帯が蛇行して、裾の部分に細い沈線が入る。胴部には、２本１組のねじり棒状の隆帯が４組つき、細い隆帯が曲線的に展開する。縦の沈線が続き横の短沈線の区画もある。

ａ３類（417～449）　隆帯に沿って押し引き文が見られるものである。

417は突起部で、２本の隆帯がそれぞれ渦を巻いている。口縁は平口縁のものと波状口縁のものがある。櫛形文と組み合わせたものもある。448は眼鏡状の突帯がつき、やや古い様相を呈する。

ａ４類（450～468）　隆帯のつき方から見て同様の時期に比定できるものである。

454は、信州でもよく見られる細い貼り付け隆帯による突起部である。460の沈線の中で隆帯が曲がっているものも同様である。

450は、まっすぐ立ち上がる平口縁で、隆帯が弧状に連なり、下方でもさらに連なっている。区画内は、条線文が埋めている。

465・466は、沈線間に列点があり特徴的である。466～468は同一個体で、曲線的な区画の中を沈線が埋めている。在地的な特徴であろう。

ｂ類（469～564）

長野編年の後半Ⅱ期に相当すると考えられるものである。施文・器形等から次の５類に分類する。

ｂ１類（469～472）　交互刺突文の見られるもの。

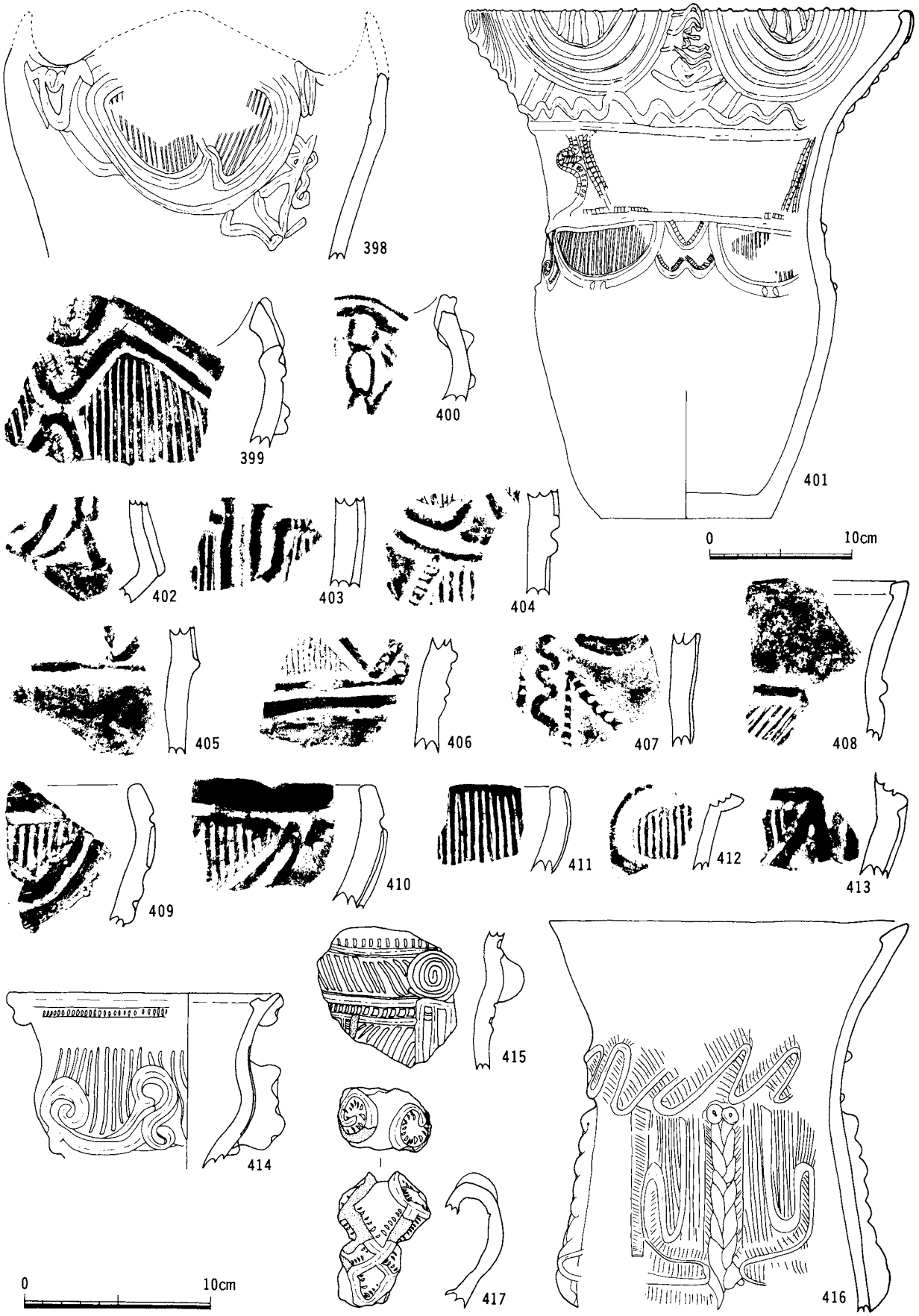
平口縁で口縁内面に段を有する。469は、渦巻き文とその下にねじり棒状の隆帯がつく。472は、口縁部は無文で、対向する渦巻き文があり、その下に蛇行隆帯があり、斜位の沈線が施されている。

ｂ２類（473～483）　腕骨文あるいは、腕骨文的な文様をもつもの。

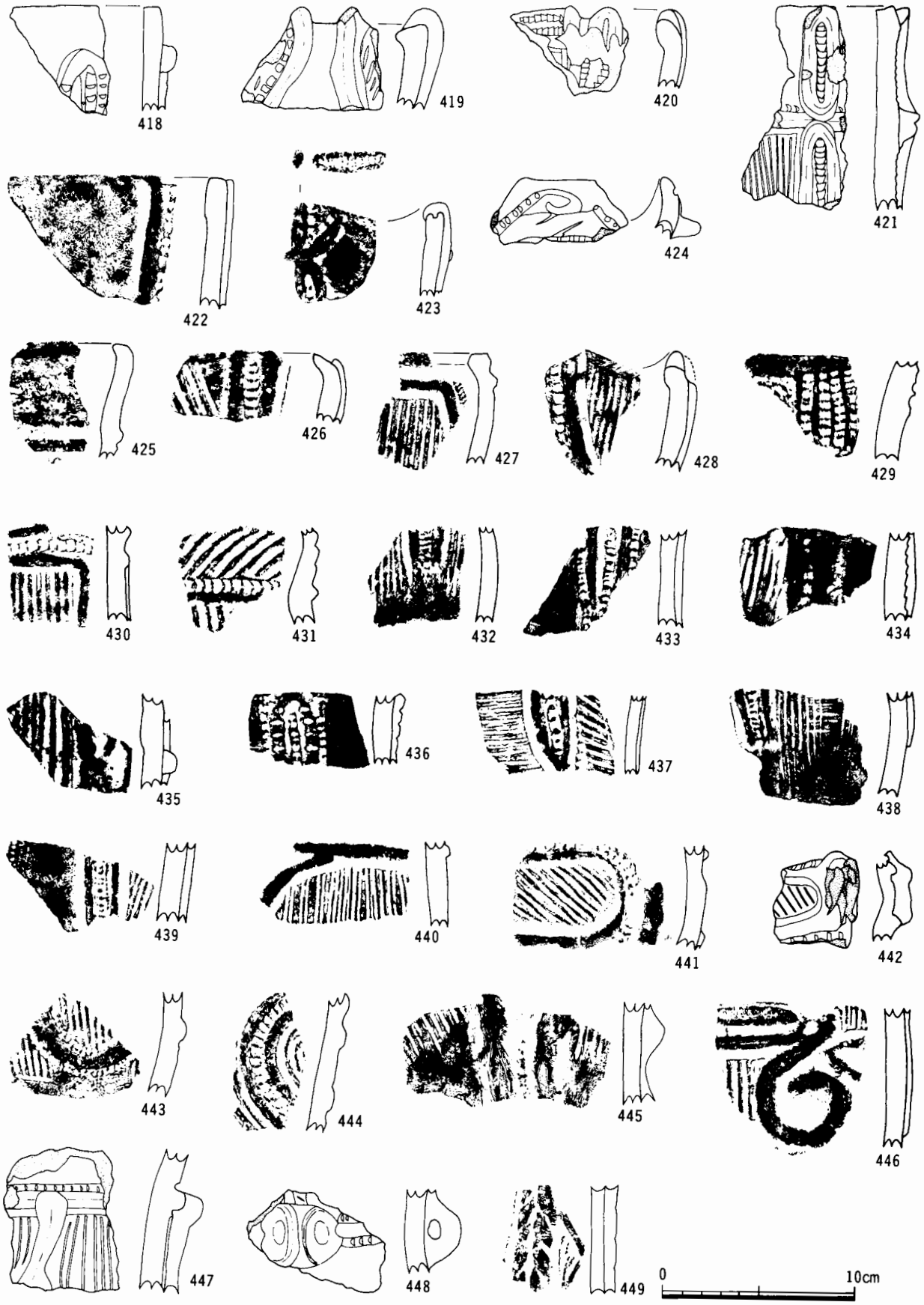
２・３本１組の隆帯が縦に降りて来て、区画されたり渦を巻いている。そのまわりは斜位の沈線で埋めている。唐草文系の土器に見られる特徴である。

ｂ３類（484～487）　いわゆる剣先文をもつもの。

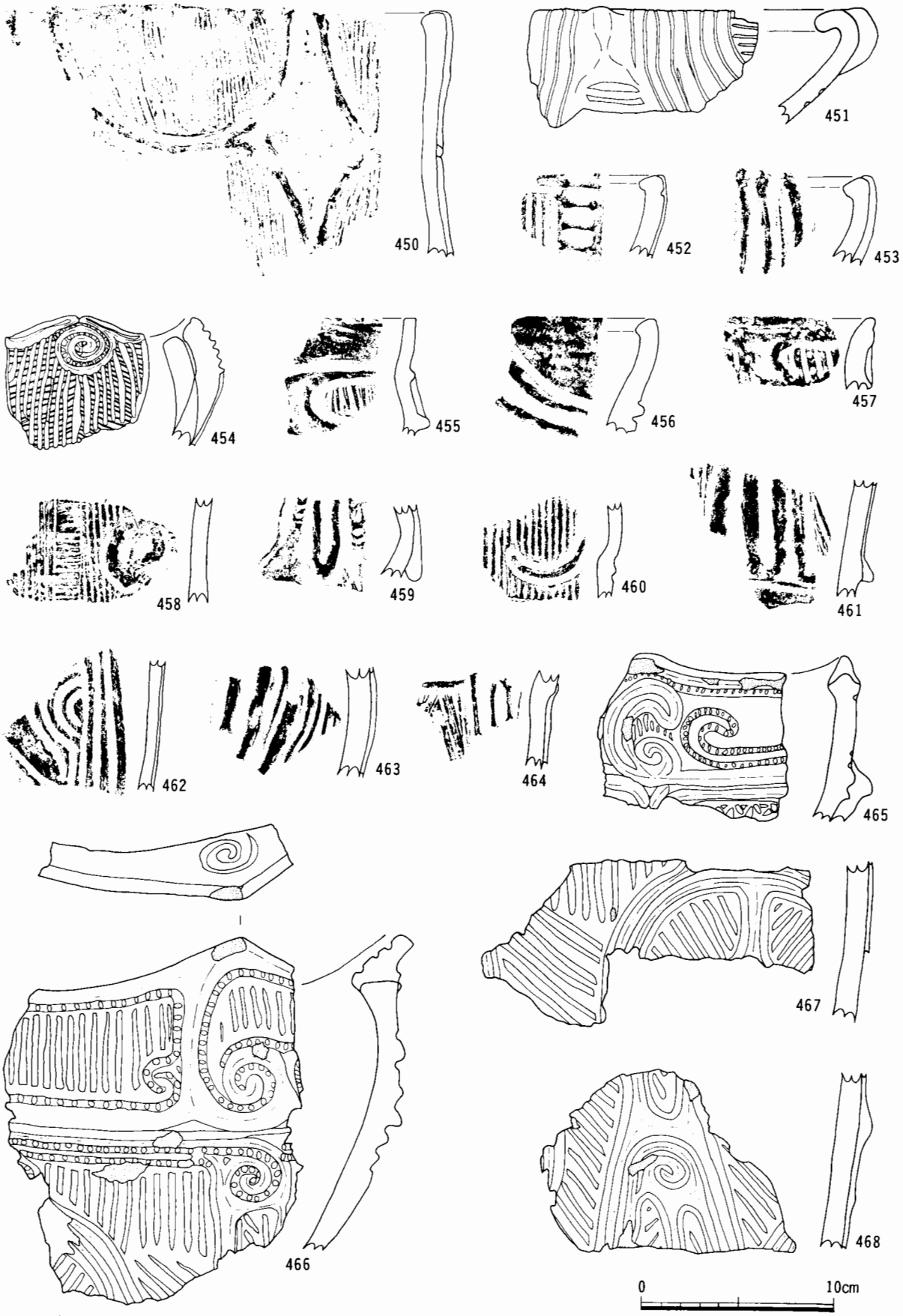
ｂ２類と同様に唐草文系土器に見られる文様である。484・486は沈線によるもので、縦方向の条線が施されている。485・487は隆帯によるもので、斜位の沈線が施してある。486は、胴部が丸く張っ



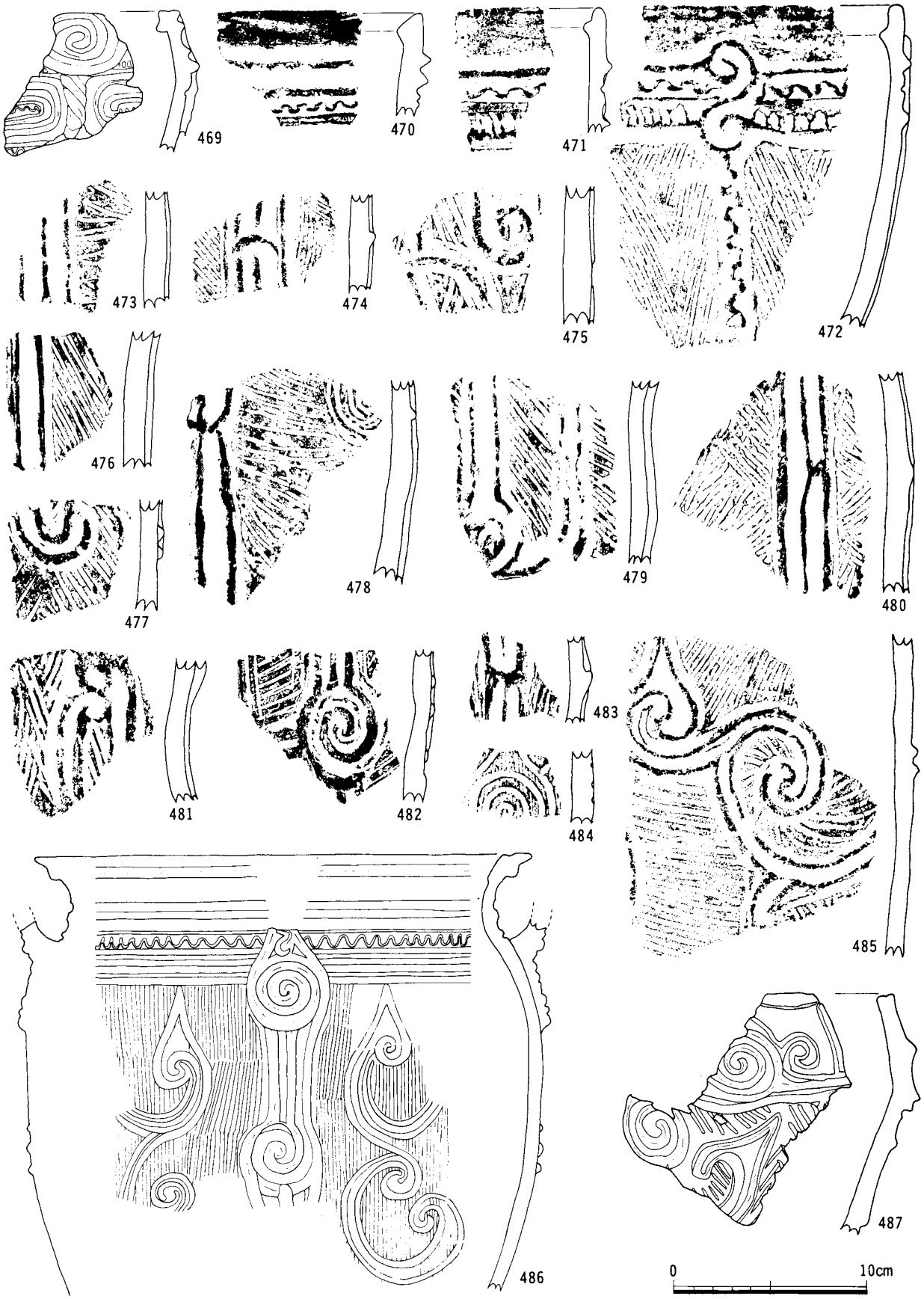
第51図　包含層出土の縄文土器（13）



第52図　包含層出土の縄文土器（14）



第53図　包含層出土の縄文土器（15）



第54図　包含層出土の縄文土器（16）

ており、頸部が括れ、開いた平口縁の土器である。頸部の下に交互刺突文があり、貼り付け隆帯が渦を巻いて、橋状把手がつくようである。黒色を呈し雲母を多く含む。

ｂ４類（488～517）　曲線的な隆帯とその間を沈線で埋めるもの。

隆帯が曲線的に展開し、そのまわりに沈線が施される。唐草文系の土器と思われる。ただし、ヘラ状工具による沈線が方向が揃わずに施文されているものもあり、やや異質なものも含んでいる。

517は、口縁は不明であるが、頸部は括れて縦位の沈線文が施され、胴部は、隆帯が渦を巻き、そのまわりに沈線が施されている。

ｂ５類（518～564）　その他突起部や文様等から同時期に比定できるもの。

521～523の渦巻き文のある突起は、唐草文系土器に特徴的に見られるものである。526は、把手とともに斜位の沈線が施され、伊那地方に見られるタイプの土器である。529は内湾して立ち上がる平口縁の土器でねじり棒状の把手がつく。531～533は、内湾気味の口縁で、弧状の隆帯が渦を巻き、その上下は沈線が埋めている。

550は伊那地方で見られる沈線の入り組み文を有する土器である。

552～563は、地文が縄文で、口縁部は隆帯による区画があり、区画内は縦位の沈線が施される。ねじり棒状の突起のつくもの（554）や、渦巻き文のつくもの（553・562）、円弧状の文様と直線的に下へ降りて来る文様の組み合わせのもの（555～558）などがある。

564は脚台で、交互刺突文状の細い隆帯があり、その下には列点文がつづく。系譜の不明な土器である。

４類　東海系の中期後半の土器（第58図、図版31）

強く内湾するキャリパー形の器形で、沈線または隆帯で渦巻き文を中心に区画され、列点文、連弧文などがつく。胴部は沈線による連弧文が施される。撚糸文が地文となっている。いわゆる中富式に類縁性がある。里木Ⅱ式など西日本系の土器との関連が問題となる。

572は、口縁部が屈曲し細い貼り付け隆帯によって渦巻き文が施され、頸部に２条の列点文がつく。584は、内湾度がゆるく撚糸文も粗く、やや様相が異なる。

５類　貝殻による連続刺突文を施す土器（第59図586～589、図版31）

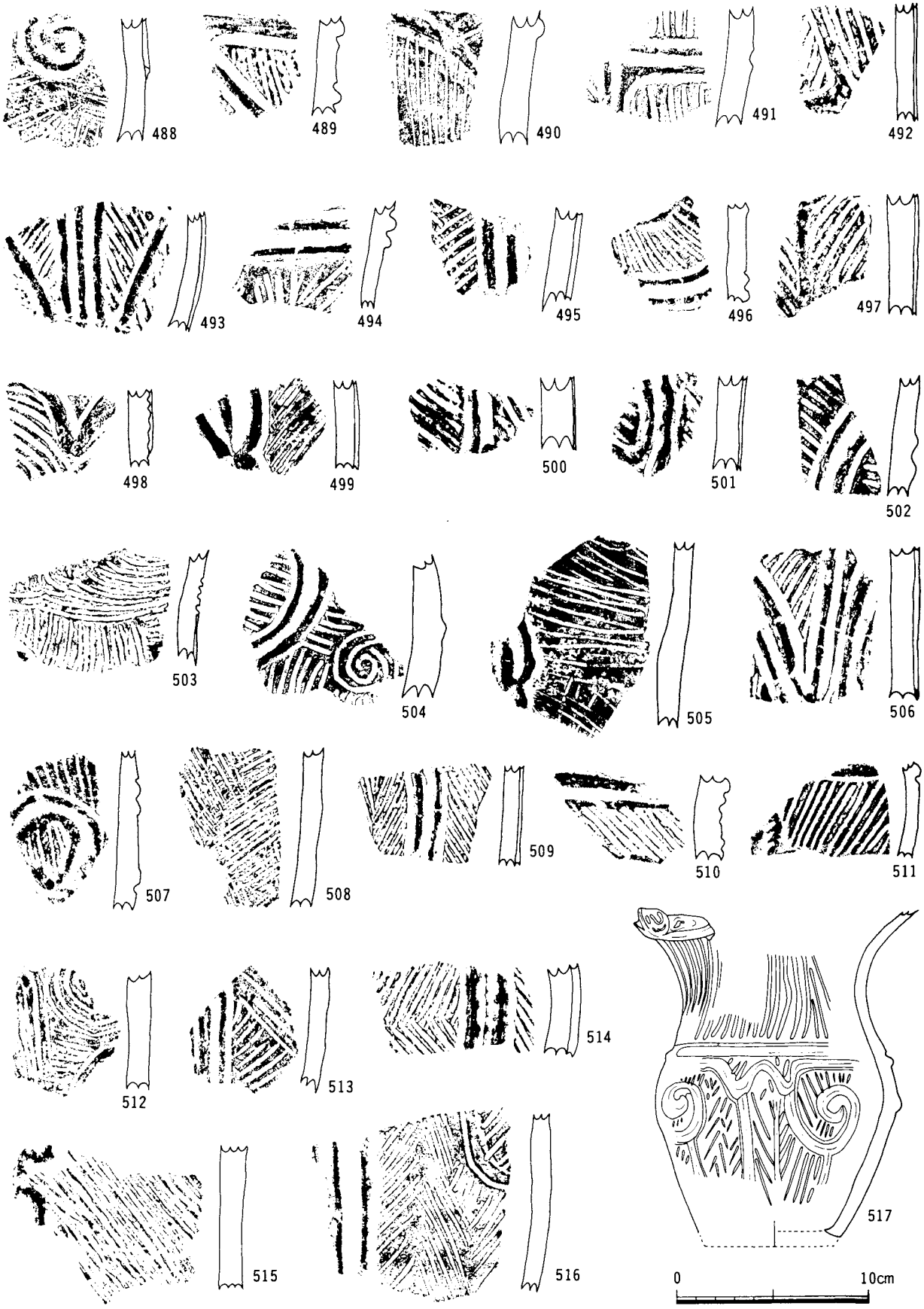
開き気味の平口縁で、口縁内面に幅広の沈線が横走する。口縁部および頸部に貝殻による連続刺突文が施される。いわゆる串田新式に比定される。

６類　リボン状突帯を有する土器（第59図590～599、図版31）

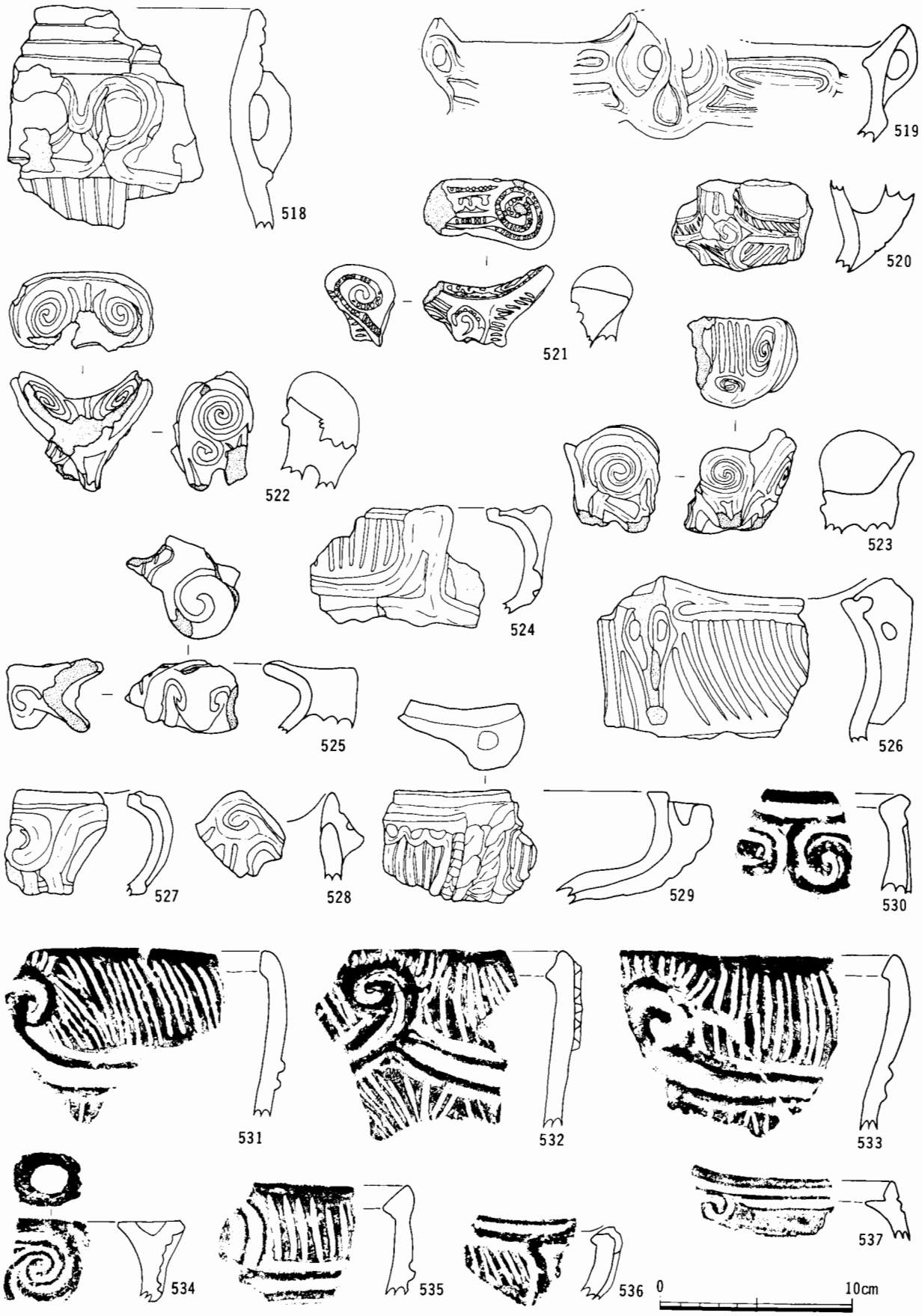
指で連続的に押しつぶしたような隆帯をリボン状突帯と呼んでいる。飛騨地方の中期後半の土器に多く見られる要素である。押圧部の長さが、590～592のように短いものと、593～599のように長いものがある。

７類　隆帯を有する土器（第59図600～627、図版32）

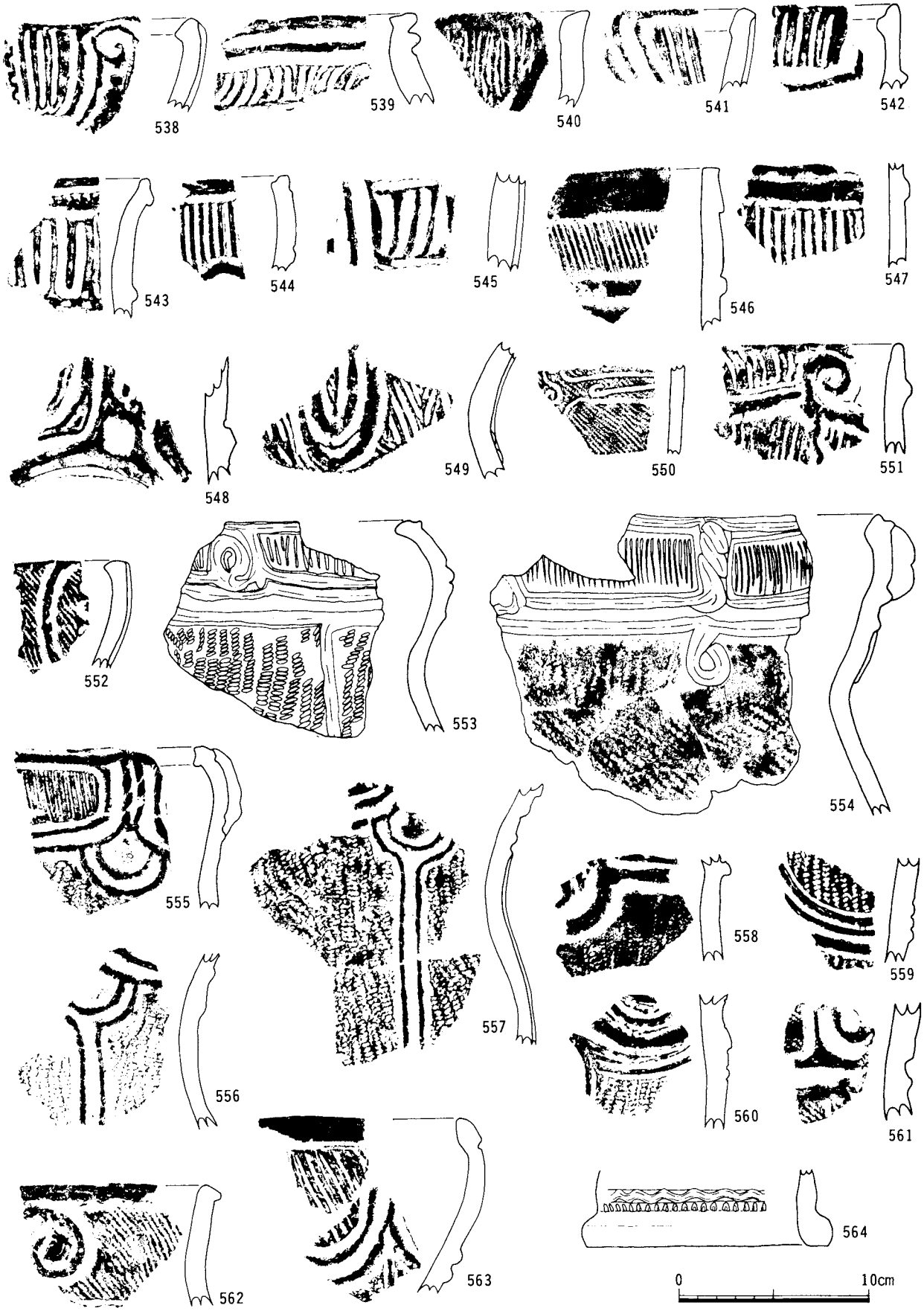
１～６類に比定できない土器で隆帯のある土器である。次の２類に分類する。



第55図　包含層出土の縄文土器（17）



第56図　包含層出土の縄文土器（18）



第57図　包含層出土の縄文土器（19）

第58図　包含層出土の縄文土器（20）

a類（600～606）

地文が縄文のものである。601は開き気味の平口縁で、隆帯が横方向に施され、一部上方に湾曲している。602は、内湾気味の平口縁で、隆帯が横走する。603～606は胴部で、隆帯が縦方向に施されている。

b類（607～627）

隆帯と沈線を組み合わせたものである。隆帯上の刻みの有無により2類に分類する。

b1類（607～608）　隆帯上に刻みが入るものである。

608は、小波状口縁で、口縁部の文様は小さい渦を巻き、口縁から胴部にかけて隆帯が直交して区画され、その間を沈線が埋めている。施文方法は信州的であるが、信州にはない文様の特徴を示す。

b2類（609～627）　隆帯上に刻みがないものである。

609～620のようにヘラ状工具による細い沈線のものと、621～627のように棒状工具による広い沈線のものがある。縦に降りて来る隆帯に対して平行に沈線がつくものと、隆帯に対して斜位に沈線がつくものがあり、「ハ」の字状に施されているものもある。

609は波状口縁で、波頂部は2か所切り込みがあり、3山になっている。隆帯は渦を巻き2本が下へ降りている。そのまわりには、ヘラ状工具による沈線が斜位に施されている。619は3本1組の隆帯が垂下し、沈線は縦方向および斜め方向に施されている。620は、平口縁で内面に段を有する。2本1組の隆帯が口縁に沿って弧状に連なり、その区画内には縦方向に細い沈線が施されている。連弧文をつなぐ隆帯があり、さらに細い隆帯が垂下する。胴部は、数本単位の細い沈線が「ハ」の字状に施される。

8類　沈線文を施す土器（第61・62図、図版33）

7類と同様に各類に比定できない沈線文が施されている土器である。次の4類に分類する。

a類（628～639）

沈線文のみのものである。縦方向あるいは横方向に直線的に施文されるものと、曲線的に施文されるものがある。628は1か所山形の突起がある。沈線が口縁から胴部にかけて曲線的に描かれている。630は口縁端部に刺突がある。口縁部に沿って1本沈線が横走し、その下には、2本の沈線が上向きの弧状に施されている。603は少し肥厚した口縁がやや外反気味に直立する。口縁部は無文で横方向に1本の沈線が区切り、下は縦方向に沈線が施されている。

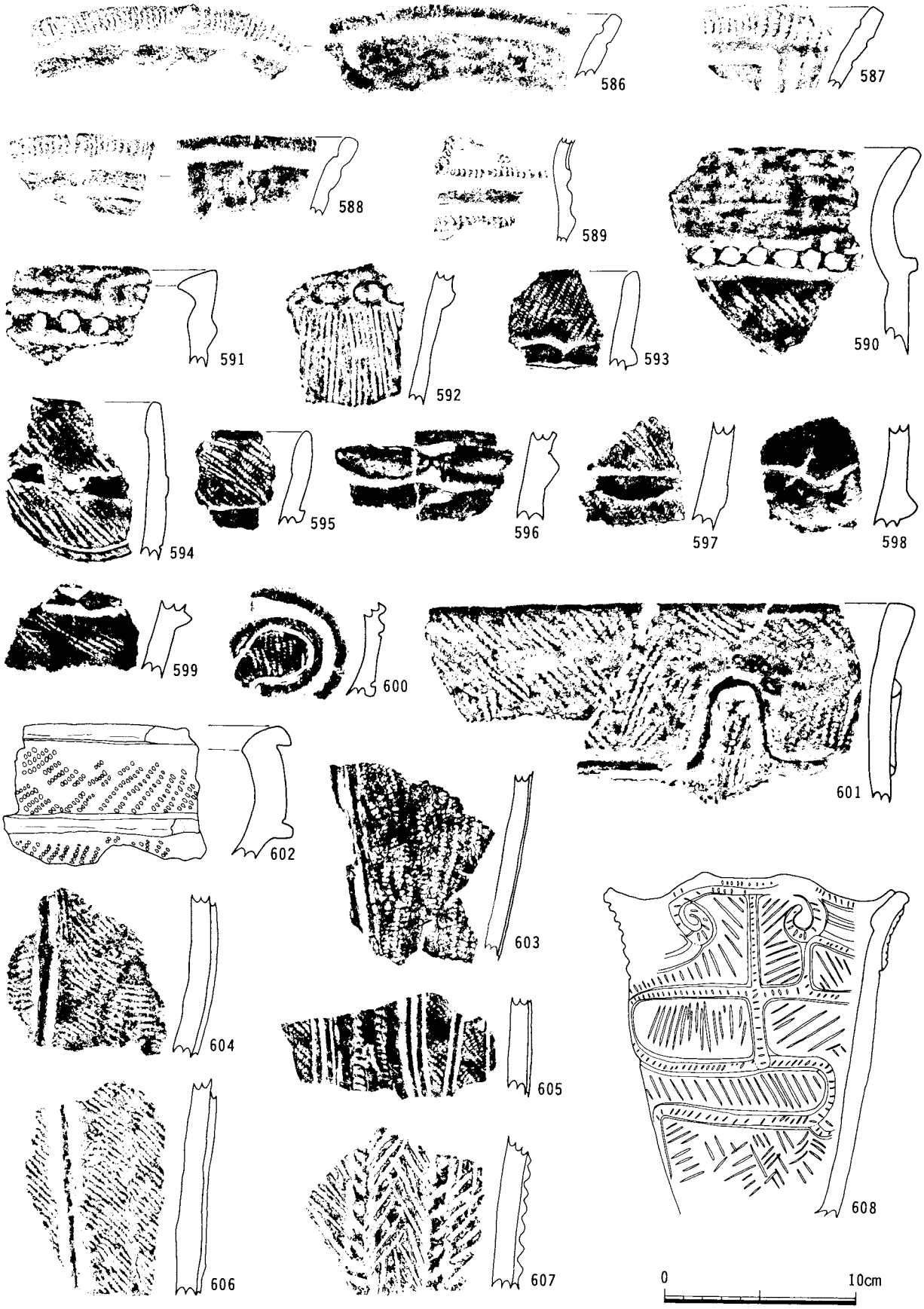
b類（640～647）

地文が撚糸文のものである。横方向にあるいは曲線的に沈線が施される。644は沈線による区画文が第1号住居址出土の土器（第25図38）に似ている。645は小突起がつき、沈線は口縁に沿って上向きの弧状に1本施されている。

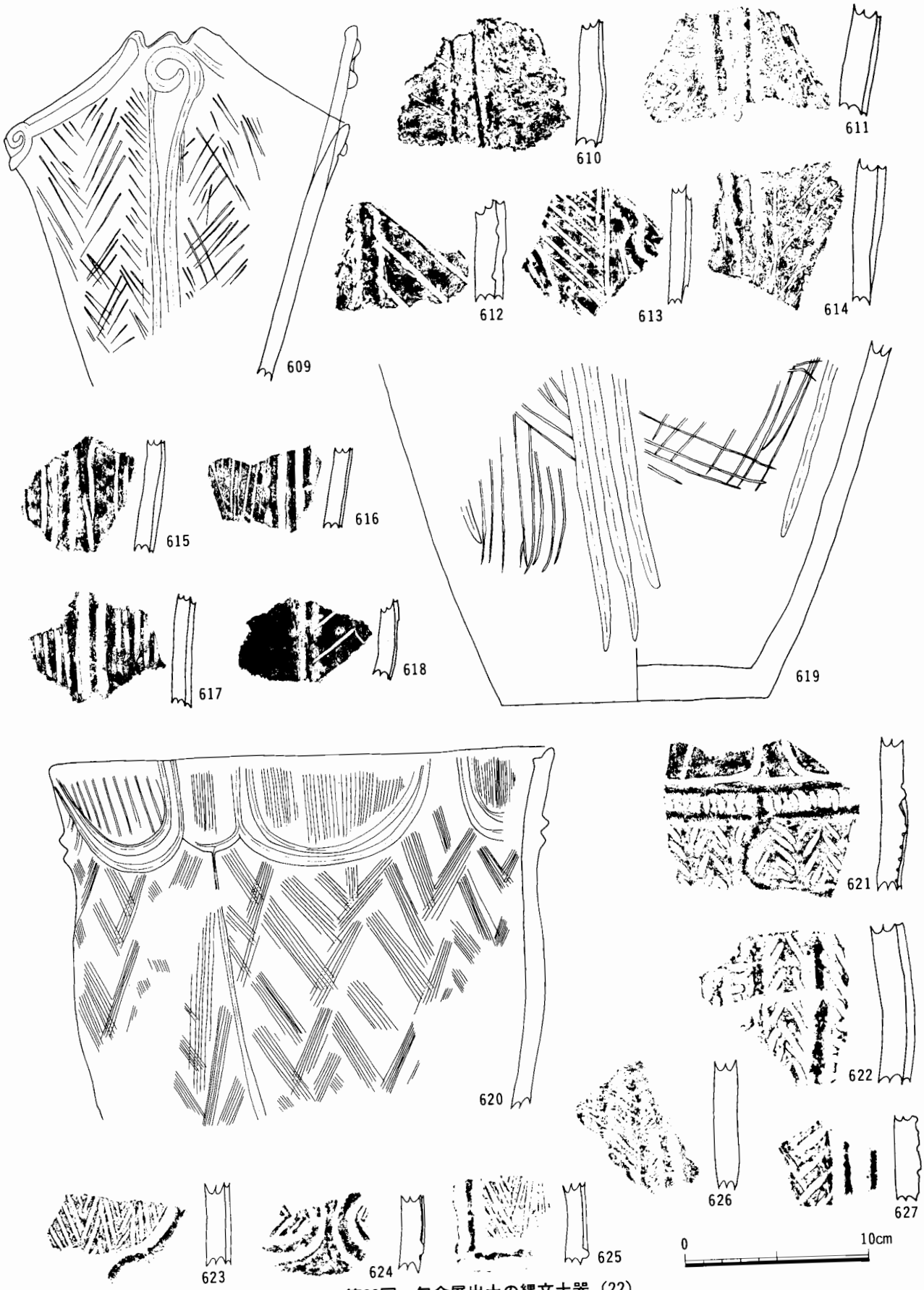
c類（648～660）

地文が縄文のものである。648～651のように横方向に施文されたもの、652～654のように縦方向に施文されたものがあり、655・656のように斜めに施文されたものもある。さらに、657・658のように曲線的な文様のものや、659・670のように区画されたものもある。

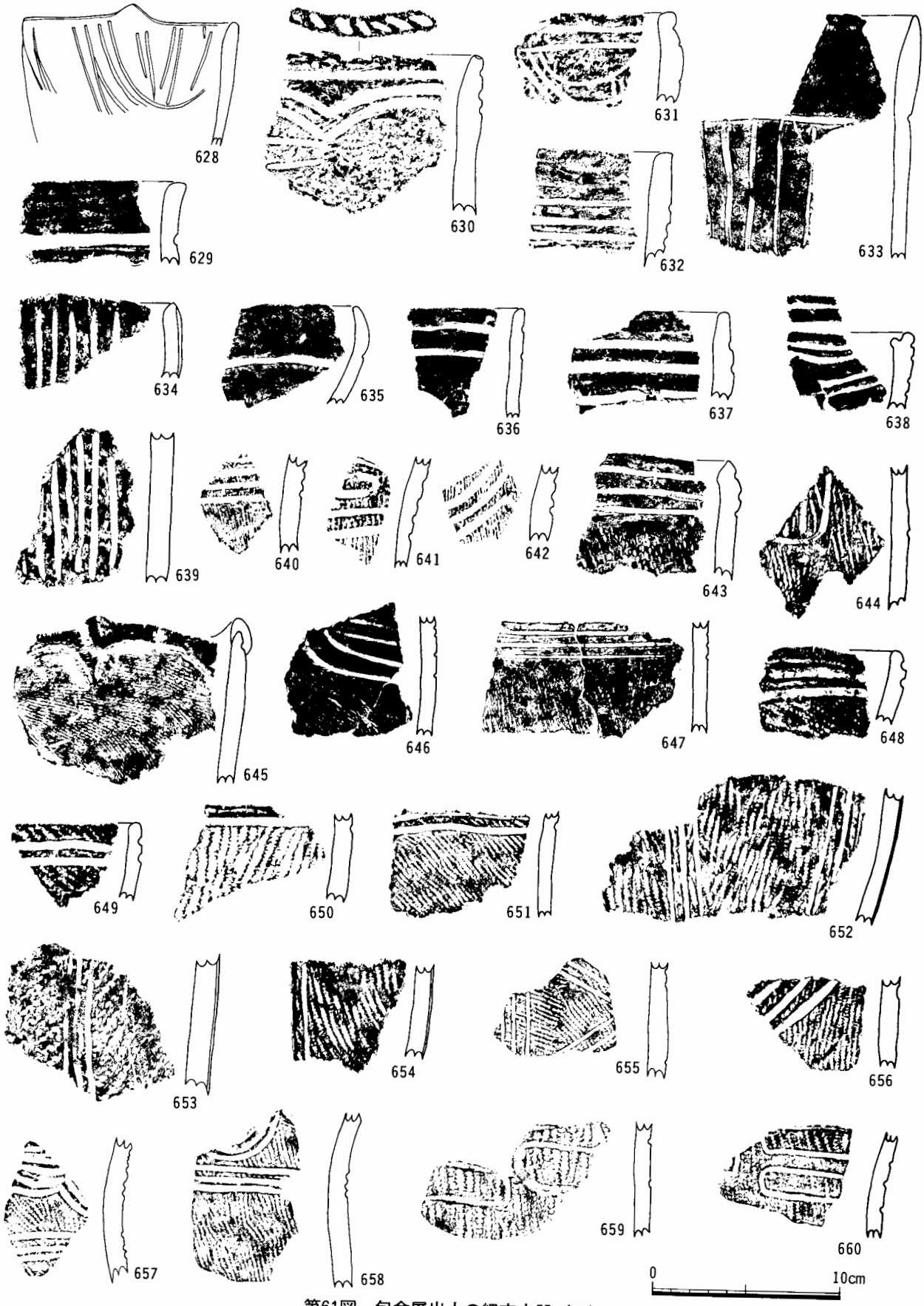
d類（661～672）



第59図　包含層出土の縄文土器（21）



第60図 包含層出土の縄文土器（22）



第61図　包含層出土の縄文土器（23）

「ハ」の字状の沈線文を施すものである。661は2本1組の沈線で縦横に区画し、その中に「ハ」の字状の沈線文が施されている。663は瘤状の突起がつく。

9類　蛇行懸垂文を有する土器（第62図673～691、図版33）

中期後半に位置づけられる蛇行懸垂文を有する土器である。次の2類に分類する。

a類（673～675）

隆帯による施文のものである。673は横位の短かい隆帯上に施されている。675は弧状の隆帯から垂下している。

b類（676～691）

沈線による施文のものである。幅が広くて浅い沈線のものと、細くて深い沈線のものがある。679・680・683・684はいわゆるコンパス状文とした方が適切かもしれない。678・686・687・689・690のように曲線的な沈線による区画文と組み合わせたものもある。

10類　条線文の土器（第63・64図、図版34・35）

いわゆる条線を施した土器である。施文方法により次の2類に分類する。

a類（692～717）

櫛状工具によるものである。口縁部が直立するもの（692～697）、内湾するもの（698～700）、外湾するもの（701～703）がある。704は口縁内面に段を有する。

口縁部から胴部にかけて縦方向に施文するものが主であるが、無文帯をもつもの（705）もある。条線が異方向のもの（706・707）や、712のように円弧を描いたり、714～717のように弧線を描くものもある。713は、波状口縁で曲線的に描かれている。

b類（718～735）

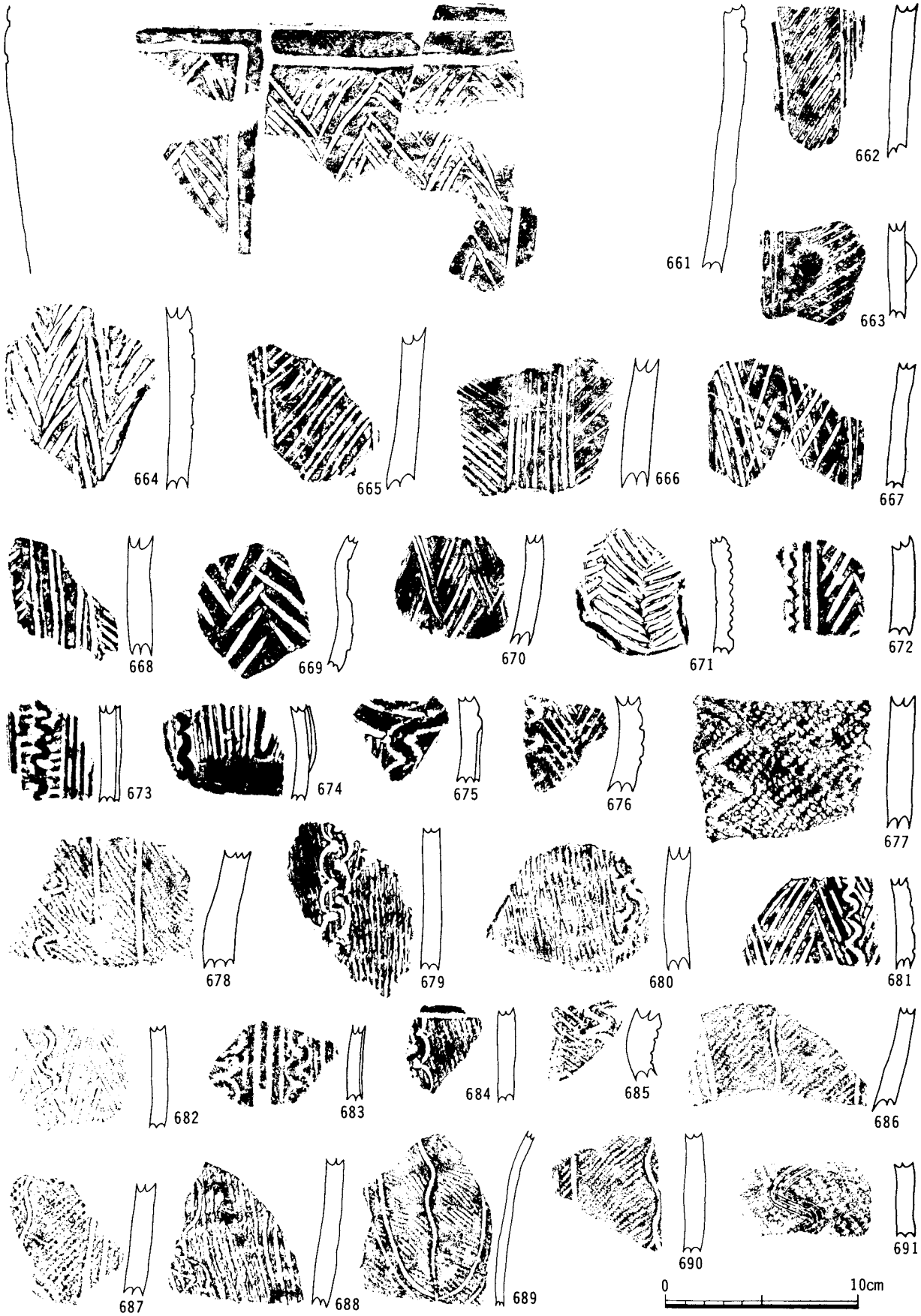
ヘラ状工具によるもので、細い沈線が何条もあり、条線状を呈するものである。縦方向の施文のものもあるが、斜位の異方向に施文したものが多い。718は、口縁部に隆帯があり櫛状工具による刺突がある。平面はやや楕円形を呈する。715～730は幅広の沈線をともなう。内湾する口縁で2本の沈線が横走し、長楕円状の区画文と思われるものもある（728・729）。

11類　撚糸文の土器（第65・66図、図版35）

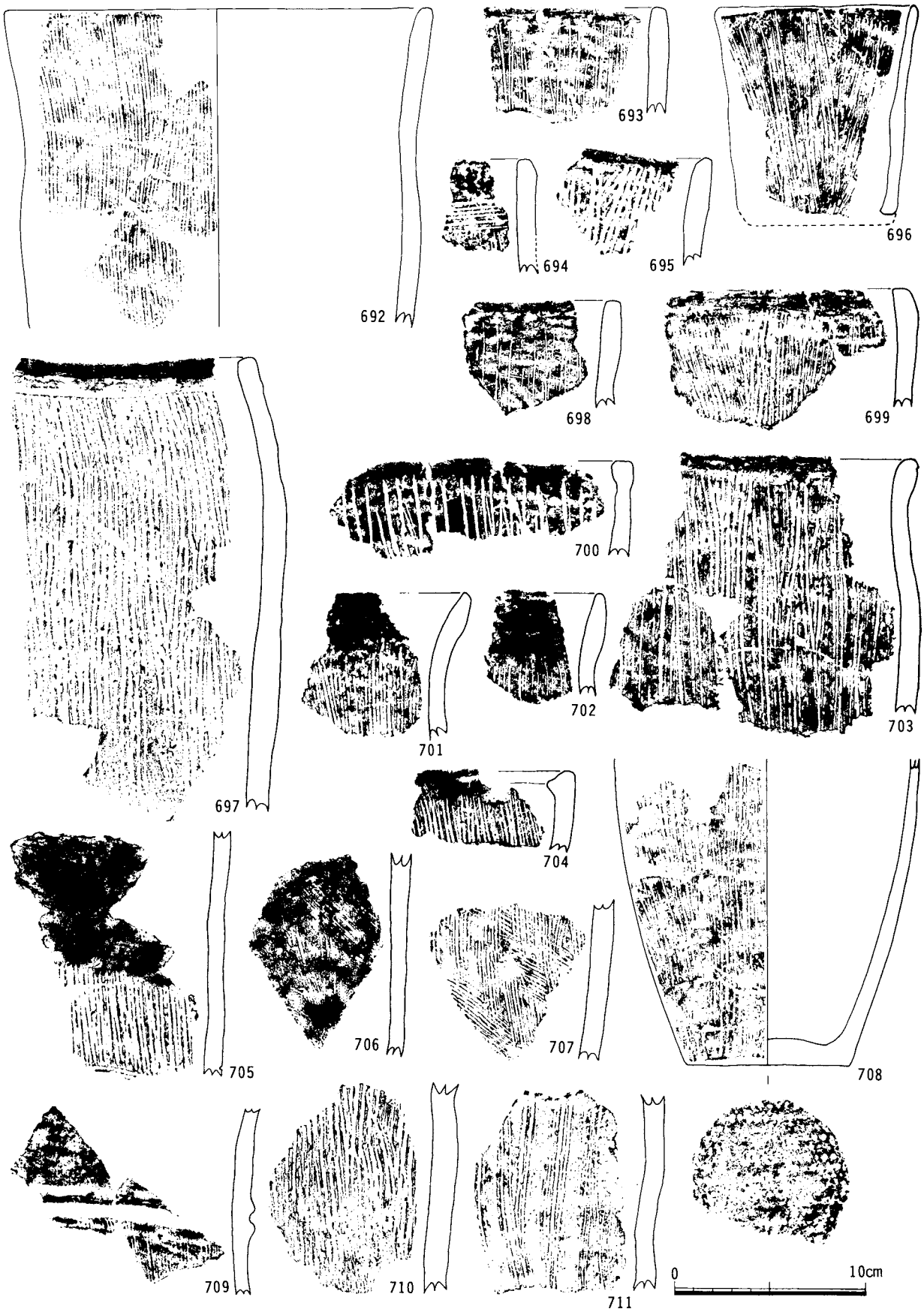
撚糸文を全面に施したものである。口縁部は直立するもの（738・741～747）、やや開き気味のもの（739・748・749）、キャリパー形のもの（735）がある。キャリパー形を呈する735は、口縁部と胴部は方向が違う施文である。738は平面形がやや楕円を呈する。739は高さ約38㎝の大型のもので、やや開き気味に立ち上がる。

12類　縄文の土器（第67・68図、図版36）

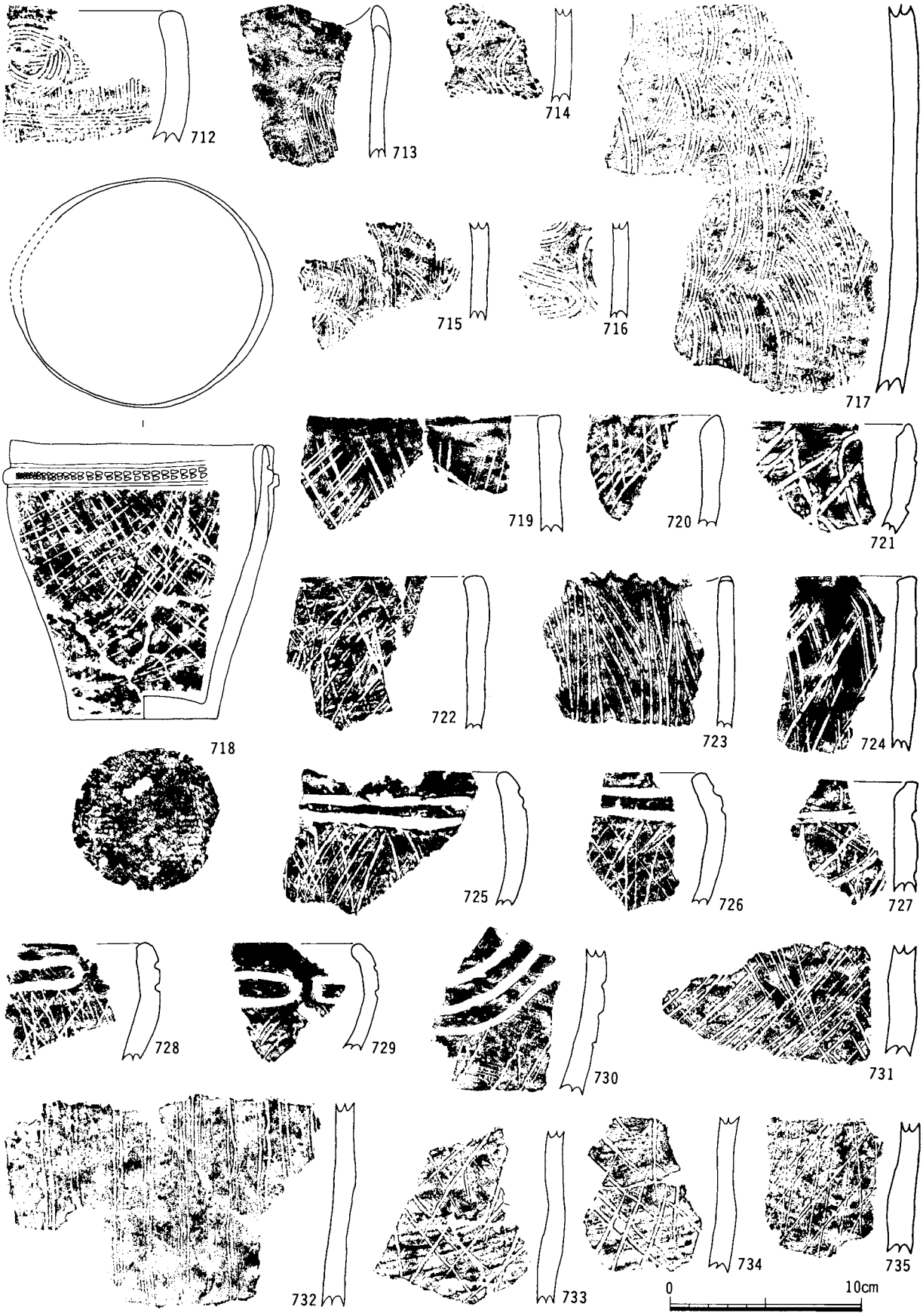
縄文が主体の土器である。口縁部の形態を見ると、直立するもの（764～773・775）、開きながら内湾あるいは直立するもの（774・776～780）、外反するもの（781～788・791・796）、波状口縁のもの（789・790）がある。



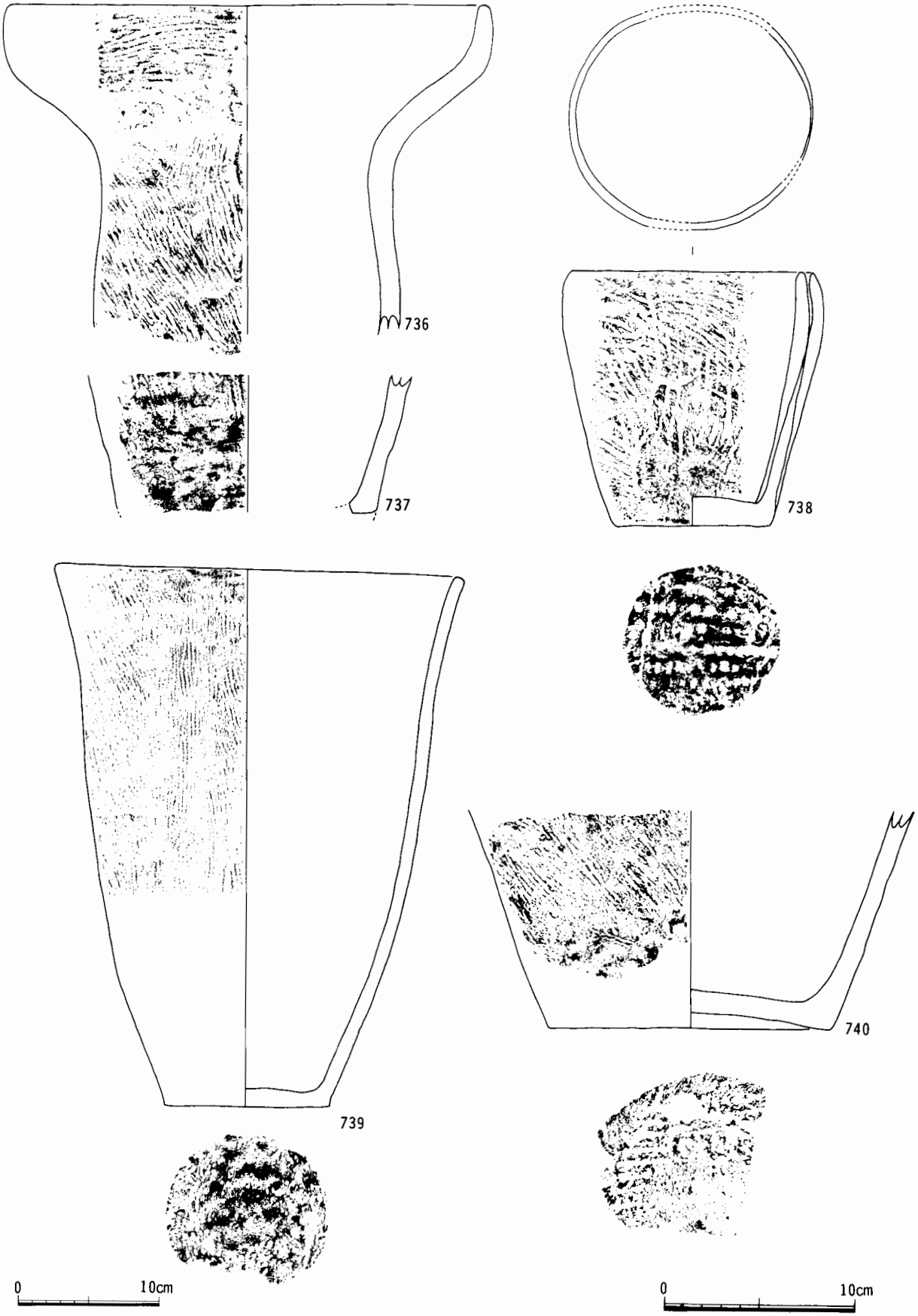
第62図　包含層出土の縄文土器（24）



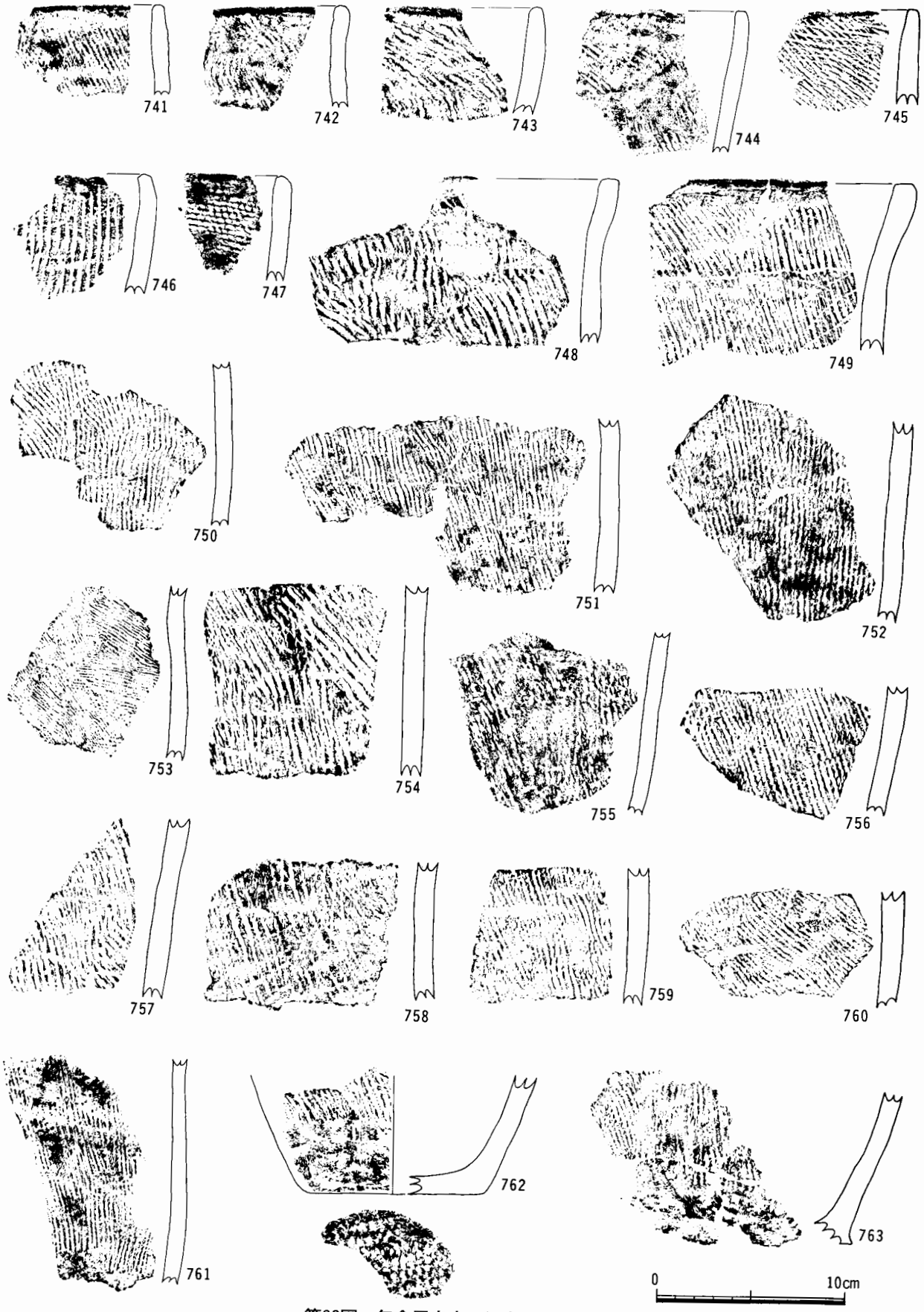
第63図　包含層出土の縄文土器（25）



第64図　包含層出土の縄文土器（26）



第65図　包含層出土の縄文土器（27）



第66図　包含層出土の縄文土器（28）

791は口縁の内外面に段を有し口唇部に刻みが入る。にぶい黄褐色を呈し、やや異質な土器である。795は頸部が括れて口縁が開く器形の台付き土器である。796は口縁に段を有し、頸部に結節の縄文が横走する。798は、胴部上半に条線を施す。

13類　無文の土器（第69図、図版36・37）

全面が無文というより無文部の破片といった方が適切かもしれない。口縁部の形態は、直立するもの（799～806）、やや開きながら内湾あるいは直立するもの（807～812）、外反するもの（813～822）、内湾するもの（823～826）がある。799は、高さ約9㎝の小型の深鉢形の土器である。口縁部のみのものは、胴部の文様が不明である。

14類　浅鉢形の土器（第70図831～848、図版37）

13類までのような深鉢形ではなく浅鉢形の土器が本類である。施文の違いから次の3類に分類する。

a類（831～836）

櫛状工具による刺突文があるものである。口縁部は屈曲して直立する。2本の沈線が横走し、渦巻き文を中心にして区画している。沈線間に櫛状工具による連続刺突文が施されている。831は図上復元したものである。

b類（837～844・847・848）

無文のものである。直線的に開いた器形である。838は口縁部に段がある。847・848は胴部なので、他の類の可能性もある。

c類（845・846）

その他のもの。845は「く」の字状に屈曲する口縁で、2本の沈線が横走し、地文は縄文である。846は波状を呈し、波頂部には刻みが入り、口縁端部に沈線が施されている。

15類　その他の器形の土器（第70図849～855、図版37）

深鉢および浅鉢以外の器形と考えられる土器である。次の3類に分類する。

a類（849～851）

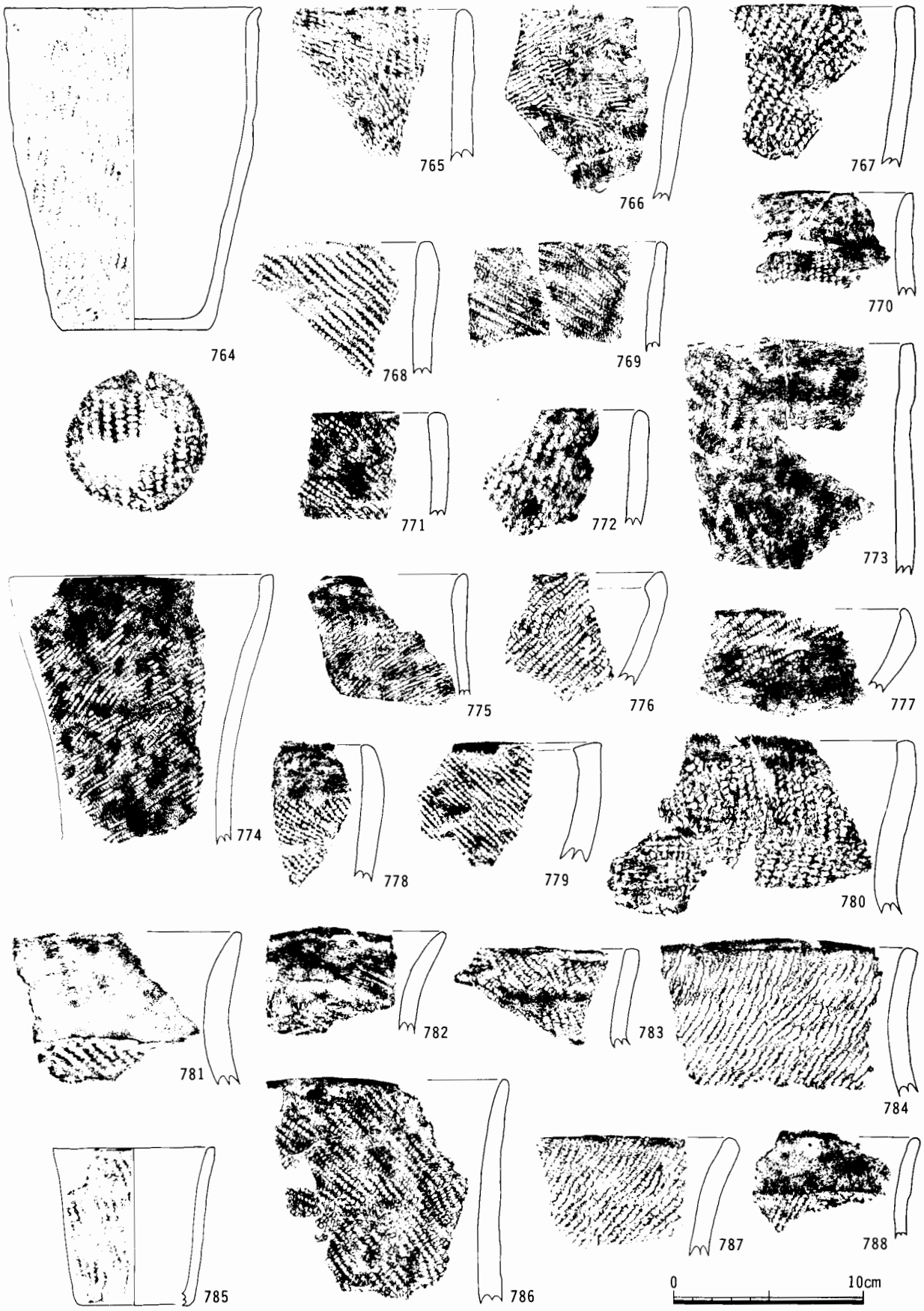
釣り手土器と思われるものである。849は隆帯が蛇行する。850はねじり棒状の隆帯がつく。851は隆帯に沿って押し引き文がある。

b類（852～854）

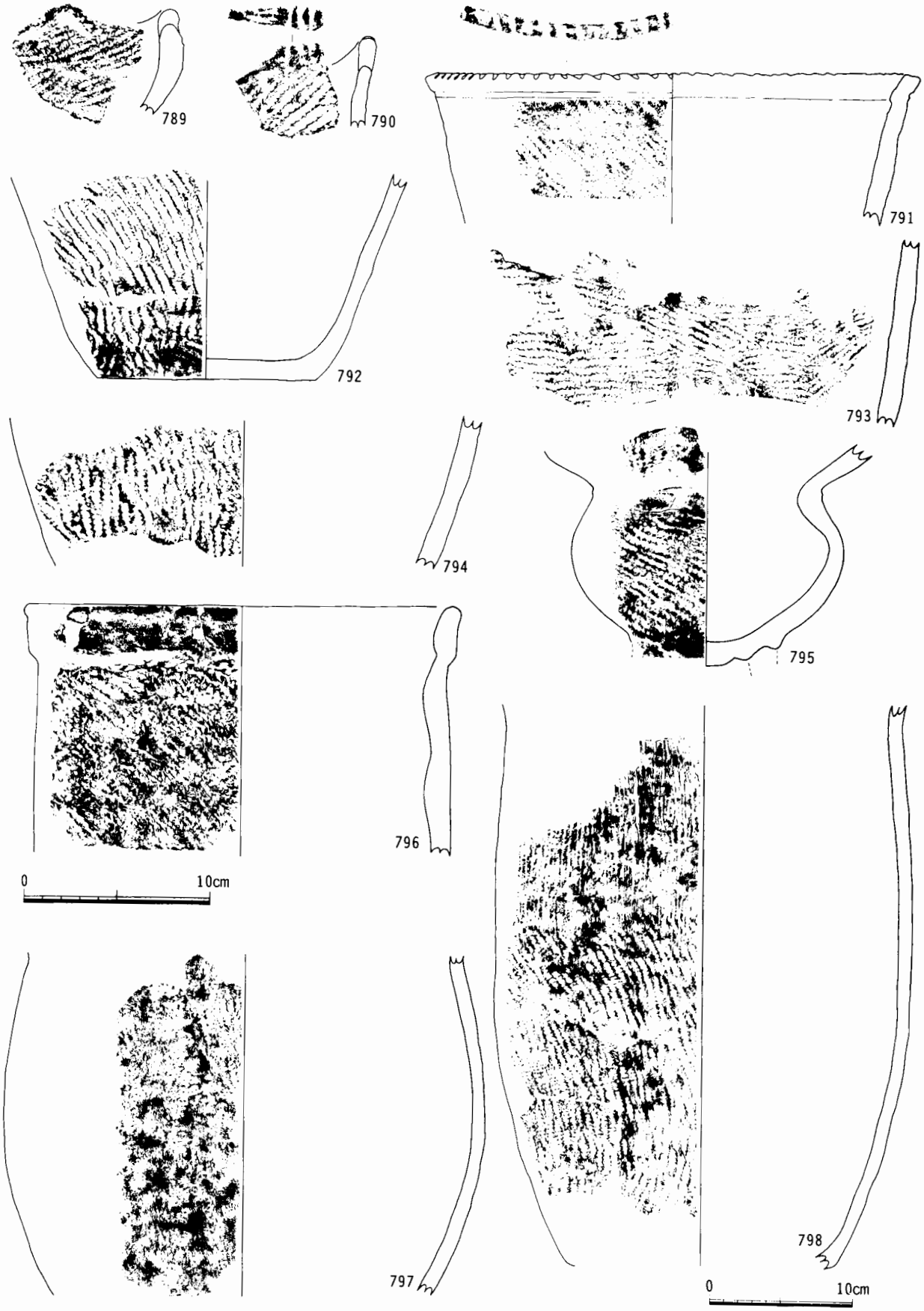
有孔鍔付土器と思われるものである。852の口縁端部は平坦で、列孔部が一部残っている。853は、眼鏡状突起があり、その上の部分に列孔部がある。854は図上で復元したものである。胴部は丸みをもって張っており、胴部中央に最大径があり、約34㎝である。鍔部は欠落している。一部突起が残存している。胴部上半に半截竹管文が2本1組で、蛇行して横走する。地文は条線文である。橙色を呈し、内面はよく磨かれている。

c類（855）

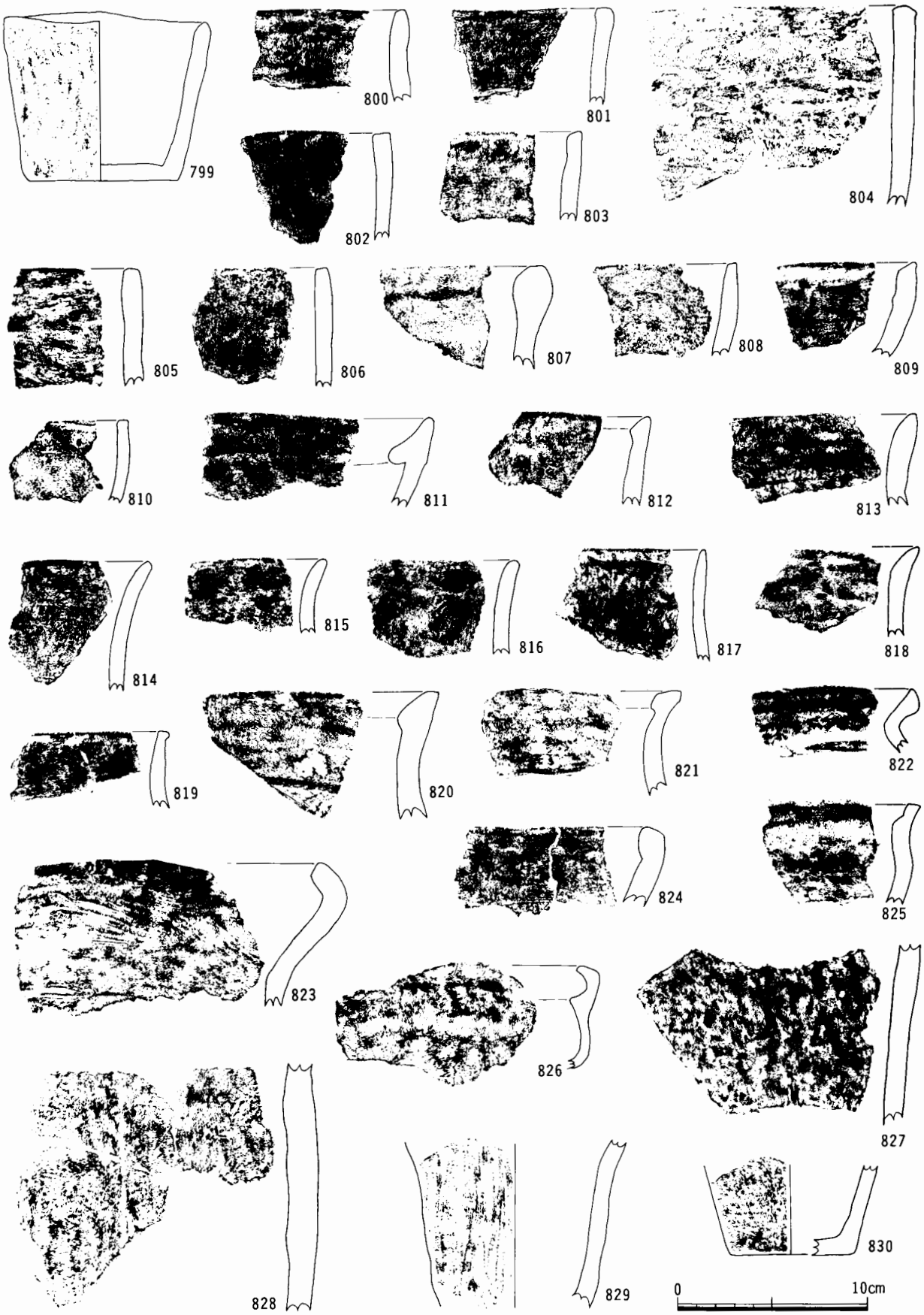
器台と思われるものが1個体確認された。855は、直径約17㎝で上面は平滑に仕上げてある。脚部は欠落している。にぶい黄橙色を呈する。



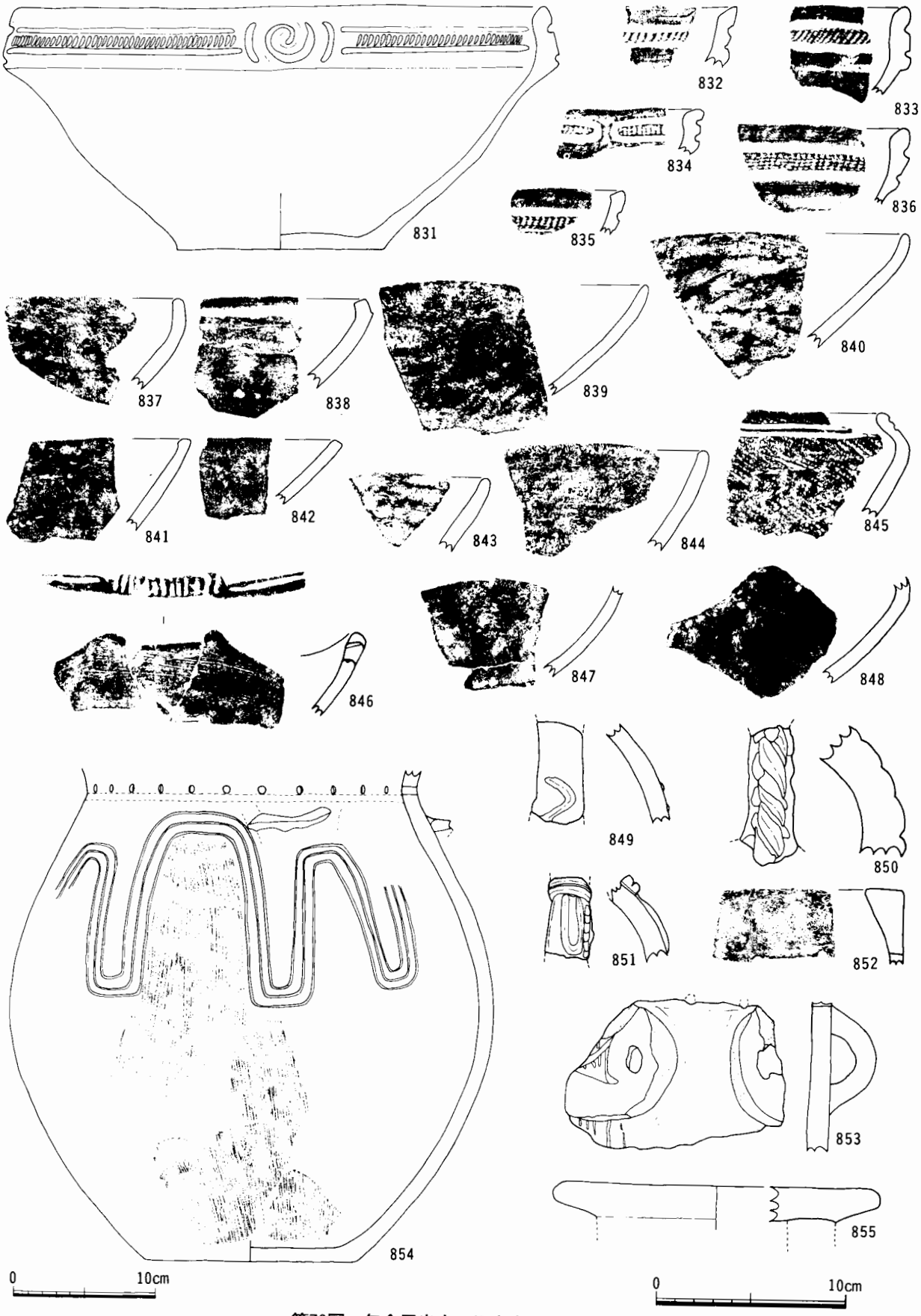
第67図　包含層出土の縄文土器（29）



第68図　包含層出土の縄文土器（30）



第69図　包含層出土の縄文土器（31）



第70図　包含層出土の縄文土器（32）

Ⅲ群　後期の土器（第71・72図、図版38・39）

後期の土器が少量であるが出土している。ここでは、中期末から後期初頭に位置付けられているものを含めて説明する。次の9類に分類する。

1類　在地性の強い中期末の土器（第71図856～862、図版38）

口縁部は肥厚しやや外反気味に開く。口縁部は無文で、その下に縦位平行沈線文が施される。859は橋状把手がつく。860～862は沈線による横位の長楕円文がつき、860は短い縦の隆帯の上下端に刺突がある。荒城神社遺跡の2群Ⅰ類（㈶岐阜県文化財保護センター1994）の土器である。

2類　岩峅野式に比定できる土器（第71図863～865、図版38）

微隆起線文が施されているが、後述する宮田式とは異なり、岩峅野式の特徴を備えたものである。863は外反する頸部で格子目文があり、864は縦位に区切った中に蛇行する微隆起線がある。865は胴部の縦位の平行線文が密に施されている。

3類　宮田式に比定できる土器（第71図866～879、図版38）

866～878は、宮田式2類の微隆起線文を施したものである。口縁部で横位に施されるもの（866・867）と、縦位に施されるもの（868・869）がある。直線的な展開をするものや曲線的なモチーフをもつものがある。876は沈線をともない、877は刺突をともなう。

879は、微隆起線に刻みをともなう宮田式1類と呼ばれるものであろう。

4類　いわゆる南垣内型鉢と呼ばれる土器（第71図880～884、図版38）

口縁部が逆「く」の字状に屈折し、「く」の字上半部に文様帯を有する。「南垣内型鉢」と呼称されている（戸田1993）。881・882は微隆起線で、弧文や横位平行線文がある。883は2条の列点文が展開する。884は横位平行沈線文が施され、880は沈線と隆帯が曲線的に展開し、区画された中に縦位の平行沈線がある。

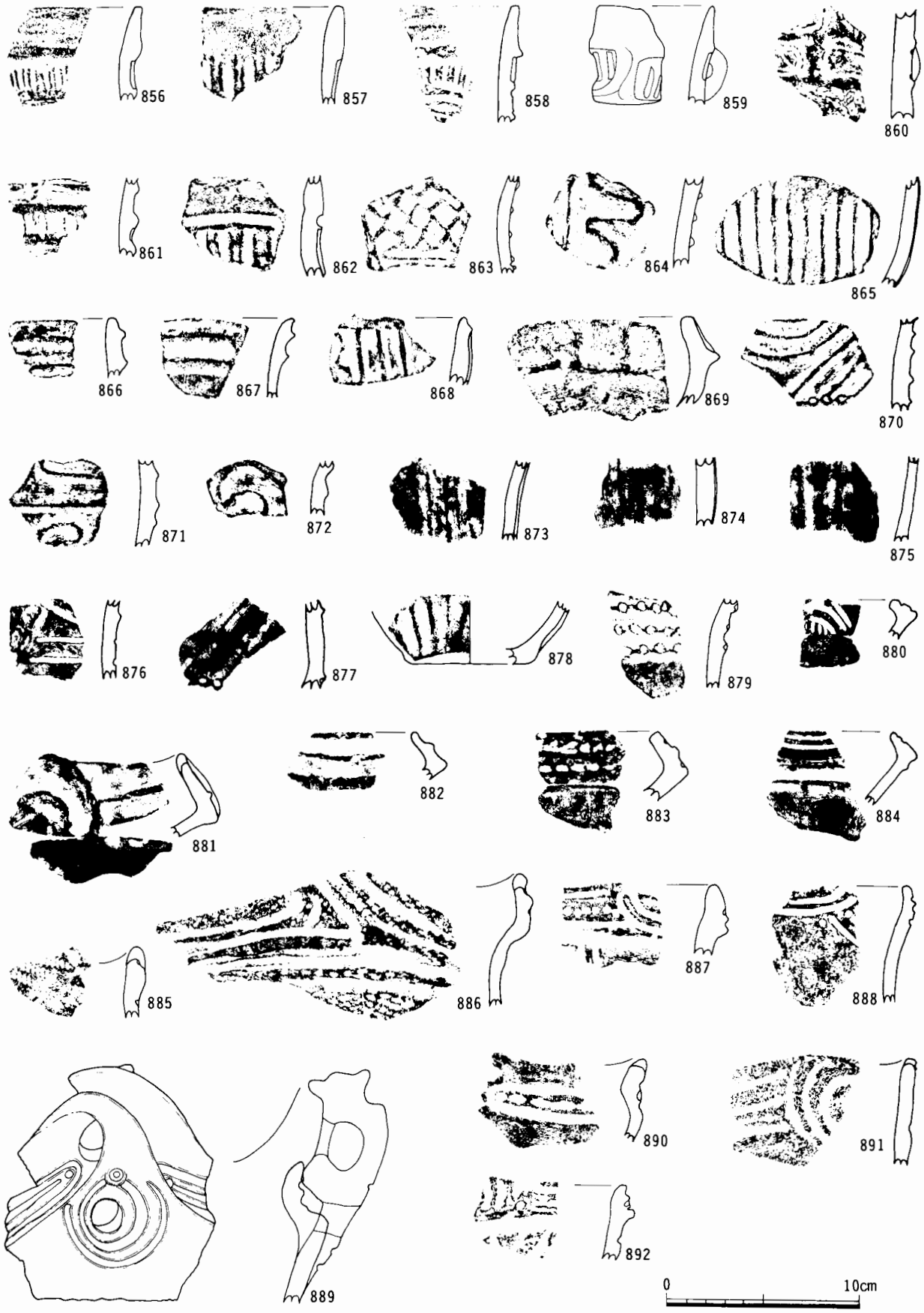
5類　気屋式に比定できる土器（第71図885～892、図版38）

885は緩い波状口縁で、肥厚する口縁部に縄文が、頸部にいわゆる三角刺突文がある。886は、波状口縁で、三角刺突が入字状に並ぶ。頸部は浅い沈線が巡り、地文は縄文である。887は肥厚する口縁で、曲線的に沈線が展開し、いわゆる末端刺突と連続刺突文がある。段の下に縦位の沈線がある。888は入字状の沈線と末端刺突がある。889は大きな波状口縁で口縁部が「く」の字状に折れ、橋状突起とともに孔が開いている。沈線と円形刺突文を組み合わせて施文している。890は肥厚する口縁が「く」の字状に開き、沈線と連続刺突文がある。891は沈線による渦巻き文と末端刺突が見られる。892は口縁部に段を有し、沈線と刺突文が施されている。

いずれも気屋Ⅰb式に対比できる（米沢1989）。

6類　縁帯文系の土器（第72図893～897、図版39）

893は頸部がくびれ口縁部は肥厚して開く器形で、口縁部には沈線が「し」の字状に展開し、ＲＬ



第71図　包含層出土の縄文土器（33）

の縄文が施され、頸部は無文帯となる。胴部は、横位と斜位の平行沈線と縄文の組み合わせである。894は肥厚する口縁に平行沈線文が施文され、895～897は縄文が施される。

７類　堀之内式に比定される土器（第72図898～900、図版39）

開きながら内湾する口縁で、口縁部端に沈線あるいは刺突があり、900は波状口縁で、波頂部の端部に渦巻き文がある。

８類　加曽利Ｂ式段階の土器（第72図901～921、図版39）

横位の磨消縄文が展開する。901～904のように口縁内面に沈線が施されているものがある。905・906は突起がつく。921は羽状縄文が施されており、酒見式に相当するであろう。

９類　井口式に比定できる土器（第72図922～925、図版39）

922は、「く」の字状にくびれ、口縁端部と頸部に凹線文と円形刺突文がある。923は逆「く」の字状に屈曲し外反して開く口縁部で横位の平行沈線が施される。924は波状口縁で、沈線と刺突が施され、瘤状の突起がつく。その下には斜位の沈線が施されている。925は波状口縁で、外面は無文であり、内面に凹線と円形の押圧文がある。

Ⅳ群　晩期の土器（第73図926～942、図版39）

わずかに晩期の土器も見られる。次の２類に分類する。

１類　中屋式に相当する土器（第73図926～941、図版39）

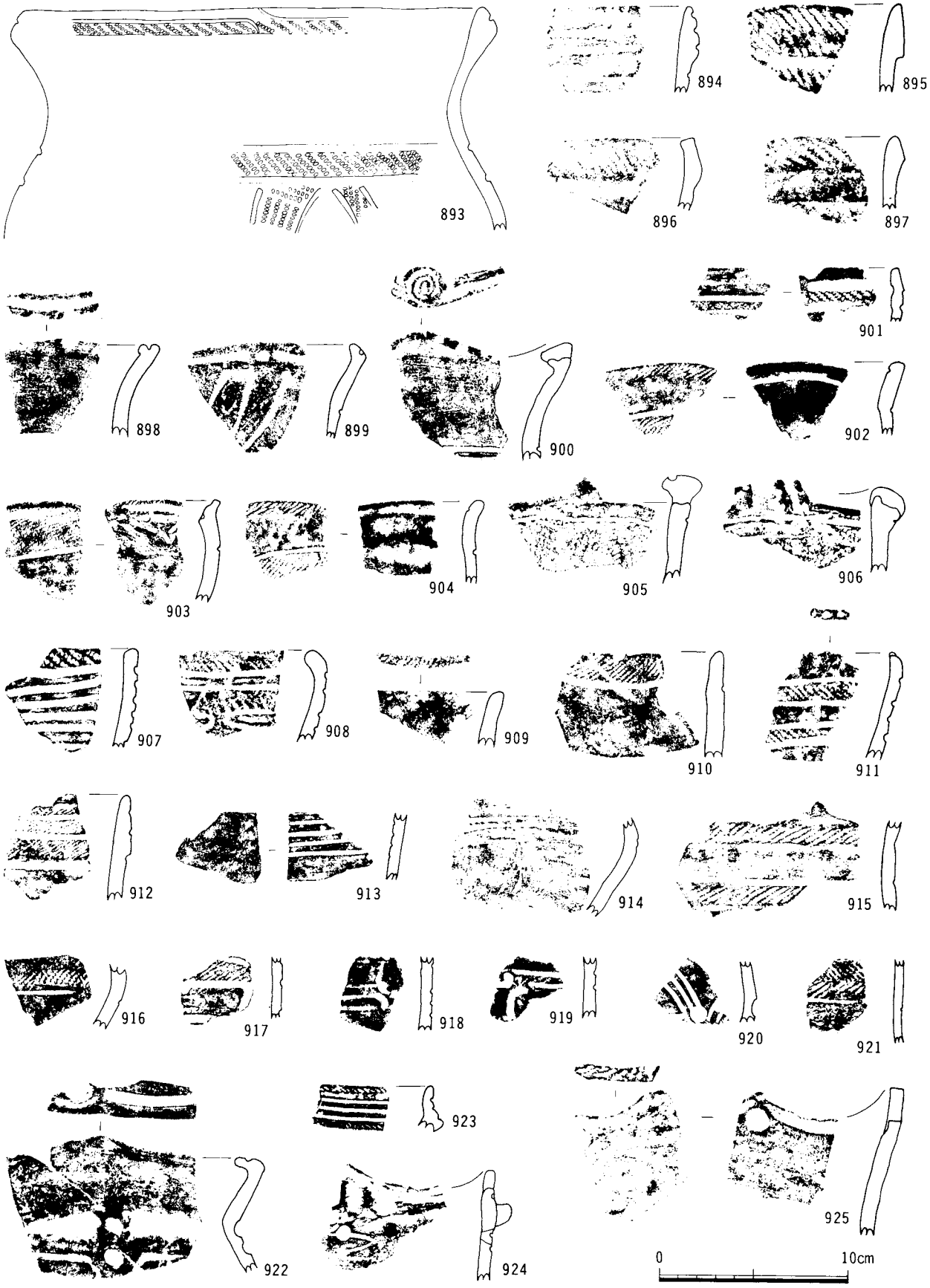
頸部が屈曲して口縁が外反する。926・932・937は連続刺突文を施されている。931は鍵の手文が見られる。927・933～939は曲線的な文様が展開する。933～935に見られる文様はいわゆるあやくり帯縄文である。941は蓋である。

２類　浮線文系の土器（第73図942、図版39）

いわゆる浮線文で、突起を有する眼鏡状の文様である。

Ⅴ群　時期不明の土器（第73図943～952）

編年的位置付けが不明のものである。943は、折り返した口縁で内面に段を有する。２条の連続刺突文が横走し、貼り付け隆帯がつく。944は内湾気味の口縁で、弧状の沈線とその間に刺突が連続する。945は、緩やかな「く」の字状を呈する口縁で、口縁部には、短い縦位平行沈線文が施され、段の下に沈線で区画された中に管状工具による刺突が見られる。946は口縁部に沈線による楕円区画があり、管状工具による刺突がある。947は内湾気味に直立し、２本の沈線が横走し、雨垂れ状の列点が２条１組で斜位に施される。948は大波状口縁で、波頂部が折り返してある。無文の土器である。949は波状口縁で、口縁部に平行沈線が数本あり、その下に刺突文がある。950は、「く」の字状に屈曲し口縁部に「日」の字状の沈線文があり、段の下に縦位平行沈線がある。951は曲線的な展開の沈線文を有する磨消縄文の土器である。952は弧状の沈線の区画内に三角形状の刺突が入る。

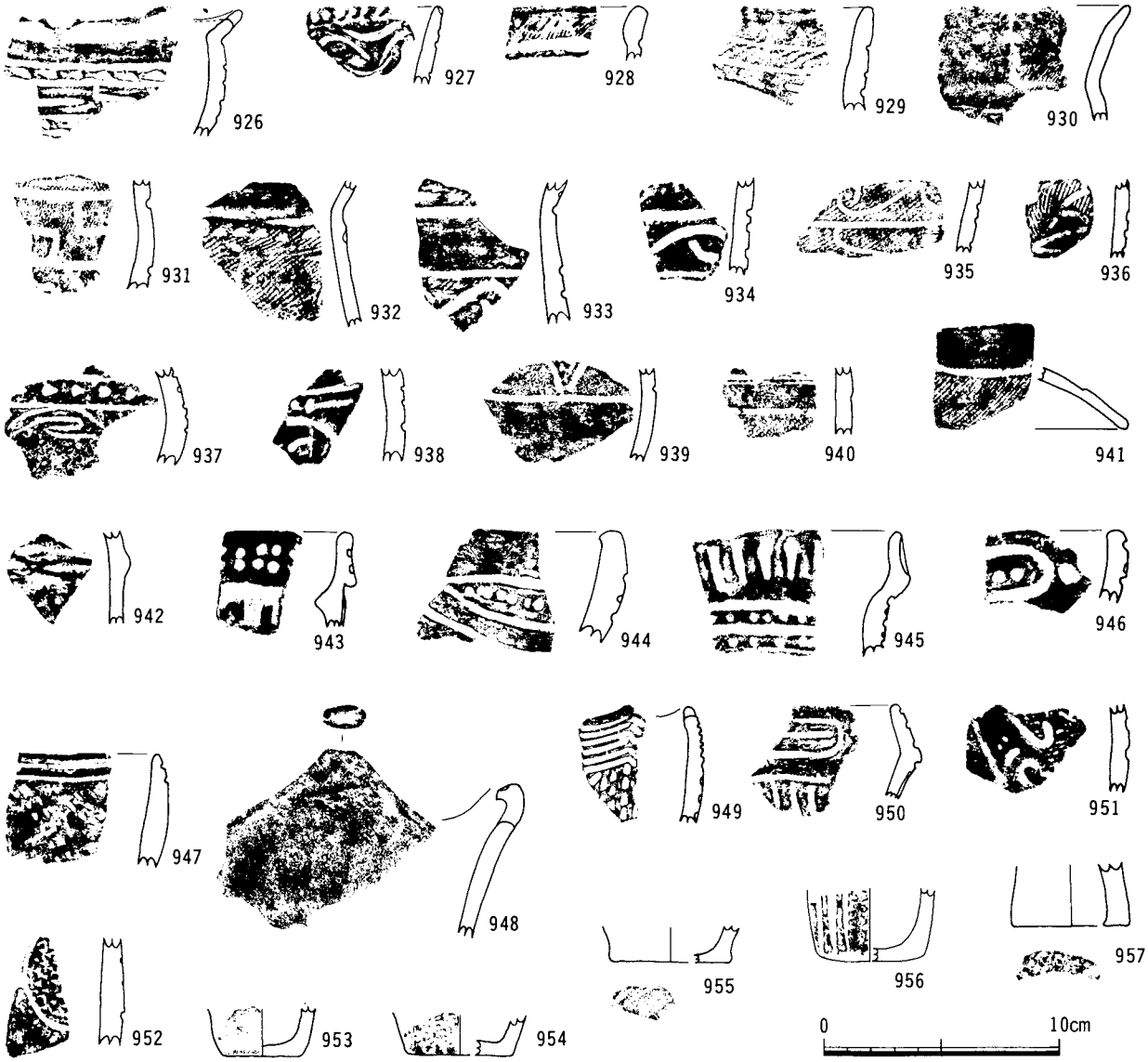


第72図　包含層出土の縄文土器（34）

Ⅵ群　ミニチュア土器（第73図954～958、図版　）

図示したものはいずれも底部あるいは脚部である。954～956は無文である。957は、縦位の沈線と刺突が見られる。958は脚台である。

１）戸田哲也(1993)「第Ⅳ章　発見された遺構と遺物　第１節　縄文時代」『中野山越遺跡発掘調査報告書』



第73図　包含層出土の縄文土器（35）

4　底部・脚部

本遺跡出土の底部は 670点、脚部は12点である。ただし、大半は破片であり670点には同一個体と思われるものも含まれており、個体数を表すものではない。本節は特に遺物包含層から出土した底部でかつ、底部からは時期等の判別が困難なもの585点に限り資料化したものである。

断面形態（第74図）

底部から胴部にかけての広がり方の違いによりＡ類～Ｄ類に分類した[1]。また脚部をＥ類とした。

この他、断面形態の特徴として、底部が平坦になるもの（１・３など）とやや上げ底的になるもの（２・６など）に大別できる。また、底部から直接外に開く断面形態（１・２）などと垂直（６・14など）またはやや内傾して立ち上がる（７・11など）断面形態を持つ土器がある。これらは土器の大きさや製作方法の相違によると考えられるが、本遺跡の底部からは良好な資料を得ることができなかったので分類の観点からは除外した。

Ａ類（１～９）

底部より直立気味に立ち上がる断面形態の器形を基本とする（概ね90度～75度）。本類の多くは第37図249のように胴部に膨らみを持たない深鉢になると思われる。339点出土し、全体の60％を占める。底径３㎝以下の小型の土器（８・９）から、底径20㎝近くの大型の土器（１・２）まで存在するが、底径６～11㎝の間に約60％の土器が集中している。これは、本遺跡で出土した復元個体の比率と類似している。

Ｂ類（10～15）

底部よりやや開き気味に立ち上がる断面形態の器形を本類とする（概ね75度～60度）。胴部にやや膨らみを持つ深鉢が多いと思われる。182点出土し、32％を占める。大きさの構成はＡ類に類似しているが、Ａ類より底径の大きい土器の占める割合が多いのが特徴である。Ａ類とＢ類を合わせると９割を越える。

Ｃ類（15～20）

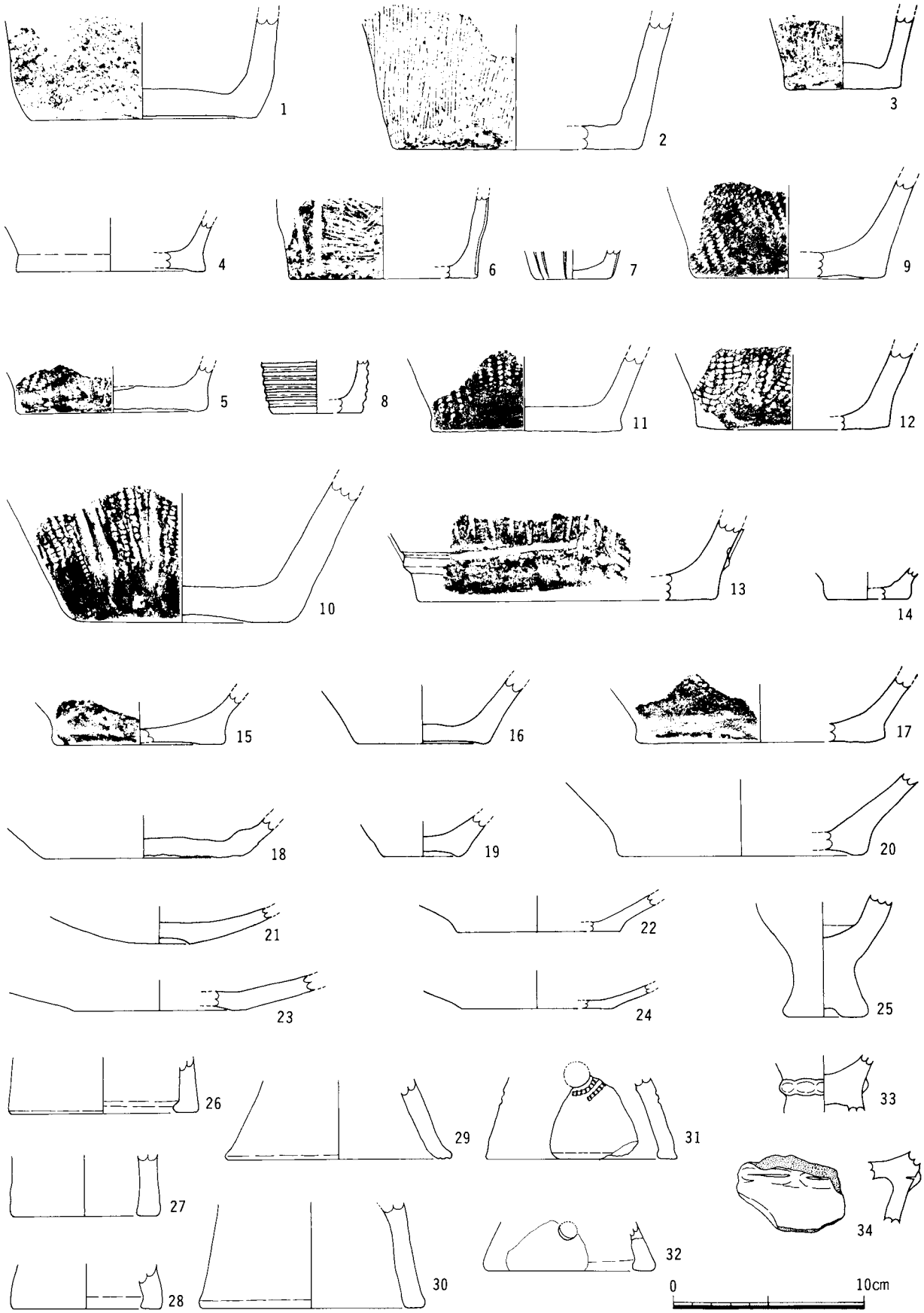
底部から大きく外反する断面形態の器形を本類とする（概ね60度～40度）。底部からは器種を特定するのは困難であるが、胴下半で大きい膨らみをもつ鉢か、もしくは浅鉢になる可能性が高い。37点出土し６％を占める。底部内面の屈曲が少なく、なだらかに底部に至る土器が多い。胴部は無文であるものが多い。

Ｄ類（21～24）

底部から39度以下に大きく外反する断面形態を持つ土器を基本とする。浅鉢もしくは皿型土器になると思われる。13点出土している。20・22は上げ底気味に成形してある。胎土は精緻で底部も磨かれている土器が多い。胴部は無文である。

Ｅ類（25～34）

台付土器の脚部を本類とする。12点出土している。胴部で台付き土器であることが明確な個体は第24図６の１点であるが、これに接合する脚部は不明である。本類にも、やや直立気味に立ち上がる器形（26～28）と内傾して立ち上がる器形（29～32）がある。31・32は脚部に円孔を持つ。31は円孔を回るように棒状工具による押し引きの沈線が施文してある。33・34は脚部と胴部をつなぐ部分である。


1
2
3
4
6
7
9
5
8
11
12
10
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
29
31
33
27
34
32
28
30
0
10cm

第74図　底部断面形態

括れ部に貼り付け隆帯を巡らし、隆帯上を指頭による押圧によりリボン状突帯となる。33はさらに凹部に横位の沈線を施す。

第7表は分類毎の底径別の個数を表したものである。

第7表　底部器形分類（器形及び底部径判明個体 501点／585点）

器形＼底部径	～3	～5	～7	～9	～11	～13	～15	～17	17～	合計
A	3	18	56	87	62	29	19	16	3	293
B		6	31	53	24	21	13	8	5	161
C		2	7	11	10	3	1			34
D	1		1	9	2					13
合計	4	26	95	160	98	53	33	24	8	501

底部圧痕

本遺跡出土の底部を圧痕別に分類したのが第8表である。総数505点の内、網代圧痕が396点と圧倒的多数を占める。このことは荒城神社遺跡と同様の傾向を示す。以下、圧痕別にその特徴を述べる。

第8表　底部圧痕分類（底部圧痕判明個体 505点／585点）

圧　痕	A（網　代）	B（スダレ）	C（葉　脈）	D（ミガキ・ナデ）	不　明
個　数	396	14	17	78	80

A類（1～24）

網代圧痕のある底部を本類とした。

編み方の種類は大きく分類して6種類確認できた。以下編み方の違いにより細分し個々の特徴を述べる。その際、経緯は密に編まれている方を縦（経条）、粗に編まれている方を横（緯条）とし、経条に対する緯条の編み方を「越え、潜り、送り」で分類した[2]。また、第9表は網代圧痕別の表であるが、材料の形、幅の分類は以下のようである。

第9表　網代圧痕分類（編み方判明個体 204点／396点）

分類	個数	材料分類　形			材料分類　幅		
		Ⅰ	ⅠⅡ	Ⅱ	Ⅰ	ⅠⅡ	Ⅱ
Aa	121	78	3	40	89	5	27
Ab	49	40	1	12	23	8	20
Ac	23	23	11	10	8		
Ad	8	1	6			6	1
Ae	2	1			1		
Af	4						

形　Ⅰ　＝圧痕が角張った長方形となり、やや偏平で硬質な感じを呈するもの

　　Ⅱ　＝圧痕が丸みをおびた楕円形や隅丸方形となり、やや軟質な感じを呈するもの

　　ⅠⅡ＝経緯に双方の材料が用いられるもの

幅　Ⅰ　＝細い材料で幅3㎜以下のもの

　　Ⅱ　＝幅広の材料で幅3㎜より広いもの

　　ⅠⅡ＝経緯が異なり、広い材料と細い材料で編まれているもの

Aa類（1～10）

本類は1本越え1本潜り1本送りを基本とする。本遺跡の網代圧痕の中で31％で圧倒的多数を占める。1・2は圧痕が長方形で市松文状を呈する。3・4は圧痕が楕円もしくは隅丸方形を呈する。前者は比較的硬質な材料を用いていると思われるのに対して、後者は比較的軟質な材料を用いているため経条間がきっちりと詰まっているものと思われる。緯条には2のように硬質で偏平な材料を用いて

いるものもあるが、全体的には断面蒲鉾形を呈する材料を用いている例が多い。５は緯条が１段ごとに深く圧痕がついている。網代が平坦でなく、上下に凹凸の大きいものであると思われるが、材料の違いによるものか、編み方によるものかは不明である。６は底部中央部分と縁辺部分が約90度向きが異なっている。中央部分がやや窪んでおり、中央を消す形で縁辺部分の圧痕が認められることから、胴部を成形する段階で土器の置き換えが行われた結果の圧痕と考えられる。７は緯条が剥きだしになっており、経条が切れている。８～９は本類を基にしながら、２種類の編み方の見られる例である。８は網代の端と思われる部分である。緯条の端を２段の経条に巻き付けて止めていると思われるが、末端をどう処理しているかは不明である。９・10は途中にもじりあみを施している。緯条が複数見られることから、緯条を増やすためにもじりあみを施した例として考えられる。

Ａｂ類（11～17）

本類は２本越え２本潜り１本送りを基本とする。Ａｂ１類は１本単位でＡｂ２類は２本単位で編んだものである。なお、２本単位のものは本類にしか認められない。

材料は硬質なもの（11・12・15）と、軟質なものに分けられるがＡａ類のように緯条、若しくは経条がきっちり詰まるものは認められない。

11・12は右に１本送り、13・14は左に送る。また15は途中で左右を変えて送ることにより模様を造りだしている。15の編み方が認められるのは２片であるが、右送り28点、左送り18点も全体では左右変えて編んでいる可能性もあるため同類とした。16・17は２本１単位で編んである。16は経緯に比較的幅の広い材料を用いているのに対し、17は経緯に細くやや丸い材料を用いている。

Ａｃ類（18～20）

本類は緯条に対し経条が２本越え２本潜りで１本送りと２本送りが交互になる編み方を基本とする。18の如く途中で送る方向を変えて模様網を呈する例が多い。18は比較的薄い材料を用いており、経緯共に密接になるが、19・20はやや丸い材料を用いており緯条の間隔が広い。20は特に緯条間１～２㎜の隙間が認められる。埋甕（第37図249）は本類に属するものであり、胴部まで判明する圧痕例である。荒城神社遺跡では３割近く認められた圧痕例であるが、本遺跡では23点（６％）と少ない。荒城神社が中期後葉の土器が多く、かつ本遺跡の埋甕（第37図249）は同期に比定できることから、本類の編み方は中期後葉の特徴的な編み方の可能性もある。

Ａｄ類（21～23）

本類は２本越え１本潜り１本送りを基本とする例で８点確認した。いずれも細片のため全体は不明だが、21・22のように右に送る例と23のように左に送る例がある。材料は23のように硬質なものを用いている例は１点のみであとはやや軟質な感じを呈する。また21のように幅広い材料より比較的細い材料を用いている例が多いのが特徴である。

Ａｅ類（24）

本類は３本越え１本潜り１本送りで２点確認した。経緯ともに密接に編み込まれている。材料はやや硬質な感じを呈する。

Ａｇ類（25）

本類は一続きの網代に二種類の編み方が認められるのを基本とする。確実なのは１点（25）のみである。送る方向を変えるＡｂ・ｃ類などで送る方向を変える際にも部分的に編み方が変わる例や、経

緯いずれか材料を足したりする際にも二種類の編み方のように見られる例もあるが、本類からは除外した。25は図上、下段はＡｂ類（２本越え２本潜り１本送り）が確認できるが、上段には４本越え２本潜り１本送りが施されている。上段と下段は一続きで密接に編み込まれている。材料はＩ類で表皮をむいて使ったような圧痕が残る。

その他、網代圧痕が認められるが編み方が不明であるものが192点ある。不明である理由は以下による。①土器の置き換えにより圧痕が重複している。②圧痕部分を指頭などによりなでており消されている。③磨滅が激しい。

ただし、断片的に確認できる部分からみる限り、上記のいずれかの編み方に属するかもしくは上記の破片と同一個体であるものが多いと思われ、全体の編み方の傾向を変えるものではない。

Ｂ類（25～29）

スダレ状圧痕を本類とする。15点確認している。

25・26は縦糸の間隔が広く横には角張った２㎜程度の材料を用いている。27～29は横糸の間隔が比較的狭い。横は明確ではないが１㎜以下の細い材料を用いている。特に29は横にも細い糸を用いている可能性が高く、いわゆる「アンギン」圧痕である可能性もある。

経緯の材料の明確な12点の経緯の間隔、材料の太さ（広さ）を第10表に示す。それぞれ粘土によるモデリングで測定した。また間隔は縦材、横材の各々の中心の間隔を示した。

縦材間隔が１㎝前後のものと、５㎜前後のものに大別できる。例外もあるが、この場合前者の横材には２㎜前後の比較的幅の広い材料を用い、後者の場合には１㎜前後の幅の狭い材料を用いている。

第10表　スダレ圧痕観察表（材料判明個体 12点／14点）

	横材の間隔（㎜）	横材の広さ（㎜）	縦材の間隔（㎜）	縦材の広さ（㎜）
1	3.9	1.8	13.0	1.5
2	4.0	2.5	12.2	2.0
3	3.8	1.6	8.7	0.9
4	5.3	1.2	6.6	1.5
5	2.8	0.9	6.3	1.0
6	4.0	1.7	5.8	1.5
7	2.1	0.7	5.5	1.2
8	2.5	0.7	5.1	1.2
9	3.8	0.8	4.8	1.4
10	2.8	1.3	4.5	0.8
11	3.1	1.1	4.2	0.9
12	2.7	1.1	3.2	1.1

Ｃ類（30～32）

葉脈圧痕を持つものを本類とした。30・31は網状脈圧痕で７例ある。33は平行脈圧痕で９例ある。いずれも全体が判明する個体はないが、全体的に底部直径の小さい個体に本類が認められる。

Ｄ類

底部にミガキ若しくはナデが見られ、意図的に圧痕を消してあるものを本類とした。78点確認でき、その内器形がＣ類またはＤ類に属するものが比較的多い。精製土器には本類に属するものが多く見られる。

１）底部の分類については、荒城神社遺跡での分類を基本とした（㈶県文化財保護センター1994）。

２）経緯は通例に従ったが、編み方から考えると、経緯が逆転することを渡辺誠氏より指摘されている。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

第75図　底部圧痕

第2節　石　器

遺構および包含層から出土した石器類の総数は約4,200点である。出土した層の状況を見ると、第Ⅰ・Ⅱ層から出土したものがほとんどである。第Ⅳ層から出土したものは、わずか47点であり、その出土状況はやや不安定なものであるので、各器種ごとに遺構出土と遺物包含層出土のものを合わせて報告する。

石鏃（第76図、図版40）

総数は102点である。石材は、下呂石57点（55.9%）、チャート31点（30.4%）、黒曜石13点（12.7%）、その他1点（1.0%）である。石材の組成は、飛騨地方の他の遺跡と比較して、下呂石の比率が低く、チャートの割合が高い点が注目される。下呂石の産地は益田郡下呂町である。当遺跡は分水嶺を挟んでいるとはいえ、吉城郡国府町荒城神社遺跡では、下呂石が74.5%、チャートが12.6%であり、また、当遺跡より北に位置する吉城郡河合村下田遺跡では、下呂石が69.0%となっていることと比較してみると、チャートの産地が遺跡の近くにあることが予想される。

形態に関しては、基部に着目して次のように分類する[1)]。

Ⅰ類（1～12）　基部に抉りの入るもので、次のa～eに細分する。

Ⅰa類（1・2）　丸みを帯びた深い抉り込みが入るもの。

Ⅰb類（3～5）　「く」の字状の抉り込みの入るもの。

Ⅰc類（6～8）　半円形のわずかな抉り込みが入るもの。

Ⅰd類（9・10）　凹状のわずかな抉り込みが入るもの。

Ⅰe類（11・12）　逆U字状の抉り込みが入るいわゆる鍬形鏃。

Ⅱ類（13・14）　いわゆる平基鏃であり、基部が直線状をなすもの。

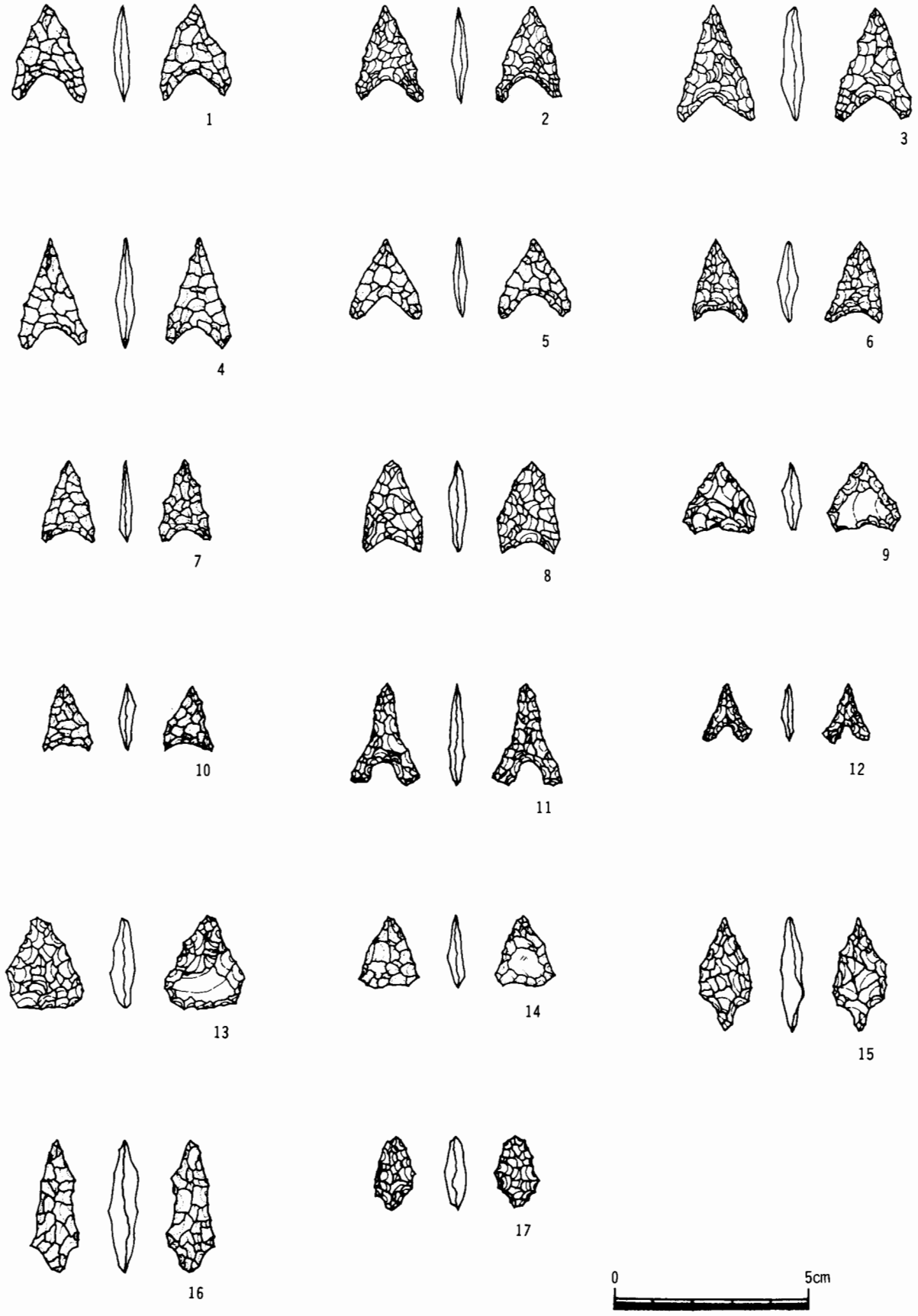
Ⅲ類（15～17）　いわゆる有茎鏃であり、基部に茎をもつもの。

「深い抉り込み」と「わずかな抉り込み」の基準があいまいであるが、一応の目安として、抉り部

第11表　石鏃の石材と形態

	Ⅰa類	Ⅰb類	Ⅰc類	Ⅰd類	Ⅰe類	Ⅱ類	Ⅲ類	不明	合計
下呂石	8 (14.0)	6 (10.5)	20 (35.1)	8 (14.0)	0	6 (10.5)	6 (10.5)	3 (5.2)	57
チャート	4 (12.9)	2 (6.5)	8 (25.8)	2 (6.5)	8 (25.8)	3 (9.6)	4 (12.9)	0	31
黒曜石	1 (7.7)	0	10 (76.9)	0	0	1 (7.7)	1 (7.7)	0	13
その他	0	0	1	0	0	0	0	0	1
合計	13 (12.7)	8 (7.9)	39 (38.2)	10 (9.8)	8 (7.9)	10 (9.8)	11 (10.8)	3 (2.9)	102

（　）内は%。石材ごとおよび合計について、形態別に計算したもの。



第76図　石器（1）

が全長の約4分の1程度を両者の境界の基準にした。Ⅰe類は、縄文早期のものと考えられている。Ⅳ層から出土したが攪乱のためか上層からも一部出土している。

形態別では、Ⅰc類が39点（38.2%）と多い。特に黒曜石では、13点中10点がⅠc類である。Ⅰe類は、チャート製の8点のみである。時期的に見て、縄文早期の段階では、下呂石の搬入が少なかった可能性がある。

石錐（第77図18～24、図版40）

総数36点である。石材は、チャート22点、下呂石14点である。形態は、次のように分類する。

Ⅰ類（18）　剥片の一端に長い尖頭部を作り出し尖頭部と基部（つまみ部）の機能の分化が明確なもの。

Ⅱa類（19～21）　棒状を呈し、基部と尖頭部の区分が不明瞭なもので、両端に尖頭部をもつもの。

Ⅱb類（22・23）　基部と尖頭部の区分が不明瞭なもので、尖頭部が一端にあるもの。

Ⅲ類（24）　剥片の一部に尖頭部を作り出したもの。

Ⅰ類は3点あり、すべてチャート製である。下呂石は、Ⅱb類が7点と多く、チャートは、Ⅱa類が6点と多くなっている。

石匙（第77図25～27、図版40）

総数5点である。いわゆる横型が4点（25・26）、縦型が1点（27）である。石材は、下呂石3点、チャート2点である。

ピエス・エスキーユ（第77図28～31、図版41）

総数16点である。石材は、下呂石7点、チャート5点、玉髄3点、硬質頁石1点である。一部石核の可能性のあるものもある。

ヘラ形石器（第77図32・33、図版41）

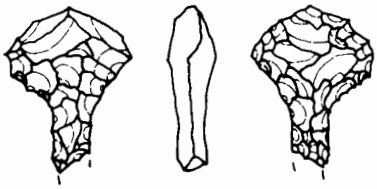
やや分厚で寸ずまりの縦長剥片の両端を折り取り、その面をそのまま利用した狭小な側面をもち、長軸方向一端に刃部をもつ石器をヘラ形石器とした。総数は3点である。石材はすべて下呂石である。

三脚石器（第78図34、図版40）

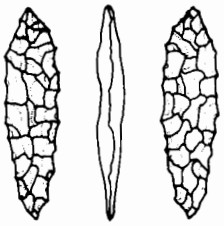
横型の石匙と形態が似るが、三叉状の形態をとる石器である。用途は不明であるが、縄文前期から後期にかけてまれに検出され、岩偶の一種という見方もある（鈴木1981）。チャート製のみで2点出土した。ただしこの可能性が高い破片のみのものを含んでいる。図示したものは、つまみ部があり、石匙の刃部に相当する部分が細長く湾曲している。一部磨いたような滑らかな部分がある。

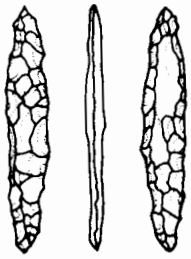
削器（第78図35～39、図版40）

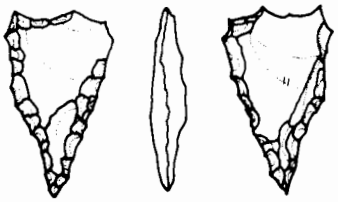
剥片の縁辺に連続的な調整によって刃部を作り出している石器を削器とした。総数23点である。石材は、チャート16点、下呂石4点、黒曜石3点である。


18

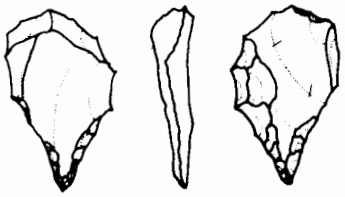
19


20


21

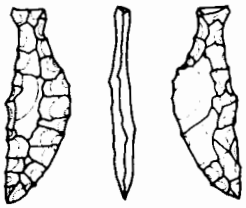

22

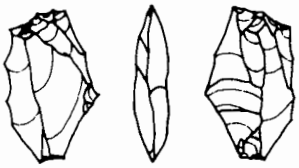
23

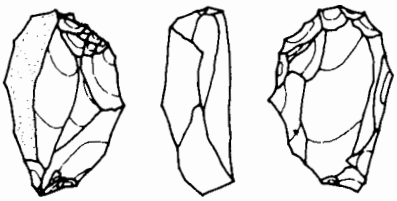

24

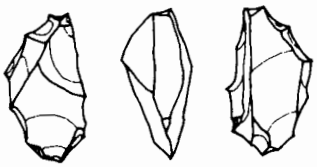
25

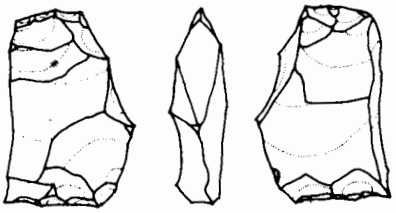
26


27


28

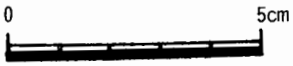

29


30

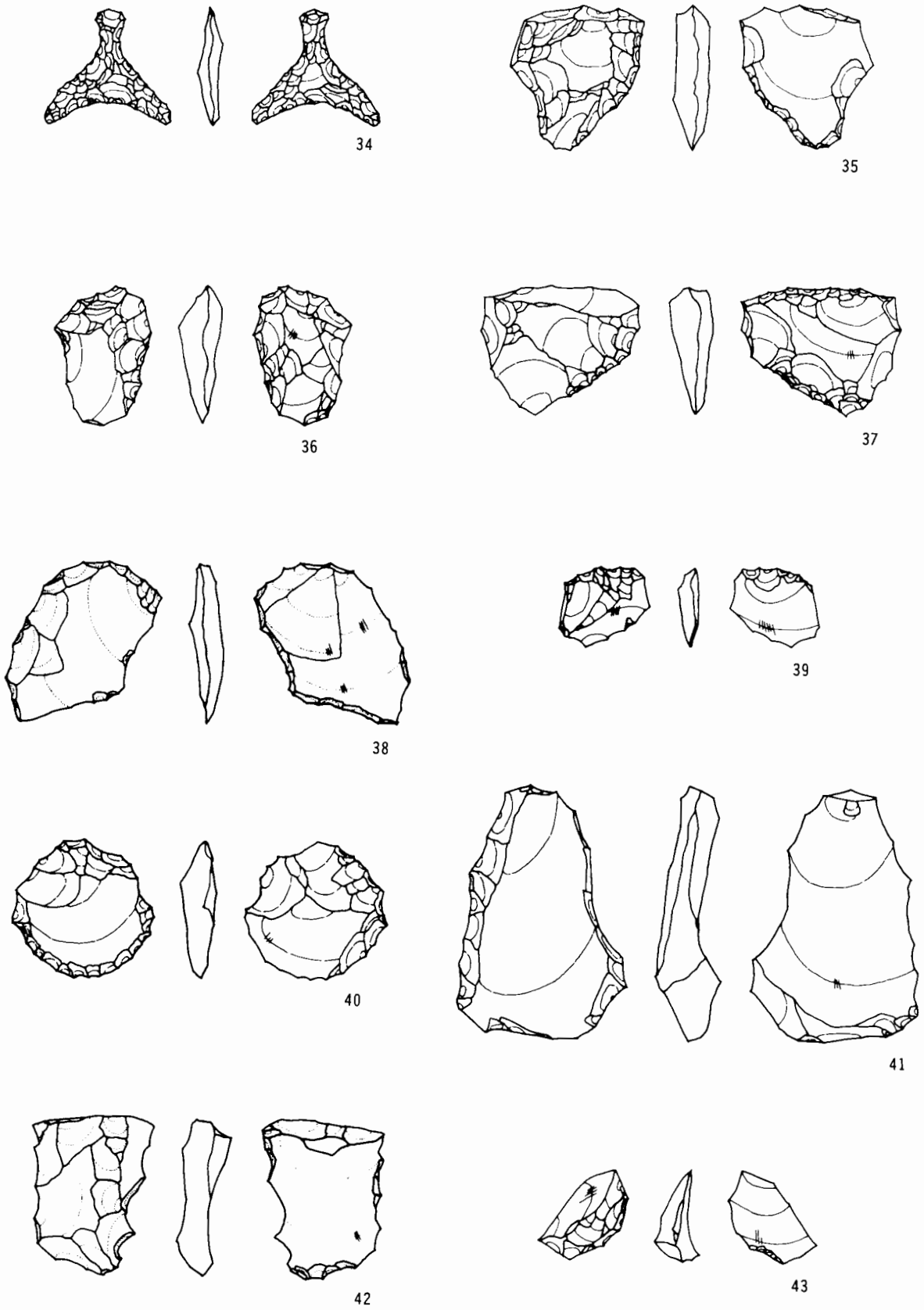

31

32

33



第77図　石器（2）



第78図　石器（3）

掻器（第78図40～43、図版40）

急角度に調整された刃部をもつ石器を掻器とした。総数26点である。石材は、チャート19点、下呂石5点、黒曜石2点である。40はチャート製のいわゆるラウンド・スクレイパーである。

ＲＦ（第79図44～47、図版41）

剥片に二次加工を施すが、刃部を形成していないものをＲＦとした。総数33点である。石材は、チャート26点、黒曜石4点、下呂石3点である。

ＵＦ（第79図48・49、図版41）

素材の鋭い縁辺に残された剥離痕が「刃こぼれ」状を呈するものをＵＦとした。総数57点である。石材は、チャート30点、下呂石26点、その他1点である。

未製品

未製品は、総数29点である。石材は、チャート20点、下呂石8点、黒曜石1点である。

石核（第79図50～53）

総数76点である。石材は、チャート57点（51・52）、下呂石15点（50）、黒曜石4点（53）である。素材として、原石をそのまま用いるものと、分割礫を用いるものがある。ただし、剥片剥離作業が進むと両者の識別が困難である。50は打面転移を行いながら剥片剥離作業を行っている。51は原石を素材として利用している。打面を1か所に設定している。52は分割礫を素材として剥片剥離を行ったものである。53は円礫を分割したようなサイコロ状の剥片を素材とし、打面転移を行っている。

剥片

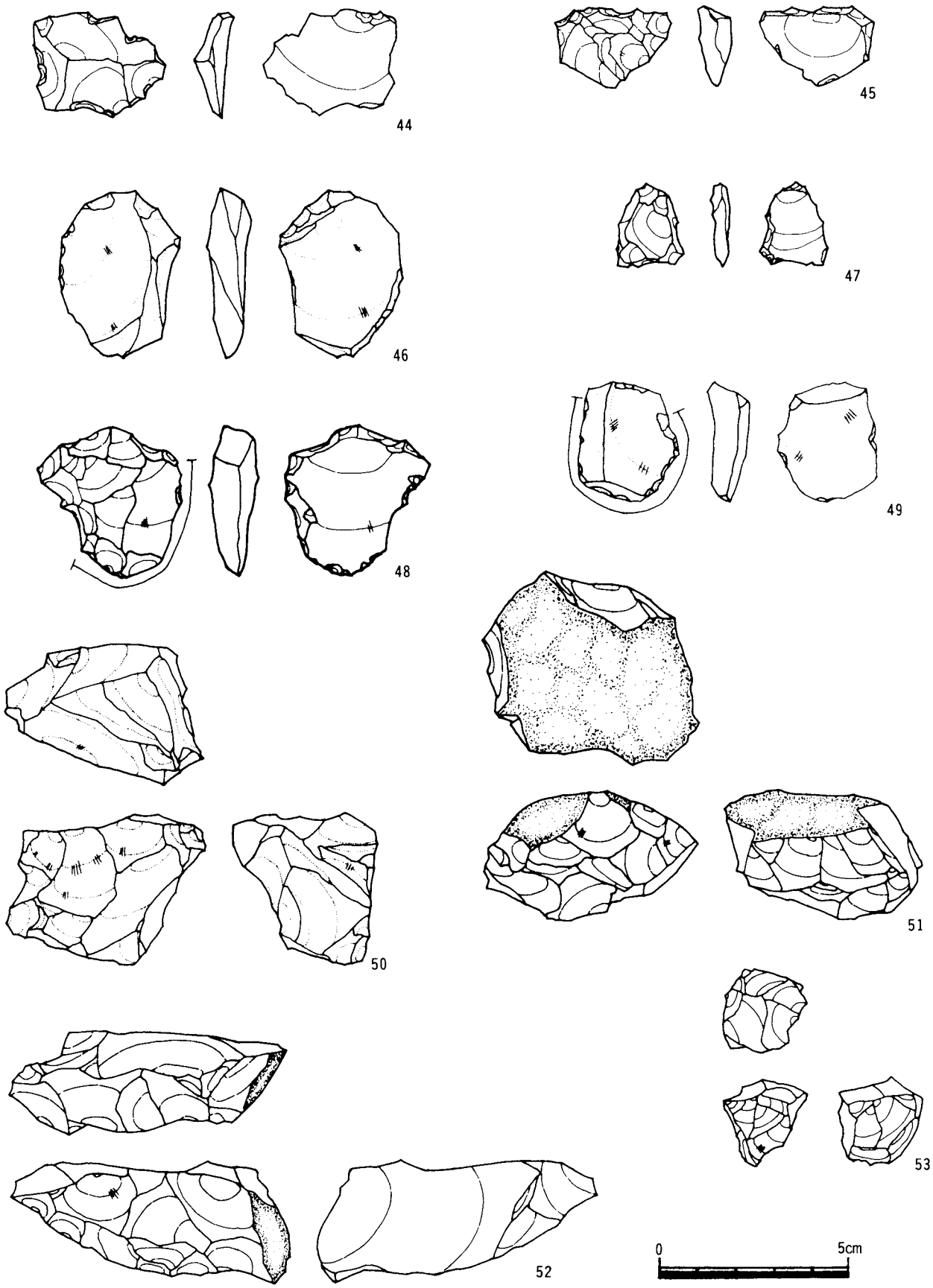
剥片類は、総数3,238点である。石材は、チャート2,417点（74.6%）、下呂石 710点（21.9%）、黒曜石80点（2.5%）、玉髄31点（1.0%）である。「石鏃」の項でふれたように、チャートの比率が高い点が注目される。吉城郡国府町荒城神社遺跡では、下呂石44.9%、玉髄32.0%、チャート20.6%、黒曜石2.5%となっている。

打製石斧（第80・81図、図版41）

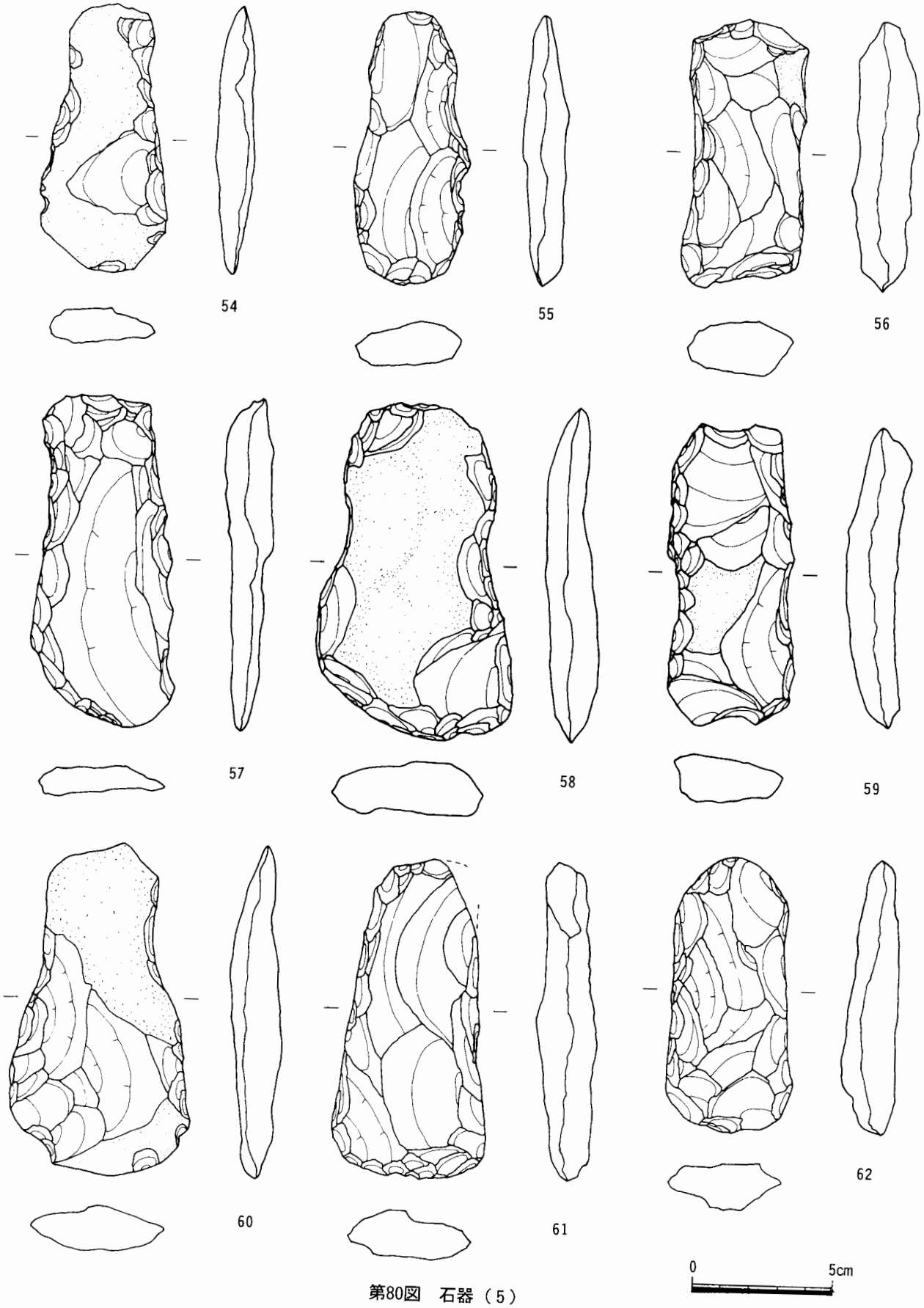
総数98点である。石材は、砂岩49点（50.0%）、凝灰岩28点（28.6%）、流紋岩12点（12.3%）、頁岩4点（4.1%）、ヒン岩2点（2.0%）、緑色片岩2点（2.0%）、片岩1点（1.0%）となっている。形態別では、短冊形（A）が74点（75.6%）、撥形（B）が12点（12.2%）、不明12点（12.2%）である。いわゆる分銅形は確認されなかった。

磨製石斧（第82・83図、図版42）

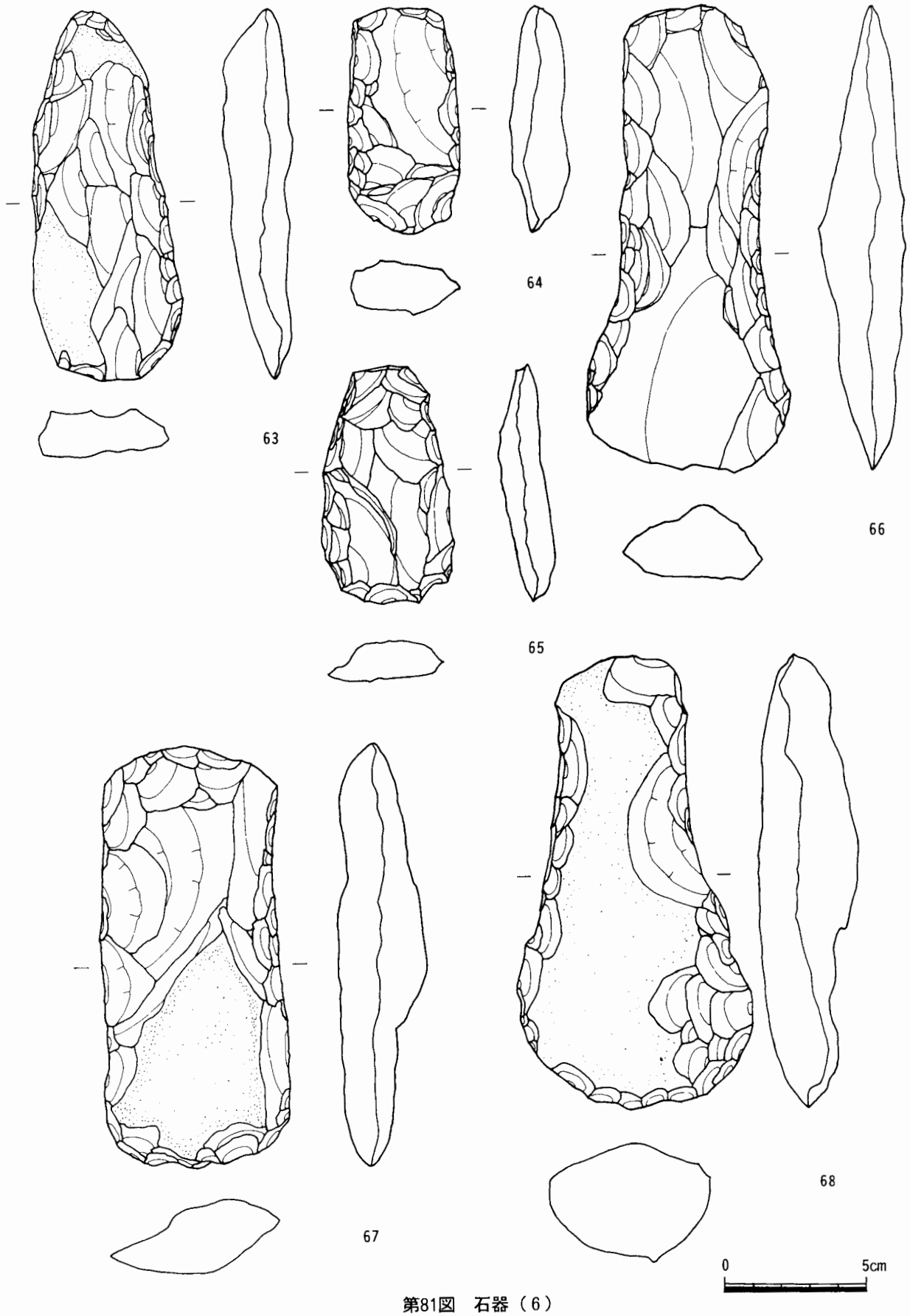
総数54点である。石材は、蛇紋岩44点、砂岩3点、ヒン岩2点、流紋岩・頁岩・凝灰岩・花崗斑岩・礫岩が各1点と、バラエティーに富んでいる。



第79図　石器（4）



第80図　石器（5）



第81図　石器（6）

形態分類としては、一般的に定角式と乳棒状の2種に分けられる。明確に後者と思われるものは、今回の調査では出土しなかった。ここでは、次のように分類する。

A類　定角式の大型（6㎝以上）のもの。

B類　定角式の小型（6㎝以下）のもの。

C類　定角式で上記のA・B不明のもの。

D類　定角式か乳棒状か不明のもの。

形態別では、A類26点、B類2点、C類23点、D類3点となる。

石錘（第84図、図版42）

石錘には、切目石錘、有溝石錘、礫石錘の3種類があり、用途の違いも指摘されている。

切目石錘は5点出土している（82・82）。長軸方向に切り込みがある、いわゆるA種のみである。石材は、砂岩3点、凝灰岩2点である。

有溝石錘は2点出土している（84・85）。84は長軸方向に溝が一周する、いわゆるA種である。石材は頁岩である。85は砂岩で、短軸方向に溝があるが一周していない。石錘の一種と判断する。

礫石錘は35点出土している（86～97）。石材は、凝灰岩23点、砂岩11点、花崗岩1点である。95のように長さが10㎝以上、重さ 500ｇ以上の大きいものもある。

磨石（第85・86図、図版43）

磨石や凹石等は分類することが困難であるが、便宜的に磨面の有無にかかわらず凹みを有するものを凹石とし、それ以外を磨石とする。

総数は152点である。石材は、凝灰岩111点（73.0％）、砂岩34点（22.4％）、流紋岩7点（4.6％）である。

形態に関しては、平面形および断面形によって次のように分類する。

Ⅰ類　平面形が円形のもの。

Ⅱ類　平面形が楕円形のもの。

Ⅲ類　平面形が長方形のもの。

a　断面形が円形のもの。

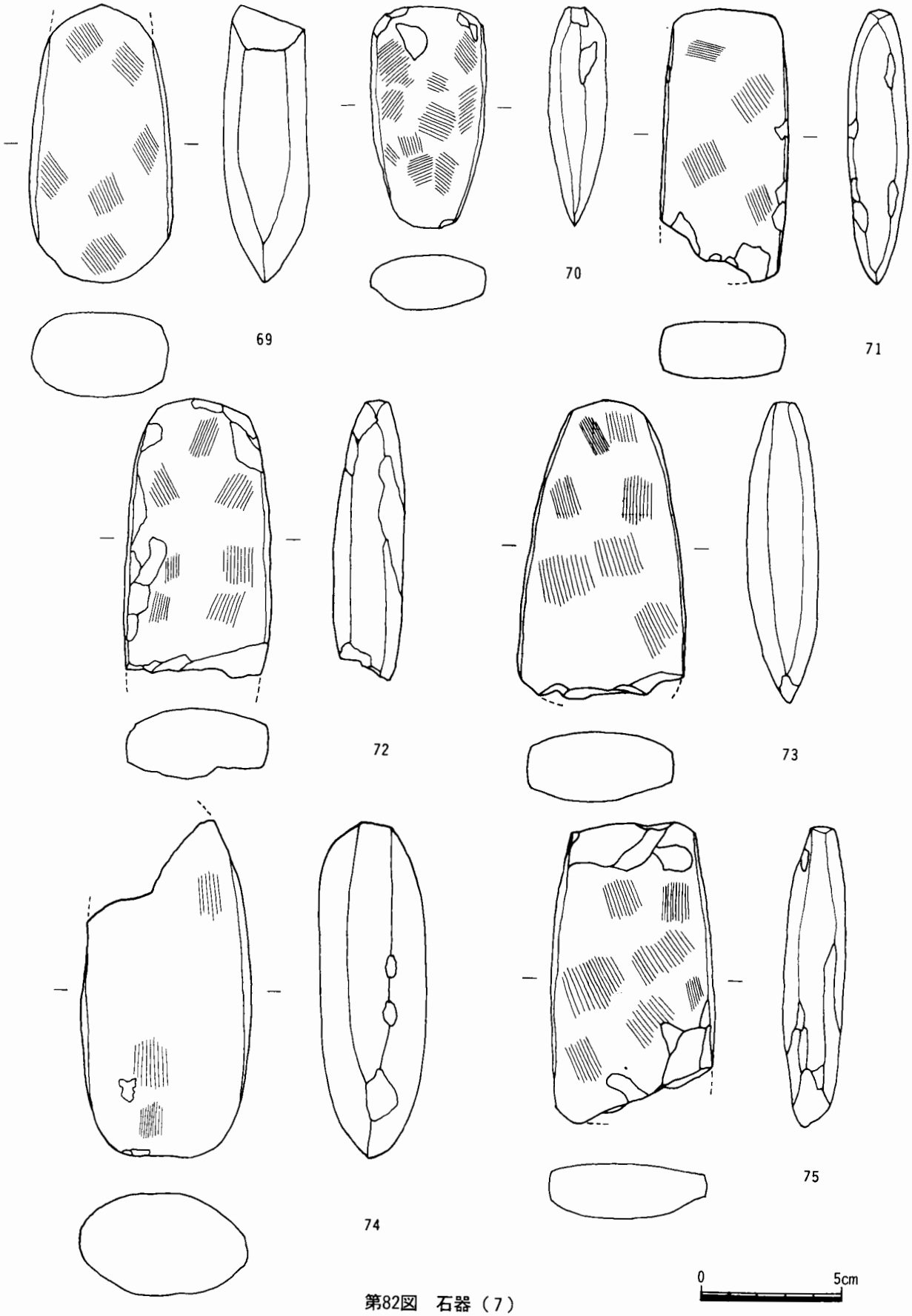
b　断面形が楕円形のもの。

c　断面形が凸レンズ状のもの。

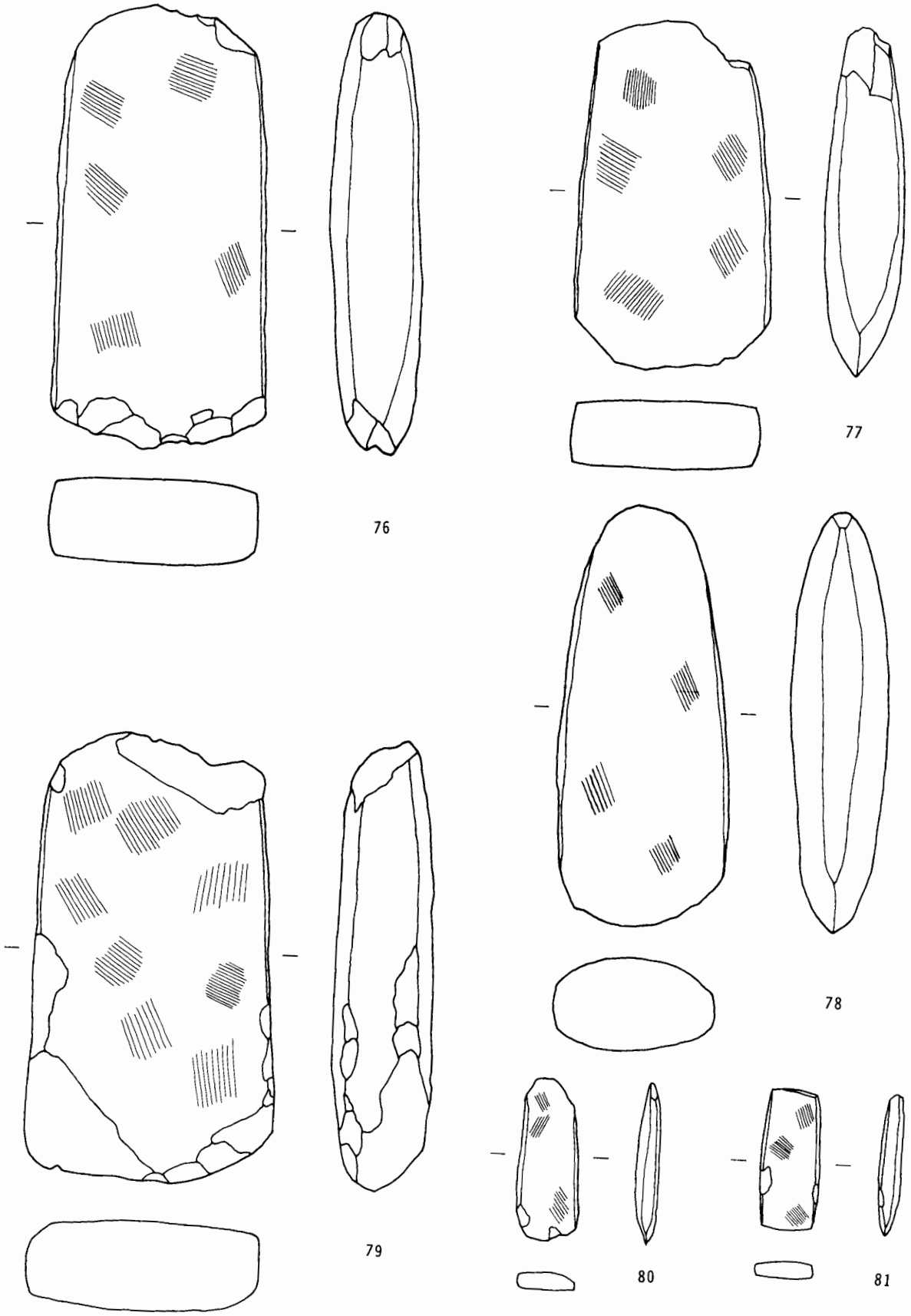
d　断面形が四角形のもの。

Ⅳ類　上記の分類にあてはまらないもの。

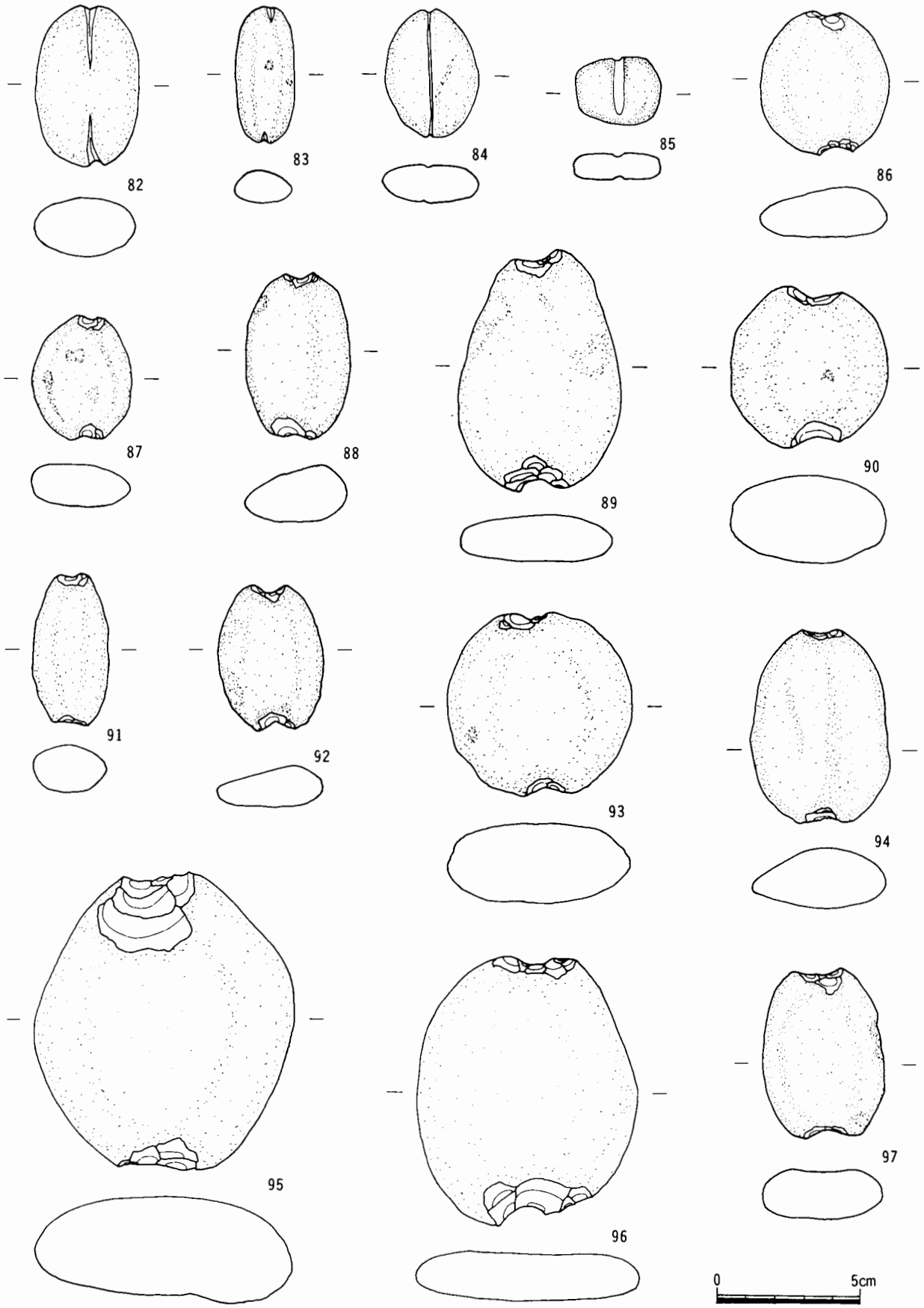
形態別では、Ⅰb類（98）、Ⅱa類（99）、Ⅱb類（100～103）、Ⅱc類（104）、Ⅱd類（105・106）、Ⅲb類（107）、Ⅲd類（108）、Ⅳ類（109・110）がある。Ⅱb類は総数で85点と多く、全体の55.9％ある。Ⅳ類は、16点中10点が砂岩であり石材に偏りが見られる。



第82図　石器（7）



第83図 石器（8）



第84図　石器（9）

第12表　磨石の石材と形態

	Ⅰb類	Ⅱa類	Ⅱb類	Ⅱc類	Ⅱd類	Ⅲb類	Ⅲd類	Ⅳ　類	合　計
凝　灰　岩	20 (18.0)	5 (4.5)	72 (64.9)	3 (2.7)	2 (1.8)	1 (0.9)	2 (1.8)	6 (5.4)	111
砂　　岩	2 (5.9)	2 (5.9)	10 (29.4)	6 (17.6)	0	0	4 (11.8)	10 (29.4)	34
流　紋　岩	1 (14,3)	1 (14.3)	3 (42.8)	0	0	0	2 (28.6)	0	7
合　　計	23 (15.1)	8 (5.3)	85 (55.9)	9 (5.9)	2 (1.3)	1 (0.7)	8 (5.3)	16 (10.5)	152

（　）内は%。石材ごとおよび合計について、形態別に計算したもの。

凹石（第87図、図版43）

前述のように磨面の有無にかかわらず凹みを有するものを凹石とした。総数は156点である。石材は、凝灰岩121点（77.6%）、砂岩26点（16.7%）、安山岩8点（5.1%）、流紋岩1点（0.6%）である。形態分類に関しては、磨石に準ずる。

凹みの数については、いわゆる表面・裏面・その他の面の個数を一覧表に示した。また、凹みの形状については、敲打痕がかたまって浅い凹みをつくっているもの（Ⅰ）、すり鉢状にはっきりと凹みがあるもの（Ⅱ）、右上がり状に細長い凹みを有するもの（Ⅲ）、その他のもの（Ⅳ）とした。

形態別では、磨石と同様に、Ⅱb類が94点（60.2%）と多く、砂岩の中では、Ⅳ類が比較的高い比率を占めた。

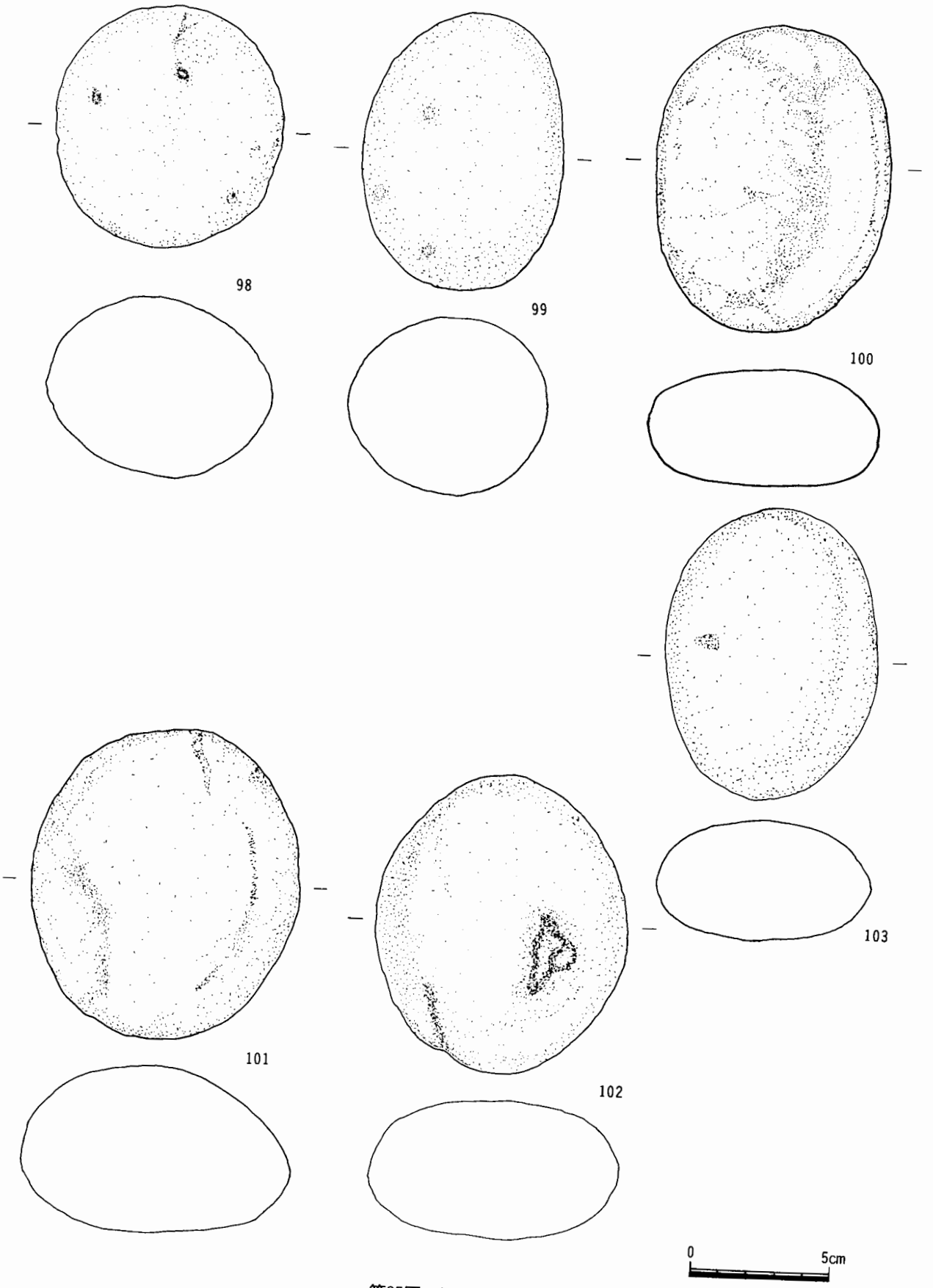
第13表　凹石の石材と形態

	Ⅰb類	Ⅱb類	Ⅱc類	Ⅱd類	Ⅲd類	Ⅳ　類	合　計
凝　灰　岩	18 (14.9)	79 (62.8)	5 (4.1)	0	4 (3.3)	18 (14.9)	121
砂　　岩	0	14 (53.9)	2 (7.7)	1 (3.8)	0	9 (34.6)	26
安　山　岩	3 (37.5)	4 (50.0)	0	1 (12.5)	0	0	8
流　紋　岩	0	0	1	0	0	0	1
合　　計	21 (13.5)	94 (60.2)	8 (5.1)	2 (1.3)	4 (2.6)	27 (17.3)	156

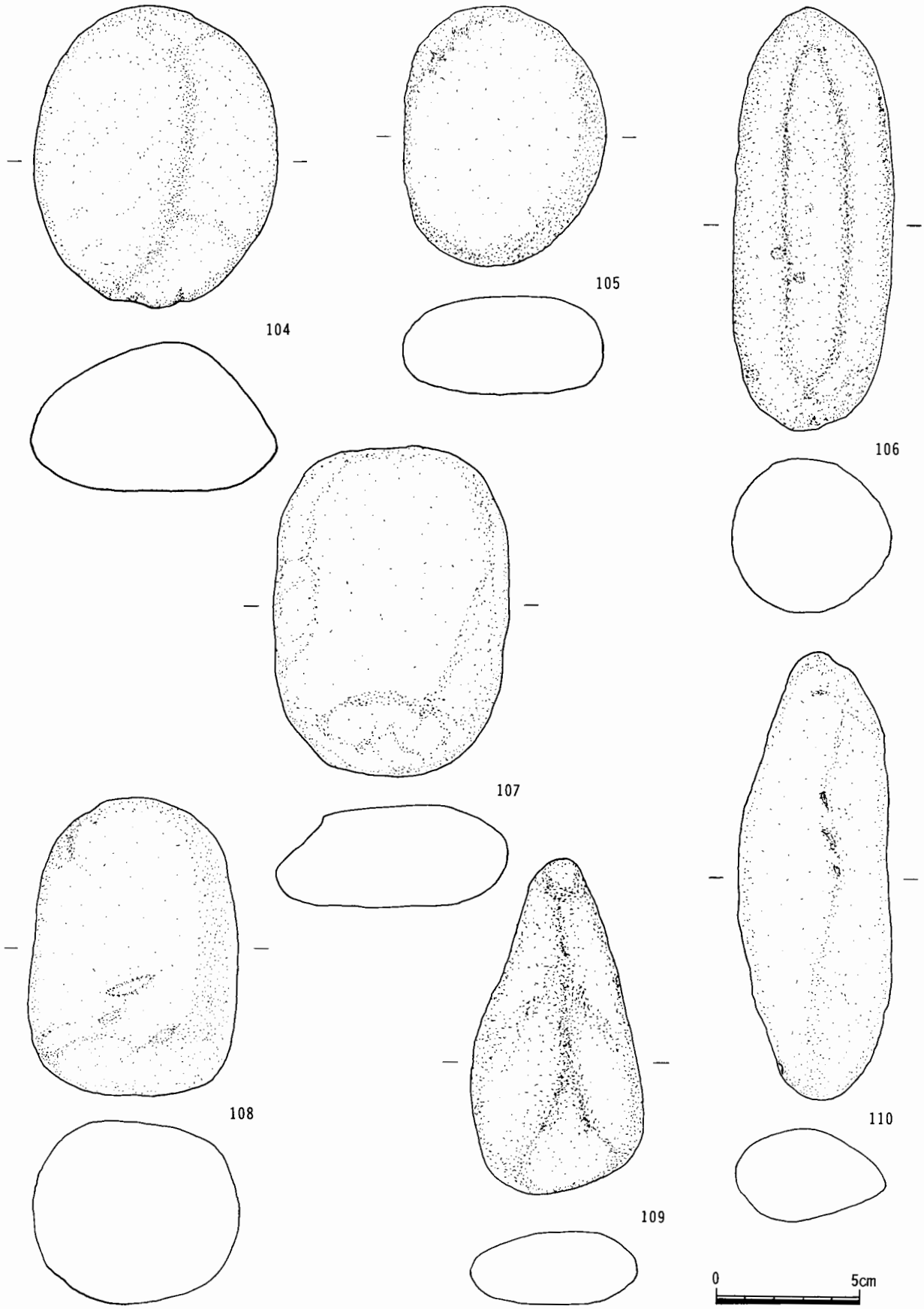
（　）内は%。石材ごとおよび合計について、形態別に計算したもの。

石皿（第88図119～121、図版43）

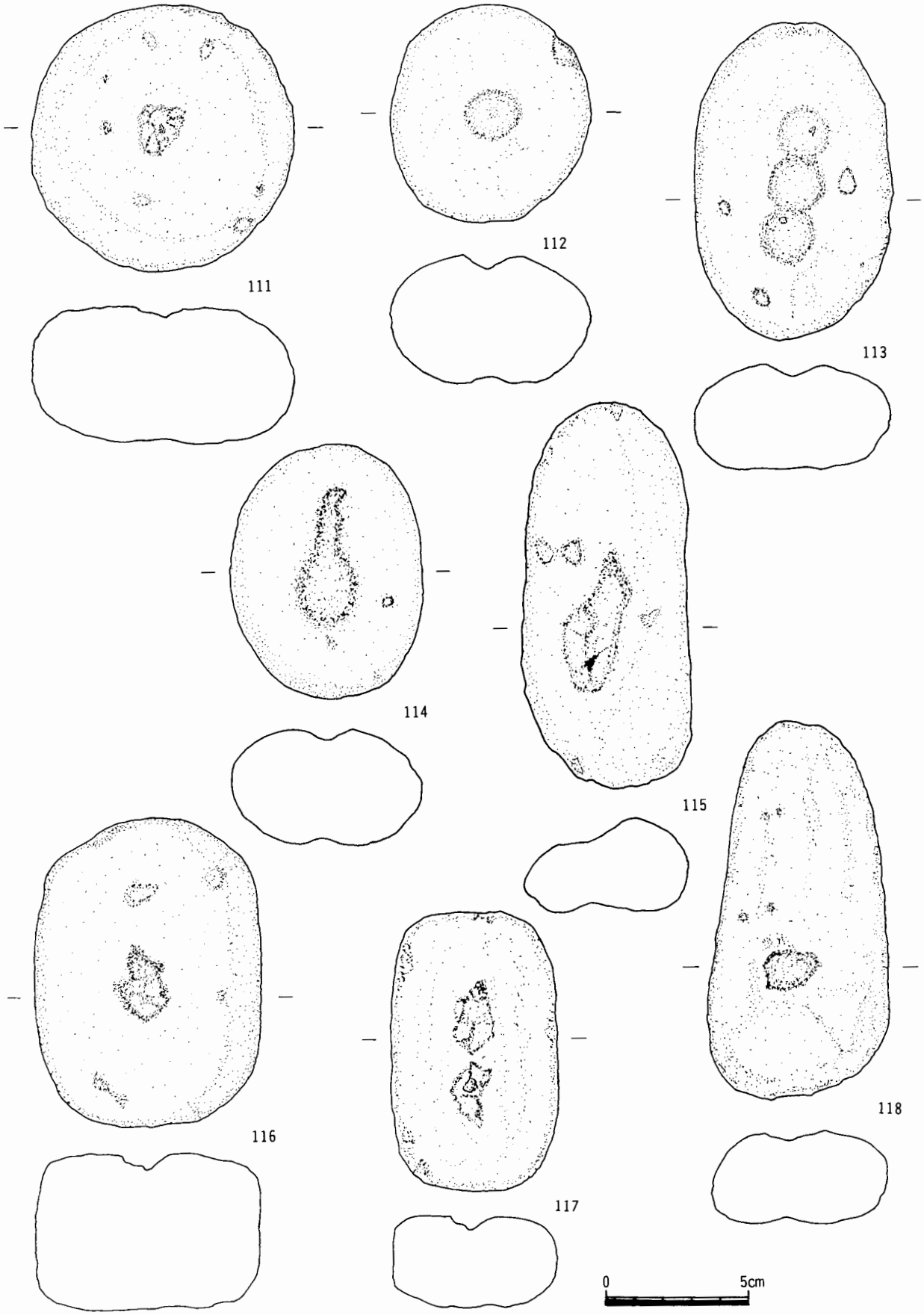
石皿は、17点出土している。石材別では、砂岩12点、流紋岩3点、凝灰岩2点である。119・120は、平面楕円形で、縁を残し中央が溝状に凹むもので、121は、平盤状で偏平な転石を利用したものである。前者は中部山地の縄文中期に多いものであり、後者は縄文早期から見られるものである（安達19



第85図　石器（10）



第86図　石器（11）



第87図　石器（12）

95)。

砥石（第88図122～124、図版43）

砥石は、13点出土している。石材別では、砂岩11点、流紋岩・凝灰岩が各1点である。124は、細い溝を1本有する。

粗製削器（第89図125、図版43）

荒割りした石材をそのままあるいは一部再加工して用いた石器である[2)]。砂岩のものが2点出土している。

玉石（第89図126、図版43）

偏平な平面楕円形の蛇紋岩を磨いている[3)]。図示した1点のみの出土である。

石棒・石刀・石剣（第89図125～131、図版44）

総数17点出土している。石棒5点（128・129)、石刀4点（130)、石剣2点（131)、不明6点（127)である。石材は、粘板岩10点、緑色片岩・凝灰岩が2点、頁岩・白雲母片岩・千枚岩が各1点である。

127は、柄頭の部分に陰刻が施されている。128は、いわゆる鍔をもつ大型石棒である。面取りされたように断面が四角く整形されている。鍔の上側で対になる狭い方の2面に三又文が印刻されている。小島分類のⅡ型になる（小島1986)。類例では、三又文が鍔部に接するように描かれているが、これは離れた部位に描かれている。石材は凝灰岩であるが、吉城郡宮川村のいわゆる塩屋石である[4)]。

石製装身具（第89図132、図版43）

垂飾が1点出土した。砂岩製で、孔は両面穿孔である。

1）石器の分類は、岐阜県教育委員会(1991)『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』を主に参照した。

2・3）名称は吉朝則富(1991)「第4章　遺物　第8節　石器」『垣内遺跡発掘調査報告書』による。

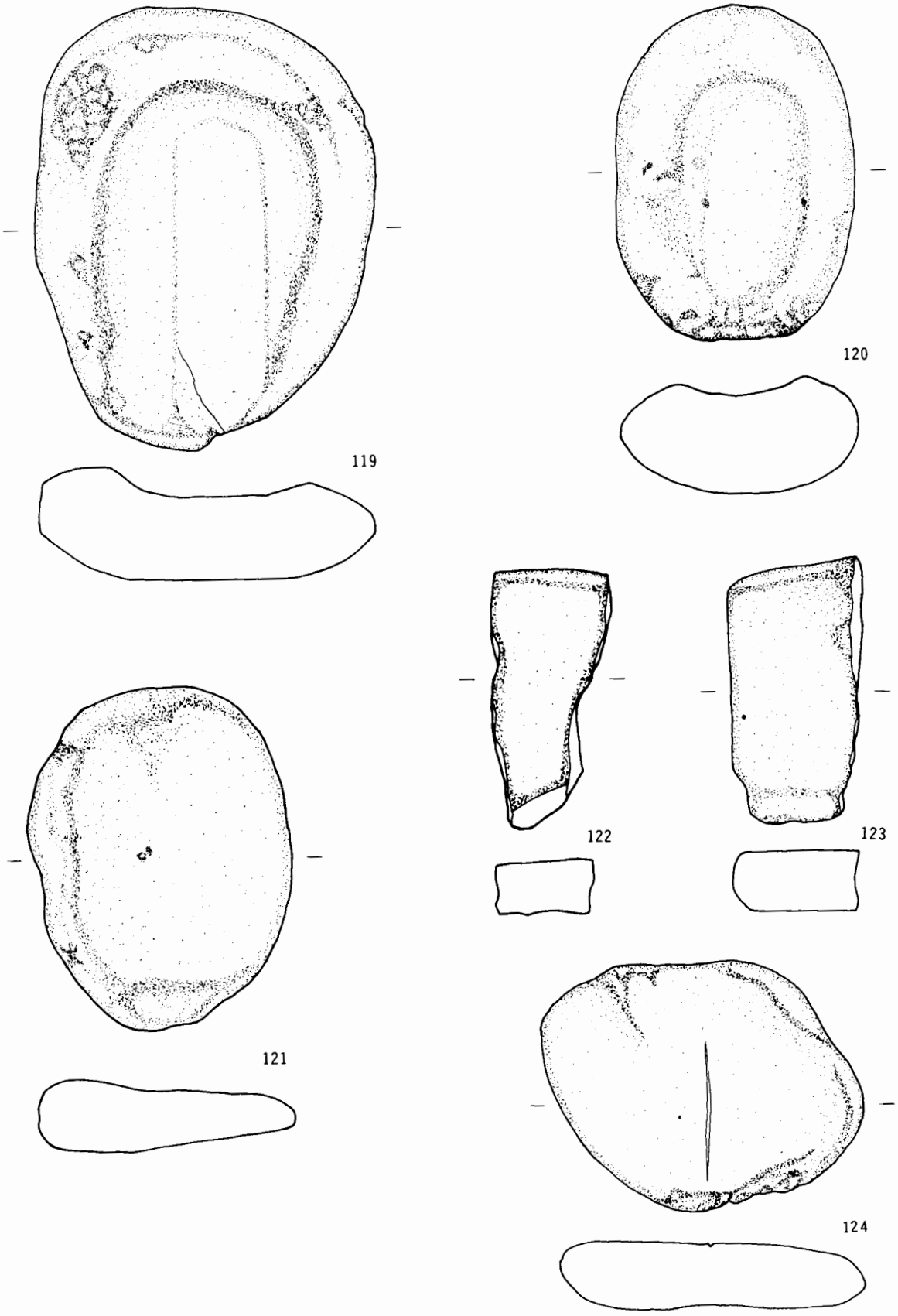
4）林　直樹氏のご教示による。

第3節　土製品

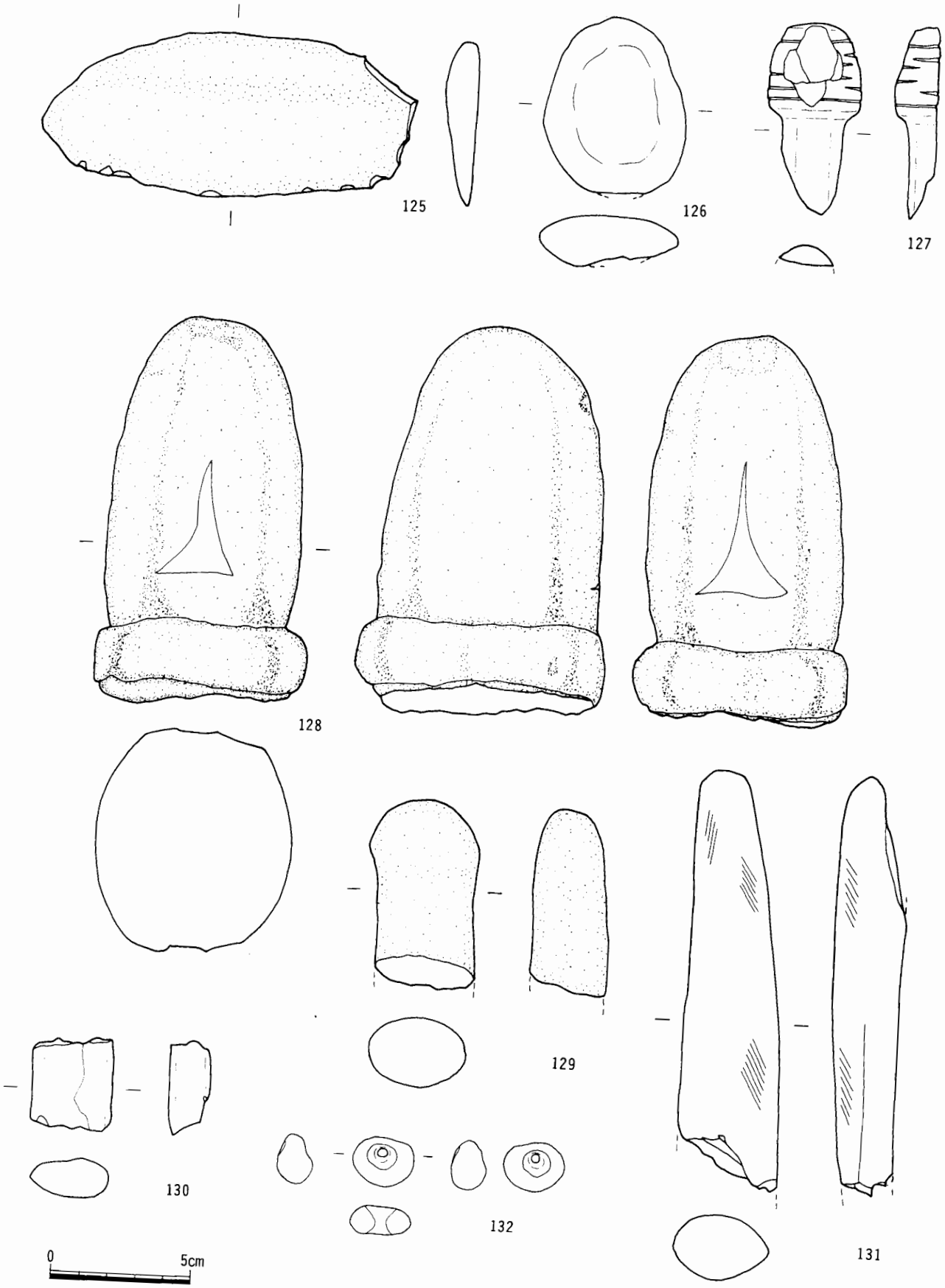
縄文時代の土製品は、土製円盤、土偶および茸形土製品が出土している。

土製円盤（第90図1～9、図版44）

土器片を再加工して円形に研磨した、いわゆる土製円盤が、9点出土している。直径は約3～4㎝である。文様としては、沈線が施されているもの、無文、縄文、撚糸文のものがある。薄手のものがあるが、ほとんど中期のものであろう。



第88図　石器（13）



第89図　石器（14）

土偶（第90図10～12、図版44）

10は板状土偶で2片からなる。約35cm離れた地点から出土した。下半身の部分と左腕から左胸の部分である。体部の中央に1本沈線が縦に走り、短い腕部と脚部には、2本ずつ平行する沈線が施されている。胸部には、短沈線が施文され、乳房のまわりに沈線がめぐっている。

11は、土偶かどうか不明であるが、頭部と想定して図示した。上半分は欠失している。口と思われる刺突があり、その両側に沈線が縦位に施される。顎の部分が突き出た状態になっている。土偶の頭部とすると、その形態から見ていわゆるハート形土偶の可能性も推定されるが、今後の検討を要する。

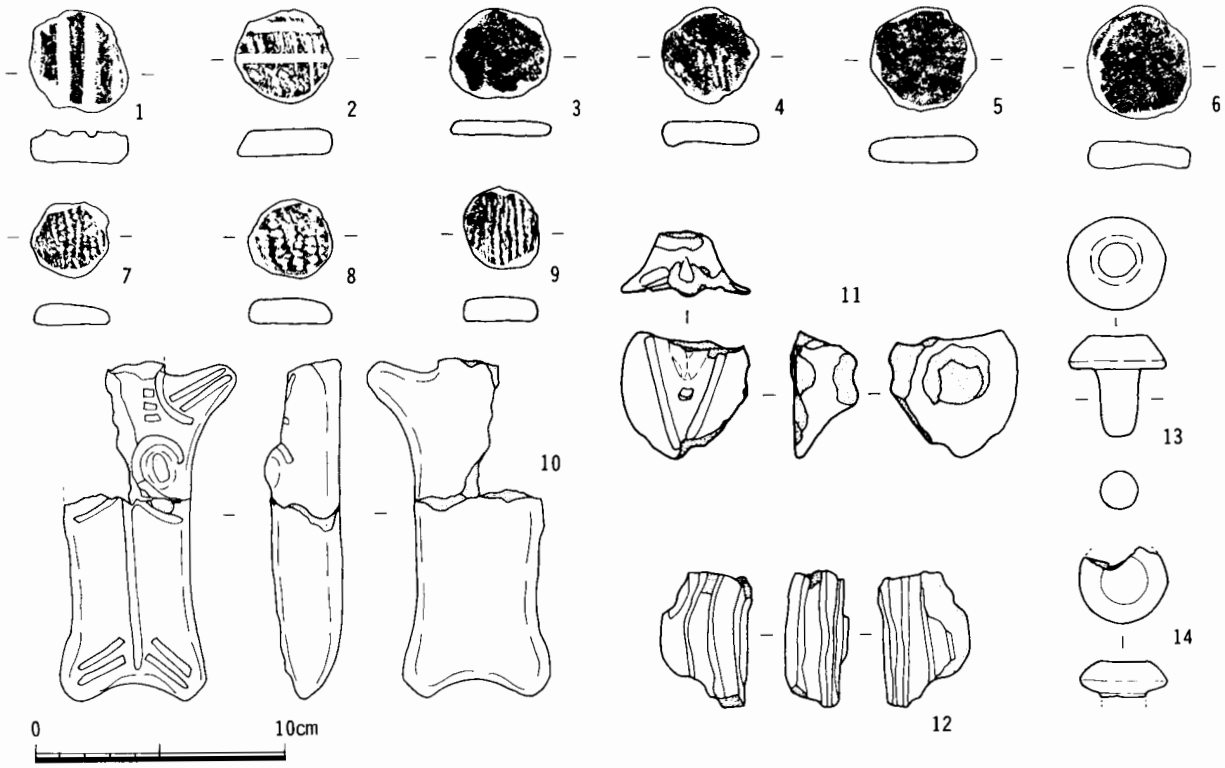
12は胴部左半と思われる。表側、側面、裏側の三面に、縦に沈線が施されている。表面の沈線の曲がり具合から見て胴部と推定した。ただし、表側と裏側は反対の可能性もある。

茸形土製品（第90図13・14、図版44）

13・14は、茸形土製品である。茸の形を模した土製品は、飛騨地方では類例を知らないが、東北地方の青森県・秋田県・岩手県で出土例がある。13はピット（P33）の覆土から出土した。傘部の最大径が3.8cm、茎部の径が1.5cm、高さ4.0cmで、傘部の天井部がややへっこんでいる。赤色顔料の付着痕が観察される。

14は、同様の土製品と思われる破片である。最大径が3.4cmである。

東北地方のものは、よりリアルな作りで、傘部が覆い被さっており、茎部は曲がっているものがある。縄文後期中葉のものである。それに対して岡前遺跡出土のものは、やや小ぶりで、模式的であり、出土状況から見て縄文中期中葉のものと思われる。



第90図　土製品

第4節　植物遺体

植物遺体としては、第1号住居址から炭化種子が、第5号住居址から炭化材が出土した。株式会社パレオ・ラボに同定を委託した。以下、その報告である。

岡前遺跡出土の炭化種子および炭化材

吉川純子・藤根　久（パレオ・ラボ）

1．はじめに

岡前遺跡は、吉城郡古川町杉崎地内の標高約480m前後に所在する遺跡である。遺跡は、平安時代と縄文時代中期の住居跡からなるが、縄文時代早期の押型文土器なども出土している。

遺跡の主体をなす縄文時代中期後半の住居跡からは、炭化した種子や材などが付随して検出されたが、ここではこれらの炭化種子と炭化材について検討する。なお、炭化種子は吉川が担当し、炭化材は藤根が担当した。

2．炭化種子

岡前遺跡より出土した炭化種子の同定結果（第14表）と出土分類群の記載を示す。

出土した炭化種子はオニグルミの内果皮破片とトチノキの種子破片であった。いずれの種類も食用として用いられるため、炭化する機会も多いかと思われる。

オニグルミの内果皮は、緻密で堅く、表面は不規則な凹凸があり滑らかで時に線状の筋が入る。破片は曲面で構成される。

トチノキの種子は、種皮の表面は光沢があり、時に不規則な凹凸がある。内部の子葉はやや緻密だが、ざらついて見え、ブナ科の子葉と違って縦方向の規則的な構造はなく割れ方が不規則である。種皮がはがれた子葉の表面は小さな低い円丘が不規則につまった感じに見える。

第14表　出土炭化種子一覧表

遺構	取上番号	分類群名	産出部位	個数
SB1	1044	オニグルミ	内果皮破片	11＋
SB1	1220	トチノキ	種子破片	1
SB1	1227	オニグルミ	内果皮破片	5＋
SB1	1228	オニグルミ	内果皮破片	3＋
SB1	1270	オニグルミ	内果皮破片	10＋
SB1	1274	オニグルミ	内果皮破片	5＋
SB1	1275	オニグルミ	内果皮破片	4＋
SB1	1287	オニグルミ	内果皮破片	5
SB1	1385	オニグルミ	内果皮破片	2
SB1	1585	トチノキ	種子破片	1
SB1	1590	トチノキ	種子破片	7＋
SB1	1711	トチノキ	種子破片	4
SB1	1713	トチノキ	種子破片	3＋
SB1	1947	トチノキ	種子破片	4
SB1	1949	トチノキ	種子破片	3
SB1	1950	トチノキ	種子破片	1
SB1	1951	トチノキ	種子破片	4
SB1	1954	トチノキ	種子破片	15＋
SB1	1956	トチノキ	種子破片	1
SB1	1957	トチノキ	種子破片	1
SB1	2323	トチノキ	種子破片	1

（＋は他に微少な破片があることを示す）

3．炭化材

試料は、縄文時代中期後半の住居跡ＳＢ５覆土から出土した炭化材である。比較的硬質で保存の良い炭化材について、実体顕微鏡下で横断面について観察した。試料は、片刃カミソリなどを用いて横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柾目と同義）の３断面について作り、直径１㎝の真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSMT－100型）で観察する。

第15表　ＳＢ５覆土出土炭化材の樹種

遺　構	時　代	樹　種	備　考
ＳＢ５	縄文時代中期後半	ク　リ	比較的多量

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科（図版50）

年輪のはじめに大型の管孔が１～３列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性であり、時に２細胞幅で、２～15細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の温帯から暖帯にかけて分布する樹高20m、幹径１ｍに達する落葉広葉樹である。

ここで検討した試料は、いずれもクリの炭化材である。全国的に、この縄文時代中期頃の住居跡からは、建築材あるいは燃料材としてクリの炭化材が検出されることが多い。当然、この時期においてクリ堅果（果実）は重要な食糧源であり、その母植物である樹木を伐採し、建築材や燃料材などに利用するのはやや不自然に思われる。このことに対し、千野(1983)は、クリが重要な食糧源のほか木材源あるいは燃料源としての役割を指摘し、積極的なクリの保護、管理があったとしている。一方では、周辺にクリが優占していたとする花粉化石の資料も多い（例えば清永1993)。岡前遺跡においても、クリが優占していたことが予想されるが、今後機会があれば確認したいところである。

引用文献

千野裕道(1983)「縄文時代のクリと集落周辺植生――南関東地方を中心に――」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅱ：25－42

清永丈太(1993)「花粉分析からみた相模平野西部，歌川低地周辺域における完新世後半の植生変遷史」『第四紀研究』32：31－40

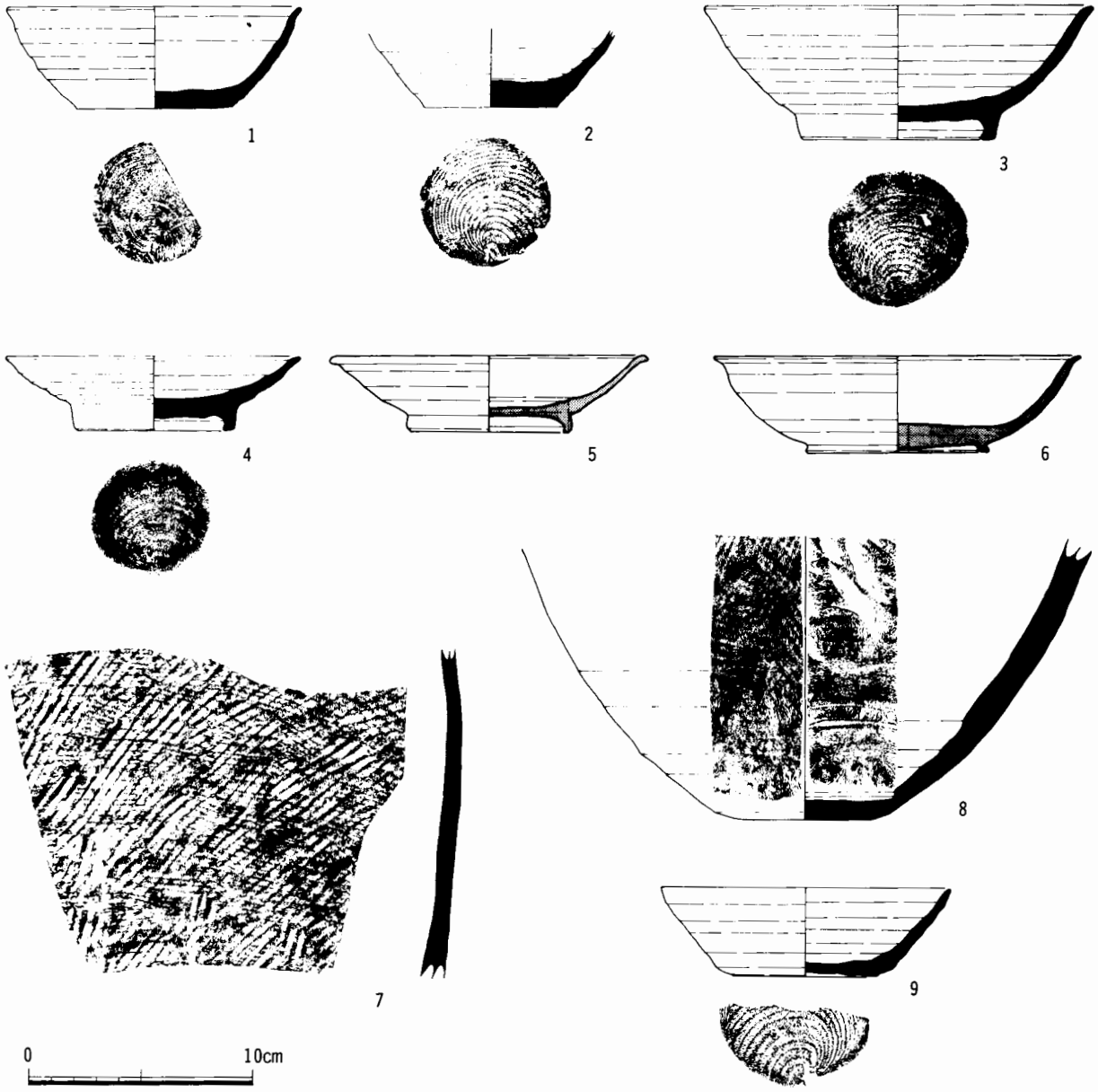
第５節　歴史時代の遺物

１　土器および陶磁器類

須恵器、灰釉陶器、土師器および中近世の陶磁器類が出土している[1)]。遺構から出土したものは、第６号住居址とＳＫ６のものである。Ｊ７・８区でほぼ完形あるいは完形に近い須恵器の鉢・高坏が出土した。遺構の存在について精査したが確認できなかった。

包含層から出土のものは、第Ⅱ層の上層（黒褐色土層）からのものである。調査区全域から出土している。

須恵器の坏・碗類に関しては、高台の無いものをＡ、高台のあるものをＢとした。



第91図　遺構出土の土器

第６号住居址出土の土器（第91図１～８、図版45）

須恵器の碗Ａ（１・２）および須恵器の碗Ｂ（３）がある。４は須恵器の皿である。口縁はやや外反し、高台は直立しており内面は内湾する。糸切り底である。いずれも９世紀後半のものであろう。６は灰釉陶器の碗Ｂである。底部が厚くなっており、口縁がやや外反している。内面ハケ塗りで角高台で外反する。９世紀後半黒笹14号期に比定できる。５は同じく内面ハケ塗りの灰釉陶器の皿である。７・８は須恵器の甕の胴部および底部である。

ＳＫ６出土の土器（第91図９、図版45）

９は須恵器の碗Ａである。糸切り底で、やや上げ底になっている。開き気味に立ち上がる器形である。

包含層出土の土器（第92～94図、図版45～48）

須恵器および土師器が出土している。

須恵器の坏類に関しては、古墳時代のものもあるが、概ね８世紀を中心とした時期のものである。10の坏はたちあがりがやや内傾する。７世紀初めＴＫ４３～ＴＫ２０９にかけてのものであろう。外面に自然降灰が見られる。

坏Ａ（11～24）は、直線的に立ち上がり、やや開き気味のものが多い。坏Ｂ（25～38）は口径が12㎝以上で外反気味に直線的に立ち上がる器形のものと、口径12㎝以下で、直立するものや内湾するものがある。39・40は碗Ａ、41・42は碗Ｂである。

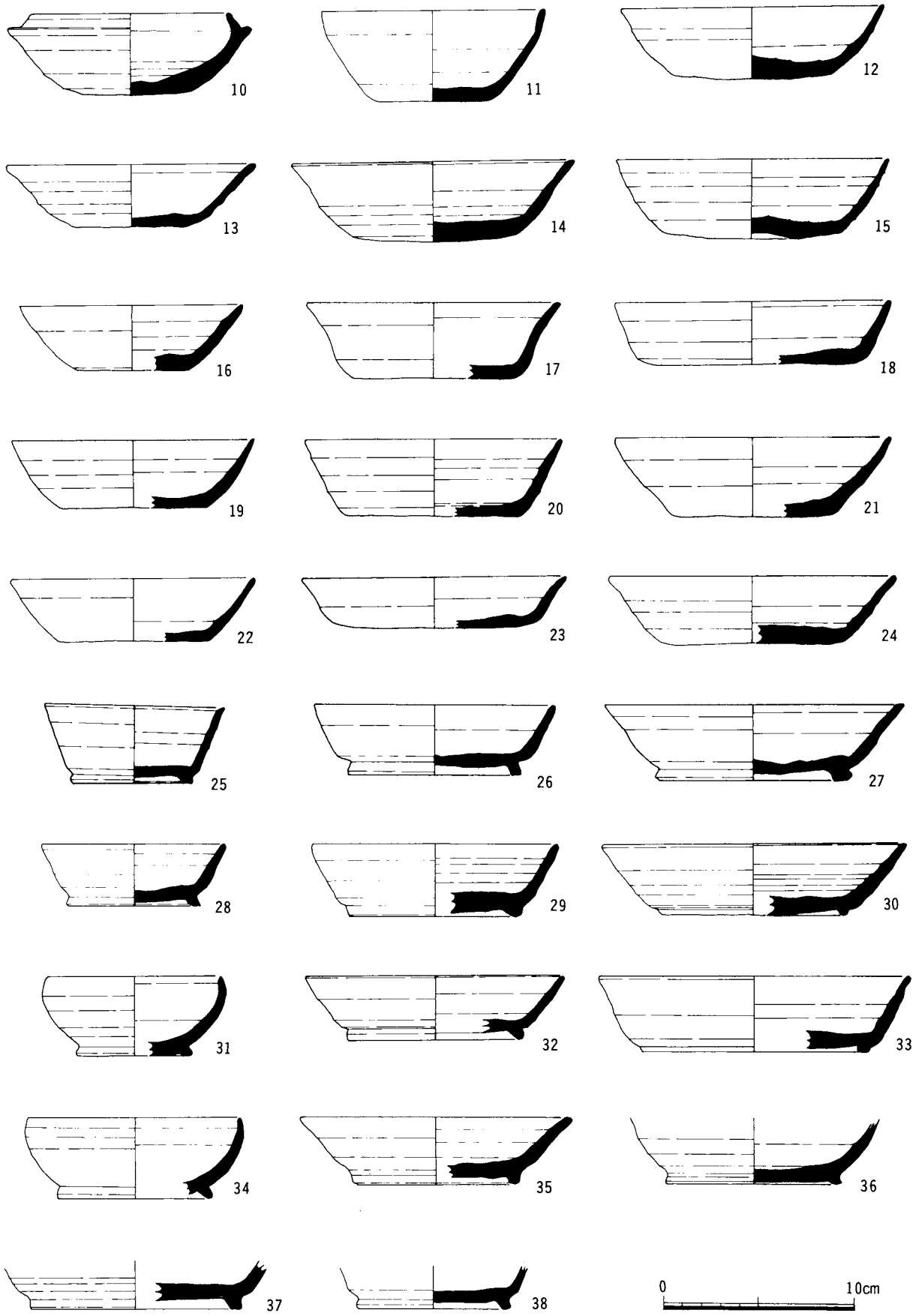
須恵器の蓋類（43～48）に関しては、宝珠つまみがつき、かえりを有する43・44のようなものもあるが、端部を折り返したものがほとんどである。

49は盤、50は長頸瓶の胴部であろう。51は平瓶の一部である。52の高坏は、口縁部は開き気味で、裾部は急に開き、端部はやや尖る。53は短頸壺、54は鉢、55は甕である。いずれも８世紀中頃のものと思われる。

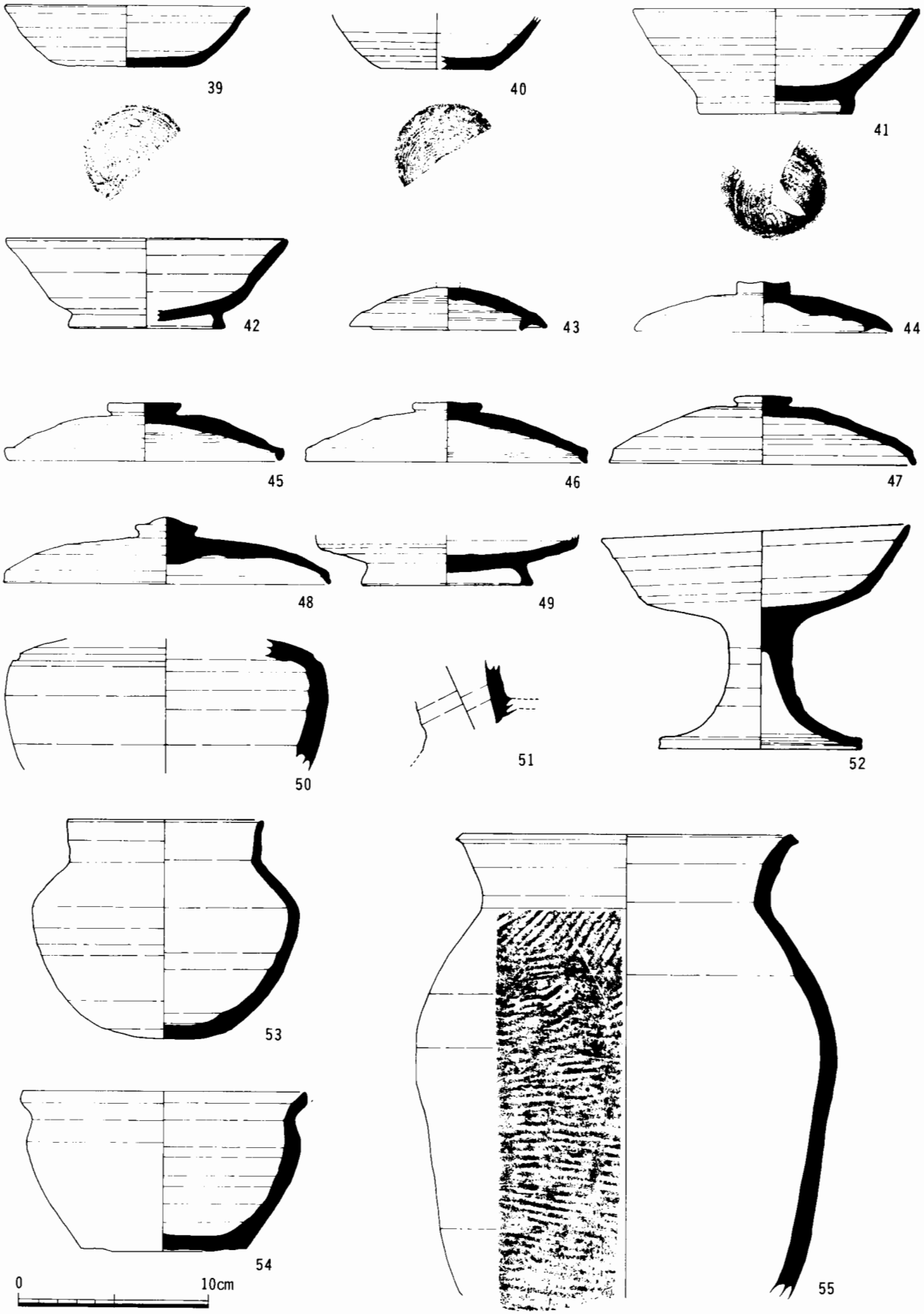
56・57は須恵器の甕の肩部のあたりである。

土師器は皿、高坏、甕が出土している。58～66は手捏ねの皿である。口径は6.6～13.2㎝、高さは1.4～3.0㎝である。67は高坏の脚部である。68～71は、内外面にハケ目を施した甕形土器である。68～70は口縁部の屈曲は弱く、外面は縦位に、内面は横位にハケ目が施してある。68は器高11.6㎝の小型のものである。71は丸みをおびた胴下半部である。72は、糸切り底である。

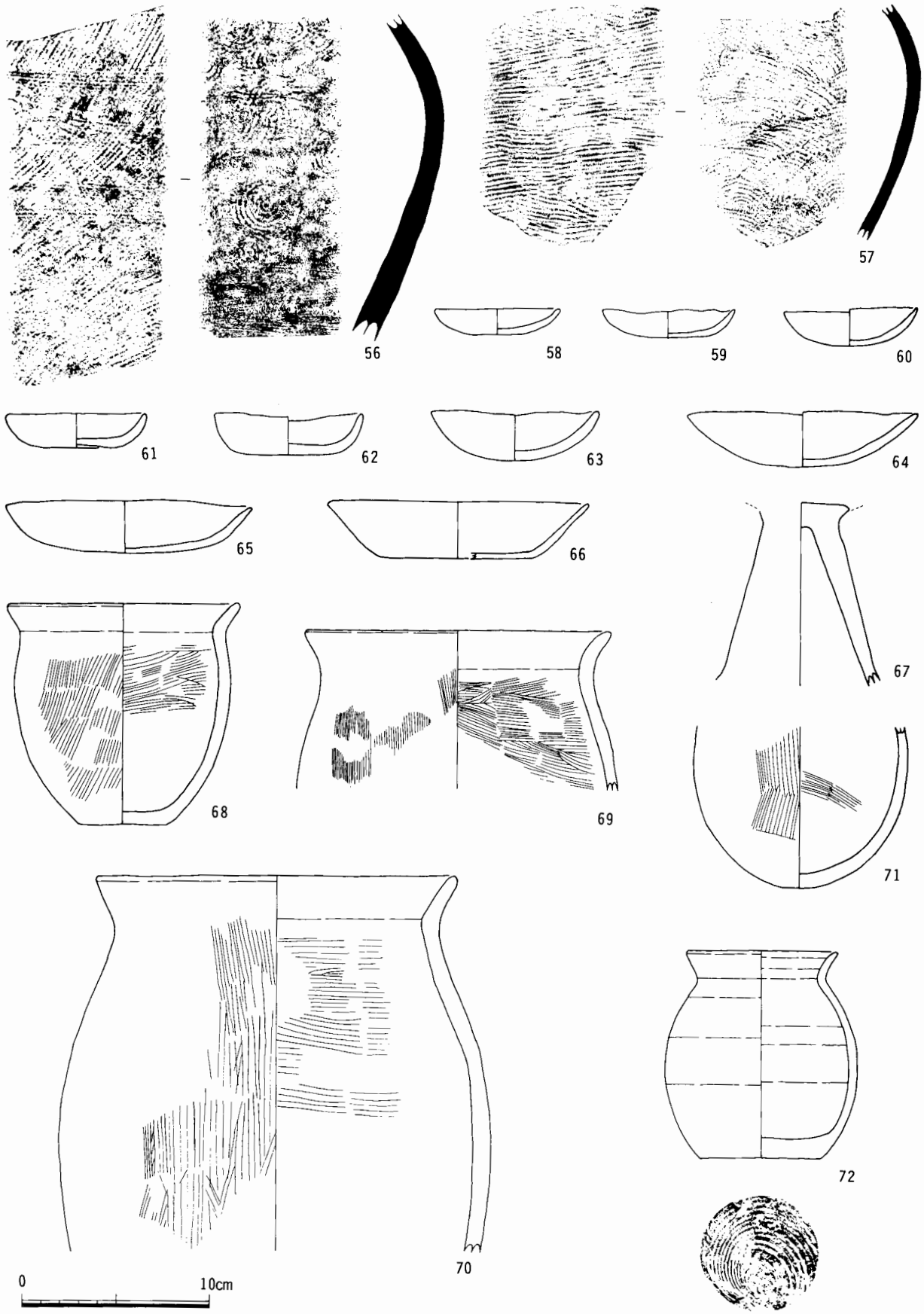
１）須恵器・灰釉陶器・土師器については河合英夫氏に、陶磁器類は田口昭二氏に、それぞれ一部の遺物を実見して頂き、ご教示を得た。



第92図　包含層出土の土器（1）



第93図　包含層出土の土器（2）



第94図　包含層出土の土器（３）

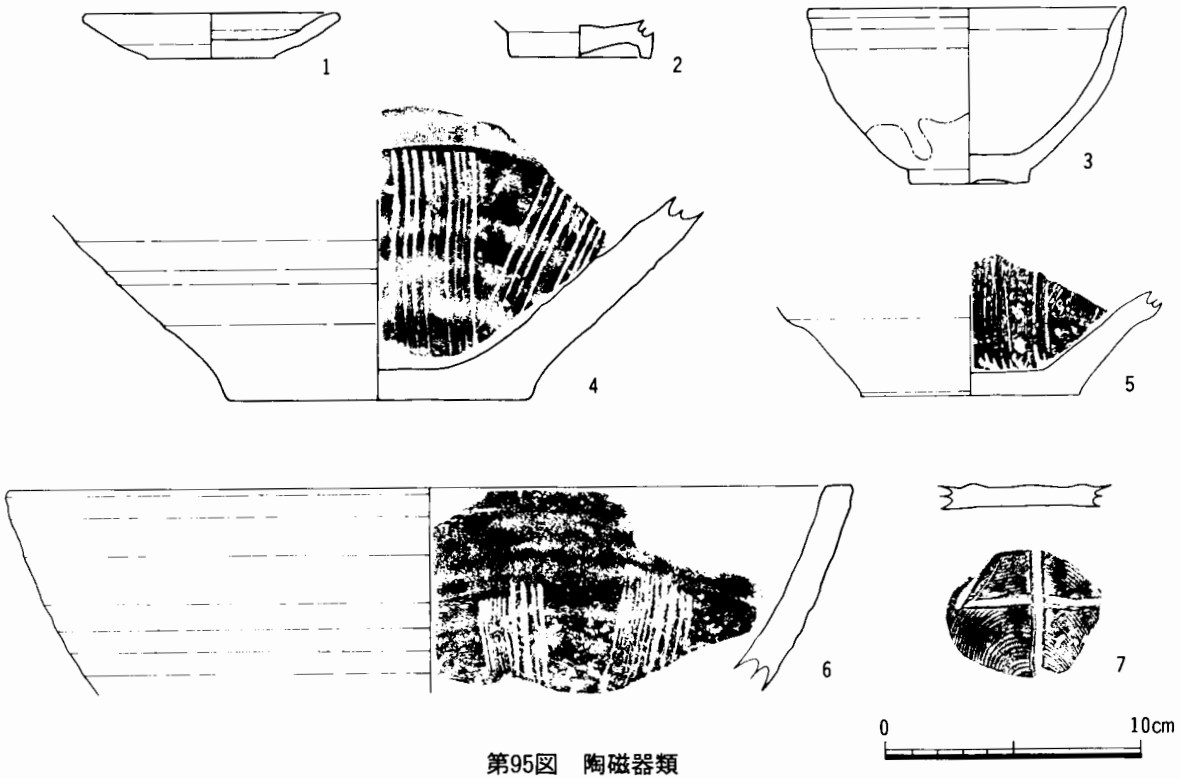
第16表　土器観察表

番号	器　種	出土区	法　量			胎土	焼成	色　　調	遺　存	備　　考
			口径	底径	器高					
1	須恵器 碗A	SB 6	13.0	7.0	4.4	密	良好	暗灰黄色(2.5Y5／2)	口縁部1／4 底部3／4	内外面とも回転ナデ 底部糸切り
2	須恵器 碗A	SB 6	9.0	6.0	3.4	密	良好	灰褐色(7.5YR4／2)	胴部1／3 底部	内外面とも回転ナデ 底部糸切り
3	須恵器 碗B	SB 6	16.8	8.4	5.9	密	良好	暗灰黄色(2.5Y5／2)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
4	須恵器 皿	SB 6	13.0	7.1	3.3	密	良好	灰褐色(7.5YR4／2)	完形	内外面とも回転ナデ 底部糸切り
5	灰釉陶器 皿	SB 6	13.6	6.9	3.4	密	良好	灰白色(2.5Y7／1)	口縁部1／2 底部3／4	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
6	灰釉陶器 碗B	SB 6	16.0	7.8	4.3	密	良好	外)灰黄色(2.5Y6／2) 内)灰白色(5Y7／1)	1／2	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
7	須恵器 甕	SB 6	－	－	－	密	良好	外)灰オリーブ色(5Y6／2) 内)灰色(5Y6／1)	胴部片	内外面とも叩き後ナデ
8	須恵器 甕	SB 6	－	5.6	－	密	良好	灰色(5Y6／1)	胴下半部	内外面とも叩き後ナデ
9	須恵器 碗A	SK 6	12.6	6.4	4.0	密	良好	褐色(7.5YR4／3)	1／2	内外面とも回転ナデ 底部糸切り
10	須恵器 坏A	I 11	10.3	5.0	4.3	密	良好	黄灰色(2.5Y6／1)	完形	内外面とも回転ナデ 自然降灰
11	須恵器 坏A	C 19	11.6	5.6	4.8	密	良好	外)暗灰黄色(2.5Y4／2) 内)にぶい黄褐色(10YR5／3)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
12	須恵器 坏A	C 18	13.6	8.1	3.8	密	良好	灰色(7.5Y6／1)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部ヘラケズリ
13	須恵器 坏A	C 19	13.0	5.8	3.3	密	良好	灰色(10Y5／1)	口縁部1／4 底部ほぼ完形	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
14	須恵器 坏A	H 14	14.8	7.4	4.2	密	良好	灰色(5Y5／1)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
15	須恵器 坏A	C 18	14.2	9.2	4.0	密	良好	灰色(7.5Y6／1)	1／2	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
16	須恵器 坏A	C 18	11.8	6.0	3.4	密	良好	にぶい黄色(2.5Y6／3)	1／5	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
17	須恵器 坏A	C 18	13.2	8.6	4.0	密	良好	灰色(5Y4／1)	1／5	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
18	須恵器 坏A	C 18	14.2	8.6	3.3	密	良好	灰色(5Y1／6) 灰色(5Y1／5)	口縁部1／8 底部1／4	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
19	須恵器 坏A	J 5	12.8	7.8	3.6	密	良好	灰色(N5／)	1／2	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
20	須恵器 坏A	C 18	13.5	9.3	4.1	密	良好	灰オリーブ色(5Y5／2)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
21	須恵器 坏A	C 18	14.2	8.2	4.2	密	不良	灰白色(2.5Y8／2)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
22	須恵器 坏A	C 18	13.0	8.0	3.3	密	良好	灰色(5Y6／1)	1／4	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
23	須恵器 坏A	H 14	13.8	9.0	2.7	密	良好	灰色(N6／) 灰色(N5／)	1／4	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
24	須恵器 坏A	H 13	14.8	8.2	3.6	密	良好	オリーブ灰色(5GY5／1)	口縁部1／5 底部1／3	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
25	須恵器 坏B	C 19	9.4	6.3	4.1	密	良好	灰色(7.5Y4／1)	口縁部1／2 底部3／4	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
26	須恵器 坏B	C 14	12.6	9.2	3.7	密	良好	黄灰色(2.5Y5／1)	1／8	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
27	須恵器 坏B	J 5	15.6	8.4	4.0	密	良好	暗黄灰色(2.5Y5／2) 黄灰色(2.5Y6／1)	1／4	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
28	須恵器 坏B	C 19	9.6	7.2	3.3	密	良好	黄灰色(2.5Y5／1) 灰黄色(2.5Y6／2)	1／2	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
29	須恵器 坏B	H 14	12.8	9.0	3.9	密	良好	灰色(7.5Y5／1)	1／4	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
30	須恵器 坏B	H 13	15.8	9.6	3.8	密	良好	灰色(7.5Y6／1)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
31	須恵器 坏B	H 13	9.2	6.0	4.2	密	良好	灰色(7.5Y6／1)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
32	須恵器 坏B	C 18	13.6	9.2	3.4	密	良好	灰色(5Y6／1)	1／10	内外面とも回転ナデ 底部回転ナデ
33	須恵器 坏B	H 13	16.2	11.8	4.0	密	良好	灰色(5Y5／1)	1／5	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
34	須恵器 坏B	H 13	11.2	8.2	4.3	密	良好	外)灰色(7.5Y5／1) 内)灰色(7.5Y6／1)	1／8	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
35	須恵器 坏B	B 18	14.4	8.6	3.6	密	良好	黄灰色(2.5Y6／2)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
36	須恵器 坏B	B 19	13.5	9.2	3.5	密	良好	外)暗灰色(N3／) 内)灰色(10Y5／1)	1／8	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り

番号	器種	出土区	法量			胎土	焼成	色調	遺存	備考
			口径	底径	器高					
37	須恵器 坏B	I 11	14.0	11.2	2.6	密	良好	灰色(N4／) 灰色(N5／)	胴部下半 底部1／4	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
38	須恵器 坏B	M 6	10.0	8.0	2.3	密	良好	灰色(7.5Y5／1)	底部1／2	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
39	須恵器 碗A	I 7	12.5	6.2	3.2	密	良好	灰色(7.5Y4／1) 暗灰黄色(2.5Y5／2)	口縁部1／4 底部1／2	内外面とも回転ナデ 底部糸切り
40	須恵器 碗A	C 18	11.0	5.8	2.9	密	良好	灰色(10Y4／1)	口縁部1／4 底部1／2	内外面とも回転ナデ 底部糸切り
41	須恵器 碗B	M 6	14.8	8.0	5.5	密	良好	暗赤褐色(2.5YR3／4) にぶい赤褐色(2.5YR5／3)	口縁部1／6 底部1／3	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
42	須恵器 碗B	L 7	14.8	8.2	4.7	密	良好	灰褐色(7.5YR5／2) にぶい赤褐色(5YR4／3)	1／2	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
43	須恵器 蓋	J 7	10.4	—	3.2	密	良好	黄灰色(2.5Y6／1) 灰白色(2.5Y7／1)	つまみ欠損	天井部3／4回転ヘラケズリ
44	須恵器 蓋	B 19	13.4	—	2.6	密	良好	灰色(5YR6／1) 暗灰黄色(2.5Y4／2)	1／2	天井部1／3回転ヘラケズリ
45	須恵器 蓋	C 18	14.4	—	3.1	密	良好	灰色(5Y6／1) 灰白色(5Y7／1)	ほぼ完形	天井部2／3回転ヘラケズリ
46	須恵器 蓋	C 18	14.6	—	3.1	密	良好	灰色(5Y6／1) 灰色(5Y4／1)	1／2	天井部3／4回転ヘラケズリ
47	須恵器 蓋	C 18	17.8	—	3.6	密	良好	灰オリーブ色(5Y6／2) 灰色(5Y6／1)	1／6	天井部1／3回転ヘラケズリ
48	須恵器 蓋	C 18	15.4	—	3.5	密	良好	褐灰色(10YR6／1) 褐灰色(10YR5／1)	1／4	天井部2／3回転ヘラケズリ
49	須恵器 蓋	B 18	13.8	9.0	2.7	密	良好	暗灰黄色(2.5Y4／2)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部回転ヘラケズリ
50	須恵器 長頸瓶	L 4	—	—	—	密	良好	青灰色(10BG5／1) 暗青灰色(10BG4／1)	胴部1／5	内外面とも回転ナデ
51	須恵器 平瓶	H 13	—	—	—	密	良好	灰白色(5Y7／1)	口頸部	外面回転ナデ 内面ヘラケズリ
52	須恵器 高坏	J 8	16.1	10.6	11.9	密	良好	灰黄褐色(10YR4／2)	坏部完形 脚部3／4	坏部下半分回転ヘラケズリ
53	須恵器 鉢	J 7	10.4	6.1	11.6	密	良好	灰白色(5Y7／1)	完形	内外面とも回転ナデ 底部ヘラ切り
54	須恵器 鉢	C 18	15.0	8.8	8.5	密	良好	褐灰色(7.5YR6／1)	1／2	内外面とも回転ナデ
55	須恵器 甕	D 17	16.8	—	—	密	良好	外)灰白色(7.5Y6／1) 内)灰黄色(2.5Y6／2)	1／3	内外面とも叩き後ナデ
56	須恵器 甕	J 6	—	—	—	密	良好	灰色(5Y5／1)	胴部片	内外面とも叩き後ナデ
57	須恵器 甕	B 18	—	—	—	密	良好	灰色(5Y6／1)	胴部片	内外面とも叩き後ナデ
58	土師器 皿	N 4	6.6	2.6	1.4	密	良好	浅黄橙色(10YR8／4)	1／2	内外面ともナデ
59	土師器 皿	M 5	6.9	3.1	1.4	密	良好	浅黄橙色(10YR8／4)	完形	内外面ともナデ
60	土師器 皿	L 7	6.9	2.3	1.9	密	良好	浅黄橙色(10YR8／3)	ほぼ完形	内外面ともナデ
61	土師器 皿	M 6	6.8	3.2	1.6	密	良好	灰黄色(2.5Y7／2)	1／3	内外面ともナデ
62	土師器 皿	H 12	7.6	4.0	2.0	密	良好	にぶい黄橙色(10YR7／4)	口縁部1／4 底部ほぼ完形	内外面ともナデ
63	土師器 皿	I 9	8.7	2.9	2.4	密	良好	にぶい黄橙色(10YR7／3)	5／6	内外面ともナデ
64	土師器 皿	I 10	12.0	3.0	2.9	密	良好	にぶい黄橙色(10YR7／3)	1／2	内外面ともナデ
65	土師器 皿	A 19	13.2	4.7	2.8	密	良好	にぶい黄色(2.5Y6／3)	口縁部3／4 底部完形	内外面ともナデ
66	土師器 皿	I 10	12.4	7.4	3.0	密	良好	灰黄色(2.5Y6／2)	1／3	内外面ともナデ
67	土師器 高坏	C 19	—	8.5	9.2	密	良好	浅黄橙色(7.5YR8／6)	脚部5／6	内外面ともナデ
68	土師器 甕	L 5	12.0	4.6	11.6	密	良好	灰白色(10YR8／2)	1／2	外面縦位のハケ目 内面横位のハケ目
69	土師器 甕	L 4	15.8	—	—	粗	やや不良	灰黄色(2.5Y6／2)	口縁～ 胴上部1／4	外面縦位のハケ目 内面横位のハケ目
70	土師器 甕	L 4	19.0	—	—	粗	やや不良	にぶい黄橙色(10YR7／4)	口縁～ 胴上部1／6	外面縦位のハケ目 内面横位のハケ目
71	土師器 甕	L 4	—	1.4	—	粗	やや不良	褐灰色(10YR6／1)	1／2	外面縦位のハケ目 内面斜位のハケ目
72	土師器 甕	L 4	7.6	6.2	10.9	密	良好	灰黄色(2.5Y7／2) 浅黄橙色(10YR8／3)	1／3	内外面とも回転ナデ 底部糸切り

陶磁器類（第95図、図版48）

中近世の陶磁器類がわずかに出土している。１は古瀬戸の緑釉小皿で、口径10.2cm、底径5.0cm、高さ1.8cmである。15世紀のものである。２は鉄釉丸碗と思われる。５の擂鉢とともに大窯期のものであろう。３は鉄釉の天目茶碗である。口縁部はやや括れるがやや開き気味である。口径12.4cm、底径4.6cm、高さ7.0cmである。４・６の擂鉢は珠洲焼の可能性がある。いずれもⅣ期、14世紀代のものであろう（吉岡1989）。卸し目は４が９条、６が12条である。６は口縁端面が水平になっている。７は加工円盤と考えられる。用途は不明てある。底部に十文字のヘラ記号があり、トチン痕が見られる。16世紀以降のものであろう。



第95図　陶磁器類

２　その他の遺物

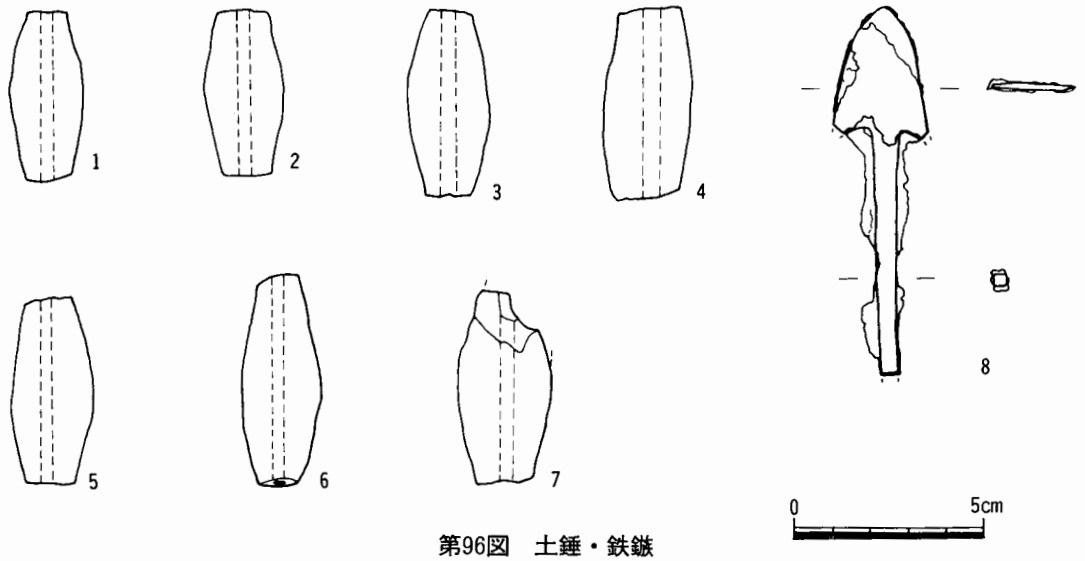
土錘および、鉄鏃、貨幣を最後にあげることにする。

土錘（第96図１～７、図版48）

土錘は７点出土した。いずれも須恵質で灰色を呈する。７のみ一部欠損するが、他は完形品である。長さは4.4～5.6cm、最大径は2.0～2.4cmである。重さは最小で18.4ｇ、最大で31.5ｇである。

鉄鏃（第96図８、図版48）

Ｃ18区で出土した。折損しているが、残存部の長さ9.6cm、鏃身部は3.5cmである。長頸鏃の三角形鏃で、逆刺を有する。鏃身は両丸造りである。長頸鏃のＡ形式－第Ｖ形式になる（杉山1988）。時期は、ＴＫ２１７～ＴＫ４６のあたりであろう。

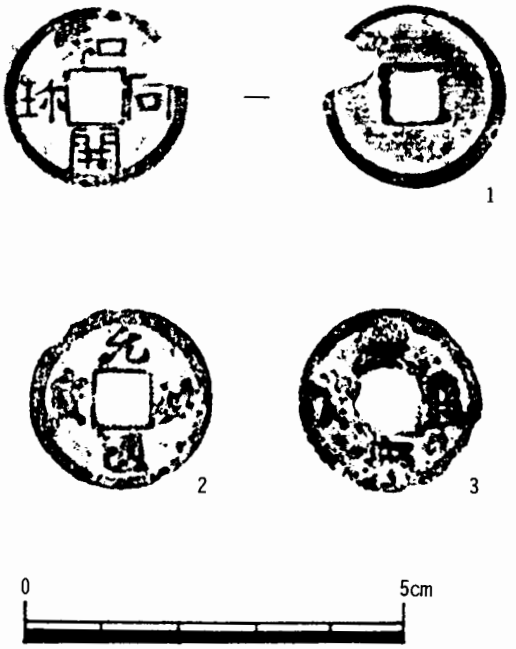


第96図　土錘・鉄鏃

貨幣（第97図、図版48）

４点出土したが、磨耗が激しく判読不明のもの以外の３点の拓影を示した[1]。

１は「和同開珎」で、Ｂ18区のⅡ層から出土した。残念ながら攪乱の激しい地点であり、遺構等は検出されなかった。一部を欠損している。銭径は2.4cm、孔径は0.7cmである。発掘調査による和同開珎の出土は、飛騨地方では初の例である。発掘調査ではないが大野郡高根村で出土したとされるが定かではない（高根村1984）。岐阜県下では、大垣市や不破郡垂井町での出土例や、不破郡関ヶ原町不破関跡第１次発掘調査での出土例がある（岐阜県教委1978）。



第97図　貨　幣

和同開珎には、銅銭と銀銭の２種類があり、また、いわゆる古和同と新和同の区別がある。本資料は銅銭の新和同である。

２は、北宋銭の「元祐通宝」で初鋳年は1086年である。銭径2.5cm、孔径0.7cmである。３も同じく北宋銭の「皇宋通宝」と推定される。初鋳年は1039年である。銭径2.4cm、孔径0.8cmである。２と３はいずれもＭ３区のⅡ層から出土している。

１）貨幣については、玉田忠雄氏にご教示を得、さらに拓本をとって頂いた。

第５章　まとめ

岡前遺跡の発掘調査の概要は、前章までで述べた通りである。本章では、遺構・縄文土器・石器・歴史時代の遺物について簡単にまとめ、若干の考察を加えることにする。

第１節　遺　構

岡前遺跡で検出された遺構は、竪穴住居址、土坑、ピットなどである。竪穴住居址は、縄文時代のもの７軒、平安時代のもの１軒である。

縄文時代の竪穴住居址で検出状況が良好なものは、ＳＢ１・ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ５の４軒である。時期は、いずれも中期中葉から後葉にかけての近接した時期のものと推定される。ＳＢ１は、南側は不明であるが、隅丸方形のプランを呈する。方形の石囲炉を有し、その位置は南側に偏っている。従って、入口部は北側と推定される。ＳＢ３は、北西部と南東部は不明であるが、隅丸方形のプランを呈し、方形あるいは五角形の形状を呈する石囲炉を有する。柱穴の位置から見て、入口部は北西側と推定される。ＳＢ４は隅丸方形のプランで、中央よりやや南東寄りに長方形の石囲炉がある。埋甕をともない、入口は北西側と推定される。ＳＢ５も隅丸方形のプランで、やはり、南東寄りに長方形の石囲炉がある。柱穴の配置、炉の位置等から見て、入口は北西側と推定される。つまり、いずれの住居址もプランが類似しており、炉の形態もよく似ている、という点を指摘することができる。また、入口が北および北西を向いている。このことから、当時の集落は、現在の諏訪神社の境内の緩斜面一帯に弧を描いて住居が配置していた可能性が高い。従って、調査区外である北側の畑地から北西の神社境内にかけてまだ住居址があり、さらに、土壙群などの存在の可能性も予想できる。

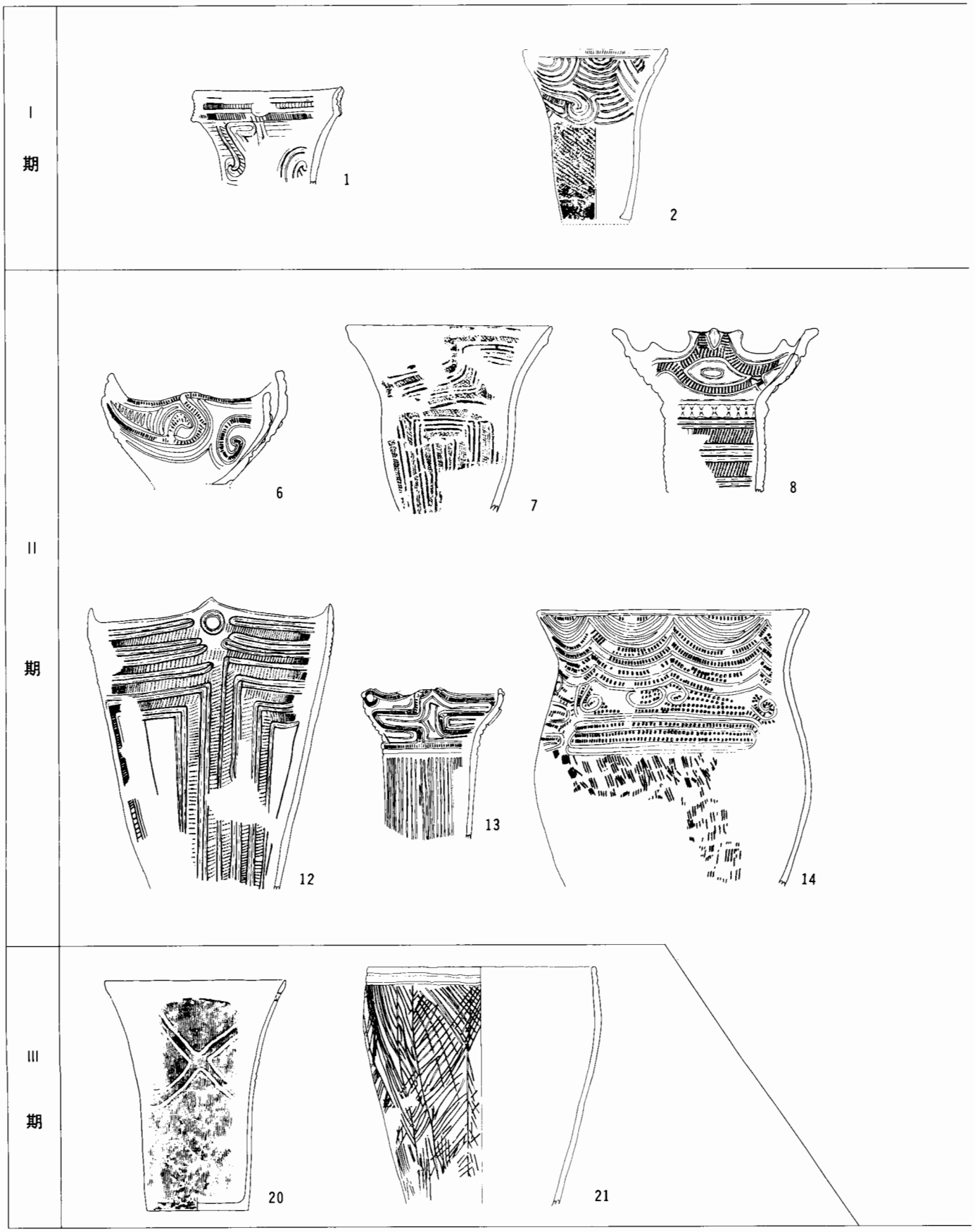
第２節　縄文土器

岡前遺跡で出土した縄文土器は、早期から晩期まで幅広く出土したが、量的に主体となるのは、中期後半の土器である。ここでは、岡前遺跡出土の縄文土器のうち、中期後半の土器の変遷について考えてみたい。

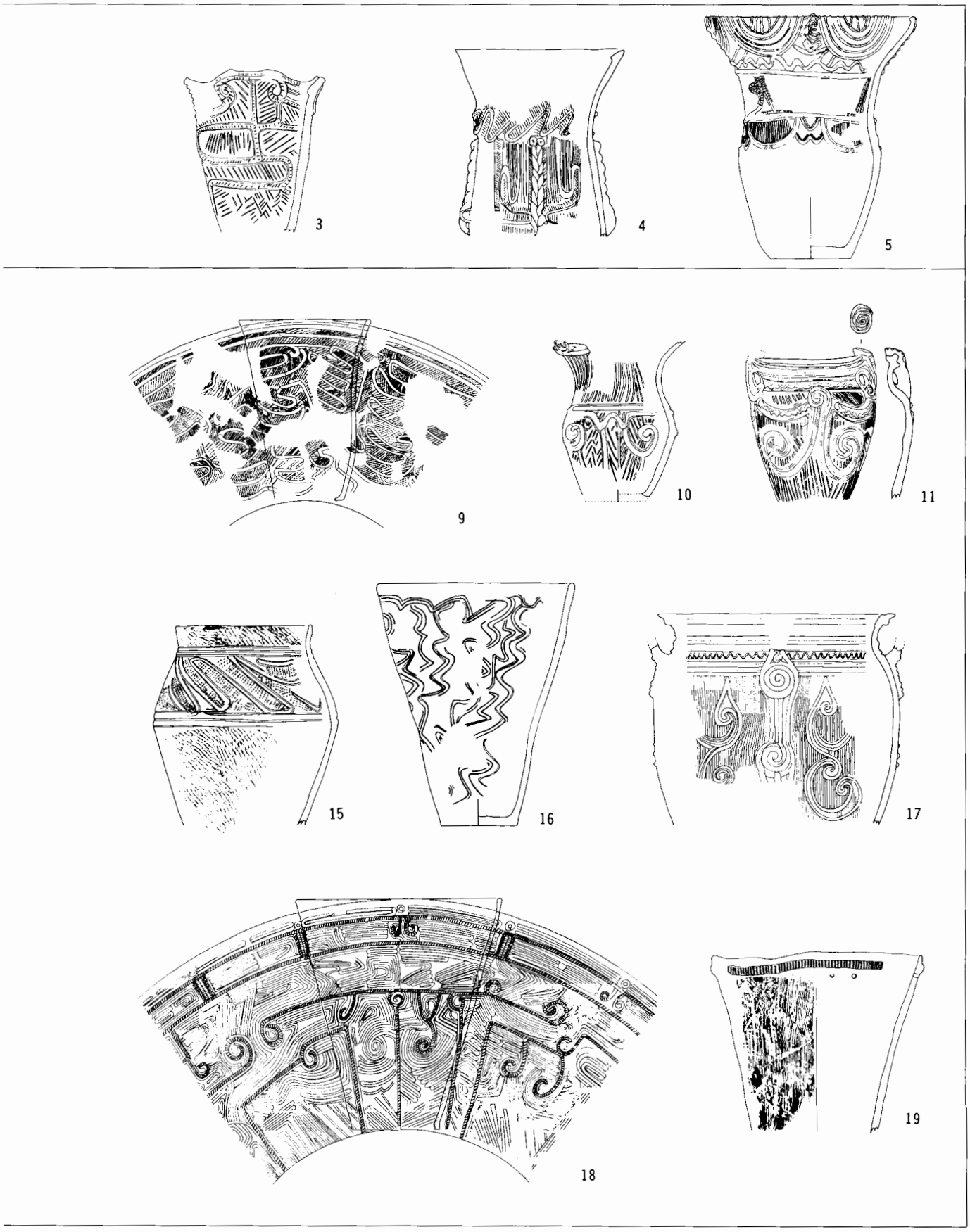
信州地方の該期の土器編年について見ると、曽利式は５段階に区分されており、唐草文系土器の編年については、４期区分と５期区分の考え方がある（唐木1986）。長野県全体では、大きく４期に区分されている（長野県1978）。飛騨地方の信州系の土器は、唐草文系の土器を中心に伝わっているようである。第98図の変遷図は、この長野編年を参考に大きな枠組みを設定した。

北陸地方の中期の土器編年は、型式名では、新保・新崎・上山田・古府・串田新といった枠組みが確立してきている。しかし、まだ意見の一致を見ない部分もある。ここでは、『縄文土器大観』の「上山田・天神山様式」を主に参考にした（小島1988）。

当遺跡出土の土器は、北陸的な要素が強い土器、信州的な要素が強い土器、それらが折衷したもの、あるいは在地性の強い土器が見られる。また、調査面積の割りには出土土器の量が多く、器形の復元



第98図　岡前遺跡出土縄文土器の変遷（中期後半）



(5・14・15・20・21は1／8、18は1／10、他は1／6)

できる完形・半完形品も多かった。第98図は、深鉢形土器の有文土器を中心に北陸的なもの、信州的なもの、その他のものを適宜配置し、その変遷を辿ろうとした図である。

岡前遺跡出土縄文土器の変遷（中期後半）

Ⅰ期は、やや幅があるかもしれない。4・5は包含層出土の土器である。4は口縁が外反し内面にかえりがあって段を有する。頸部がやや膨らみ、胴部は下方に開いている。口縁部は無文である。5は頸部でくびれて開きながら立ち上がる器形で、連弧状の隆帯や櫛形文があり、隆帯に沿って押し引き文が見られる。これらは器形や文様等から見て長野編年のⅠ期に該当する。井戸尻Ⅲ式から曽利Ⅰ式段階のものである。2はＳＢ１床面直上から出土したもので、口縁部の横走する沈線や胴下半部の縄文など、北陸地方では見られない特徴もあるが、渦を巻く基隆帯とそのまわりの弧状を描く半隆起線文など北陸的な要素も見られる。1は複合口縁で、北陸的な要素が強いがやや古い様相を呈する。3は、台形状に高まる小さい波状口縁で、隆帯による区画と緩い渦巻き文が見られる。隆帯には刻みが入る。また、隆帯間は沈線で埋めている。信州的な要素があるが、飛騨独自のものと考える。

Ⅱ期の土器が圧倒的に多数である。時期的には細分できる可能性がある。

10・11・17は、隆帯による渦巻き文と沈線の組み合わせがあったり、剣先文や把手のつき方等、形態と施文の様子から見て唐草文系土器といえる。長野編年のⅡ期に相当する。それに対して、6は平面楕円形で波状口縁の台付き土器で、隆帯の渦巻きや櫛状工具による連続刺突文など北陸的要素が強い土器である。12は、区画文の施文方法は異なるが富山県花切遺跡第4号住居跡出土の土器とよく似た形態および文様構成をしている（富山県埋文1988）。この他Ⅱ期の土器には櫛状工具による刺突が多用される。

器形的には、2のように開いた器形が7に引き継がれ、胴部が膨らんで頸部が括れる14へ変化し、さらに口縁部が直立すると15のような器形になる。14・15は文様帯が胴部上半に偏り、胴部下半はそれぞれ撚糸文・縄文となる。また、2から口縁の開き具合が弱くなると9のような緩いカーブを描いて真っ直ぐ開き、さらに16・18のような直線的に開く器形へと変化すると思われる。

3の口縁部に見られる小渦巻き文は13に見られ、18にも続くようである。また、12と18の口縁部の円文と半隆起線の組み合わせは共通する面がある。13は屈曲する隆帯に連続刺突文が施されているが、3の胴部文様と共通する要素がある。13の場合は文様帯が頸部以上に上がっており、胴部は縦位の沈線文となる。18の隆帯も3とはやや異なるが屈曲しながら展開する。ただし、3とは異なり隆帯には櫛状工具の刺突がある。また隆帯間は、沈線ではなくて偏平な半隆起線文で埋められている。

8は大小の波頂部をもつ波状口縁の土器で、櫛状工具の刺突文を施した隆帯が曲線的に描かれているものの特異な構成であり、胴部には横方向に刺突文が展開し、さらに頸部にリボン状突帯がつくという具合に色々な要素が混ざっている。9は櫛状工具による刺突文を多用し、半截竹管文が曲線を描いて下方へ蛇行しながら降りて来ながら不規則な展開をする。16は2本ないし3本単位の沈線が、口縁部付近では横方向に、胴部では縦方向に描かれているが、9と同様に不規則な配列をしている。15の胴上部の文様構成も方向が異なるが共通する面がある。中野山越遺跡12号住居址出土の土器の中に、施文方法は異なり櫛状工具による条線文であるが、同様のモチーフの土器がある。該期の飛騨地方の

土器の一つの特徴といえるかもしれない。

Ⅱ期とⅢ期の間には、時期的に隔たりがある。また、この時期の土器は、岡前遺跡では数が少ない。

20は、口縁部は、やや厚みをもって直線的に開き無文帯となっている。胴部は地文は撚糸文で、棒状工具による沈線が2本1組になって弧状に連なる。串田新式に比定される。地文の違いや連弧文の形態が微妙に異なるものの、同様の土器が中野山越遺跡、荒城神社遺跡、門端遺跡（大野郡清見村）、水口遺跡（益田郡小坂町）等、飛騨各地で出土している。

21は、沈線が斜位に施されているが、基軸になる縦の沈線も見られることから、葉脈状文が崩れたものといえる。ＳＢ１覆土出土ではあるがここに位置付けておく。

以上簡単ではあるが、岡前遺跡の縄文中期後半の土器の変遷を見た。施文方法に注目すれば、北陸系の土器が優勢と言えるが、在地化した要素が強く出ている土器が多い。飛騨地方の該期の資料はまだまだ増えそうである。今後、飛騨各地の出土例を検討するとともに、飛騨独自の土器編年が体系化されることを期待する。

第3節　石　器

岡前遺跡出土の石器類は、第4章第3節で述べたように、石鏃、石錐、石匙、ピエス・エスキーユ、三脚石器、削器、掻器、打製石斧、磨製石斧、石錘、磨石、凹石、石皿、砥石、石棒、石刀、石剣等が出土している。縄文早期のものを一部含んでいるがわずかである。ほとんどが縄文中期中葉から後葉にかけてのものであろう。飛騨地方でも、中期から後期にかけての集落遺跡が調査され、それぞれの遺跡での石器の組成が明らかになってきた。ここでは、各遺跡の石器組成を比較し、岡前遺跡の石器のあり方を考えてみたい。

比較した遺跡は、中野山越遺跡（吉城郡古川町）、荒城神社遺跡（吉城郡国府町）、垣内遺跡（高山市）、寺東遺跡（高山市）である。

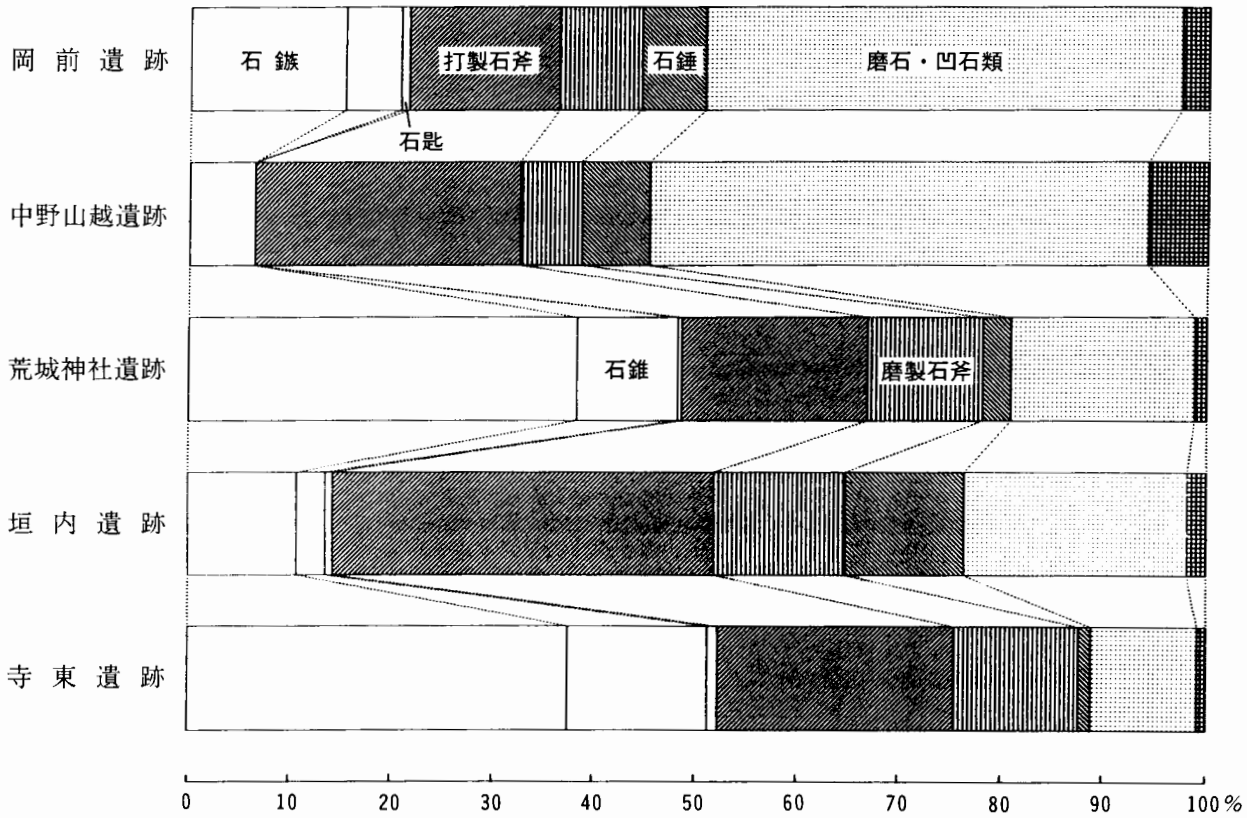
中野山越遺跡は、岡前遺跡とは宮川を挟んで反対側に位置する。中期中葉から後期にかけての集落で一部晩期も含んでいる。報告書では、石器組成の点について言及されている（中野山越1993）。

荒城神社遺跡は、荒城川の河岸段丘と宮谷川によって形成された扇状地上に位置する。平成5年度に当センターが発掘調査を行ったが、調査面積の割に多量の石器類が出土した。中期後半から後期にかけての遺跡である。

垣内遺跡は、中期から後期にかけての住居址が75軒検出された。現在までのところ飛騨地方では最も多くの住居址が検出された遺跡である。

寺東遺跡は中期後半から後期にかけての遺跡で、竪穴住居址が6軒検出された。遺跡の北東を流れる中曽洞谷が大八賀川に合流し、二つの川に挟まれた舌状台地の基部にあたる地点に位置している。

以上の遺跡は、いずれも中期から後期を中心とした遺跡といえる。垣内遺跡の報告書では、中期9軒、後期9軒の出土石器の比較を行っている。それによると、「狩猟具」「工具」「農具」「調理具」の量的比率は近似しているが、絶対量が倍増しているという点を指摘している[1]。



第99図　石器組成の比較

岡前遺跡の石器組成を他の遺跡と比べると、石鏃などや打製石斧の比率が比較的低く、磨石・凹石類が多い点が目立つ。また、石皿の比率がやや高いことも指摘できる。同様の傾向を示すのが中野山越遺跡である。中野山越遺跡の報告書では、打製石斧、磨石・凹石類、石皿等により、植物食への依存度の高さを指摘している。また、中野山越遺跡の場合は石鏃等の比率が非常に低い。

荒城神社遺跡は岡前遺跡とは時期的にややずれているが、石鏃等の石器の多さが目立つ。寺東遺跡の組成と通ずる面がある。この両者については、時期的には共通性があると考えられるが、さらに、遺跡の立地や性格の比較等の検討を要する。

垣内遺跡の場合は、打製石斧の比率の高さが際立っている。13号住居址では33点の出土を数える。破損率も高く、消耗度の高さが指摘されている。また、石錘の比率も高いが、「編物の需要の増加を反映している」と推定されている[2)]。

1・2）吉朝則富(1991)「第4章　遺物　第8節　石器」『垣内遺跡発掘調査報告書』

第4節　歴史時代の遺物

歴史時代の遺物としては、須恵器、土師器、陶磁器類、土錘、鉄鏃、貨幣が出土した。須恵器は、8世紀中頃を中心とした時期のものが多い。そして、和同開珎の出土が注目される。不破関第1次発掘調査でも出土しているが、報告書では美濃地方での出土例が紹介されている（岐阜県教委1978）。

県内の和同開珎の出土状況を概観すると次のようになる。

(1)　不破関（不破郡関ケ原町）

3点出土しているが、1点は「珎」の字の部分のみである。土師器甕内にあったとされ、土塁跡の東北角（「鬼門」にあたる）から出土したことから「鎮壇具」として埋納されたと報告書では推定している（岐阜県教委1978）。

(2)　不破郡青墓村（現在の大垣市）

『不破郡史』に「旧国分寺阯の南隣の古墳破壊の節、和同開珎五文入骨壺二個竝に多数の歯牙を發掘せり」とある。

(3)　不破郡宮代村（現在の不破郡垂井町）

『不破郡史』に「四ツ辻古墳より發掘せしものにして、此の骨器中に和同開珎五文づゝ有りたり」とある。

(4)　不破郡垂井町大字府中字大石の秋葉山麓を昭和14・15年頃畑地に開墾中、骨壺の中に2枚の銀製和同開珎が入っているのが発見されている（岐阜県教委1978）。

(5)　大野郡高根村

『高根村史』によると同村内ケ谷地内で糸印（室町時代に明から生糸輸入の際にそえた銅印）が出土し、さらに「又同所から和同開珎も出土している」とされているが定かでない。

美濃出土の(1)～(4)は、いずれも旧不破郡内である。(1)は不破関、(2)は美濃国分寺、(3)は不破郡家、(4)は美濃国府と、奈良時代の主要施設に伴うものである（岐阜県教委1978）。

古代においては、美濃は「関国」と呼ばれるように、天下の要衝不破関が重要な意味をもち、美濃国の中心機関がいずれも地理的には西に偏った場所に集中している。和同開珎の出土はそれらの施設と密接な関係があったことが予想される。

山国飛騨においては、いわゆる政治・経済・文化の中心は、中央の盆地（高山・国府・古川）地域にあった。岡前遺跡は古川盆地を望む地点に所在している。眼下には7世紀末期より9世紀初頭にかけて栄えたとされる杉崎廃寺がある。伽藍配置が明らかにされるとともに、石敷きの珍しい寺院跡であることがわかった。出土した木簡には、「符　飽□」とあり、「荒城郡飽見郷」を推定できる資料であった。

岡前遺跡はこの寺の北方背後に位置する。今回の発掘調査では関連する遺構等は検出できなかったが、遺跡の位置関係から見て、両者には何らかの関連があったことも予想できる。

主要参考文献

安達厚三 1995「石皿」『縄文文化の研究』7
大沢野町教育委員会 1977『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』
大野政雄・佐藤達夫「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』53－2
岡谷市教育委員会 1986『梨久保遺跡』
各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
笠原烏丸 1956「御番屋敷先史時代遺蹟の研究」『御番屋敷遺址の研究』
片岡　肇 1988「異形押型文土器について」『朱雀』1
角川日本地名大辞典編集委員会 1978『角川日本地名大辞典』21 岐阜県
狩野　睦 1988「串田新・大杉谷式土器様式」『縄文土器大観』第3巻
唐木孝雄 1986「中期後葉土器の分類と検討」『梨久保遺跡（本編）』
　　1988「上木戸遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2
河合英夫・島田敏男 1994「飛騨の伽藍――杉崎廃寺の調査――」『月刊文化財』3月号
河合村教育委員会 1987『下田遺跡』
上町Ｃ地点遺跡発掘調査団 1989『上町遺跡Ｃ地点発掘調査報告書』
　　1991『上町遺跡Ｄ地点発掘調査報告書』
上町遺跡トヨタ地点・Ｏ地点・栗原センター地点発掘調査団
　　1994『上町遺跡トヨタ地点・Ｏ地点・栗原センター地点発掘調査報告書』
岐 阜 県 1972『岐阜県史』通史編原始
岐阜県教育委員会 1962『岐阜県遺跡目録』
　　1978『美濃不破関』
　　1990『改定版 岐阜県遺跡地図』
　　1991『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』
小島俊彰 1986「鍔をもつ縄文中期の大型石棒」『大境』10号
　　1988「上山田・天神山式土器様式」『縄文土器大観』第3巻
国府町教育委員会 1988『岐阜県吉城郡国府町宮ノ下遺跡発掘調査報告書』
財団法人岐阜県文化財保護センター 1994『荒城神社遺跡』
杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8
末木　健 1978「伊那谷中部縄文中期後半の土器群とその性格――予察――」『信濃』30－4
鈴木道之助 1981『図録石器の基礎知識』Ⅲ
田口昭二 1982「猿投窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』221
田中清文 1984「伊那谷縄文中期後半土器編年への展開」『中部高地の考古学』Ⅲ
田辺昭三 1966『陶邑古窯址』Ⅰ
高根村史編纂委員会 1984『高根村史』
高山市教育委員会 1988『寺東遺跡、西保木（対岸）遺跡発掘調査報告書』
　　1991『垣内遺跡発掘調査報告書』

辰口町教育委員会 1978『莇生遺跡』
中部高地縄文土器集成グループ 1979『中部高地縄文土器集成』第1集 縄文中期後半の部その1
土田吉左衛門 編 1987『飛騨の神社』
戸沢充則 編 1994『縄文時代研究事典』
戸田哲也 1993「飛騨を中心とした縄文後期前半土器の様相」『先史考古学研究』第4号
東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会 1992『古代仏教東へ――寺と窯――』1. 寺院編 2. 窯編
富山県教育委員会 1976『富山県立山町岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』
1991『北陸自動車道遺跡調査報告』朝日町編6 境A遺跡土器編
富山県埋蔵文化財センター 1988『富山県大山町花切遺跡発掘調査概要』
中野山越遺跡発掘調査団 1993『中野山越遺跡発掘調査報告書』
長 野 県 1988『長野県史』考古資料編
八賀　晋 1984「各地域における最後の前方後円墳　岐阜県」『古代学研究』105
1988「飛騨の古墳と古代寺院」『飛騨国府シンポジウム古代の飛騨』
林　魁一 1938「岐阜縣に於ける住居跡と思はる石器時代遺跡及び石の蓋ありし縄文土器發見に就いて」『考古学論叢』9
飛騨考古土俗学会 編 1935『飛騨石器時代遺蹟地名表』
飛騨国府シンポジウム実行委員会
1988 飛騨国府シンポジウム 古代の飛騨――その先進性を問う――』
1991『第2回飛騨国府シンポジウム 飛騨と文化――豊かな生活の再現――』
増子康真 1981「第3章 東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階』本文編 補足改定版
1992「宮田式土器細別（試論）」『どっこいし』第40号
三上徹也 1988「唐草文系土器様式」『縄文土器大観』第3巻
南　久和 1985『北陸の縄文時代中期の編年 他9編』
1989「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観』第4巻
1993「あやくり帯縄文覚書」『土曜考古』第17号
八木光則 1976「縄文中期集落の素描」『長野県考古学会誌』25・26
吉岡康暢 1989『珠洲の名陶』
米沢義光 1989「気屋式土器様式」『縄文土器大観』第4巻
米田明訓 1980「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」『甲斐考古』17－1
渡辺　誠 1973『縄文時代の漁業』

第17表　石器一覧表（単位はcm、g）

石鏃（1）

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	挿図番号	備考
1	B18	Ⅱ	137	1.5	1.3	0.3	0.4	Ⅰc	チャート		
2	B19	Ⅱ	4087	(2.1)	(1.5)	0.4	(0.8)	Ⅰc	チャート		
3	C16	Ⅱ	78	1.1	1.3	0.3	0.4	Ⅰa	下呂石		
4	C17	Ⅱ	75	2.8	1.8	0.6	2.5	Ⅲ	チャート		
5	C17	Ⅱ	167	(2.6)	(1.1)	(0.4)	(1.1)	Ⅰe	チャート		
6	C17	Ⅱ	178	(2.8)	(1.5)	0.4	(0.9)	Ⅰd	下呂石		
7	C17	Ⅱ	4490	2.6	1.8	0.3	1.0	Ⅰe	チャート	76−11	
8	C17	Ⅳ	4614	(1.2)	(1.2)	0.2	(0.1)	Ⅰc	黒曜石		
9	C18	Ⅱ	3951	2.5	1.9	0.3	1.2	Ⅰa	下呂石	76−1	
10	C18	Ⅱ	4165	1.4	1.3	0.3	0.5	Ⅰd	チャート		
11	C18	Ⅱ	4411	2.6	1.8	0.4	1.4	Ⅱ	下呂石		
12	C18	Ⅱ	4479	(2.1)	(1.4)	(0.4)	(0.7)	Ⅰa	下呂石		
13	C18	Ⅱ	4485	1.9	1.3	0.4	0.5	Ⅰe	チャート		
14	C18	Ⅱ	4602	(1.6)	(1.5)	(0.3)	(0.7)	Ⅰc	黒曜石		
15	C18	Ⅱ	4606	(1.6)	(1.4)	(0.4)	(0.5)	Ⅰe	チャート		
16	C18	Ⅱ′	4612	1.5	1.3	0.2	0.3	Ⅰe	チャート	76−12	
17	C18	Ⅱ	4727	(1.4)	1.5	0.3	(0.5)	Ⅰe	チャート		
18	H12	Ⅰ	119	(2.8)	(1.2)	(0.3)	(0.6)	Ⅰc	黒曜石		
19	H14	Ⅱ	1342	2.1	1.4	0.2	0.5	Ⅰc	下呂石	76−7	
20	I 6	Ⅱ	4132	(1.8)	(1.2)	(0.4)	(0.7)	Ⅰc	下呂石		
21	I 10	Ⅰ	3756	3.1	1.2	0.8	2.9	Ⅲ	下呂石		
22	I 10	Ⅱ	104	2.3	1.3	0.4	1.4	Ⅱ	下呂石		
23	I 10	Ⅱ	3757	1.9	1.1	0.5	0.9	Ⅲ	黒曜石	76−17	
24	I 10	Ⅱ	4139	(2.1)	(1.4)	0.3	(0.8)	Ⅰc	チャート		
25	I 11	Ⅱ	144	1.8	1.6	0.3	1.3	Ⅱ	下呂石	76−14	
26	I 11	Ⅱ	1882	2.5	1.2	0.4	0.8	Ⅲ	下呂石		
27	I 11	Ⅱ	2030	2.1	1.4	0.4	1.0	Ⅰc	チャート	76−6	
28	I 11	Ⅱ	4267	(1.6)	(1.6)	0.5	(1.1)	Ⅰc	黒曜石		
29	I 12	Ⅱ	3021	(2.4)	(1.5)	0.3	(0.8)	Ⅰc	下呂石		
30	J 7	Ⅱ	68	1.7	(0.7)	0.2	(0.2)	Ⅰb	チャート		
31	J 7	Ⅱ	506	1.6	1.2	0.3	0.5	Ⅰd	下呂石	76−10	
32	J 9	Ⅱ	4745	2.8	1.7	0.3	1.0	Ⅰc	下呂石	76−4	
33	J 10	Ⅱ	1347	1.6	(1.0)	0.3	(0.3)	Ⅰa	下呂石		
34	K 4	Ⅱ	68	2.0	1.4	0.3	0.6	Ⅰc	下呂石		
35	K 4	Ⅱ	437	(2.1)	(1.2)	0.5	(1.0)	Ⅲ	チャート		
36	K 4	Ⅱ	480	(2.1)	(1.3)	0.4	(0.8)	Ⅰc	下呂石		
37	K 4	Ⅱ	561	(1.4)	(1.0)	(0.2)	(0.3)	Ⅰd	下呂石		
38	K 4	Ⅱ	640	1.5	1.2	0.3	0.6	?	下呂石		
39	K 4	Ⅱ	721	1.9	1.2	0.4	0.6	Ⅰb	下呂石		
40	K 4	Ⅱ	918	(1.9)	(1.2)	0.3	(0.7)	Ⅰc	下呂石		
41	K 4	Ⅱ	1379	1.9	1.2	0.3	0.4	Ⅰc	チャート		
42	K 4	Ⅱ	1398	(2.1)	(2.0)	0.5	(2.6)	Ⅱ	チャート		
43	K 4	Ⅱ	2951	(2.5)	(1.5)	0.3	(1.0)	Ⅰc	黒曜石		
44	K 4	Ⅱ	3140	(2.1)	(1.2)	0.4	(0.9)	Ⅰc	黒曜石		
45	K 5	Ⅰ	512	(2.1)	(1.5)	0.4	(0.9)	Ⅰc	下呂石		
46	K 5	Ⅱ	333	3.4	1.3	0.7	2.1	Ⅲ	下呂石	76−16	
47	K 5	Ⅱ	393	2.7	1.5	0.5	1.8	Ⅱ	下呂石		
48	K 5	Ⅱ	586	1.6	0.9	0.3	0.3	Ⅰc	下呂石		

石鏃（2）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
49	K 5	Ⅱ	593	1.8	1.0	0.2	0.3	Ⅰd	下呂石		
50	K 5	Ⅱ	963	2.5	1.7	0.3	0.8	Ⅰa	黒曜石	76−2	
51	K 5	Ⅱ	4926	(2.0)	1.6	0.3	(1.4)	Ⅱ	チャート		
52	K 6	Ⅱ	775	2.4	1.2	0.4	1.3	Ⅰd	下呂石		
53	K 6	Ⅱ	1150	2.1	0.7	0.2	0.1	Ⅰb	下呂石		
54	K 6	Ⅱ	1236	(2.3)	(1.2)	0.3	(0.7)	Ⅰc	下呂石		
55	K 6	Ⅱ	1246	2.5	1.5	0.8	2.6	Ⅰa	チャート		
56	K 6	Ⅱ	2399	(2.1)	(1.4)	(0.3)	(0.8)	Ⅰc	下呂石		
57	K 6	Ⅱ	2519	(2.3)	(1.5)	0.4	(1.3)	Ⅰc	チャート		
58	K 6	Ⅱ	2756	2.0	1.2	0.4	0.8	Ⅰc	チャート		
59	K 6	Ⅱ	3543	2.8	1.5	0.3	0.9	Ⅱ	下呂石		
60	K 7	Ⅱ	15	1.8	1.5	(0.3)	(0.6)	Ⅰe	チャート		
61	K 7	Ⅱ	688	2.7	1.9	0.4	1.6	?	下呂石		
62	K 7	Ⅱ	2400	2.9	1.9	0.5	2.1	Ⅰb	チャート	76−3	
63	L 1	Ⅱ	1	1.1	0.8	0.2	0.1	Ⅱ	黒曜石		
64	L 1	Ⅱ	9	(1.7)	(1.1)	0.3	(0.4)	Ⅰc	下呂石		
65	L 2	Ⅱ	53	1.8	1.6	0.4	0.5	Ⅰc	下呂石		
66	L 2	Ⅱ	64	1.9	1.1	0.2	0.4	Ⅰb	下呂石		
67	L 3	Ⅱ	54	2.3	1.5	0.3	1.0	Ⅰc	黒曜石	76−8	
68	L 3	Ⅱ	3561	(1.7)	(1.6)	(0.4)	(0.7)	Ⅰd	下呂石		
69	L 3	Ⅱ	4657	1.5	1.5	0.3	0.5	Ⅰd	下呂石		
70	L 4	Ⅱ	552	1.7	1.2	0.2	0.4	Ⅰc	チャート		
71	L 4	Ⅱ	800	1.6	1.2	0.3	0.4	Ⅰa	下呂石		
72	L 4	Ⅱ	2994	2.9	1.4	0.5	1.9	Ⅲ	チャート	76−15	
73	L 5	Ⅱ	920	(1.5)	(1.2)	0.3	(0.4)	Ⅰc	下呂石		
74	L 5	Ⅱ	973	1.6	1.1	0.2	0.4	Ⅰb	下呂石		
75	L 5	Ⅱ	1006	2.0	1.6	0.4	1.0	Ⅰc	チャート		
76	L 5	Ⅱ	1007	1.3	(1.0)	(0.2)	(0.2)	Ⅰd	下呂石		
77	L 5	Ⅱ	1377	(1.5)	(1.0)	0.2	(0.4)	Ⅰc	下呂石		
78	L 5	Ⅱ	3070	1.7	1.1	0.4	0.8	Ⅲ	チャート		
79	L 6	Ⅱ	785	(1.7)	(1.3)	(0.2)	(0.4)	Ⅰa	下呂石		
80	L 6	Ⅱ	976	2.3	(1.4)	0.3	(0.6)	Ⅰa	チャート		
81	L 6	Ⅱ	2612	2.0	1.5	0.6	1.2	Ⅰb	下呂石		
82	L 6	Ⅱ	2696	2.0	1.5	0.5	1.0	Ⅰa	下呂石		
83	L 6	Ⅱ	4934	2.1	1.8	0.2	0.6	Ⅰb	下呂石	76−5	
84	M 4	Ⅱ	555	1.8	0.9	0.2	0.4	Ⅳ	下呂石		
85	M 5	Ⅰ	102	3.7	1.3	0.4	1.2	Ⅲ	下呂石		
86	M 5	Ⅱ	361	1.9	1.0	0.3	0.5	Ⅰc	下呂石		
87	M 6	Ⅱ	76	2.8	1.8	0.3	1.2	Ⅰd	チャート	76−6	
88	M 6	Ⅱ	996	1.4	1.2	0.4	0.7	?	下呂石		
89	M 7	Ⅱ	92	(1.8)	(1.5)	(0.4)	(0.7)	Ⅰc	黒曜石		
90	N 4	Ⅱ	5	1.4	1.5	0.3	0.6	Ⅱ	下呂石		
91	N 5	Ⅱ	90	2.6	1.3	0.4	1.2	Ⅲ	下呂石		
92	SB 1	Ⅱ	1218	(2.8)	(1.3)	(0.4)	(1.3)	Ⅰc	黒曜石		
93	SB 1	Ⅱ	1396	(2.2)	(1.1)	0.3	(0.7)	Ⅰa	チャート		
94	SB 1	Ⅱ	1414	(2.6)	(1.4)	(0.5)	(1.7)	Ⅰa	チャート		
95	SB 1	Ⅱ	1416	2.3	1.8	0.5	2.2	Ⅱ	チャート	76−13	
96	SB 1	Ⅱ	1574	(1.6)	(1.1)	(0.2)	(0.3)	Ⅰc	下呂石		
97	SB 5	Ⅱ	5019	(2.8)	(1.5)	(0.4)	(1.1)	Ⅰc	流紋岩		
98	SB 5	Ⅱ	5044	(2.2)	1.5	0.4	(1.0)	Ⅰc	下呂石		

石鏃（3）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
99	ＳＢ５	Ⅱ	5070	2.2	1.4	0.5	1.1	Ⅰc	下呂石		
100	ＳＢ５	Ⅱ	5110	3.2	1.5	0.4	1.5	Ⅰc	下呂石		
101	Ｐ14	Ⅱ	1	1.4	(1.0)	0.2	(0.3)	Ⅰc	黒曜石		
102	表採		35	1.6	1.3	0.3	0.5	Ⅰa	下呂石		

石錐

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
1	Ｃ17	Ⅱ	134	2.5	1.2	0.7	1.7	Ⅱb	チャート		
2	Ｃ19	Ⅱ	3305	3.3	1.1	0.7	1.9	Ⅱa	下呂石		
3	Ｈ12	Ⅱ	3406	2.5	1.3	0.6	1.4	Ⅱb	下呂石		
4	Ｉ９	Ⅱ	1436	3.5	2.1	0.9	4.3	Ⅲ	下呂石	77－24	
5	Ｊ７	Ⅱ	505	5.0	1.6	1.0	7.1	Ⅱa	下呂石		
6	Ｊ７	Ⅱ	507	3.7	2.0	0.7	3.8	Ⅱb	下呂石	77－22	
7	Ｊ９	Ⅱ	4351	2.6	0.9	0.5	1.5	Ⅱa	チャート	77－19	
8	Ｋ４	Ⅰ	370	2.4	1.2	0.6	2.1	Ⅱa	チャート		
9	Ｋ４	Ⅱ	152	(1.8)	(1.9)	(0.6)	(1.7)	Ⅰ	チャート		
10	Ｋ４	Ⅱ	384	1.5	1.1	0.5	1.3	Ⅱb	チャート		
11	Ｋ４	Ⅱ	509	2.2	0.9	0.4	0.9	Ⅱb	下呂石		
12	Ｋ５	Ⅰ	622	(1.4)	(1.5)	(0.5)	(1.1)	Ⅰ	チャート		
13	Ｋ５	Ⅰ	1305	3.5	0.9	0.5	1.9	Ⅱa	下呂石		
14	Ｋ５	Ⅱ	426	2.7	0.8	0.6	1.4	?	チャート		
15	Ｋ５	Ⅱ	520	2.6	0.7	0.5	1.3	?	チャート		
16	Ｋ５	Ⅱ	582	3.6	0.9	0.4	1.4	Ⅱa	チャート		
17	Ｋ５	Ⅱ	1306	4.8	0.8	0.4	1.8	Ⅱa	下呂石	77－21	
18	Ｋ６	Ⅱ	3359	2.5	0.7	0.3	0.7	Ⅱa	チャート		
19	Ｌ２	Ⅰ	72	1.9	0.6	0.4	0.5	Ⅱa	チャート		
20	Ｌ２	Ⅱ	146	2.3	1.4	0.5	1.9	Ⅱb	チャート		
21	Ｌ４	Ⅱ	3202	(3.2)	(2.5)	(0.9)	(4.8)	Ⅰ	チャート	77－18	
22	Ｌ５	Ⅱ	12	(2.5)	(0.6)	(0.5)	(0.8)	Ⅱa	チャート		
23	Ｌ６	Ⅰ	225	3.5	0.8	0.5	1.6	Ⅱb	下呂石		
24	Ｍ４	Ⅰ	252	3.2	0.8	0.6	2.2	?	チャート		
25	Ｍ４	Ⅱ	84	3.1	1.1	0.6	2.1	?	チャート		
26	Ｍ４	Ⅱ	163	2.5	0.8	0.3	0.7	Ⅱb	下呂石		
27	Ｍ６	Ⅱ	993	(3.1)	1.5	0.6	(2.5)	Ⅱb	下呂石		
28	Ｎ５	Ⅰ	22	2.1	0.7	0.4	0.5	?	チャート		
29	Ｎ６	Ⅱ	77	1.9	0.9	0.4	0.6	Ⅱb	下呂石		
30	ＳＢ１	Ⅱ	415	2.5	0.8	0.5	1.0	?	チャート		
31	ＳＢ１	Ⅱ	2470	2.4	1.2	0.8	2.2	?	チャート		
32	ＳＢ１	Ⅱ	4783	4.2	1.1	0.5	2.3	Ⅱa	下呂石	77－20	
33	ＳＢ２	Ⅱ	3363	2.9	0.8	0.5	1.4	Ⅱb	チャート	77－23	
34	ＳＢ４	Ⅱ	17	2.9	2.1	0.7	3.0	Ⅲ	下呂石		
35	ＳＢ５	Ⅱ	5089	3.3	1.8	0.7	3.0	Ⅲ	チャート		
36	Ｐ15	Ⅱ	2	3.1	1.6	0.5	1.9	Ⅱb	チャート		

石匙（1）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
1	Ｃ18	Ⅱ	4416	4.6	5.6	0.8	20.5	横型	下呂石		
2	Ｊ７	Ⅱ	424	3.1	4.6	0.4	5.9	横型	下呂石	77－26	
3	ＳＢ１	Ⅱ	1389	3.0	(3.6)	0.3	(4.1)	横型	チャート		
4	ＳＢ５	Ⅱ	5052	2.9	4.6	0.6	6.2	横型	チャート	77－25	

石匙（2）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
5	ＳＢ５	Ⅱ	5065	3.9	1.4	0.4	1.8	縦型	下呂石	77－27	

ピエス・エスキーユ

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	B17	Ⅱ	97	2.1	3.4	0.5	4.8	硬質頁岩		
2	C17	Ⅱ	76	2.5	2.5	1.0	5.7	チャート		
3	Ｉ９	Ⅱ	62	3.0	2.3	0.7	4.2	下呂石		
4	I11	Ⅱ	387	2.8	3.1	1.3	10.6	下呂石		
5	Ｊ７	Ⅱ	519	2.1	2.1	0.8	3.3	下呂石		
6	Ｊ８	Ⅱ	252	3.0	1.6	0.8	3.5	チャート	77－28	
7	Ｊ９	Ⅱ	28	2.8	2.0	0.8	3.7	玉髄		
8	Ｋ４	Ⅱ	256	2.9	1.3	1.3	5.4	玉髄	77－30	
9	Ｋ４	Ⅱ	492	3.0	2.5	1.4	10.3	下呂石		
10	Ｋ５	Ⅱ	42	3.8	2.6	1.0	10.5	下呂石	77－31	
11	Ｋ６	Ⅰ	585	3.6	2.3	1.4	13.9	チャート	77－29	
12	Ｋ７	Ⅱ	260	3.0	2.4	1.5	10.8	チャート		
13	Ｌ６	Ⅱ	249	2.3	1.5	1.1	4.9	玉髄		
14	Ｍ５	Ⅱ	127	2.3	2.3	1.0	5.7	下呂石		
15	Ｍ５	Ⅱ	149	1.8	2.5	0.9	3.9	チャート		
16	ＳＢ１	Ⅱ	201	2.6	1.5	0.8	2.9	下呂石		

ヘラ形石器

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	Ｊ７	Ⅱ	336	2.9	2.6	0.9	6.3	下呂石		
2	Ｌ６	Ⅱ	238	2.5	1.7	0.9	2.9	下呂石	77－33	
3	Ｍ４	Ⅱ	261	2.6	1.7	1.1	6.3	下呂石	77－32	

削器（1）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	B18	Ⅱ	86	2.6	3.6	0.6	5.2	チャート		
2	C17	Ⅱ	157	3.3	2.2	0.9	7.3	チャート		
3	C18	Ⅱ	137	2.2	1.4	0.4	1.7	黒曜石		
4	C19	Ⅱ	83	4.5	5.5	1.6	20.8	下呂石		
5	H13	Ⅱ	35	3.4	3.5	0.7	10.7	チャート	78－35	
6	H13	Ⅱ	154	2.9	1.6	0.7	4.8	チャート		
7	H14	Ⅱ	50	2.5	3.0	0.7	4.8	チャート		
8	Ｉ７	Ⅱ	288	3.2	4.1	1.1	16.7	チャート		
9	Ｉ９	Ⅰ	578	3.5	6.4	1.0	26.4	チャート		
10	I10	Ⅱ	319	2.0	2.4	0.7	3.8	チャート		
11	I11	Ⅱ	157	3.6	2.4	1.0	9.1	チャート		
12	I12	Ⅱ	96	2.9	4.5	1.0	9.2	下呂石		
13	Ｊ７	Ⅱ	52	2.2	2.0	0.4	1.7	黒曜石	78－39	
14	Ｊ７	Ⅱ	224	3.4	2.4	1.0	7.3	チャート	78－36	
15	Ｊ７	Ⅱ	426	2.8	2.1	0.5	3.1	チャート		
16	Ｋ４	Ⅱ	75	1.9	2.4	0.6	2.7	チャート		
17	Ｋ５	Ⅱ	708	1.8	2.4	0.5	2.7	チャート		
18	Ｋ７	Ⅱ	259	3.7	3.9	0.9	10.6	チャート	78－37	
19	Ｌ２	Ⅱ	125	2.9	2.3	0.7	4.9	チャート		
20	Ｌ５	Ⅱ	66	3.9	4.0	0.6	9.2	下呂石	78－38	
21	Ｌ７	Ⅱ	146	3.7	2.6	0.6	4.1	下呂石		

削器（2）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
22	M6	Ⅰ	93	2.4	2.8	0.7	3.8	黒曜石		
23	SB5	Ⅱ	168	3.6	3.0	0.5	4.6	チャート		

掻器

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	B17	Ⅱ	38	6.3	4.2	0.9	24.5	チャート	78−41	
2	B18	Ⅱ	60	2.8	2.7	0.8	6.4	チャート		
3	B19	Ⅱ	31	1.6	2.6	0.8	2.5	黒曜石	78−43	
4	B19	Ⅱ	4086	3.5	3.5	0.7	9.3	チャート	78−40	
5	C14	Ⅱ	49	2.3	4.5	0.9	8.0	チャート		
6	C17	Ⅱ	95	3.0	4.2	0.7	8.5	チャート		
7	C17	Ⅱ	156	2.6	4.7	0.7	8.8	チャート		
8	C17	Ⅳ	15	3.2	3.1	0.7	9.3	チャート		
9	C18	Ⅱ	445	5.5	5.4	1.1	35.4	下呂石		
10	C18	Ⅱ	537	2.6	3.3	0.8	8.3	チャート		
11	C18	Ⅱ	550	3.1	3.2	0.9	9.6	チャート		
12	C19	Ⅱ	29	3.1	2.8	0.7	6.5	チャート		
13	D17	Ⅱ	15	4.1	3.2	1.0	13.0	チャート		
14	H13	Ⅱ	136	2.0	3.6	0.9	5.8	チャート		
15	I9	Ⅱ	157	4.0	3.0	1.0	10.0	下呂石	78−42	
16	I10	Ⅰ	54	2.2	2.5	0.5	3.3	チャート		
17	I10	Ⅱ	245	3.1	2.0	0.9	4.2	チャート		
18	I12	Ⅱ	11	4.4	4.7	1.5	18.6	チャート		
19	J6	Ⅱ	80	7.3	4.3	1.7	50.3	チャート		
20	J7	Ⅱ	638	5.6	5.1	1.2	33.0	下呂石		
21	K4	Ⅱ	345	2.7	1.9	0.9	4.1	黒曜石		
22	K6	Ⅱ	636	4.0	6.0	0.9	16.0	下呂石		
23	L4	Ⅰ	434	2.7	4.9	1.0	14.1	チャート		
24	L4	Ⅱ	213	1.9	1.8	0.5	1.4	チャート		
25	L5	Ⅱ	87	4.9	4.0	1.1	22.3	下呂石		
26	N4	Ⅱ	15	4.3	2.4	0.6	7.9	チャート		

三脚石器

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	J8	Ⅱ	160	(1.9)	(1.3)	0.2	(0.9)	チャート		
2	SB5	Ⅱ	5017	2.9	3.2	0.4	2.1	チャート	78−34	

RF（1）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	A19	Ⅱ	32	3.9	3.0	1.1	13.9	チャート		
2	B19	Ⅱ	75	2.5	2.8	0.8	5.1	チャート	79−45	
3	C18	Ⅱ	253	2.5	2.2	0.5	3.6	チャート		
4	C19	Ⅱ	114	2.8	1.6	0.6	3.8	チャート		
5	D17	Ⅰ	26	2.0	2.7	0.5	2.6	チャート		
6	H13	Ⅱ	156	3.9	1.5	0.3	1.9	チャート		
7	H13	Ⅱ	189	3.1	3.3	1.0	5.5	チャート		
8	I10	Ⅱ	130	2.7	2.8	1.0	5.1	黒曜石		
9	I11	Ⅱ	132	4.0	2.6	7.0	6.0	下呂石		
10	I11	Ⅱ	137	3.5	1.8	0.5	4.1	チャート		
11	I11	Ⅱ	292	3.8	4.3	1.5	13.4	チャート		

RF（2）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
12	J 8	Ⅱ	18	2.9	1.2	1.0	1.7	黒曜石		
13	J 9	Ⅱ	170	2.0	3.0	0.9	4.5	下呂石		
14	K 3	Ⅱ	23	2.0	2.2	0.4	2.2	チャート		
15	K 4	Ⅰ	589	3.7	3.1	0.9	6.8	チャート	79−44	
16	K 4	Ⅱ	154	2.4	3.2	0.6	4.2	チャート		
17	K 5	Ⅰ	309	2.8	1.7	0.6	3.4	チャート		
18	K 5	Ⅰ	515	2.3	1.6	0.3	1.5	チャート		
19	K 6	Ⅱ	430	1.5	2.5	0.4	0.8	チャート		
20	K 7	Ⅱ	348	1.9	3.6	0.9	5.2	チャート		
21	K 8	Ⅱ	58	2.7	4.6	1.0	11.7	チャート		
22	L 3	Ⅱ	29	2.4	3.0	0.8	4.4	チャート		
23	L 4	Ⅱ	135	3.2	2.7	0.8	8.1	チャート		
24	L 4	Ⅱ	212	1.4	1.7	0.6	2.5	チャート		
25	L 5	Ⅱ	147	9.1	1.7	0.6	1.7	黒曜石	79−47	
26	L 5	Ⅱ	207	1.8	1.0	0.3	0.4	黒曜石		
27	L 6	Ⅰ	72	1.7	2.4	0.6	2.3	チャート		
28	L 6	Ⅱ	165	4.0	2.1	1.3	6.6	チャート		
29	M 4	Ⅱ	47	3.1	4.3	0.9	12.2	チャート		
30	M 5	Ⅱ	60	4.8	4.5	1.0	14.5	チャート		
31	M 6	Ⅰ	60	2.3	1.7	0.6	2.1	チャート		
32	M 7	Ⅰ	71	2.9	2.5	0.8	5.0	チャート		
33	P 5	Ⅱ	1	4.3	3.3	0.9	11.8	下呂石	79−46	

UF（1）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	B17	Ⅱ	22	4.5	2.2	0.6	5.2	チャート		
2	B18	Ⅳ	1	3.6	2.9	0.6	5.4	下呂石		
3	B18	Ⅳ	16	3.5	2.0	0.8	6.4	チャート		
4	C17	Ⅱ	97	3.0	4.5	0.6	8.6	チャート		
5	C17	Ⅱ	142	4.0	3.1	0.8	6.4	チャート		
6	C17	Ⅱ	182	2.0	1.9	0.7	2.0	チャート		
7	C17	Ⅳ	45	4.7	3.7	0.9	15.4	チャート		
8	C17	Ⅳ	67	4.0	2.9	1.3	14.9	チャート		
9	D16	Ⅱ	3	3.0	3.3	0.7	6.5	チャート		
10	I 10	Ⅰ	326	1.7	3.2	0.5	2.2	下呂石		
11	I 10	Ⅱ	129	3.8	6.5	1.5	25.7	チャート		
12	I 10	Ⅱ	167	5.8	5.7	1.2	29.9	下呂石		
13	I 11	Ⅱ	203	4.0	2.3	0.6	5.7	チャート		
14	I 12	Ⅱ	139	3.2	2.5	0.7	5.0	チャート		
15	J 6	Ⅰ	57	2.2	3.3	0.6	3.4	チャート		
16	J 7	Ⅱ	94	3.7	2.2	1.0	10.1	チャート		
17	J 7	Ⅱ	337	3.5	4.0	0.7	12.9	チャート		
18	J 7	Ⅱ	425	3.5	2.4	0.6	6.0	チャート		
19	J 8	Ⅱ	14	3.8	2.9	0.7	6.3	下呂石		
20	J 8	Ⅱ	248	1.9	2.8	0.7	2.5	下呂石		
21	J 8	Ⅱ	491	2.3	2.2	0.7	1.9	下呂石		
22	J 8	Ⅱ	509	2.4	2.1	0.7	2.5	下呂石		
23	K 4	Ⅰ	595	2.2	3.3	0.8	4.2	チャート		
24	K 4	Ⅱ	156	2.3	2.5	0.8	3.7	下呂石		
25	K 4	Ⅱ	329	2.0	0.9	0.4	0.6	チャート		

ＵＦ（２）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
26	Ｋ５	Ⅱ	178	３．８	２．５	０．８	４．３	チャート		
27	Ｋ５	Ⅱ	208	４．０	３．４	１．２	９．６	下呂石		
28	Ｋ６	Ⅱ	637	３．８	１．７	１．５	８．４	下呂石		
29	Ｋ７	Ⅱ	343	１．９	１．９	０．５	１．７	下呂石		
30	Ｌ２	Ⅰ	157	３．１	２．１	０．９	４．０	チャート		
31	Ｌ２	Ⅱ	121	２．５	１．７	０．３	１．３	下呂石		
32	Ｌ３	Ⅱ	62	２．１	３．０	１．２	８．６	チャート		
33	Ｌ３	Ⅱ	166	３．２	２．３	０．６	４．１	チャート		
34	Ｌ４	Ⅱ	108	３．８	２．３	０．８	６．５	チャート		
35	Ｌ４	Ⅱ	111	２．３	１．４	０．５	１．９	チャート		
36	Ｌ４	Ⅱ	225	３．０	２．５	１．１	７．７	下呂石		
37	Ｌ５	Ⅱ	140	３．３	２．６	０．８	６．３	下呂石	79－49	
38	Ｌ６	Ⅱ	104	２．９	１．６	０．７	２．４	下呂石		
39	Ｌ６	Ⅱ	119	２．２	３．２	０．８	４．６	下呂石		
40	Ｌ７	Ⅱ	71	２．６	２．５	１．４	１０．１	下呂石		
41	Ｌ７	Ⅱ	135	３．９	３．６	１．１	１５．３	チャート	79－48	
42	Ｍ３	Ⅰ	64	３．７	２．４	１．１	９．５	チャート		
43	Ｍ３	Ⅱ	7	２．８	４．９	０．７	７．５	チャート		
44	Ｍ４	Ⅱ	214	２．３	２．９	０．８	５．４	下呂石		
45	Ｍ４	Ⅱ	215	２．９	１．８	０．５	２．８	下呂石		
46	Ｍ５	Ⅱ	179	２．８	２．３	０．８	４．３	チャート		
47	Ｍ６	Ⅰ	167	１．８	２．０	０．４	１．３	下呂石		
48	Ｍ６	Ⅰ	168	２．３	１．６	０．６	１．８	下呂石		
49	Ｍ６	Ⅱ	35	３．７	２．７	０．９	９．８	チャート		
50	Ｍ７	Ⅱ	94	２．８	１．７	１．０	４．０	下呂石		
51	Ｎ６	Ⅰ	69	２．７	１．８	０．７	２．９	下呂石		
52	Ｎ６	Ⅱ	6	２．９	３．７	０．９	９．８	チャート		
53	ＳＢ１	Ⅱ	62	３．７	５．０	０．９	１４．９	流紋岩		
54	ＳＢ１	Ⅱ	67	３．３	２．１	０．６	３．９	チャート		
55	ＳＢ５	Ⅱ	140	１．８	１．４	０．４	０．６	下呂石		
56	Ｐ135	Ⅱ	1	２．５	５．９	０．９	１３．３	下呂石		
57	表採		37	４．３	２．２	０．８	５．５	下呂石		

打製石斧（１）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
1	Ｂ19	Ⅱ	2707	１０．９	５．８	２．２	２２４．７	Ａ	片岩		
2	Ｃ18	Ⅱ	199	（６．１）	（４．９）	（２．９）	（９０．２）	Ａ	砂岩		
3	Ｃ18	Ⅱ	4601	（８．１）	（６．１）	（２．３）	（１４９．７）	Ａ	凝灰岩		
4	Ｃ19	Ⅱ	38	（４．６）	（８．１）	（２．０）	（８３．０）	Ａ	凝灰岩		
5	Ｈ12	Ⅱ	1652	（１０．２）	（４．８）	（２．６）	（１６９．１）	Ａ	流紋岩		
6	Ｈ12	Ⅱ	1773	（６．３）	（６．１）	（２．７）	（１２９．３）	？	頁岩		
7	Ｈ13	Ⅱ	29	９．６	４．７	１．１	５３．４	Ｂ	凝灰岩	80－54	
8	Ｈ13	Ⅱ	1332	（７．２）	（４．９）	（１．７）	（６８．５）	Ａ	砂岩		
9	Ｉ９	Ⅱ	45	（６．７）	（７．０）	（１．６）	（１００．２）	？	凝灰岩		
10	Ｉ９	Ⅱ	299	（７．９）	（５．５）	（２．６）	（１５７．４）	Ａ	凝灰岩		
11	Ｉ９	Ⅰ	573	（１２．０）	４．４	１．２	（８９．３）	Ａ	砂岩		
12	Ｉ９	Ⅱ	605	１０．１	４．７	１．６	９６．３	Ａ	凝灰岩		
13	Ｉ９	Ⅱ	4263	１０．６	６．８	２．０	１４２．５	Ｂ	砂岩		
14	Ｉ９	Ⅱ	4516	（７．３）	（４．４）	（２．０）	（７７．７）	Ａ	砂岩		
15	Ｉ10	Ⅱ	164	１０．２	５．６	１．７	１１６．３	Ａ	凝灰岩		

打製石斧（2）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
16	I 10	Ⅱ	166	8.2	4.6	1.4	67.8	A	砂岩	81－65	
17	I 10	Ⅱ	258	(10.5)	(7.2)	(3.3)	(365.3)	A	緑色片岩		
18	I 10	Ⅱ	277	(6.9)	(6.1)	(1.2)	(98.9)	A	砂岩		
19	I 10	Ⅱ	300	(10.6)	(6.1)	(3.0)	(237.0)	A	流紋岩		
20	I 10	Ⅱ	584	(6.9)	(5.3)	(1.2)	(60.4)	A	砂岩		
21	I 10	Ⅱ	1621	12.1	7.0	1.4	178.3	B	砂岩	80－58	
22	I 10	Ⅱ	4563	(11.4)	(5.3)	(2.4)	(177.9)	A	ヒン岩		
23	I 11	Ⅱ	44	(7.2)	(5.3)	(1.5)	(63.7)	A	凝灰岩		
24	I 11	Ⅱ	309	(6.2)	(5.1)	(1.6)	(69.9)	?	凝灰岩		
25	I 11	Ⅱ	332	(6.3)	(5.5)	(1.8)	(76.4)	A	流紋岩		
26	I 11	Ⅱ	489	10.0	4.2	1.5	76.6	A	砂岩	80－55	
27	I 11	Ⅱ	2237	(11.1)	(5.6)	(2.7)	(211.0)	A	凝灰岩		
28	I 12	Ⅱ	3026	(10.8)	(4.3)	2.4	(156.4)	A	砂岩		
29	J 5	Ⅱ	3681	(12.8)	7.8	2.7	(319.2)	A	ヒン岩		
30	J 5	Ⅱ	3686	(12.5)	9.0	2.2	(334.5)	B	凝灰岩		
31	J 5	Ⅱ	3748	10.2	6.3	1.8	103.9	B	砂岩		
32	J 5	Ⅱ	4901	(11.6)	5.3	1.8	(109.4)	B	砂岩		
33	J 6	Ⅱ	3615	(11.9)	(7.9)	(3.0)	(309.0)	A	凝灰岩		
34	J 6	Ⅱ	3755	13.1	5.3	2.1	182.7	A	砂岩	81－63	
35	J 6	Ⅱ	4008	(9.1)	(6.2)	(1.3)	(120.5)	A	流紋岩		
36	J 7	I	182	11.4	4.8	0.6	54.6	A	砂岩		
37	J 7	Ⅱ	91	(8.1)	(4.6)	(1.8)	(79.2)	A	砂岩		
38	J 7	Ⅱ	115	13.4	5.5	2.1	258.8	A	流紋岩		
39	J 7	Ⅱ	334	(4.2)	(6.2)	(1.0)	(30.5)	?	頁岩		
40	J 7	Ⅱ	475	(9.9)	(7.3)	(3.4)	(328.7)	A	砂岩		
41	J 7	Ⅱ	477	(10.1)	(7.7)	(2.7)	(283.2)	A	流紋岩		
42	J 7	Ⅱ	3915	(10.2)	(4.6)	(1.3)	(83.3)	A	砂岩		
43	J 7	Ⅱ	4020	(8.6)	(5.8)	(2.3)	(97.7)	A	凝灰岩		
44	J 7	Ⅱ	4232	14.8	5.2	2.5	241.6	A	砂岩		
45	J 7	Ⅱ	4233	(14.2)	6.5	(3.5)	(362.4)	A	流紋岩		
46	J 8	Ⅱ	75	8.3	5.5	2.0	107.2	A	砂岩		
47	J 8	Ⅱ	92	(8.7)	(9.2)	(2.3)	(276.9)	?	凝灰岩		
48	J 8	Ⅱ	108	(11.9)	5.3	1.6	(129.7)	A	砂岩		
49	J 8	Ⅱ	162	9.8	4.7	1.9	99.7	A	砂岩	80－62	
50	J 8	Ⅱ	163	(10.2)	6.3	1.6	(102.5)	B	砂岩		
51	J 8	Ⅱ	233	(9.1)	(5.9)	1.5	(109.2)	A	砂岩		
52	J 8	Ⅱ	461	(10.9)	(4.4)	(1.9)	(74.6)	A	砂岩		
53	J 8	Ⅱ	507	8.8	5.3	1.4	90.1	A	砂岩		
54	J 8	Ⅱ	4555	(11.2)	5.6	1.9	(120.6)	B	凝灰岩		
55	J 8	Ⅱ	4570	(11.3)	(5.7)	(2.8)	(198.2)	A	流紋岩		
56	J 9	Ⅱ	4746	(7.6)	(5.0)	(2.4)	(119.7)	A	凝灰岩		
57	J 10	Ⅱ	1628	(8.5)	(6.1)	(2.5)	(152.2)	A	流紋岩		
58	J 10	Ⅱ	2251	12.6	5.8	1.7	191.8	A	凝灰岩		
59	K 4	I	369	(6.2)	(5.1)	(2.8)	(117.5)	A	凝灰岩		
60	K 4	Ⅱ	344	11.0	4.8	1.3	(79.6)	A	砂岩		
61	K 4	Ⅱ	553	(9.1)	4.8	1.1	(59.9)	A	砂岩		
62	K 5	Ⅱ	224	(9.4)	(5.1)	(1.2)	(87.2)	A	凝灰岩		
63	K 5	Ⅱ	235	10.2	4.0	2.2	115.8	A	流紋岩		
64	K 5	Ⅱ	237	(5.9)	(3.7)	(1.4)	(43.0)	?	頁岩		
65	K 5	Ⅱ	3102	(8.9)	(5.3)	(2.1)	(137.6)	A	流紋岩		

打製石斧（3）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
66	K6	Ⅱ	856	(8.0)	3.9	2.0	(82.6)	A	砂岩	81−64	
67	K6	Ⅱ	3362	(10.1)	(6.5)	(1.8)	(175.7)	?	凝灰岩		
68	K7	Ⅱ	233	(5.7)	(4.5)	(1.9)	(62.0)	A	砂岩		
69	K7	Ⅱ	1079	16.7	6.2	3.2	422.8	A	砂岩		
70	K7	Ⅱ	1122	12.0	5.0	1.4	110.7	A	砂岩	80−57	
71	K7	Ⅱ	2779	(7.7)	(4.1)	(2.0)	(74.7)	A	砂岩		
72	K8	Ⅱ	57	(8.8)	(6.2)	1.7	(99.0)	A	砂岩		
73	K8	Ⅱ	82	16.0	8.2	3.4	421.4	B	砂岩	81−68	
74	K8	Ⅱ	83	10.8	4.3	(1.7)	(107.4)	A	砂岩		
75	K8	Ⅱ	84	(11.7)	(5.7)	9.2	(179.9)	A	凝灰岩		
76	L3	Ⅰ	124	(5.1)	(3.8)	(1.3)	(37.2)	A	砂岩		
77	L3	Ⅱ	3172	11.5	5.7	1.9	(134.0)	A	砂岩	80−61	
78	L3	Ⅱ	3174	15.0	6.8	2.9	324.5	A	流紋岩	81−67	
79	L4	Ⅱ	327	(4.7)	(4.1)	(1.8)	(51.1)	A	凝灰岩		
80	L5	Ⅱ	86	11.8	7.3	3.0	(309.7)	B	砂岩		
81	L5	Ⅱ	2877	(9.7)	(4.2)	2.0	(123.3)	A	砂岩	80−56	
82	L7	Ⅱ	980	12.9	5.3	1.8	168.9	A	凝灰岩		
83	L7	Ⅱ	1965	(9.5)	(5.4)	1.8	(111.4)	A	砂岩		
84	M3	Ⅱ	3184	(7.2)	(5.1)	(1.6)	(75.7)	?	砂岩		
85	M7	Ⅰ	120	(3.3)	(3.2)	(1.3)	(8.9)	?	頁岩		
86	SB1	Ⅱ	36	(9.0)	(7.7)	(2.4)	(205.6)	?	凝灰岩		
87	SB1	Ⅱ	139	10.9	4.6	1.9	126.5	A	凝灰岩		
88	SB1	Ⅱ	373	(9.1)	(5.3)	(1.5)	(127.0)	A	砂岩		
89	SB1	Ⅱ	1018	10.1	6.2	2.2	135.6	B	凝灰岩		
90	SB1	Ⅱ	1578	11.8	6.5	1.7	133.1	B	凝灰岩	80−60	
91	SB1	Ⅱ	4781	16.4	7.0	2.7	298.4	A	砂岩	81−66	
92	SB4	Ⅱ	4814	(10.9)	6.2	2.2	(208.8)	A	砂岩		
93	SK2	Ⅱ	29	10.4	6.0	2.0	168.5	A	砂岩		
94	SK3	Ⅱ	1	(7.1)	(7.0)	(2.0)	(150.0)	?	砂岩		
95	SK5	Ⅱ	2	(6.3)	(6.7)	(2.2)	(124.5)	?	凝灰岩		
96	SK5	Ⅱ	5099	(10.9)	4.5	(1.7)	(115.7)	A	砂岩	80−59	
97	P46	Ⅱ	1	(9.0)	(4.4)	(1.5)	(71.8)	A	緑色片岩		
98	表採		36	(7.9)	(5.6)	(2.5)	(141.0)	A	砂岩		

磨製石斧（1）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
1	B16	Ⅱ	74	(9.2)	(6.7)	(1.3)	(91.2)	Ⅰb	ヒン岩		
2	B19	Ⅱ	3797	(10.4)	(5.8)	2.4	(244.5)	Ⅰb	蛇紋岩	82−73	
3	B19	Ⅱ	3799	(5.2)	(4.2)	(1.7)	(64.6)	Ⅰ?	蛇紋岩		
4	C17	Ⅱ	74	(4.4)	(3.8)	(0.8)	(11.9)	Ⅰ?	蛇紋岩		
5	C18	Ⅱ	4481	(15.2)	(8.7)	(3.3)	(814.5)	Ⅰb	流紋岩	83−79	
6	C18	Ⅱ	4611	(4.3)	(3.3)	(1.0)	(24.8)	Ⅰ?	蛇紋岩		
7	C19	Ⅱ	193	(4.7)	(2.2)	(1.0)	(12.2)	Ⅰ?	蛇紋岩		
8	I9	Ⅱ	607	(10.0)	(6.3)	(3.5)	(329.4)	Ⅰb	砂岩		
9	I10	Ⅱ	301	(12.5)	(5.5)	(2.5)	(332.8)	Ⅰb	蛇紋岩		
10	I10	Ⅱ	1878	(6.5)	(3.2)	(2.2)	(67.2)	?	蛇紋岩		
11	I10	Ⅱ	2085	(11.8)	(6.1)	(3.8)	(387.7)	Ⅰb	凝灰岩	82−74	
12	I10	Ⅱ	4900	(11.9)	(6.6)	(2.6)	(390.8)	Ⅰb	蛇紋岩	83−77	
13	I11	Ⅱ	488	(10.7)	(5.6)	(2.0)	(227.5)	Ⅰb	蛇紋岩	82−75	
14	I11	Ⅱ	2241	(5.9)	(6.3)	(2.4)	(152.9)	Ⅰb	蛇紋岩		

磨製石斧（2）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
15	I 12	Ⅱ	196	(14.9)	(7.4)	(2.9)	(690.7)	Ib	蛇紋岩	83－76	
16	I 12	Ⅱ	1375	(8.2)	(5.1)	(2.1)	(151.5)	?	蛇紋岩		
17	J 5	Ⅱ	3749	(8.5)	(5.3)	2.7	(181.4)	Ib	ヒン岩		
18	J 6	Ⅱ	22	(5.4)	(4.3)	(1.6)	(56.4)	I ?	蛇紋岩		
19	J 6	Ⅱ	3689	(5.2)	(3.7)	(1.5)	(49.6)	I ?	蛇紋岩		
20	J 7	Ⅱ	219	(5.6)	(3.7)	(1.5)	(50.1)	Ib	蛇紋岩		
21	J 7	Ⅱ	637	(3.5)	(3.3)	(0.9)	(12.0)	I ?	蛇紋岩		
22	J 7	Ⅱ	4228	(5.1)	(3.5)	(1.4)	(35.0)	I ?	蛇紋岩		
23	J 7	Ⅱ	4309	(7.3)	(4.4)	(1.8)	(91.5)	Ib	礫岩		
24	J 7	Ⅱ	4440	(9.6)	(4.9)	(2.9)	(237.6)	Ib	砂岩	82－69	
25	J 7	Ⅱ	4446	(7.4)	(4.4)	(3.0)	(154.5)	Ib	ヒン岩		
26	J 8	Ⅱ	17	(8.2)	(5.2)	2.0	(137.6)	Ib	蛇紋岩		
27	J 8	Ⅱ	508	(11.5)	(6.7)	(2.5)	(355.4)	Ib	蛇紋岩		
28	J 8	Ⅱ	4621	(4.0)	(3.2)	(1.9)	(41.4)	I ?	蛇紋岩		
29	J 8	Ⅱ	4628	(8.8)	(6.1)	(2.2)	(205.8)	Ib	蛇紋岩		
30	J 9	Ⅱ	1617	(4.6)	(3.6)	(1.0)	(29.7)	I ?	蛇紋岩		
31	J 9	Ⅱ	4805	(9.8)	(5.1)	(2.4)	(227.9)	Ib	蛇紋岩	82－72	
32	K 4	Ⅱ	115	(1.6)	(2.2)	(0.5)	(2.0)	?	蛇紋岩		
33	K 5	Ⅱ	596	5.6	2.1	0.7	(15.1)	Ia	蛇紋岩	83－80	
34	K 6	Ⅱ	30	(2.3)	(2.2)	(0.4)	(2.1)	I ?	蛇紋岩		
35	K 6	Ⅱ	170	(2.2)	(3.1)	(0.6)	(4.4)	I ?	蛇紋岩		
36	K 6	Ⅱ	375	(2.0)	(3.0)	(0.6)	(4.2)	I ?	蛇紋岩		
37	K 6	I	580	(4.4)	(3.3)	(2.2)	(31.8)	I ?	砂岩		
38	K 6	I	581	(2.1)	(2.4)	(1.2)	(8.8)	I ?	蛇紋岩		
39	K 7	Ⅱ	139	(4.0)	(5.3)	(2.1)	(68.3)	I ?	蛇紋岩		
40	K 7	I	430	(2.9)	(2.7)	(1.0)	(12.6)	I ?	蛇紋岩		
41	K 8	Ⅱ	15	(5.7)	(3.2)	(1.1)	(40.7)	Ib	蛇紋岩		
42	L 3	Ⅱ	556	7.9	4.0	2.0	109.5	Ib	蛇紋岩	82－70	
43	L 4	Ⅱ	553	(2.1)	(2.3)	(1.0)	(6.8)	I ?	蛇紋岩		
44	L 6	Ⅱ	198	(1.5)	(1.8)	(0.3)	(1.4)	I ?	蛇紋岩		
45	L 6	Ⅱ	208	(1.9)	(2.1)	(0.6)	(3.5)	I ?	蛇紋岩		
46	M 4	Ⅱ	162	(3.4)	(1.3)	(1.3)	(5.7)	I ?	蛇紋岩		
47	M 4	Ⅱ	296	(3.5)	(2.5)	(0.5)	(6.5)	I ?	頁岩		
48	M 4	Ⅱ	4917	14.3	5.8	3.0	394.2	Ib	花崗斑岩	83－78	
49	M 5	Ⅱ	120	(3.4)	(4.3)	(0.6)	(12.7)	I ?	蛇紋岩		
50	M 6	Ⅱ	131	4.8	2.0	(0.6)	(12.7)	Ia	蛇紋岩	83－81	
51	SB 1	Ⅱ	4782	(9.6)	(4.5)	2.0	(164.2)	Ib	蛇紋岩	82－71	
52	SB 1	Ⅱ	4820	(11.7)	(5.0)	(2.8)	(283.0)	Ib	蛇紋岩		
53	SB 3	Ⅱ	3576	(13.9)	(5.4)	(2.7)	(363.3)	Ib	蛇紋岩		
54	SB 5	Ⅱ	166	(7.3)	(2.7)	(1.5)	(24.4)	Ib	蛇紋岩		

切目石錘

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
1	I 11	Ⅱ	3931	5.7	3.2	1.8	47.1	A種	凝灰岩		
2	J 6	Ⅱ	309	5.7	3.7	2.1	65.7	A種	砂岩	84－82	
3	J 7	Ⅱ	4229	6.8	5.7	1.6	81.3	A種	凝灰岩		
4	K 6	Ⅱ	117	4.8	2.0	1.2	15.8	A種	砂岩	84－83	
5	SB 1	Ⅱ	1700	(5.2)	3.1	1.3	(30.4)	A種	砂岩		

礫石錘（計測部位は、渡辺誠1985「礫石錘計測部位説明図」『阿曽田遺跡発掘調査報告書』を参照した）

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ1	長さ2	幅	厚さ	a	b	重さ	石材	挿図番号	備考
1	H11	Ⅱ	36	7.6	6.8	5.9	2.6	1.4	2.5	157.1	凝灰岩		
2	H11	Ⅱ	3928	5.6	4.8	4.5	3.1	1.7	1.7	103.6	凝灰岩	84－90	
3	H14	Ⅱ	2488	5.7	5.5	3.5	2.0	0.9	1.0	60.2	砂岩	84－88	
4	I 6	Ⅱ	4129	9.6	8.9	7.5	3.4	1.6	1.6	333.9	凝灰岩		
5	I 8	Ⅱ	48	6.2	5.9	3.7	2.1	2.0	1.6	(74.9)	砂岩		
6	I 9	Ⅱ	4260	6.8	6.6	5.8	2.2	1.4	1.4	96.8	砂岩	84－94	
7	I 10	Ⅱ	165	6.0	5.5	4.2	2.0	1.9	1.4	77.3	凝灰岩	84－97	
8	I 11	Ⅱ	469	10.4	10.1	9.3	3.9	2.7	2.7	523.6	凝灰岩	84－95	
9	I 11	Ⅱ	2235	5.4	5.2	2.7	1.8	0.8	1.1	28.7	凝灰岩	84－91	
10	I 11	Ⅱ	4268	6.0	5.9	6.3	2.5	0.5	1.3	106.1	凝灰岩		
11	I 11	Ⅱ	4277	7.1	6.4	(6.5)	2.4	2.2	1.3	(148.6)	凝灰岩		
12	I 12	Ⅱ	197	5.2	5.0	2.8	(1.7)	(0.9)	(0.6)	(31.1)	砂岩		
13	J 6	I	325	5.2	4.6	3.7	1.5	1.0	1.1	33.1	凝灰岩	84－92	
14	J 6	Ⅱ	477	(4.5)	(3.5)	(7.6)	(2.8)	—	(2.0)	(104.9)	砂岩		
15	J 6	Ⅱ	3733	4.4	4.1	3.5	1.6	0.6	0.7	34.2	凝灰岩	84－87	
16	J 7	Ⅱ	3884	5.0	4.7	4.4	1.8	1.2	1.1	60.8	砂岩	84－86	
17	J 7	Ⅱ	3998	9.4	8.7	4.9	2.6	0.7	1.5	182.9	凝灰岩		
18	J 7	Ⅱ	4231	6.5	6.0	6.4	3.0	1.4	1.3	160.5	凝灰岩	84－93	
19	J 8	Ⅱ	117	(6.5)	(5.4)	(4.5)	(1.3)	—	(1.2)	(50.2)	凝灰岩		
20	J 9	Ⅱ	1443	7.8	7.1	7.0	2.6	1.8	3.5	205.6	凝灰岩		
21	J 10	Ⅱ	1632	9.3	8.2	6.5	2.7	2.0	2.8	225.5	凝灰岩		
22	K 4	Ⅱ	735	7.5	7.1	5.7	2.4	1.3	1.5	160.0	花崗岩		
23	K 6	Ⅱ	244	9.6	8.7	7.7	2.0	2.7	3.2	205.0	砂岩	84－96	
24	K 6	Ⅱ	666	8.7	8.3	4.4	2.6	1.0	1.0	141.0	凝灰岩		
25	K 7	Ⅱ	2558	7.0	6.3	6.0	(2.3)	2.8	2.5	(113.0)	凝灰岩		
26	K 8	Ⅱ	16	(5.6)	5.5	3.5	1.9	0.7	0.8	(50.9)	凝灰岩		
27	K 8	Ⅱ	56	7.1	6.3	6.3	2.3	1.0	1.5	133.8	砂岩		
28	L 2	Ⅱ	16	11.0	10.4	9.5	4.4	2.5	2.0	598.3	凝灰岩		
29	L 2	Ⅱ	3188	13.8	13.2	12.4	3.7	1.5	1.8	836.7	砂岩		
30	L 8	Ⅱ	11	8.6	7.8	5.5	1.8	1.5	1.6	116.0	凝灰岩	84－89	
31	M 6	Ⅱ	804	3.7	3.4	3.9	(1.9)	(1.0)	—	(36.3)	凝灰岩		
32	M 6	Ⅱ	4932	11.9	11.4	10.2	3.5	2.3	2.9	596.6	凝灰岩		
33	SB 1	Ⅱ	2469	5.1	4.1	3.8	1.7	2.1	2.4	42.0	凝灰岩		
34	SK 6	Ⅱ	1	5.6	5.2	4.2	2.6	0.8	1.5	92.0	砂岩		
35	表採		33	5.8	3.8	2.0	0.5	1.0	1.0	68.2	砂岩		

有溝石錘

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	挿図番号	備考
1	J 6	Ⅱ	205	4.5	3.2	1.4	26.7	A種	頁岩	84－84	
2	J 9	Ⅱ	1441	2.3	2.9	0.9	10.4		砂岩	84－85	

磨石（1）

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類	石材	挿図番号	備考
1	A18	Ⅱ	2714	9.6	7.0	3.5	319.8	Ⅱc	砂岩		
2	A18	Ⅱ	8451	(8.8)	(4.7)	(5.2)	(233.9)	Ⅳ	凝灰岩		
3	B17	Ⅱ	36	(8.9)	(7.4)	(4.6)	(401.8)	Ⅱc	凝灰岩		
4	B17	Ⅱ	2739	9.6	9.2	5.8	662.2	Ⅰb	凝灰岩		
5	B17	Ⅱ	2740	9.2	7.2	3.6	319.5	Ⅱd	凝灰岩	86－105	
6	B18	Ⅱ	26	(4.0)	(5.2)	(2.2)	(47.1)	Ⅳ	砂岩		
7	B18	Ⅱ	118	(10.1)	(5.1)	(4.9)	(386.3)	Ⅱa	流紋岩		

磨石（2）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
8	B18	Ⅱ	138	(5.3)	(6.9)	(3.5)	(126.9)	Ⅳ	砂岩		
9	B18	Ⅱ	2727	(6.5)	(5.5)	(4.4)	(213.2)	Ⅳ	砂岩		
10	B18	Ⅱ	3452	14.0	8.9	5.2	770.9	Ⅳ	凝灰岩		
11	B19	Ⅱ	99	10.9	5.1	4.9	354.9	Ⅳ	砂岩		
12	C16	Ⅱ	51	(5.0)	(6.3)	(4.0)	(180.4)	Ⅱb	凝灰岩		
13	C16	Ⅱ	1511	11.0	9.8	4.2	632.0	Ⅱb	凝灰岩		
14	C16	Ⅱ	1610	11.4	5.2	3.1	245.6	Ⅱb	砂岩		
15	C17	Ⅰ	190	8.7	7.0	4.6	333.6	Ⅱb	凝灰岩		
16	C17	Ⅱ	2748	6.5	4.6	4.2	158.7	Ⅱa	凝灰岩		
17	C18	Ⅱ	417	7.7	5.3	2.2	(123.8)	Ⅱb	凝灰岩		
18	C18	Ⅱ	4052	11.4	8.2	4.1	(563.5)	Ⅲb	凝灰岩	86－107	
19	C18	Ⅱ	4189	12.5	7.6	3.2	473.8	Ⅱb	凝灰岩		
20	C18	Ⅱ	4478	22.9	21.5	6.6	4330.0	Ⅰb	凝灰岩		
21	C18	Ⅱ	4486	10.3	8.6	4.4	480.6	Ⅱb	凝灰岩		
22	C19	Ⅱ	137	(8.5)	(7.7)	(4.6)	(447.3)	Ⅳ	砂岩		
23	H12	Ⅱ	1954	(15.2)	(10.1)	(4.1)	(738.9)	Ⅱb	凝灰岩		
24	H13	Ⅱ	1523	11.3	8.9	4.2	590.2	Ⅱb	凝灰岩		
25	I 9	Ⅱ	29	5.7	4.9	4.1	149.3	Ⅱa	砂岩		
26	I 9	Ⅱ	287	8.2	(5.1)	1.7	(112.4)	Ⅱb	凝灰岩		
27	I 9	Ⅰ	413	8.6	7.0	4.3	318.5	Ⅱb	凝灰岩		
28	I 9	Ⅱ	352	6.9	5.8	3.8	(182.3)	Ⅱb	凝灰岩		
29	I 9	Ⅱ	2062	12.1	10.1	4.9	(870.5)	Ⅱb	砂岩		
30	I 9	Ⅱ	4431	10.6	9.1	4.6	618.3	Ⅱb	凝灰岩		
31	I 10	Ⅱ	17	12.1	10.1	5.2	903.5	Ⅱb	凝灰岩		
32	I 10	Ⅱ	126	14.0	6.6	4.0	568.3	Ⅱb	砂岩		
33	I 10	Ⅱ	128	12.1	6.4	1.9	231.6	Ⅱb	凝灰岩		
34	I 10	Ⅱ	163	10.0	7.1	5.8	581.7	Ⅱb	凝灰岩		
35	I 10	Ⅱ	275	11.0	9.0	6.9	824.8	Ⅱb	凝灰岩		
36	I 10	Ⅱ	3256	11.0	10.6	5.9	872.9	Ⅰb	凝灰岩		
37	I 10	Ⅱ	4038	8.7	7.3	4.5	316.4	Ⅱb	凝灰岩		
38	I 11	Ⅱ	225	10.7	9.0	5.2	703.4	Ⅱb	凝灰岩	85－102	
39	I 11	Ⅱ	385	9.8	9.0	6.0	652.3	Ⅰb	凝灰岩		
40	I 11	Ⅱ	492	7.9	6.6	4.7	307.1	Ⅱb	凝灰岩		
41	I 11	Ⅱ	495	11.8	9.1	4.5	(702.6)	Ⅱb	凝灰岩		
42	I 11	Ⅱ	3932	11.9	9.7	4.8	816.4	Ⅱb	凝灰岩		
43	I 11	Ⅱ	4269	10.9	8.1	6.9	839.8	Ⅱb	凝灰岩		
44	I 12	Ⅱ	184	13.4	8.5	6.3	984.8	Ⅱb	流紋岩		
45	I 12	Ⅱ	1459	13.2	5.8	2.7	342.5	Ⅲd	流紋岩		
46	I 12	Ⅱ	4995	9.3	7.2	5.5	464.2	Ⅱb	凝灰岩		
47	I 13	Ⅱ	1	13.1	8.6	4.8	(779.0)	Ⅱb	凝灰岩		
48	J 5	Ⅱ	8	14.0	10.2	3.9	768.5	Ⅱb	凝灰岩		
49	J 5	Ⅱ	34	6.8	5.6	3.7	171.3	Ⅱb	凝灰岩		
50	J 5	Ⅱ	3682	10.8	5.6	5.2	399.6	Ⅱa	凝灰岩		
51	J 6	Ⅱ	203	16.0	7.2	5.1	761.6	Ⅳ	凝灰岩		
52	J 6	Ⅱ	204	(10.2)	(7.3)	(4.6)	(417.6)	Ⅱb	凝灰岩		
53	J 6	Ⅱ	476	11.0	8.4	4.3	585.9	Ⅱb	凝灰岩	85－100	
54	J 6	Ⅱ	3671	9.4	8.8	6.5	658.2	Ⅰb	凝灰岩		
55	J 6	Ⅱ	3753	12.1	10.2	8.4	132.0	Ⅱb	凝灰岩		
56	J 6	Ⅱ	3985	10.1	8.5	5.3	650.2	Ⅱb	凝灰岩		
57	J 6	Ⅱ	4127	11.4	9.5	6.4	861.9	Ⅱd	凝灰岩		

磨石（3）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
58	J 6	Ⅱ	4249	10.0	8.4	4.4	525.5	Ⅱb	凝灰岩		
59	J 7	Ⅱ	89	8.8	8.3	6.3	576.0	Ⅰb	凝灰岩	85－98	
60	J 7	Ⅱ	110	(7.4)	(7.3)	5.7	(447.5)	Ⅱb	凝灰岩		
61	J 7	Ⅱ	3747	10.5	7.3	6.5	750.7	Ⅲd	凝灰岩	86－108	
62	J 7	Ⅱ	3916	16.7	6.2	4.2	(681.9)	Ⅲd	砂岩		
63	J 7	Ⅱ	4026	12.0	10.1	6.3	1043.1	Ⅱb	凝灰岩		
64	J 7	Ⅱ	4093	10.8	9.4	5.7	678.6	Ⅱb	凝灰岩		
65	J 7	Ⅱ	4227	6.4	4.9	3.0	131.9	Ⅱb	凝灰岩		
66	J 8	Ⅱ	16	8.6	8.0	6.2	506.1	Ⅰb	凝灰岩		
67	J 8	Ⅱ	106	8.4	7.0	5.1	427.1	Ⅱb	凝灰岩		
68	J 8	Ⅱ	107	9.1	7.6	5.9	521.7	Ⅱb	凝灰岩		
69	J 8	Ⅱ	187	10.3	7.3	4.9	509.8	Ⅱb	流紋岩		
70	J 8	Ⅱ	188	10.8	8.7	5.9	771.6	Ⅱb	凝灰岩		
71	J 8	Ⅱ	246	8.7	6.8	4.9	306.3	Ⅱb	凝灰岩		
72	J 8	Ⅱ	460	14.8	4.4	4.2	413.0	Ⅱa	砂岩		
73	J 8	Ⅱ	3019	15.4	6.2	3.3	461.0	Ⅱb	砂岩		
74	J 8	Ⅱ	4554	8.2	7.2	4.8	411.8	Ⅰb	凝灰岩		
75	J 8	Ⅱ	4629	9.0	8.0	5.2	478.3	Ⅰb	凝灰岩		
76	J 8	Ⅱ	4632	14.2	13.8	3.1	755.7	Ⅰb	砂岩		
77	J 9	Ⅱ	163	14.9	5.6	5.3	577.4	Ⅱa	凝灰岩	86－106	
78	J 9	Ⅱ	166	11.0	7.1	3.6	422.1	Ⅱb	凝灰岩		
79	J 9	Ⅱ	167	6.6	5.0	2.3	(120.5)	Ⅱb	凝灰岩		
80	J 9	Ⅱ	203	11.1	8.7	5.1	696.0	Ⅱb	凝灰岩		
81	J 9	Ⅱ	216	18.8	8.1	5.0	1183.0	Ⅳ	砂岩		
82	J 9	Ⅱ	4897	8.5	7.8	4.6	389.5	Ⅰb	凝灰岩		
83	K 2	Ⅱ	9	14.0	12.5	4.6	1163.3	Ⅱb	凝灰岩		
84	K 3	Ⅱ	182	8.6	6.4	4.7	(371.8)	Ⅱb	凝灰岩		
85	K 3	Ⅱ	296	11.1	9.7	4.9	900.2	Ⅱb	凝灰岩	85－101	
86	K 4	Ⅱ	150	17.6	16.3	4.2	1710.0	Ⅰb	流紋岩		
87	K 4	Ⅱ	619	14.2	9.7	6.0	1073.0	Ⅱb	流紋岩		
88	K 4	Ⅱ	916	12.7	8.1	3.6	514.1	Ⅱc	砂岩		
89	K 4	Ⅱ	3265	(7.1)	(9.2)	(6.5)	(455.6)	Ⅱb	凝灰岩		
90	K 4	Ⅱ	3279	13.6	8.7	5.4	969.5	Ⅱb	凝灰岩		
91	K 5	Ⅱ	47	(8.6)	(4.9)	(4.6)	(210.3)	Ⅱa	凝灰岩		
92	K 5	Ⅱ	48	7.5	7.0	5.0	286.1	Ⅰb	凝灰岩		
93	K 5	Ⅱ	94	16.8	15.9	7.4	2300.0	Ⅰb	凝灰岩		
94	K 5	Ⅱ	570	(8.1)	(4.6)	(3.2)	(159.4)	Ⅲd	砂岩		
95	K 5	Ⅱ	3100	(5.1)	(5.4)	(2.0)	(99.6)	Ⅲd	砂岩		
96	K 6	Ⅱ	327	7.6	4.0	2.5	94.1	Ⅱb	凝灰岩		
97	K 6	Ⅱ	361	9.2	8.5	3.3	318.9	Ⅰb	凝灰岩		
98	K 6	Ⅱ	376	(9.2)	(4.1)	(2.6)	(113.7)	Ⅳ	砂岩		
99	K 6	Ⅱ	499	7.0	5.9	3.0	181.8	Ⅱb	砂岩		
100	K 6	Ⅱ	500	10.2	(5.4)	2.8	(220.7)	Ⅱc	砂岩		
101	K 6	Ⅱ	501	10.2	8.8	3.8	414.7	Ⅱb	凝灰岩		
102	K 6	Ⅱ	696	(4.4)	(5.5)	(3.3)	(102.7)	Ⅱb	凝灰岩		
103	K 6	Ⅱ	742	(9.8)	(4.5)	(4.2)	(272.1)	Ⅳ	凝灰岩		
104	K 6	Ⅱ	809	10.2	9.3	4.8	585.6	Ⅱb	凝灰岩		
105	K 6	Ⅱ	825	9.7	8.6	6.6	746.6	Ⅱb	凝灰岩		
106	K 6	Ⅱ	876	10.0	7.2	6.4	576.8	Ⅱa	凝灰岩	85－99	
107	K 6	Ⅱ	1141	12.9	7.1	3.7	494.6	Ⅱc	砂岩		

磨石（4）

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分類	石　材	挿図番号	備　考
108	K 6	Ⅱ	1152	9.4	6.9	3.8	346.5	Ⅱb	凝灰岩		
109	K 6	Ⅱ	4254	13.1	9.5	4.7	953.3	Ⅱb	凝灰岩		
110	K 7	Ⅱ	1851	9.3	6.4	(3.0)	(247.3)	Ⅳ	砂岩		
111	K 7	Ⅱ	2275	8.4	7.1	3.4	279.6	Ⅱb	凝灰岩		
112	K 7	Ⅱ	2594	11.1	9.3	6.0	861.7	Ⅱb	凝灰岩		
113	K 7	Ⅱ	2823	8.9	6.8	3.9	308.4	Ⅱb	凝灰岩		
114	K 8	Ⅱ	14	7.1	6.3	4.3	248.0	Ⅰb	凝灰岩		
115	K 8	Ⅱ	34	(8.2)	(9.0)	(5.4)	(570.4)	Ⅱb	砂岩		
116	K 8	Ⅱ	2809	7.6	7.1	1.3	90.2	Ⅰb	凝灰岩		
117	L 2	Ⅱ	3	10.2	8.0	5.5	566.3	Ⅱb	凝灰岩		
118	L 2	Ⅱ	54	14.1	9.5	4.5	832.8	Ⅱb	凝灰岩		
119	L 3	Ⅱ	105	8.3	5.8	2.4	175.8	Ⅱb	凝灰岩		
120	L 3	Ⅱ	209	12.4	10.3	2.7	541.0	Ⅱb	砂岩		
121	L 3	Ⅱ	369	12.1	4.9	3.4	272.9	Ⅱc	砂岩		
122	L 4	Ⅱ	323	(5.3)	(6.5)	(3.1)	(157.1)	Ⅱb	砂岩		
123	L 4	Ⅱ	3199	(8.2)	(8.3)	(3.1)	(307.7)	Ⅱb	凝灰岩		
124	L 5	Ⅱ	2875	(8.4)	(4.4)	(3.4)	(221.6)	Ⅲd	凝灰岩		
125	L 6	Ⅱ	45	14.8	5.3	3.4	441.3	Ⅳ	凝灰岩	86－110	
126	L 6	Ⅱ	78	10.3	7.7	4.3	443.4	Ⅱb	凝灰岩	85－103	
127	L 6	Ⅱ	2228	13.2	7.8	6.1	812.5	Ⅱb	凝灰岩		
128	L 6	Ⅱ	2430	17.2	5.3	5.3	781.3	Ⅲd	流紋岩		
129	L 6	Ⅱ	3495	9.3	5.5	3.9	294.2	Ⅱb	凝灰岩		
130	L 7	Ⅱ	65	14.6	6.0	3.9	482.4	Ⅱc	砂岩		
131	M 3	Ⅱ	67	11.9	6.1	3.5	286.0	Ⅳ	凝灰岩	86－109	
132	M 3	Ⅱ	3181	9.4	8.6	5.1	533.5	Ⅰb	凝灰岩		
133	M 5	Ⅱ	6	10.7	8.9	4.9	625.9	Ⅱb	凝灰岩		
134	M 6	Ⅱ	754	(8.1)	(5.5)	(2.5)	(171.9)	Ⅲd	砂岩		
135	M 6	Ⅱ	3485	11.3	8.4	4.8	658.9	Ⅱb	凝灰岩		
136	M 7	Ⅱ	18	(13.1)	(8.9)	(4.0)	(539.7)	Ⅳ	砂岩		
137	SB 1	Ⅱ	117	(6.0)	(5.9)	(4.3)	(170.2)	Ⅳ	砂岩		
138	SB 1	Ⅱ	223	5.7	5.1	1.8	79.0	Ⅰb	砂岩		
139	SB 1	Ⅱ	1431	(10.3)	(7.7)	(3.9)	(417.8)	Ⅱb	凝灰岩		
140	SB 1	Ⅱ	1937	10.6	7.8	4.4	540.4	Ⅱb	凝灰岩		
141	SB 2	Ⅱ	3291	15.9	6.6	4.1	675.4	Ⅱb	砂岩		
142	SB 2	Ⅱ	4467	9.7	7.7	4.2	457.0	Ⅱb	砂岩		
143	SB 3	Ⅱ	53	13.0	4.9	3.0	290.4	Ⅱc	凝灰岩		
144	SB 3	Ⅱ	3996	9.8	7.9	3.5	309.2	Ⅱb	凝灰岩		
145	SB 5	Ⅱ	139	12.4	9.1	4.6	724.1	Ⅱb	凝灰岩		
146	SK 2	Ⅱ	1	(7.4)	(4.1)	(4.7)	(255.2)	Ⅱb	凝灰岩		
147	P95	Ⅱ	1	10.8	10.3	5.0	738.6	Ⅰb	凝灰岩		
148	P149	Ⅱ	1	10.4	8.7	5.4	688.7	Ⅱc	凝灰岩	86－104	
149	表採		66	8.0	6.9	3.8	292.0	Ⅱb	凝灰岩		
150	表採		67	11.1	7.6	4.8	526.8	Ⅱb	凝灰岩		
151	表採		68	17.4	16.8	4.9	2010.0	Ⅰb	凝灰岩		
152	表採		123	12.3	11.8	4.9	1033.6	Ⅰb	凝灰岩		

凹石（1）

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類			石材	挿図番号	備考
								形態	凹みの数と形状				
1	A18	Ⅱ	2713	9.4	9.3	4.7	575.3	Ⅰb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩	87－111	
2	B18	Ⅱ	36	(7.8)	(8.2)	(5.0)	(475.5)	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
3	B18	Ⅱ	2728	10.6	9.1	3.7	471.9	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
4	C16	Ⅱ	536	(10.1)	(9.9)	(7.6)	(933.4)	Ⅳ	2・0・2	ⅠⅡ	凝灰岩		
5	C16	Ⅱ	1510	6.7	6.5	3.3	160.8	Ⅰb	1・1・1	ⅠⅣ	凝灰岩		
6	C16	Ⅱ	1611	15.5	8.5	3.4	692.1	Ⅳ	1・1・1	ⅠⅣ	凝灰岩		
7	C16	Ⅱ	4853	(11.7)	7.7	3.5	(506.2)	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
8	C17	Ⅱ	4491	8.4	7.2	4.5	383.4	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
9	C18	Ⅱ	4487	12.3	11.5	5.6	1045.6	Ⅳ	1・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
10	C19	Ⅱ	4080	17.2	14.2	(8.4)	(227.0)	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
11	H11	Ⅱ	35	9.0	7.4	4.9	383.7	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
12	H12	Ⅱ	1466	10.3	7.5	4.9	520.5	Ⅱb	2・0・0	ⅠⅣ	安山岩		
13	H13	Ⅱ	1558	9.2	7.2	3.1	297.5	Ⅱb	2・1・0	Ⅰ	砂岩		
14	H14	Ⅱ	88	9.0	6.8	4.1	329.8	Ⅱb	3・1・0	ⅠⅡⅢ	凝灰岩	87－114	
15	I 8	Ⅱ	2	9.0	8.2	5.2	525.4	Ⅰb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
16	I 9	Ⅱ	44	10.4	8.2	3.4	413.6	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
17	I 9	Ⅱ	125	6.9	6.2	3.9	216.9	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
18	I 9	Ⅱ	341	9.0	7.6	4.2	480.0	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
19	I 9	Ⅱ	603	9.4	7.7	4.3	420.0	Ⅱb	1・1・1	Ⅰ	凝灰岩		
20	I 10	Ⅱ	127	11.8	9.2	5.8	802.7	Ⅳ	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
21	I 10	Ⅱ	155	11.3	8.9	5.3	790.9	Ⅱb	1・1・0	ⅠⅡ	砂岩		
22	I 10	Ⅱ	205	10.3	8.2	4.6	498.4	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡ	安山岩		
23	I 10	Ⅱ	207	8.8	7.2	4.5	371.9	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
24	I 10	Ⅱ	245	6.7	5.5	3.9	182.4	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
25	I 10	Ⅱ	276	14.3	10.8	4.2	815.1	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
26	I 10	Ⅱ	302	9.8	7.7	4.4	407.6	Ⅱb	1・1・1	ⅠⅣ	凝灰岩		
27	I 11	Ⅱ	15	11.4	7.1	(2.4)	(316.5)	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
28	I 11	Ⅱ	234	12.7	10.3	6.1	1057.4	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
29	I 11	Ⅱ	470	7.5	6.9	5.2	341.0	Ⅰb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
30	I 11	Ⅱ	487	8.1	7.5	3.1	230.0	Ⅰb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
31	I 11	Ⅱ	490	9.7	5.9	3.4	278.2	Ⅲd	2・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩	87－117	
32	I 11	Ⅱ	491	10.7	10.1	4.9	798.7	Ⅰb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
33	I 11	Ⅱ	1897	9.6	7.0	4.8	433.8	Ⅳ	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
34	I 12	Ⅱ	45	(8.1)	(9.2)	(4.6)	(423.1)	Ⅱb	1・1・0	Ⅲ	凝灰岩		
35	I 12	Ⅱ	272	9.9	8.3	5.5	545.8	Ⅰb	2・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
36	I 12	Ⅱ	273	15.9	4.1	3.0	334.8	Ⅱb	2・2・0	Ⅰ	凝灰岩		
37	J 5	Ⅱ	35	12.7	5.5	5.4	502.5	Ⅱc	1・1・0	Ⅰ	砂岩		
38	J 5	Ⅱ	165	13.7	10.0	4.2	876.4	Ⅱb	1・1・0	ⅠⅢ	砂岩		
39	J 5	Ⅱ	217	13.0	6.2	3.7	459.7	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
40	J 5	Ⅱ	3783	10.2	8.4	4.5	525.2	Ⅱb	2・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
41	J 6	Ⅰ	31	8.5	6.2	2.0	164.1	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	砂岩		
42	J 6	Ⅱ	460	10.6	6.7	5.6	457.1	Ⅱc	2・1・1	ⅠⅡ	凝灰岩		
43	J 6	Ⅱ	3679	10.0	8.2	4.5	464.1	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
44	J 6	Ⅱ	3766	11.6	11.0	5.0	824.4	Ⅰb	1・1・1	ⅠⅣ	凝灰岩		
45	J 6	Ⅱ	3912	(11.9)	7.6	3.6	(480.1)	Ⅱb	1・1・0	ⅠⅢ	砂岩		
46	J 6	Ⅱ	4250	(13.3)	(7.0)	(5.6)	(638.4)	Ⅳ	1・1・1	ⅠⅡⅣ	砂岩		
47	J 7	Ⅱ	50	13.4	6.3	3.3	361.7	Ⅳ	2・1・0	Ⅰ	凝灰岩	87－118	
48	J 7	Ⅱ	90	12.0	9.2	4.2	634.1	Ⅱb	2・2・0	Ⅰ	凝灰岩		
49	J 7	Ⅰ	419	11.6	(4.4)	3.8	276.1	Ⅲd	1・1・1	Ⅰ	凝灰岩		

凹石（2）

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類			石材	挿図番号	備考
								形態	凹みの数と形状				
50	J 7	Ⅱ	496	(11.0)	(5.8)	(3.2)	(309.8)	Ⅱb	2・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
51	J 7	Ⅱ	504	13.2	6.6	3.7	465.8	Ⅳ	1・0・1	ⅠⅣ	凝灰岩		
52	J 7	Ⅱ	608	13.2	10.6	6.1	123.0	Ⅱb	2・1・1	ⅠⅡⅣ	凝灰岩		
53	J 7	Ⅱ	3883	14.0	11.4	6.5	1580.0	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
54	J 7	Ⅱ	4006	10.6	8.8	5.1	568.8	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
55	J 7	Ⅱ	4117	11.0	7.0	3.7	368.8	Ⅱb	3・2・0	ⅠⅡ	凝灰岩	87－113	
56	J 7	Ⅱ	4332	11.2	10.4	(4.5)	(697.6)	Ⅱb	1・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
57	J 7	Ⅱ	8995	9.0	5.3	4.2	291.3	Ⅱb	1・0・1	ⅠⅣ	砂岩		
58	J 8	Ⅱ	39	10.9	8.0	5.5	656.4	Ⅱd	1・1・0	Ⅰ	安山岩	87－116	
59	J 8	Ⅱ	116	9.5	7.7	4.5	491.2	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
60	J 8	Ⅱ	189	12.4	4.8	5.3	500.7	Ⅳ	2・1・1	ⅠⅡ	凝灰岩		
61	J 8	Ⅱ	190	(8.7)	(6.7)	(2.2)	(193.8)	Ⅱb	1・1・0	Ⅲ	凝灰岩		
62	J 8	Ⅱ	4394	12.4	6.5	3.9	456.6	Ⅱc	2・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
63	J 8	Ⅱ	4590	11.3	10.2	4.8	662.1	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
64	J 8	Ⅱ	4631	9.8	9.8	4.2	549.3	Ⅰb	1・0・0	Ⅰ	安山岩		
65	J 8	Ⅱ	4642	10.3	8.4	4.0	414.6	Ⅱb	2・3・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
66	J 9	Ⅱ	22	11.7	10.6	4.9	852.8	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
67	J 9	Ⅱ	164	10.2	8.2	5.1	536.5	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
68	J 9	Ⅱ	1647	12.4	6.8	4.2	496.5	Ⅱb	2・2・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
69	J 9	Ⅱ	2068	6.1	5.8	4.1	158.2	Ⅰb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
70	J 9	Ⅱ	2077	10.9	6.4	4.7	441.2	Ⅲd	3・2・3	ⅠⅡ	凝灰岩		
71	J 9	Ⅱ	2078	12.0	7.7	4.2	533.7	Ⅱb	2・0・0	Ⅰ	砂岩		
72	J 9	Ⅱ	2080	13.5	6.0	3.0	334.5	Ⅱc	1・1・0	Ⅳ	凝灰岩	87－115	
73	J 9	Ⅱ	4640	7.9	7.3	4.0	287.3	Ⅰb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
74	J 9	Ⅱ	4803	9.8	9.0	5.3	574.0	Ⅰb	1・1・0	Ⅱ	安山岩		
75	J 10	Ⅱ	206	10.1	8.6	4.7	411.2	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
76	K 4	Ⅱ	147	10.9	8.6	4.0	518.3	Ⅱb	2・2・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
77	K 4	Ⅱ	537	10.8	11.0	5.7	907.8	Ⅰb	1・0・1	Ⅰ	凝灰岩		
78	K 4	Ⅱ	1063	8.6	7.6	2.8	274.2	Ⅰb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
79	K 4	Ⅱ	2941	10.3	7.8	4.3	467.0	Ⅱb	2・2・3	ⅠⅡ	凝灰岩		
80	K 4	Ⅱ	3155	(11.3)	(9.6)	(4.8)	(570.1)	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
81	K 4	Ⅱ	3280	11.5	9.3	5.1	715.3	Ⅱb	2・0・2	ⅡⅣ	凝灰岩		
82	K 5	Ⅱ	69	(12.5)	7.4	(5.8)	(888.4)	Ⅳ	1・0・0	Ⅳ	凝灰岩		
83	K 5	Ⅱ	70	13.9	7.8	4.2	696.3	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
84	K 5	Ⅱ	93	(12.4)	(9.2)	(5.7)	(790.6)	Ⅱb	3・2・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
85	K 5	Ⅱ	336	12.1	10.5	4.4	788.1	Ⅱb	2・2・0	ⅠⅡⅢ	凝灰岩		
86	K 5	Ⅱ	512	8.7	7.1	4.9	391.8	Ⅱb	1・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
87	K 5	Ⅰ	594	(5.6)	(4.8)	(3.3)	(115.9)	Ⅳ	0・0・1	Ⅰ	砂岩		
88	K 5	Ⅱ	789	12.2	7.8	3.9	547.1	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	砂岩		
89	K 5	Ⅱ	2045	(9.3)	(8.1)	(4.5)	(436.9)	Ⅱb	2・1・0	Ⅱ	凝灰岩		
90	K 5	Ⅱ	2902	(11.0)	8.4	4.9	(635.9)	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
91	K 5	Ⅱ	2927	12.0	10.2	5.2	728.4	Ⅱb	3・2・2	ⅡⅣ	凝灰岩		
92	K 5	Ⅱ	3103	(8.3)	(10.1)	(6.0)	(515.9)	Ⅳ	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
93	K 6	Ⅱ	377	(11.3)	(6.9)	(4.2)	(351.5)	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡⅢ	凝灰岩		
94	K 6	Ⅱ	462	13.0	6.8	2.7	365.3	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	砂岩		
95	K 6	Ⅱ	576	9.4	8.7	6.3	642.8	Ⅰb	2・0・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
96	K 6	Ⅱ	635	12.5	6.9	2.7	329.2	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
97	K 6	Ⅱ	718	12.7	7.8	6.2	787.1	Ⅱb	2・1・0	Ⅱ	凝灰岩		
98	K 6	Ⅱ	1153	10.0	7.1	4.7	423.4	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		

凹石（3）

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類			石材	挿図番号	備考
								形態	凹みの数と形状				
99	K 6	Ⅱ	1815	14.2	6.5	5.2	646.9	Ⅱc	1・1・0	Ⅰ	流紋岩		
100	K 6	Ⅱ	3076	10.7	6.1	4.5	401.0	Ⅱb	2・2・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
101	K 6	Ⅱ	3342	8.8	5.6	3.1	(186.0)	Ⅱb	1・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
102	K 7	Ⅱ	253	(9.5)	(7.3)	(3.3)	(126.0)	Ⅳ	1・0・1	ⅠⅣ	凝灰岩		
103	K 7	Ⅱ	377	(5.5)	(5.8)	(4.4)	(189.4)	Ⅳ	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
104	K 7	Ⅱ	1128	10.7	8.0	4.6	566.5	Ⅱb	1・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
105	K 7	Ⅱ	1853	9.2	4.1	4.0	121.6	Ⅳ	1・1・0	Ⅰ	砂岩		
106	K 7	Ⅱ	2397	9.7	7.9	5.1	(468.8)	Ⅱb	2・0・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
107	K 7	Ⅱ	2555	10.3	8.9	5.1	615.0	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
108	K 7	Ⅱ	2569	20.1	6.6	3.3	695.8	Ⅱc	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
109	K 7	Ⅱ	3328	10.8	9.9	7.2	849.4	Ⅰb	1・0・0	Ⅰ	安山岩		
110	K 7	Ⅱ	4247	11.7	7.1	4.2	516.2	Ⅱb	2・2・2	ⅠⅡ	砂岩		
111	K 7	Ⅱ	4393	12.7	7.9	5.6	896.5	Ⅲd	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
112	K 8	Ⅱ	13	9.8	9.4	5.4	708.6	Ⅳ	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
113	K 8	Ⅱ	32	11.3	10.6	6.8	1025.7	Ⅰb	1・1・0	Ⅱ	凝灰岩		
114	K 8	Ⅱ	33	15.1	6.8	4.4	687.0	Ⅱb	2・1・0	Ⅰ	砂岩		
115	K 8	Ⅱ	35	(9.6)	(5.9)	(3.6)	(336.2)	Ⅳ	1・1・1	ⅠⅣ	砂岩		
116	L 1	Ⅰ	4	(11.0)	(4.9)	(4.3)	(333.0)	Ⅳ	1・0・0	Ⅰ	砂岩		
117	L 1	Ⅱ	310	11.4	7.7	2.3	304.4	Ⅱb	1・1・0	Ⅳ	凝灰岩		
118	L 2	Ⅱ	16	11.7	5.1	5.0	456.2	Ⅳ	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
119	L 2	Ⅱ	18	13.0	8.5	2.8	495.9	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	砂岩		
120	L 2	Ⅱ	3185	12.8	5.5	3.7	405.0	Ⅱc	1・0・1	Ⅳ	砂岩		
121	L 3	Ⅱ	115	10.0	8.5	4.5	594.1	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
122	L 3	Ⅱ	119	(6.4)	(6.7)	(3.1)	(159.1)	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	砂岩		
123	L 3	Ⅱ	128	9.0	5.9	3.5	224.3	Ⅱb	1・1・1	ⅠⅣ	凝灰岩		
124	L 3	Ⅱ	174	(9.3)	(9.0)	(2.7)	(282.3)	Ⅳ	1・1・0	Ⅰ	砂岩		
125	L 6	Ⅱ	2444	11.9	6.2	3.1	(212.4)	Ⅱb	1・0・0	Ⅱ	凝灰岩		
126	L 7	Ⅱ	23	(12.0)	(6.1)	4.5	(517.5)	Ⅱb	2・0・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
127	L 7	Ⅱ	981	10.0	6.4	3.3	301.6	Ⅱb	2・0・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
128	L 7	Ⅱ	2443	(13.1)	(9.1)	(3.9)	(676.4)	Ⅳ	1・1・1	ⅠⅡ	砂岩		
129	M 5	Ⅱ	360	9.5	8.1	4.9	503.7	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	安山岩		
130	M 5	Ⅱ	3069	10.4	8.2	6.8	663.4	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
131	M 7	Ⅱ	1194	7.3	8.2	5.2	445.8	Ⅱb	2・0・0	Ⅰ	安山岩		
132	N 5	Ⅱ	1	10.5	6.7	5.2	492.9	Ⅱc	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
133	SB 1	Ⅱ	1041	10.9	6.9	3.8	425.2	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
134	SB 1	Ⅱ	1429	(5.2)	(5.4)	(3.4)	(110.7)	Ⅳ	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
135	SB 1	Ⅱ	1582	9.8	7.7	3.4	263.0	Ⅳ	1・1・0	ⅠⅡ	砂岩		
136	SB 1	Ⅱ	1696	13.4	5.9	3.1	363.7	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
137	SB 1	Ⅱ	1926	11.4	10.9	5.3	822.3	Ⅰb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
138	SB 1	Ⅱ	2468	11.4	9.6	6.2	913.7	Ⅱb	1・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
139	SB 1	Ⅱ	4776	7.6	7.1	4.5	307.6	Ⅰb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩	87－112	
140	SB 3	Ⅱ	3572	11.5	8.3	4.6	554.0	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
141	SB 3	Ⅱ	3936	10.9	9.7	5.2	631.6	Ⅱb	2・2・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
142	SB 4	Ⅱ	5	11.7	9.6	6.5	854.5	Ⅱb	1・0・1	ⅠⅣ	凝灰岩		
143	SB 4	Ⅱ	40	12.3	4.8	4.1	326.0	Ⅱb	2・1・0	ⅠⅡ	砂岩		
144	SB 4	Ⅱ	4855	12.3	10.6	8.0	1280.0	Ⅱb	1・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
145	SB 5	Ⅱ	212	9.6	8.7	4.1	415.7	Ⅳ	1・1・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
146	SB 5	Ⅱ	5064	11.4	8.9	6.4	745.0	Ⅳ	2・0・0	Ⅰ	凝灰岩		
147	SB 5	Ⅱ	5175	10.4	8.0	4.5	490.3	Ⅱb	2・2・1	ⅠⅣ	凝灰岩		

凹石（4）

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	分類			石材	挿図番号	備考
								形態	凹みの数と形状				
148	SB6	Ⅱ	5156	8.8	5.7	3.7	210.0	Ⅳ	1・0・0	Ⅰ	砂岩		
149	SB7	Ⅱ	5133	10.0	8.9	6.4	741.0	Ⅳ	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
150	SK4	Ⅱ	1	11.9	9.6	4.2	680.9	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		
151	SK4	Ⅱ	2	12.1	6.3	3.7	404.2	Ⅱb	2・2・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
152	SK6	Ⅱ	1	10.8	6.1	4.9	433.0	Ⅱb	2・2・0	ⅠⅡ	凝灰岩		
153	SF2	Ⅳ	1	10.1	10.0	4.8	583.9	Ⅰb	1・1・0	ⅠⅣ	凝灰岩		
154	SF2	Ⅳ	4721	13.1	6.5	4.5	563.9	Ⅱd	1・1・0	Ⅰ	砂岩		
155	P9	Ⅱ	1	9.9	7.0	3.8	375.6	Ⅱb	2・2・1	ⅠⅡ	凝灰岩		
156	P140	Ⅱ	1	10.8	6.4	4.8	459.2	Ⅱb	1・1・0	Ⅰ	凝灰岩		

石皿

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	挿図番号	備考
1	C16	Ⅱ	37	(11.0)	(13.7)	(6.2)	(813.5)	流紋岩		
2	I10	Ⅱ	3252	(17.0)	(29.1)	(6.6)	(3250.0)	砂岩		
3	I11	Ⅱ	486	23.8	17.7	5.1	3090.0	凝灰岩	88－121	
4	I11	Ⅱ	2004	20.2	18.1	7.8	3460.0	砂岩		
5	I12	Ⅱ	274	30.3	23.2	8.3	8250.0	流紋岩	88－119	
6	J5	Ⅱ	3724	(15.9)	(7.9)	(4.4)	(673.9)	砂岩		
7	J6	Ⅱ	3848	14.7	12.7	3.9	803.1	凝灰岩		
8	K5	Ⅱ	238	(7.4)	(5.4)	(5.7)	(354.7)	砂岩		
9	K5	Ⅱ	516	7.7	8.5	5.9	(379.1)	砂岩		
10	K6	Ⅱ	741	(21.3)	(10.6)	(7.3)	(2700.0)	砂岩		
11	K6	Ⅱ	3531	22.8	16.0	7.4	4080.0	流紋岩	88－120	
12	K6	Ⅱ	3555	(27.7)	(25.7)	(7.1)	(4860.0)	砂岩		
13	L3	Ⅱ	3178	32.4	27.0	4.7	6790.0	砂岩		
14	L4	Ⅰ	423	(22.5)	(19.0)	(6.2)	(2530.0)	砂岩		
15	L7	Ⅱ	985	(13.7)	(13.1)	(8.1)	(1450.0)	砂岩		
16	M4	Ⅱ	4981	29.0	22.1	(16.2)	(11280.0)	砂岩		
17	SB1	Ⅱ	4777	(33.4)	(12.8)	(13.1)	(5430.0)	砂岩		

砥石

番号	出土区	層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	挿図番号	備考
1	B19	Ⅱ	97	7.9	17.6	4.1	785.4	砂岩	88－122	
2	C17	Ⅱ	460	9.9	14.1	2.0	373.0	砂岩		
3	C18	Ⅱ	4529	16.5	17.3	4.8	1510.0	砂岩		
4	H14	Ⅱ	1686	9.3	17.8	4.7	1151.6	砂岩	88－123	
5	I9	Ⅱ	610	21.7	7.7	11.1	3000.0	砂岩		
6	I11	Ⅱ	2249	18.7	38.6	7.2	5400.0	砂岩		
7	J5	Ⅱ	54	4.8	3.3	0.7	20.6	砂岩		
8	K3	Ⅰ	75	9.9	8.2	12.6	1760.0	流紋岩		
9	K4	Ⅱ	318	5.4	4.8	0.8	30.3	砂岩		
10	K4	Ⅱ	986	13.8	10.4	5.2	1020.0	砂岩		
11	L2	Ⅰ	155	10.0	16.2	5.0	1079.0	凝灰岩		
12	表採		86	17.1	21.1	4.8	2360.0	砂岩	88－124	
13	表採		124	26.9	27.9	7.0	6030.0	砂岩		

粗製削器

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	K 5	Ⅱ	670	5.0	7.7	1.4	58.1	砂岩		
2	K 7	Ⅱ	321	6.1	13.3	1.2	114.0	砂岩	89－125	

玉石

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	H13	Ⅱ	37	(6.1)	5.0	(1.8)	(74.7)	蛇紋岩	89－126	

石製装身具

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	石　材	挿図番号	備　考
1	J 8	Ⅱ	2131	1.8	2.2	1.2	4.6	砂岩	89－132	

石棒・石刀・石剣類

番号	出土区	層位	遺物番号	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	石　材	挿図番号	備　考
1	I 8	Ⅱ	39	(13.9)	(7.6)	(8.9)	(881.2)	石棒	凝灰岩	89－128	
2	I 9	Ⅱ	604	(6.1)	2.3	1.1	(26.2)	石棒	粘板岩		
3	J 5	Ⅱ	88	(5.3)	(10.0)	(10.5)	(10.8)	石棒	粘板岩		
4	J 9	Ⅱ	353	(6.6)	3.9	2.6	(101.7)	石棒	凝灰岩	89－129	
5	L 8	Ⅱ	19	(6.4)	3.8	2.7	(101.6)	石棒	粘板岩		
6	J 8	Ⅱ	279	(5.8)	(2.4)	(1.0)	(22.5)	石刀	千枚岩		
7	L 4	Ⅰ	40	(4.3)	(1.9)	(1.1)	(14.0)	石刀	緑色片岩		
8	L 5	Ⅱ	123	(3.2)	(2.8)	(1.4)	(23.5)	石刀	粘板岩	89－130	
9	M 6	Ⅱ	46	(3.8)	(1.5)	(1.0)	(5.0)	石刀	粘板岩		
10	K 5	Ⅱ	3048	(15.1)	(3.6)	(2.3)	(159.7)	石剣	頁岩	89－131	
11	N 5	Ⅱ	173	(7.0)	(3.4)	(1.6)	(62.8)	石剣	白雲母片岩		
12	J 6	Ⅱ	1	(6.0)	(2.8)	(0.4)	(5.8)	不明	粘板岩		
13	J 8	Ⅱ	161	(4.8)	(3.8)	(1.6)	(39.5)	不明	粘板岩		
14	K 5	Ⅱ	2908	(6.9)	(3.4)	(1.6)	(36.1)	不明	緑色片岩	89－127	
15	M 3	Ⅱ	4	(8.0)	(2.1)	(1.0)	(16.8)	不明	粘板岩		
16	M 7	Ⅰ	176	(6.1)	(1.8)	(1.0)	(12.7)	不明	粘板岩		
17	SK 2	Ⅱ	39	(5.3)	(1.7)	(0.9)	(8.6)	不明	粘板岩		

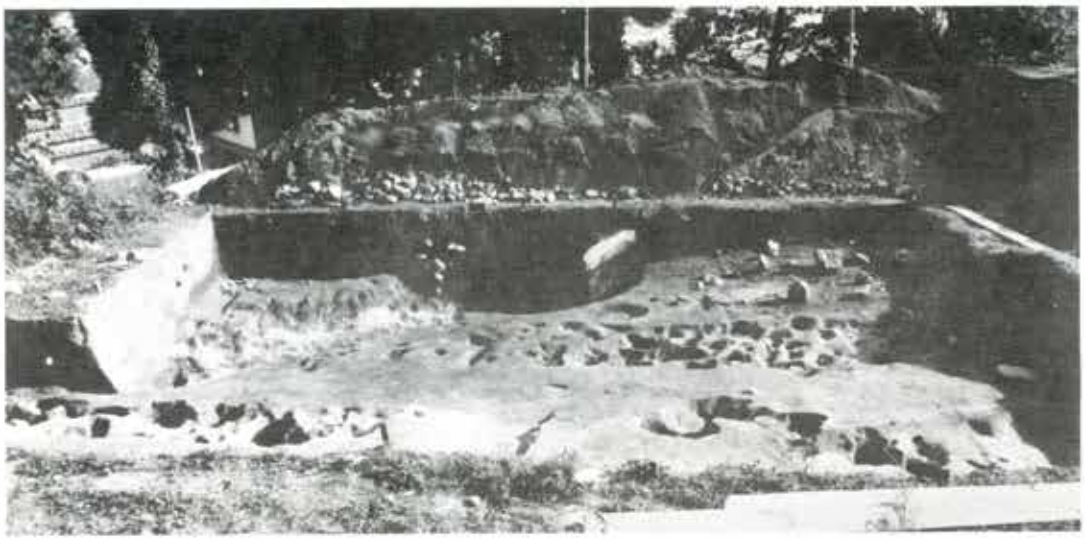
1

2

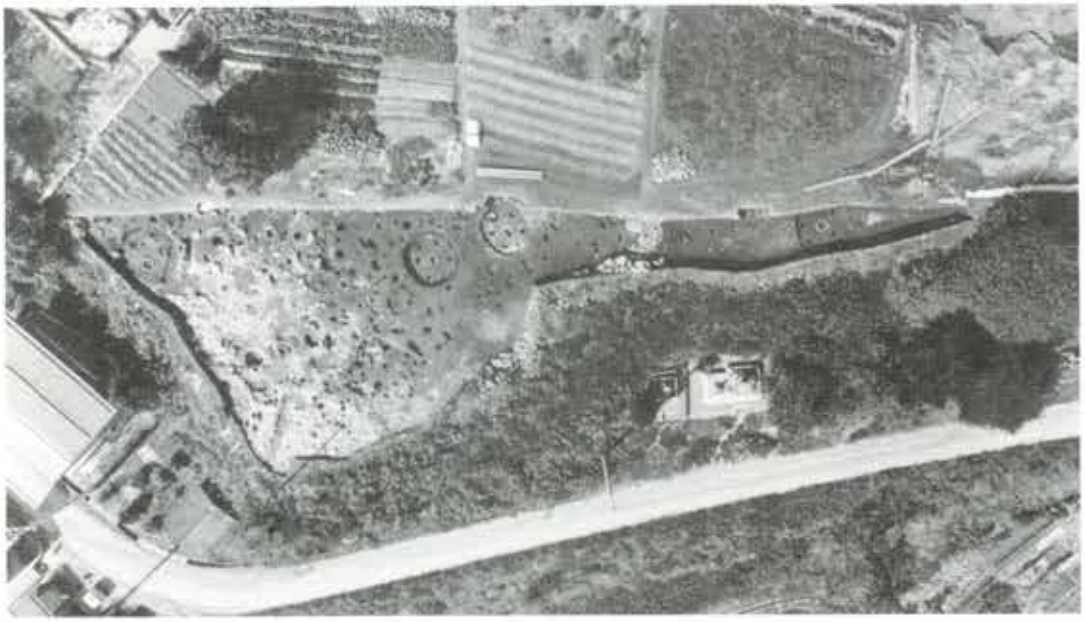
3

1．遺跡遠景　2．発掘前の状況　3．遺跡全景

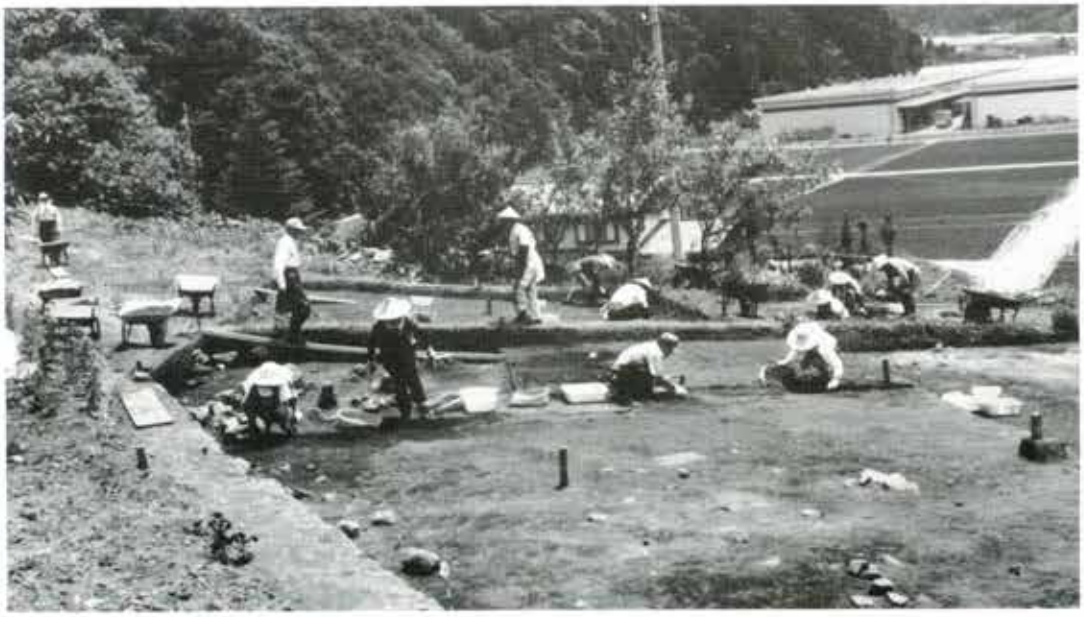
図版2



1

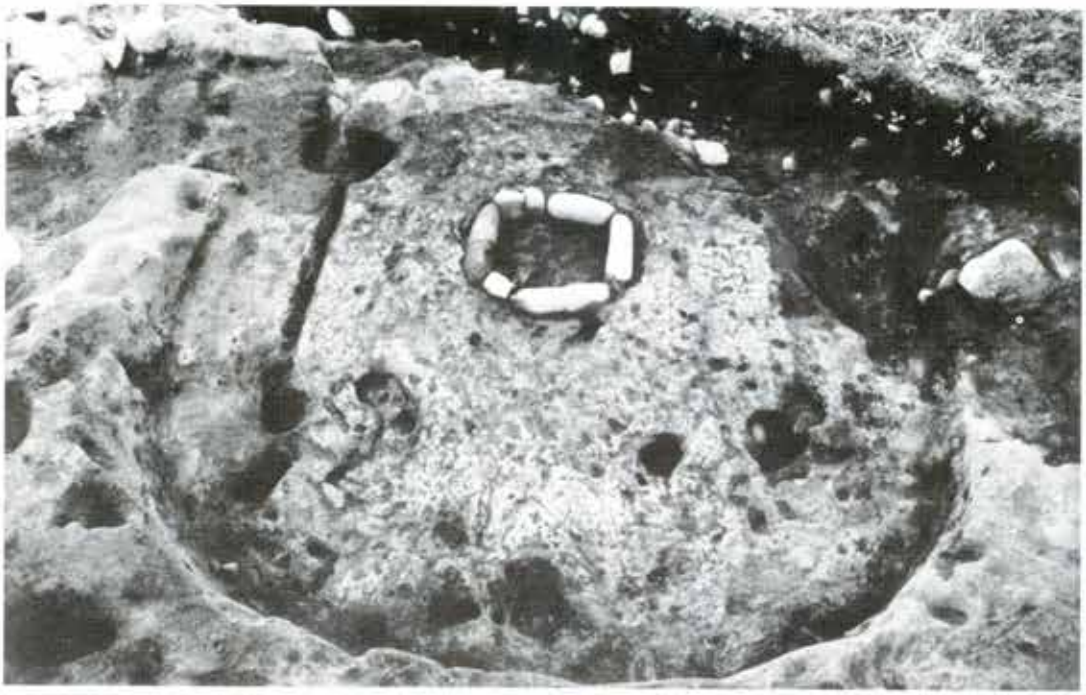


2



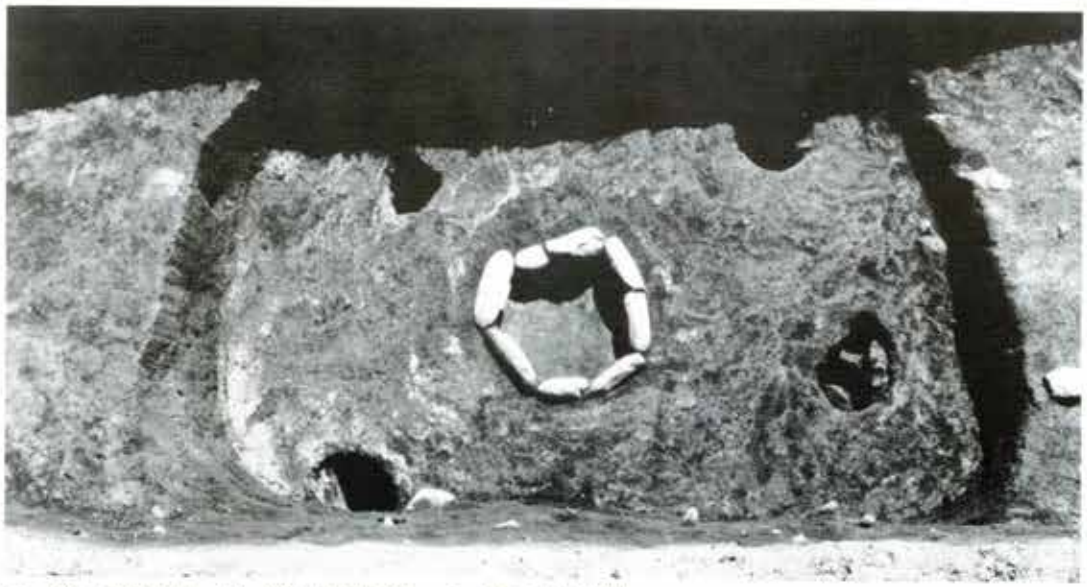
3

1．北東調査区　2．南西調査区　3．作業風景



1

2



3

1．第1号住居址　2．第2号住居址　3．第3号住居址

図版4

1

2

3

4

1．第4号住居址　2．埋甕の蓋石　3．蓋石除去後　4．埋甕

1

2

3

4

1．第5号住居址　2．炉　3・4．有孔鍔付土器出土状況

図版6

1

2

3

4

1・2．第6号住居址　2．第8号住居址　3．第7号住居址

1

2

3

4

5

1．埋甕　2．ＳＫ１検出状況　3．縄文土器出土状況　4．土偶出土状況　5．和同開珎出土状況

図版8

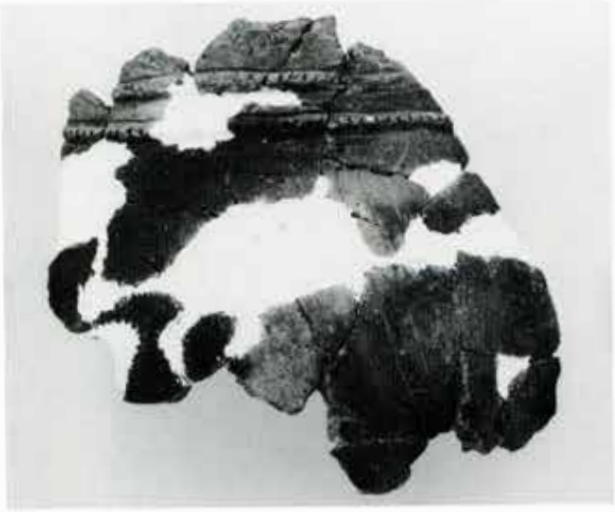
1

2

3

4

5



6

1～6．第1号住居址出土の縄文土器

1

2

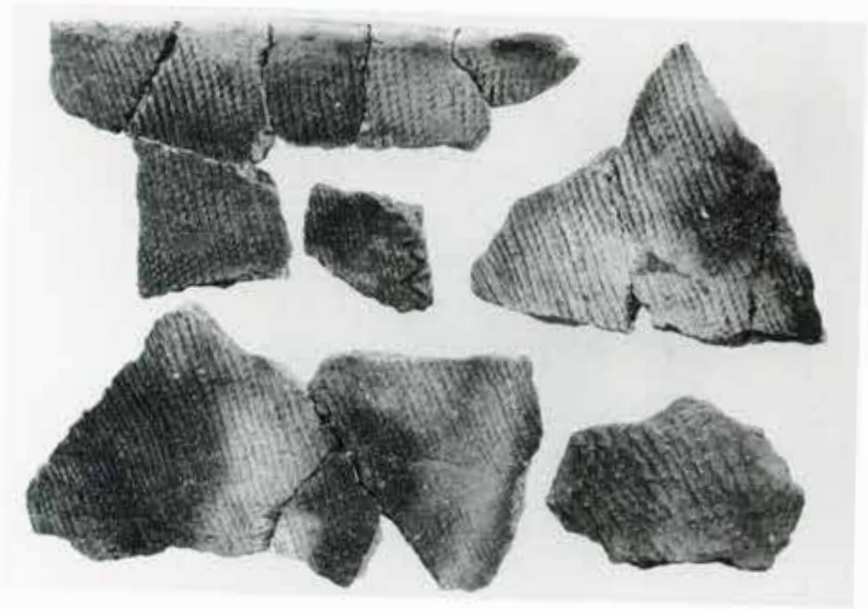
3

4

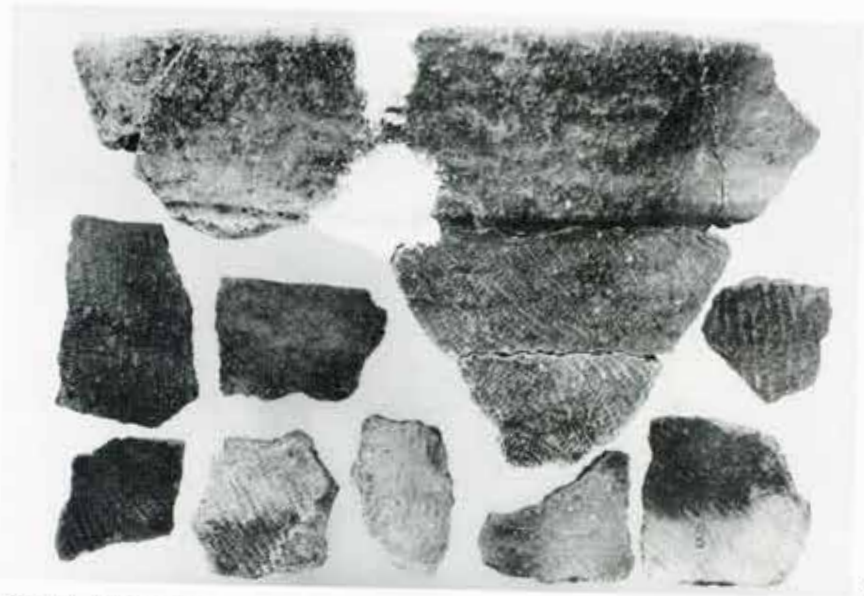
1～4．第1号住居址の縄文土器

図版10

1



2

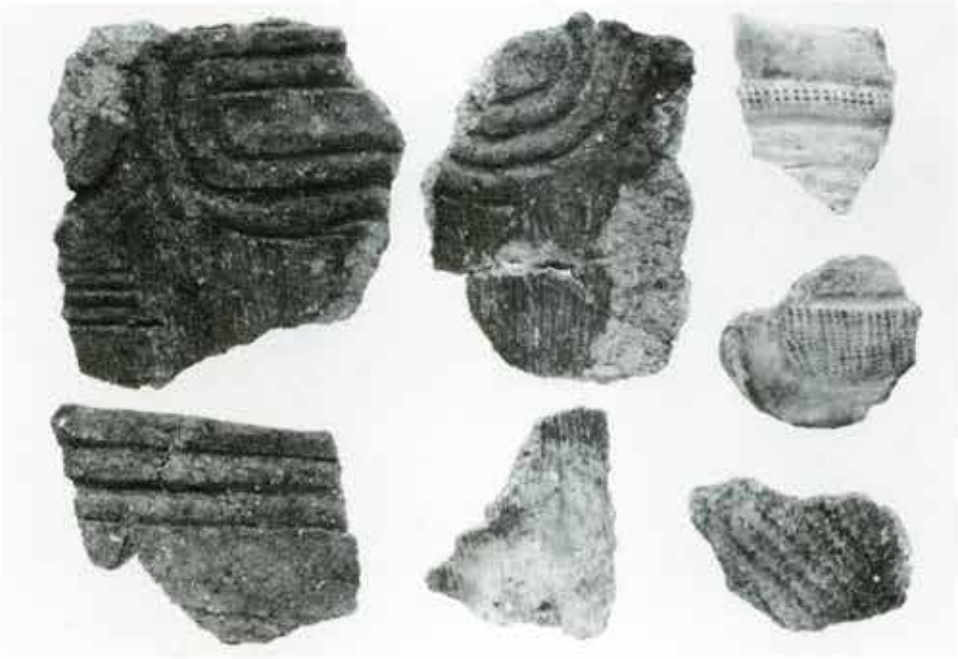


3

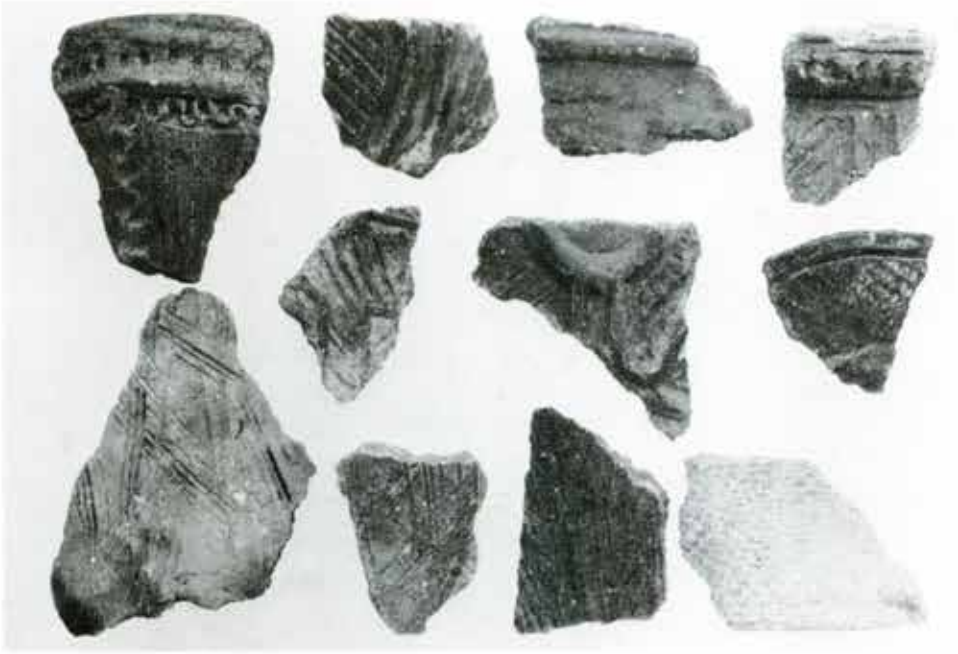
1～3．第1号住居址出土の縄文土器

1

2



3



4

1～4．第2号住居址出土の縄文土器

図版12

1

2

3

4

1～4．第3号住居址出土の縄文土器

1

2

3

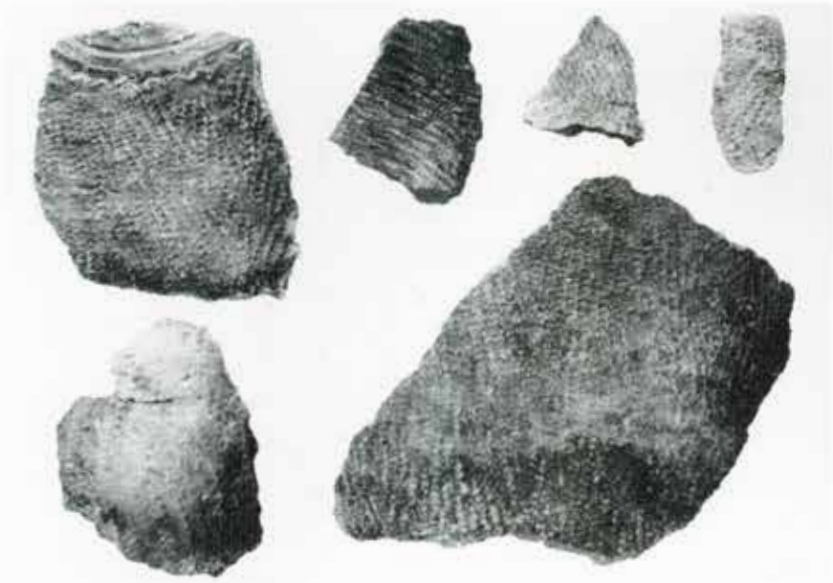
4

5

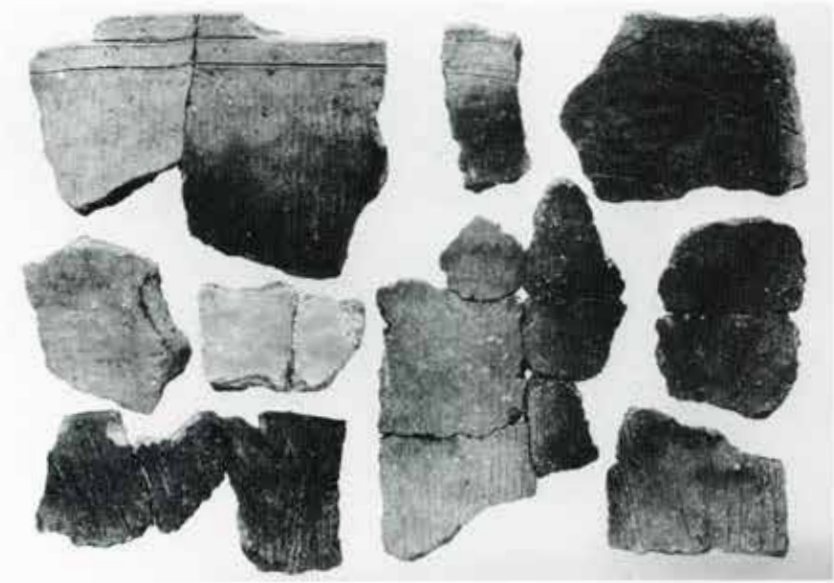
1～5．第4号住居址出土の縄文土器

図版14

1



2



3

1～3．第4号住居址出土の縄文土器

1

2

4

3

5

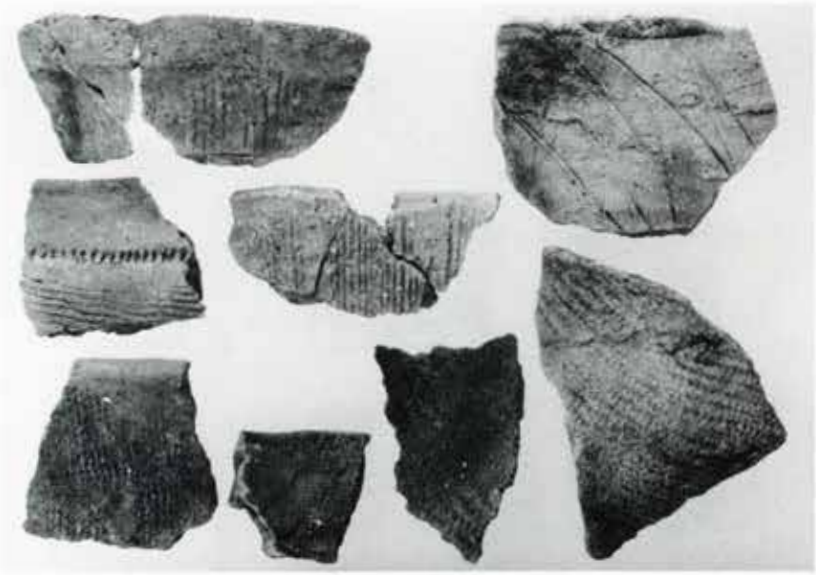
6

1～6．第5号住居址出土の縄文土器

図版16

1

2



3

1～3．第5号住居址出土の縄文土器

1

2

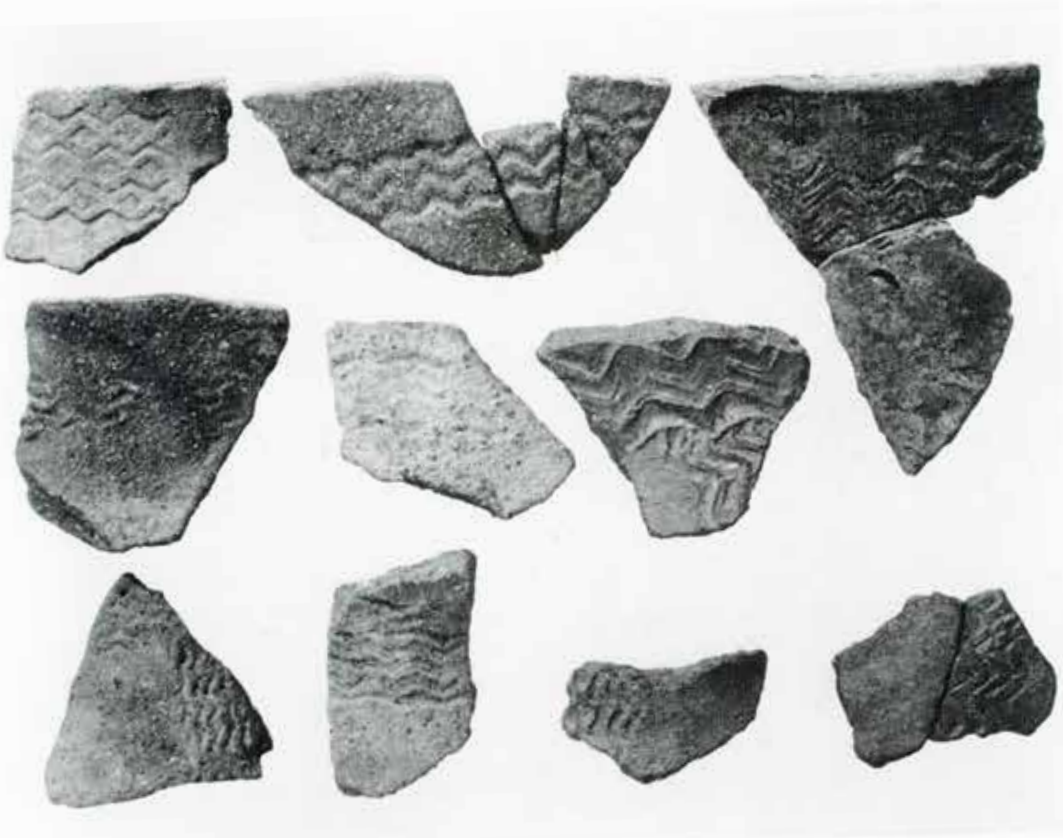
3

4

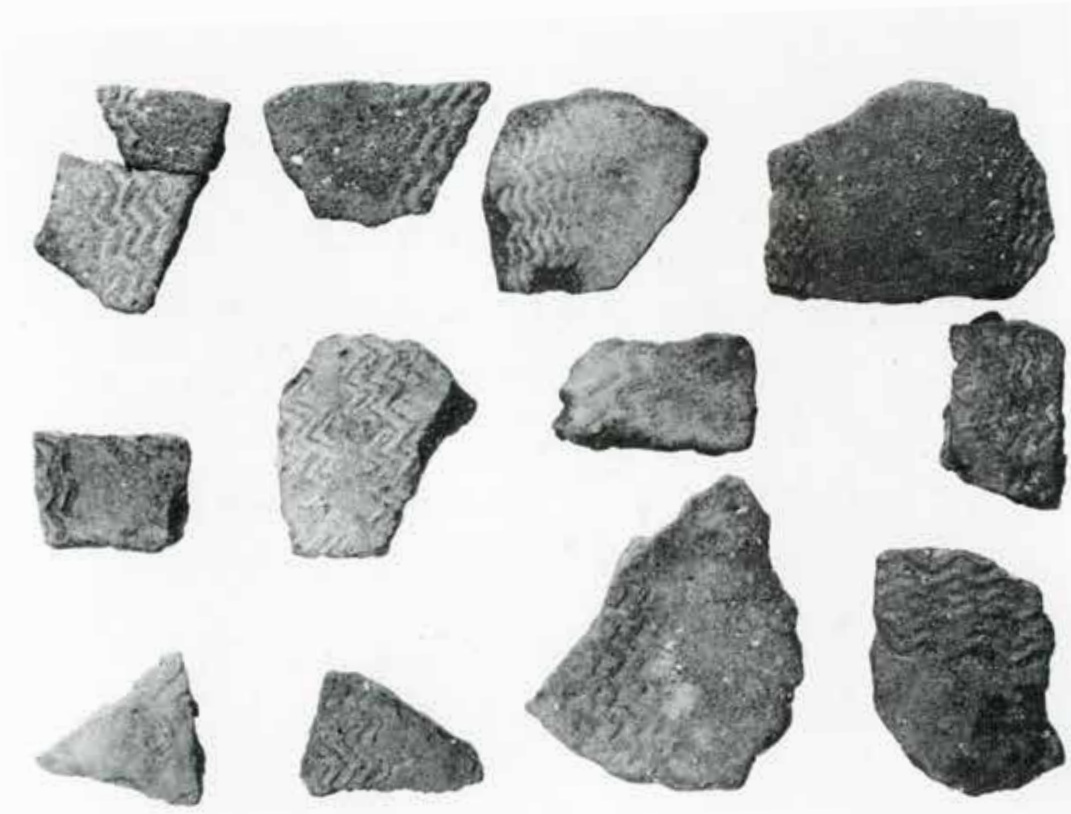
5

1～5．遺構出土の縄文土器

図版18



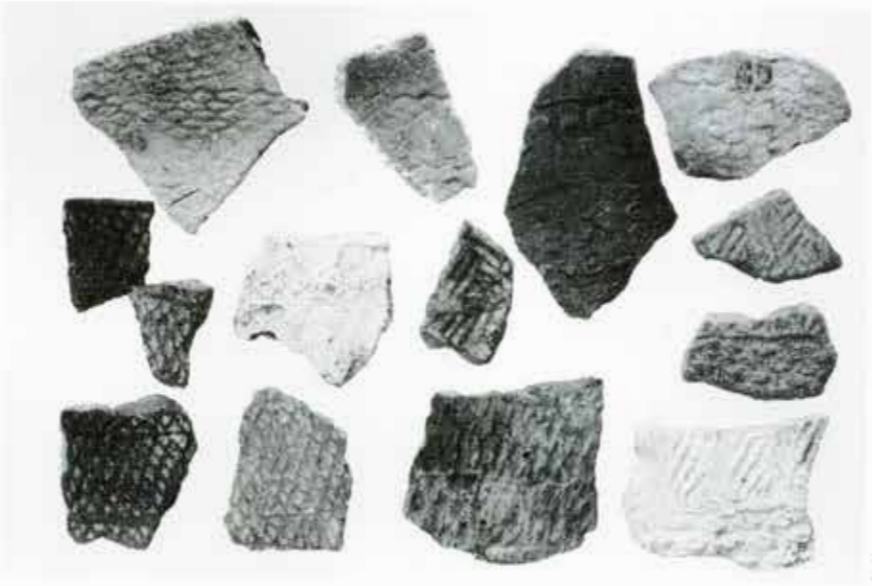
1



2

1・2．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群1類）

1



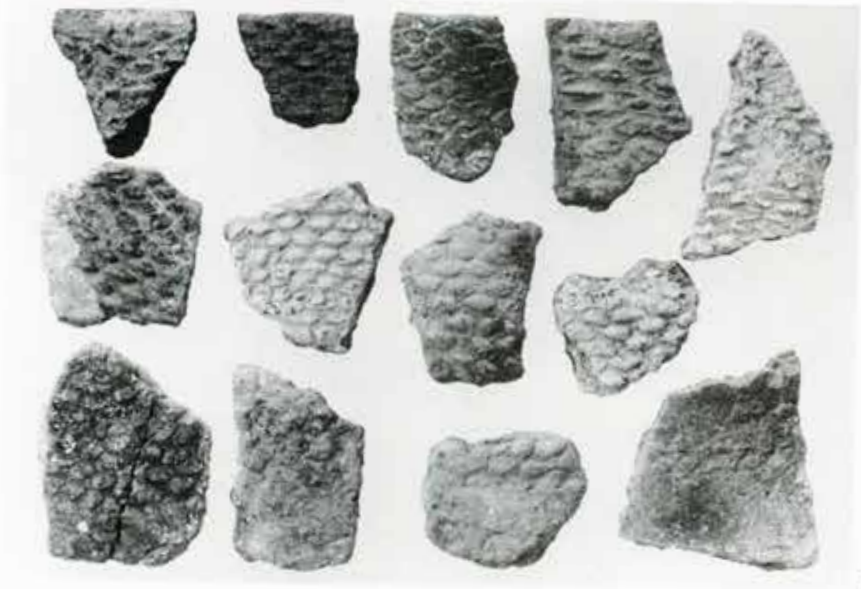
2

3

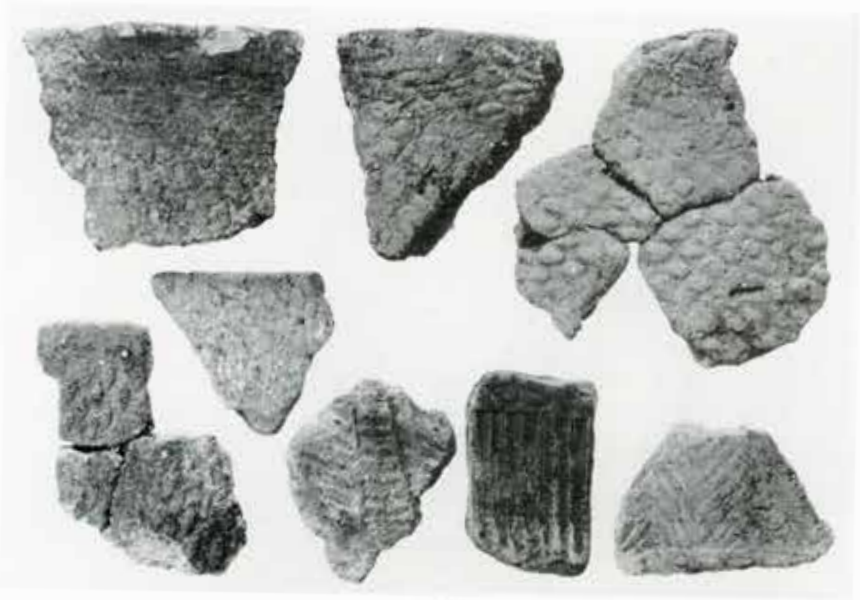
1～3．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群1類）

図版20

1

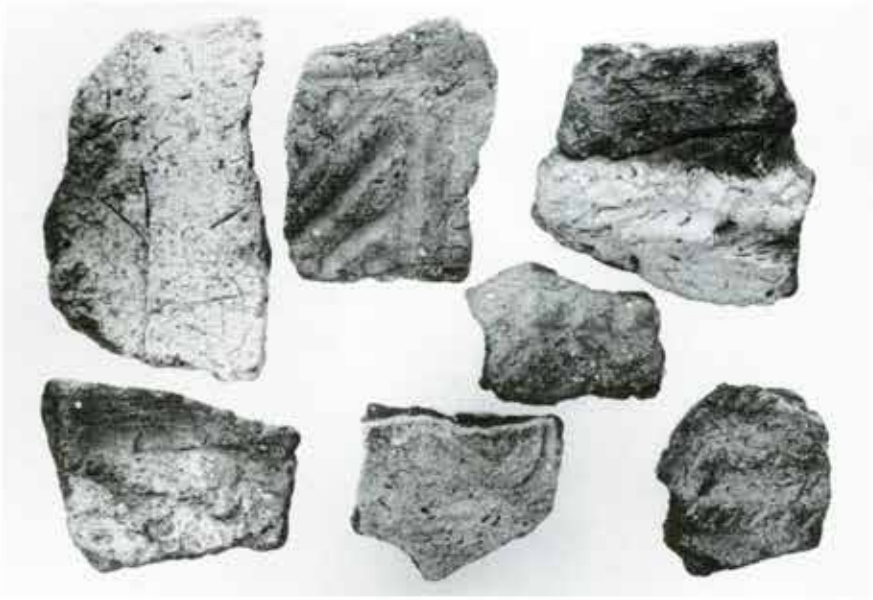


2

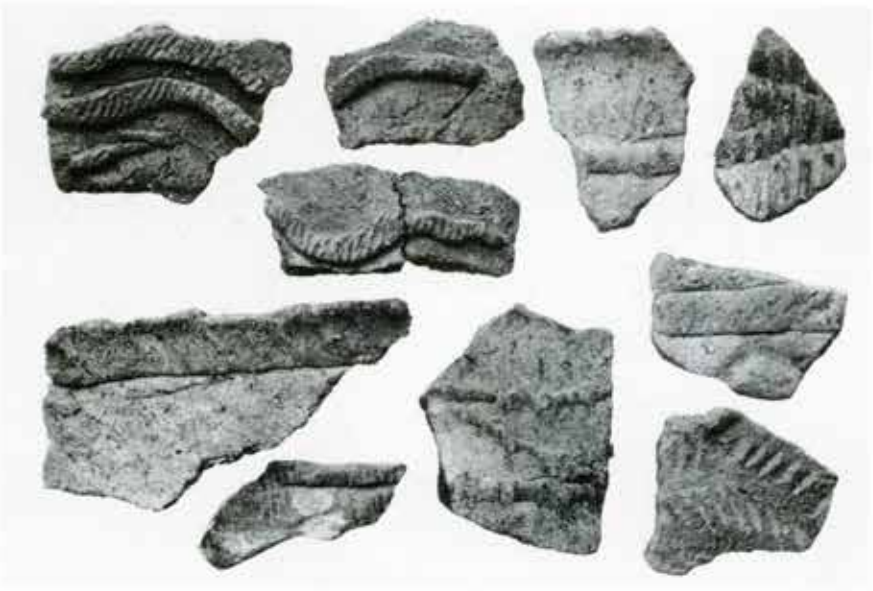


3

1～3．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群1類）



1



2

3

1・2．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群2類）　3．包含層出土の縄文土器（Ⅰ群3類）

図版22

1

2

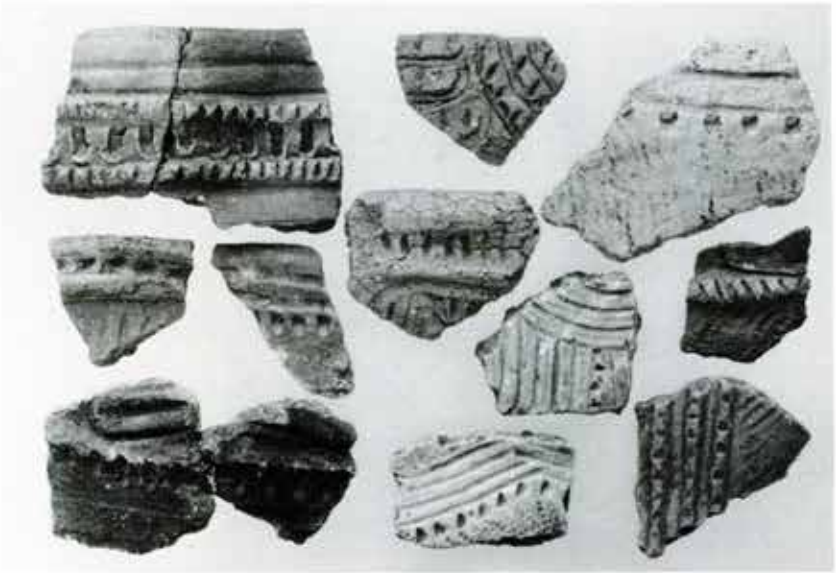
3

4

1．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群1類）　2～4．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群2類）

1

2



3

1～3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群2類）

図版24

1

2

3

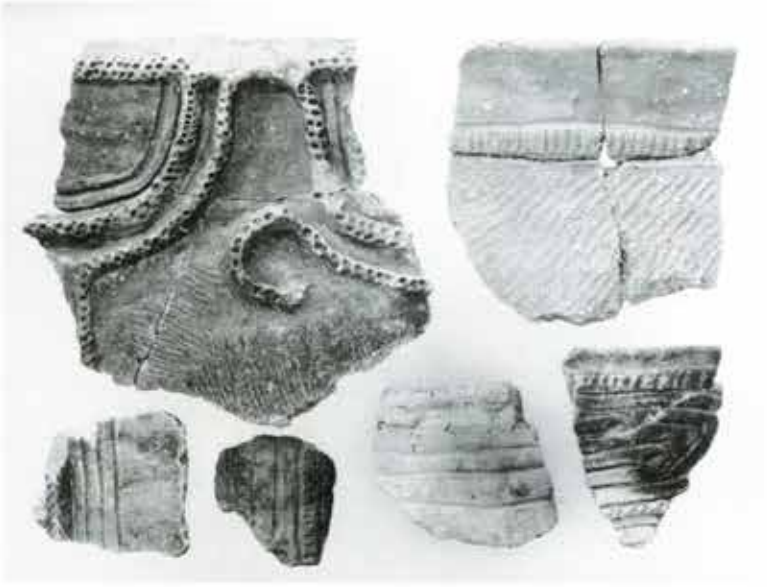
1～3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群2類）

1

2

4

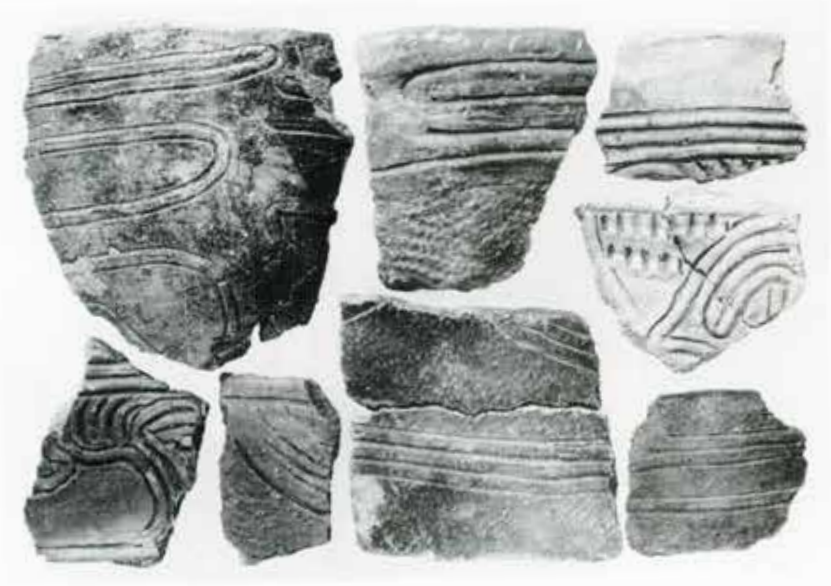
3



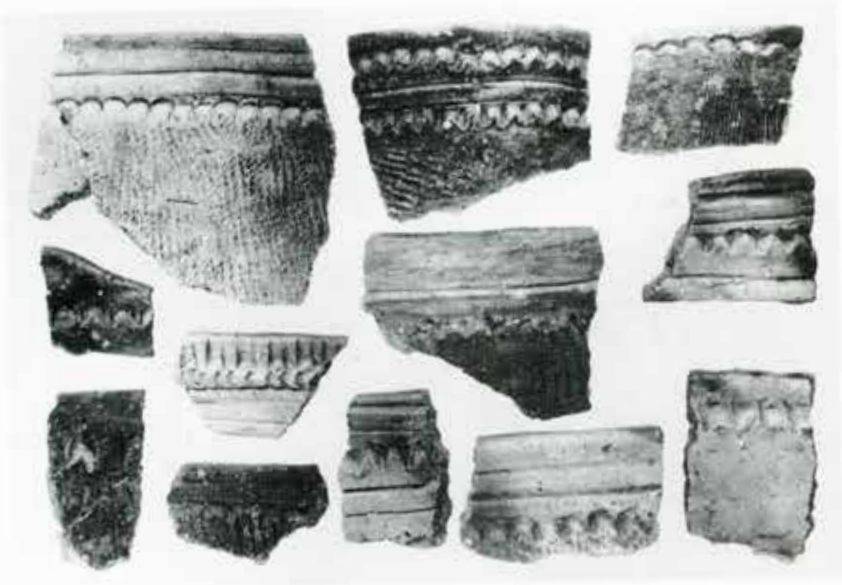
5

1～5．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群２類）

図版26



1



2

3

1～3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群2類）

1

2

3

4

1～4．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群3類）

図版28

1

2

3

1～3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群3類）

1

2

3

4

1～4．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群3類）

図版30

1

2

3

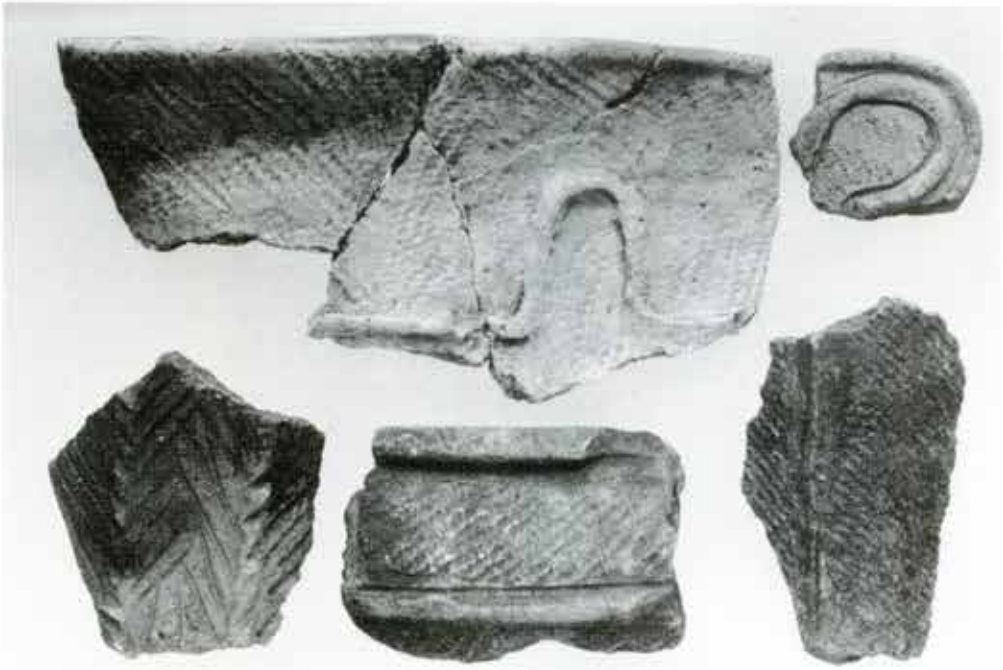
1～3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群3類）

1

2

3

1・2．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群4類）　3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群5・6類）



1

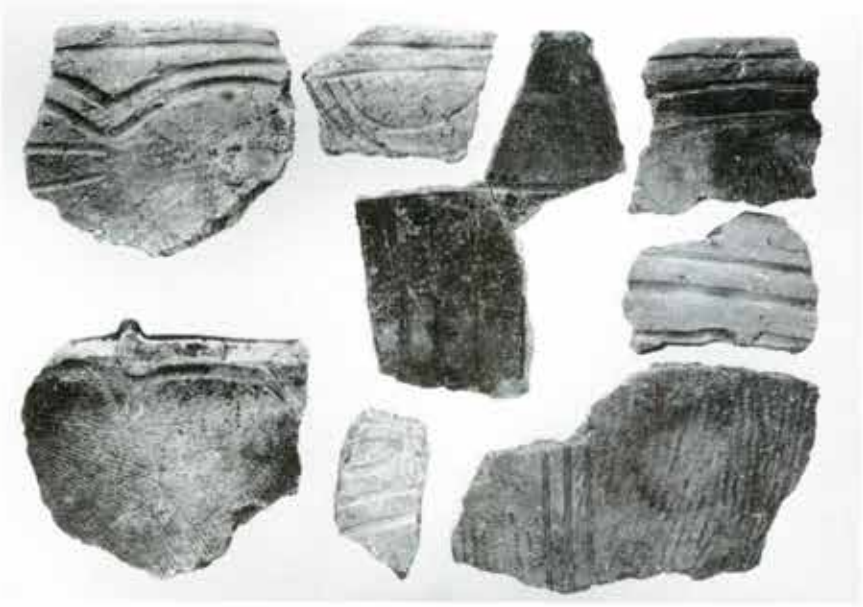
2

3

4

5

1～5．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群7類）



1

2

3

4

1～3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群8類）　4．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群9類）

図版34

1

2

3

4

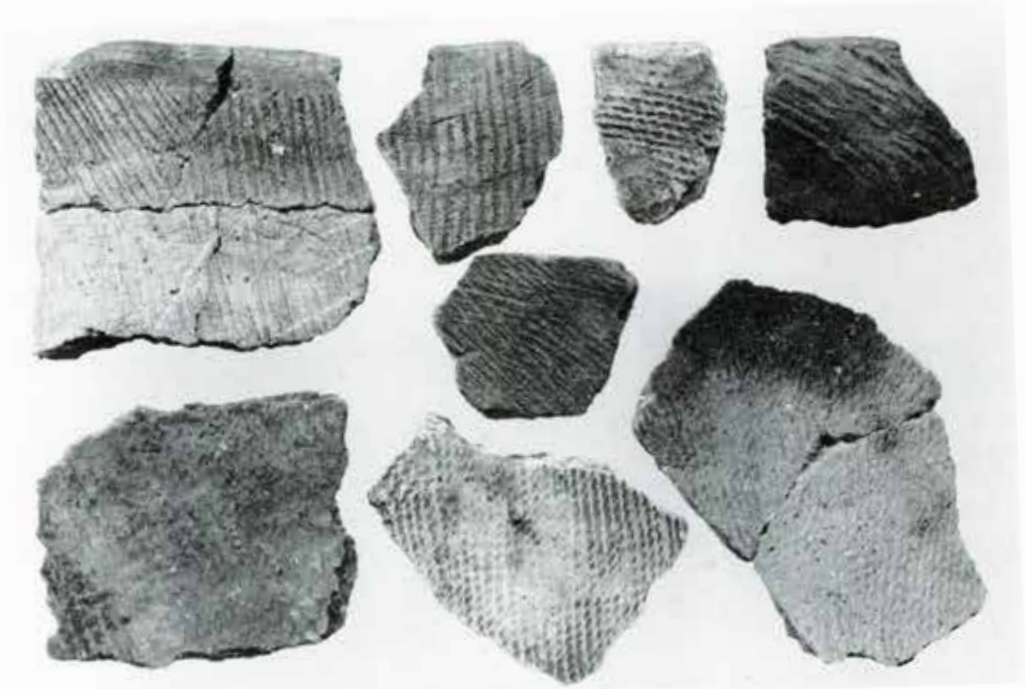
1～4．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群10類）

1

2

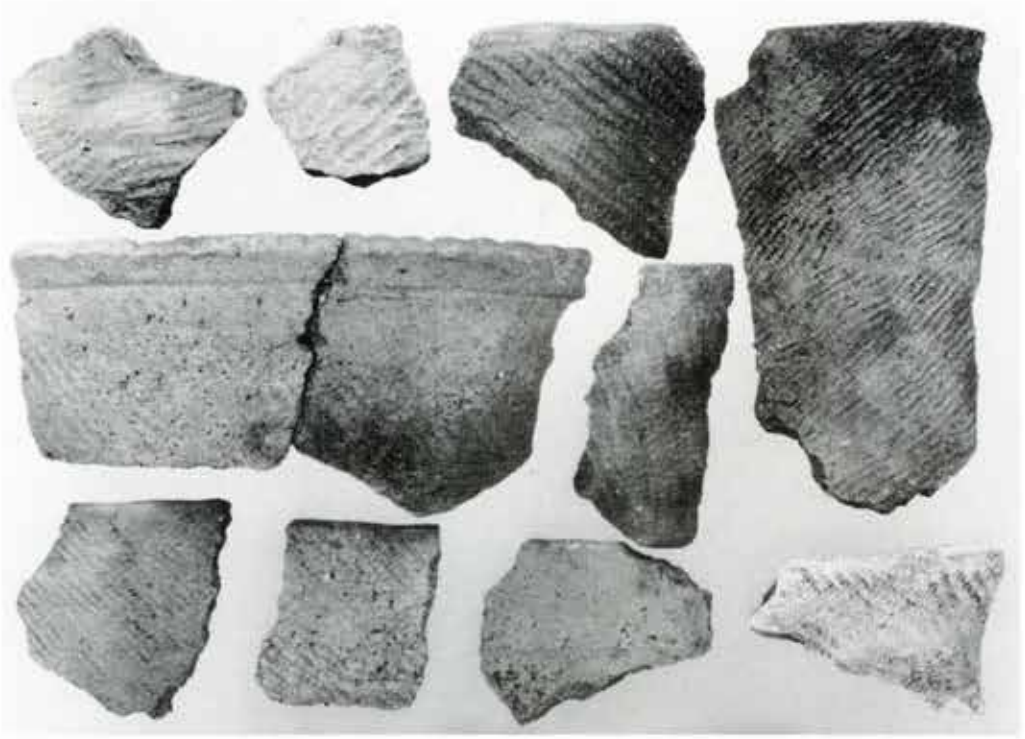
3

4



5

1．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群10類）　2～5．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群11類）



1

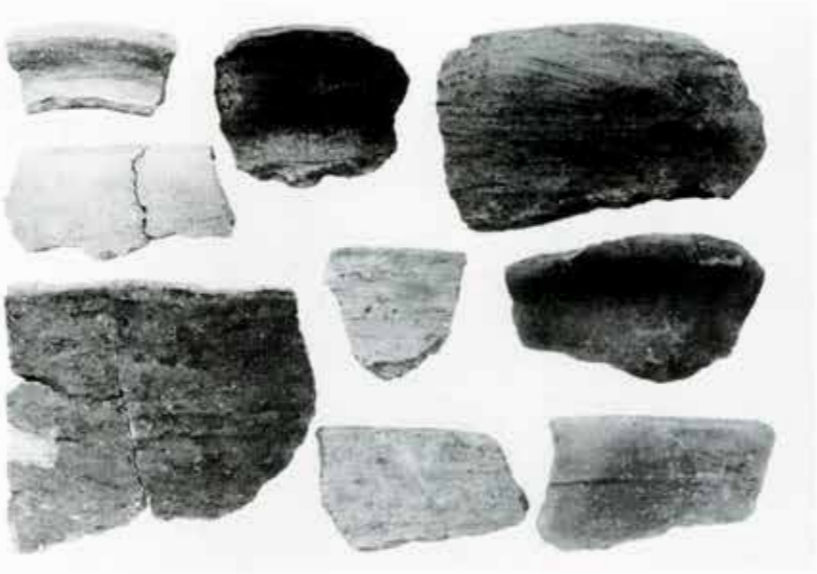
2

3

4

5

1～4．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群12類）　5．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群13類）



1

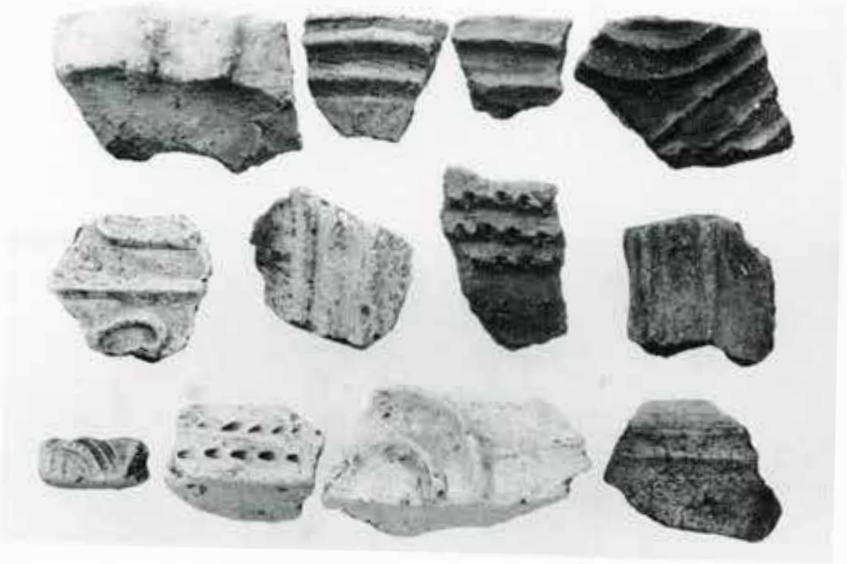
2

3

1．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群13類）　2．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群14・15類）
3．包含層出土の縄文土器（Ⅱ群15類）

図版38

1

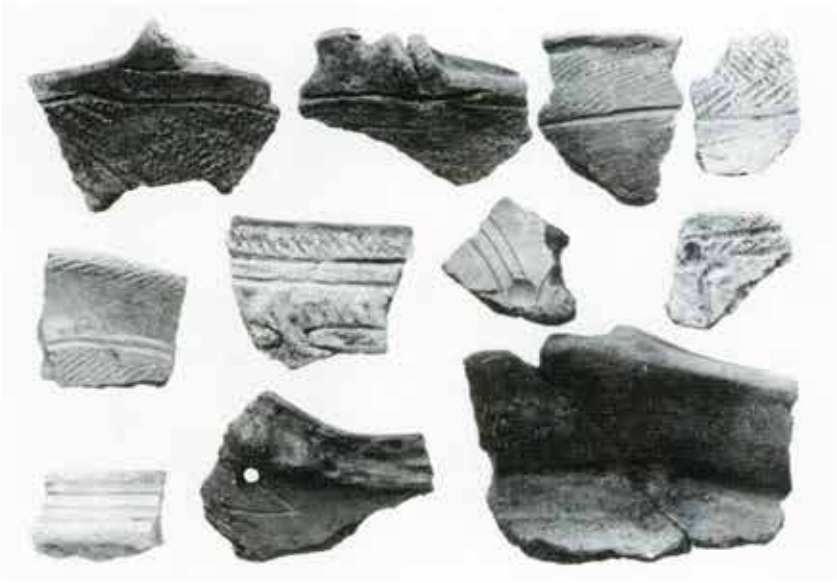


2

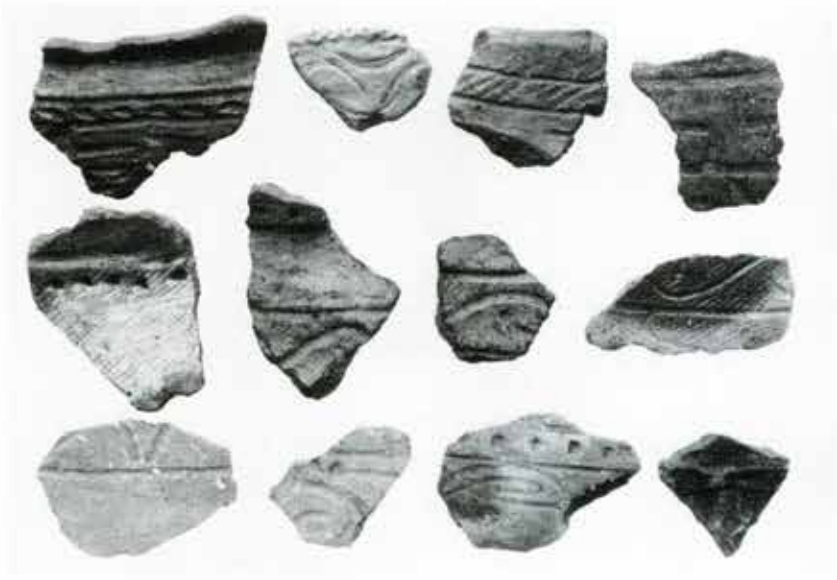
3

1．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群1・2類）　2．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群3・4類）
3．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群5類）

1



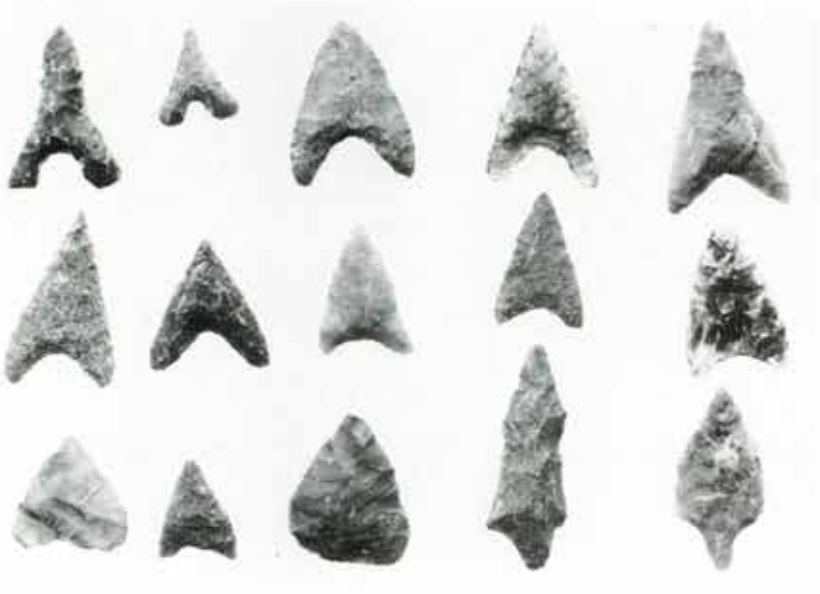
2



3

1．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群6・7類）　2．包含層出土の縄文土器（Ⅲ群8・9類）
3．包含層出土の縄文土器（Ⅳ群）

図版40



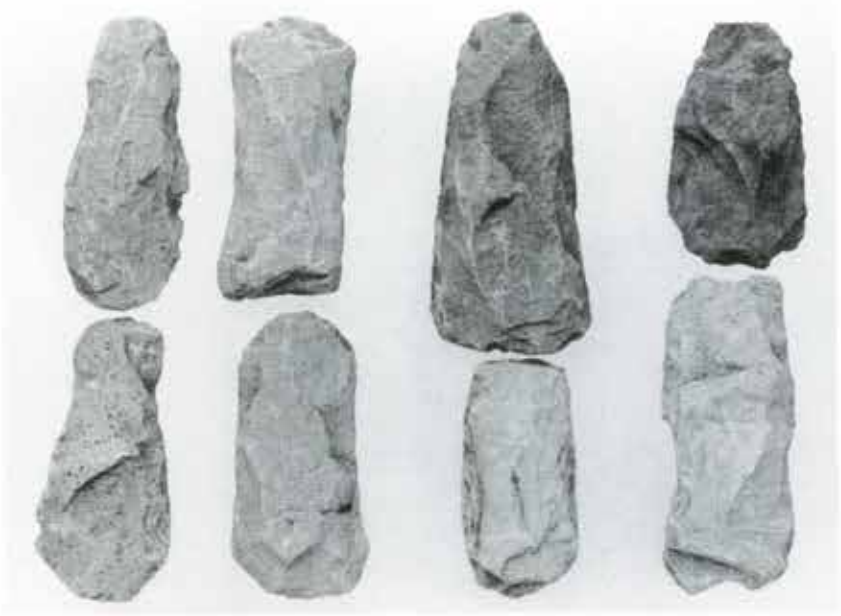
1

2

3

1．石器（石鏃）　2．石器（石錐、三脚石器、石匙）　3．石器（削器、掻器）

1



2

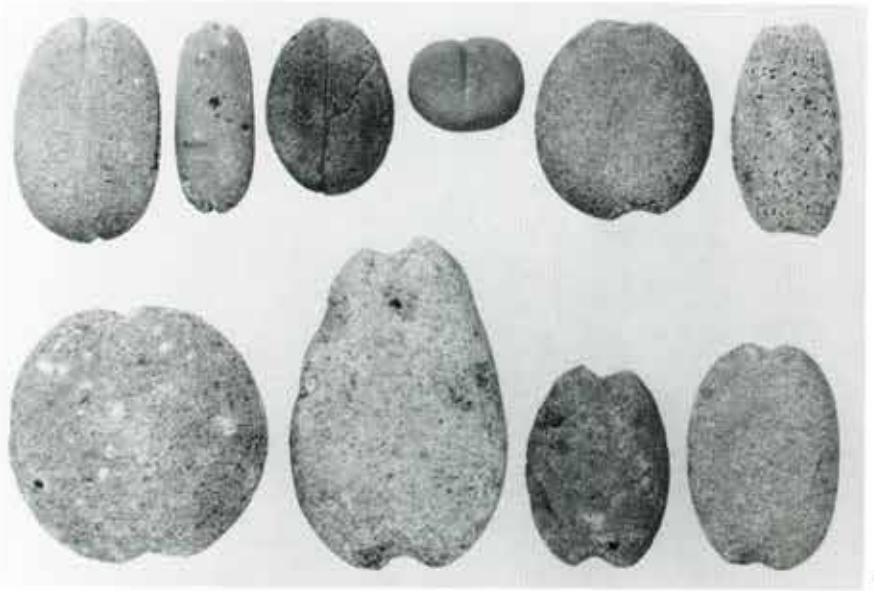
3

1．石器（ピエス・エスキーユ、ヘラ形石器、ＲＦ、ＵＦ）　2・3．石器（打製石斧）

図版42

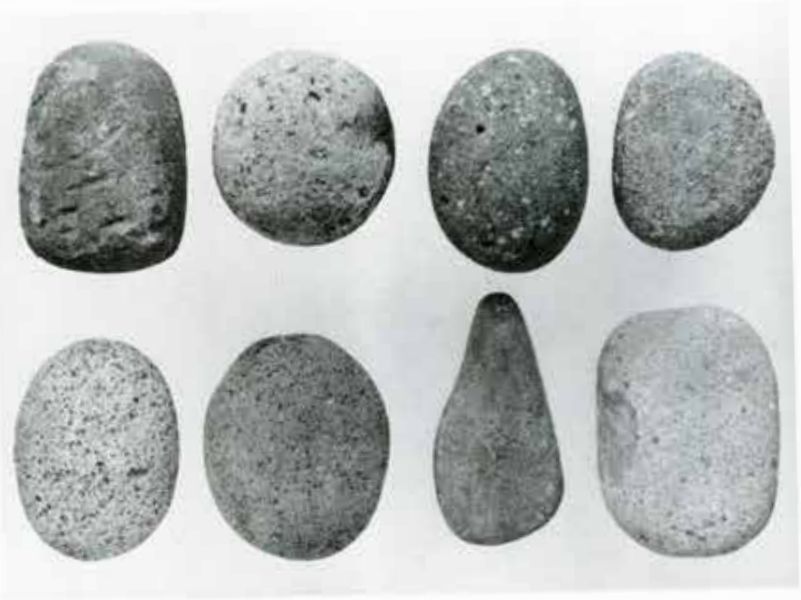
1

2

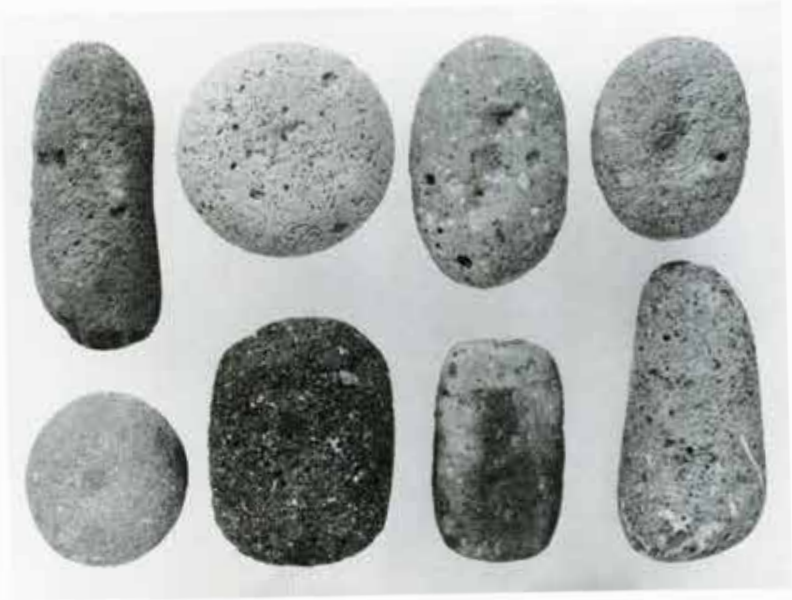


3

1・2．石器（磨製石斧）　3．石器（石錘）

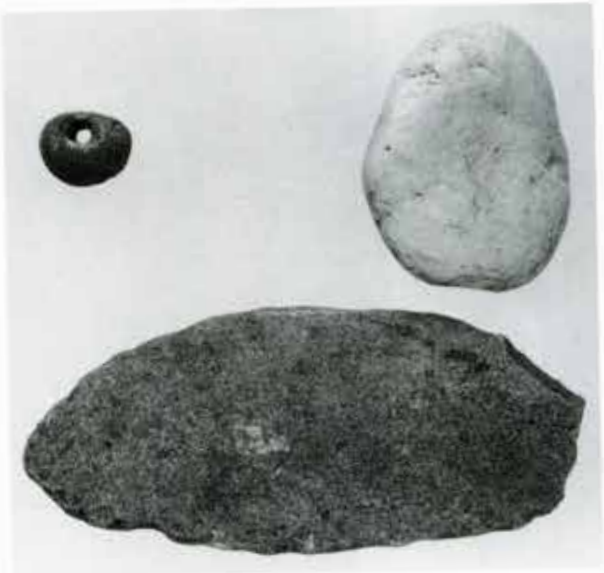


1



2

3



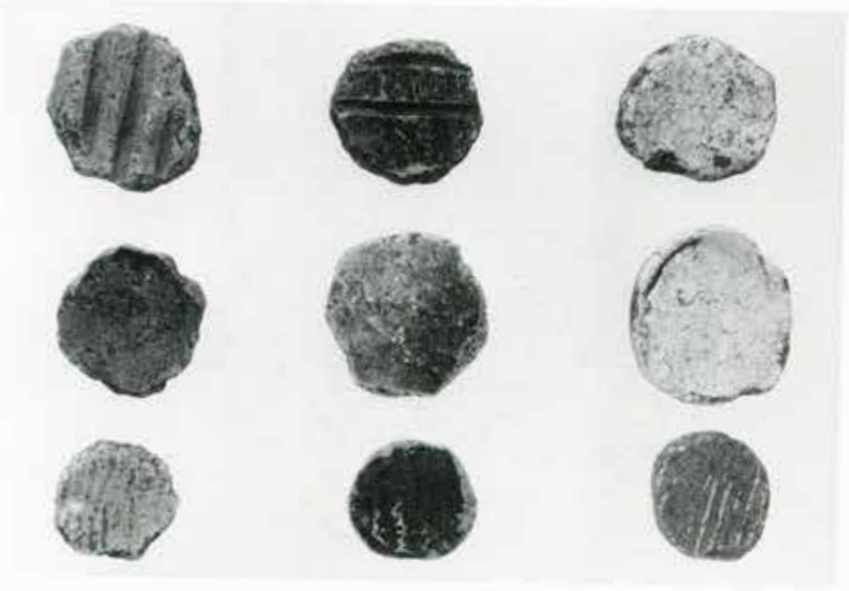
4

5

1．石器（磨石）　2．石器（凹石）　3．石器（石皿）　4．石器（石製装身具、玉石、粗製削器）
5．石器（砥石）

図版44

1



2

3

1．石器（石棒、石刀、石剣）　2．土製品（土製円盤）　3．土製品（土偶、茸形土製品）

1

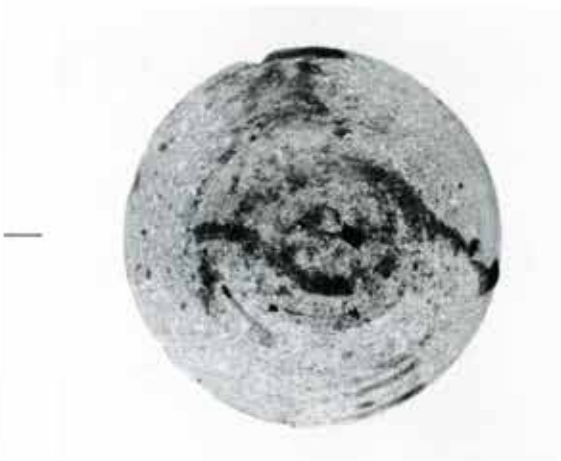
2

3

4

5

6



7

1～5．第6号住居址出土の土器　6．ＳＫ６出土の土器　7．包含層出土の土器

図版46

1

2

3

4

5

6

7

8

1～8．包含層出土の土器

1

2

3

4

5

6

7

1～7．包含層出土の土器

図版48

1

2

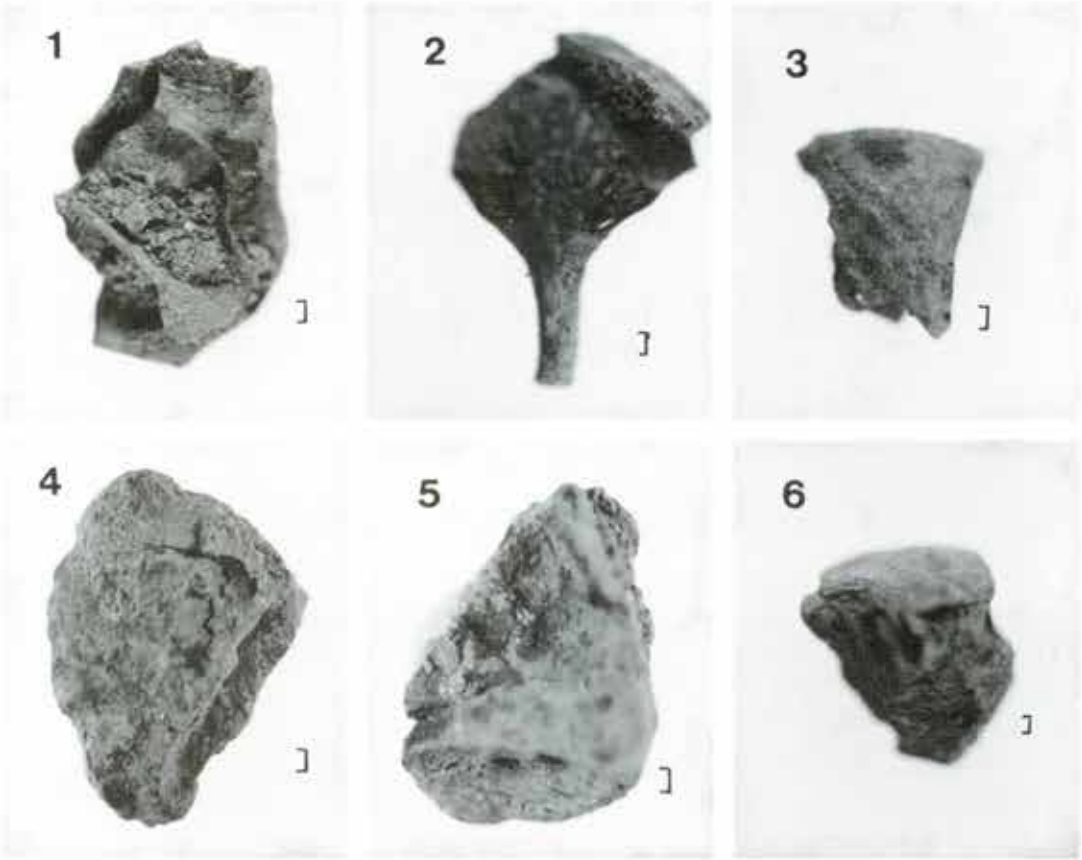
3

4

5

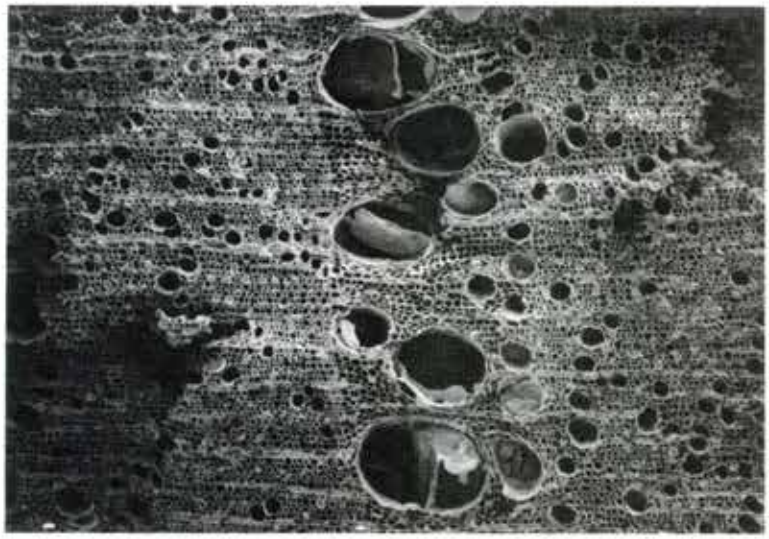
6

1・2．包含層出土の土器　3・4．陶磁器類　5．土錘、鉄鏃　6．貨幣



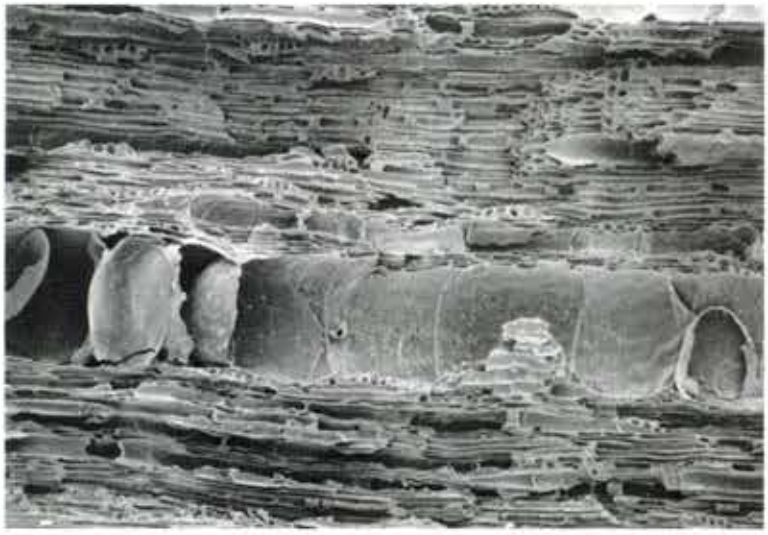
岡前遺跡の炭化種子（スケールは1㎜）
1．2．3．オニグルミ、内果皮破片（No.1044）　4．5．トチノキ、種子（子葉）破片（No.2323）
6．トチノキ、種子破片（上部に種皮が残る。）（No.1220）

図版50



a. クリ(横断図) bar : 1 mm

b. 同(接線断面) bar : 0.5mm



c. 同(放射断面) bar : 0.5mm

ＳＢ５出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	おかまえいせき
書　　名	岡前遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第20集
編 著 者 名	上嶋善治　谷口和人　古田靖志　吉川純子　藤根　久
編 集 機 関	財団法人　岐阜県文化財保護センター
所　在　地	〒500 岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）　TEL 058－264－1111(814)
発行年月日	1995年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
岡前遺跡（おかまえいせき）	岐阜県吉城郡（ぎふけんよしきぐん） 古川町杉崎御構（ふるかわちょうすぎさきおかまえ）	21621	G06F00150	36° 15′ 20″	137° 09′ 36″	19940614～ 19941013 558㎡	県道鼠餅古川線改良工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡前遺跡	集落	縄文 古代	竪穴住居址 8軒 土坑　6基 埋甕　1基 焼土址　2基 ピット	縄文土器 石器 土製品 須恵器 土師器 和同開珎	竪穴住居址7軒は縄文時代、1軒は平安時代。縄文土器は、早期から晩期まであるが中期後半が主である。須恵器は8世紀のものが多い。和同開珎は飛騨では初の出土。

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第20集

岡 前 遺 跡

県道鼠餅古川線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書

1995年3月25日 印刷
1995年3月31日 刊行

編集・発行　財団法人岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町（岐阜総合庁舎内）

印　刷　大　進　社　高山市有楽町40番地